仮面ライダーW ~ another world story ~

亀鳥虎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーW \ another world story \

【Nコード】

N2193X

【作者名】

亀鳥虎龍

【あらすじ】

科学と魔術、そして怪異に神秘が取り巻く街『シメント神都』。
この街には、あらゆる事件に遭遇する。
そこにある喫茶店の二階にある事務所。
名は『万時屋』と呼ばれ、様々な依頼や事件を解決している。
これは、その事務所に所属する二人の青年の物語である。

プロローグ(前書き)

新連載しました。

プロローグ

今から一年前、一人の男がある組織との戦いに敗れ、命を落とした。

その弟子の少年は、彼が助けようとした青年共に脱出を試みたが、

「逃がさないわ」

一人の異形が立ちはだかる。

その時、青年がこう言った。

「魔術師と契約する覚悟、あるかい？」

「え……」

その言葉に、少年の下した決断とは、

「決まってるだろ、そんな事」

たった一つであった。

「地獄のそこから引き上げるまで、トコトン付き合ってる！ そして…… 奴等の幻想をぶち殺す！」

科学と魔術、そして怪異に神秘が取り巻く街『シント神都』。

この街には、あらゆる事件に遭遇する。

そこにある喫茶店の二階にある事務所。

名は『万時屋』と呼ばれ、様々な依頼や事件を解決している。

そんなこの事務所には、二人の事務員が経営していた。

「行くぜ、相棒！」

「勿論！」

この二人を中心に、様々な事件が巻き起こるのであった。

「さあ、その幻想をぶち殺す！」

プロローグ（後書き）

次からは連続投稿です。

世界設定と人物設定（前書き）

キャラ設定です。

グダグダな部分もありますが……

世界設定と人物設定

この小説の世界

アビリティ
特殊者

この世界の能力者や魔術師を纏めた呼び名。
科学系なら『サイエンスアビリティ』、魔術系なら『マジックアビリティ』と呼ばれる。

それぞれ特性が異なり、生まれつきの者がいれば、一から習得する者もいる。

また、同じ能力でもランクが違う。
最低ランクはEで、最高ランクはS。

ガイアメモリ

『仮面ライダーW』に登場したアイテム。
本作でもキーアイテムとして登場する。
あらゆる話で登場する。

ドーパント

『仮面ライダーW』に登場する怪人。

オーメダル

『仮面ライダーOOO』で登場するアイテム。

〔登場人物設定〕

上条当麻

登場作品：とある魔術の禁書目録

年齢：18歳

能力：幻想殺し（イマジンプレイカー）

ランク：E

設定：この作品の主人公。

原作同様に様々なトラブルや不幸に巻き込まれる。

『幻想殺し（イマジンプレイカー）』によりあらゆる能力を無効化出来る。

メンバー内ではどっちかと言うと常識あり。

本作に合わせて年齢を少し上げている。

ユーノ・スクライア

登場作品：魔法少女リリカルなのは

年齢：23歳

能力：賢者 ワインスマン

ランク：S

設定：この作品のもう一人主人公。
あらゆる知識を持つ能力を持ってしまったためにある組織に拉致された経験がある。

上条の相棒兼彼の唯一の理解者。

柴馬アトリ

登場作品：アトリ抄

年齢：16歳

能力：髪刃 ヘアブレード

ランク：A

設定：スタイル抜群の少女。
しかし、かなりの大食い。

自らの髪を武器に変えることができるが、体力を激しく消耗するため、食事量が高い。
スカートがめくれても全く動じない。

ジライヤという小さな妖獣と過ごしている。

インデックス

登場作品：とある魔術の禁書目録

年齢：不明

能力：完全記憶

ランク：S

設定：上条と一緒にいるシスター。
魔術系特殊者の能力知識に詳しい。
かなりの大食いで、彼女とアトリの食費で赤字寸前である。

世界設定と人物設定（後書き）

『アトリ抄』知ってる人がいるかが心配だ。

上条

「だったら何故書く？」

第1話・その名はW/街の切り札(前書き)

第一話です。

第1話：その名はW／街の切り札

あらゆる出来事に魅入られるような街『神都^{シント}』。

この街にある喫茶店『翠屋』では、

「ですから、それは濡れ衣ですよ！」

「しかし犯人は此処の道場を名乗っているんだ！ どう見てもお前達は重要参考人だ！！」

喫茶店の看板娘・高町なのはは警察官と口論していた。

理由は、彼女の父親や兄が使っている剣術『小太刀御神二刀流』の使い手を名乗る人物『幻想殺し』が殺人事件を起こしていて、それ以来お客が一行に来なくなっただのである。

ある人物を除いては。

「すみませ〜ん。上条さんは、此処の甘味を食べに来たんですけど、良いでしょうか？」

一人の青年が頭を掻きながら問い出す。

名は上条当麻。

この『翠屋』の二階にある事務所『万時屋』を営んでいる。

たまたま『翠屋』の甘味を食べに来る事もある。

「あ、上条君。いらっしやい」

「あゝそれとお巡りさん。あんまり大声で怒鳴らない方が良いでしょう。状況次第では警察が喧嘩売ってるような感じだから」

「う……」

反論できない刑事・石垣筍は、『翠屋』を後にした。

注文したケーキを食しながら、上条はなのはにこう言った。

「アンタも大変だな。実家の剣術を悪用されるわ、警察に目を付けられるわ」

「ええ。誰だか知らないけど、ウチの剣術を悪用するなんて許せない」

悔やみながらもなのは拳を握った。

「絶対捕まえるわ『幻想殺し』」

上条もそれを黙って見ていた。

「それより上条君。 銀さんは帰ってこないけど？」

「……」

銀さんとは、万時屋の所長・坂田銀時のことである。

「ぎ……銀さんは今出張で帰ってこないんだ。 だから暫らくは会えない」

そう言って上条は、話を強引に戻す。

「そっか……ユーノ君の件もあるから……」

婚約者の名前を口に出しながら悔やむのは。

それを見るしか出来なかった。

事務所に戻った上条は、ある一人の青年に顔を向け、先ほどの話を
をする。

「だそうだ。いい加減に再会して、彼女を安心させたらどうなん
だ？」

「無理だ……彼女が僕の所為で傷付いてるなら、余計顔向け出来な
い」

青年は悲しそうな顔をするが、上条は頭を掻きながらこう言った。

「無理にとは言わねえけど、彼女の今の状況……お前も知ってるだ
ろ？」

「……………」

「まあ、お前が言いたいと思った時に言えば良い。それ以上は強
制しないぜ？」

上条はそのまま自室に戻るのであった。

その夜、一人の人間が殺害された。

さらにその血でこう書かれていた。

“小太刀御神二刀流『幻想殺し』見参”と……

「これで、我々の計画は……」

一人の男がそう言って呟いたのであった。

そして翌日、事件は起きた。

「高町恭也。　夕べの夜に起きた殺人事件について、話を聞きたい」

「な!？」

昨日の夜に起きた殺人事件の重要参考人にされたなのはの兄・恭也は、警察に同行されたのであった。

一方上条は、その事件の現場に向かっていた。

「此処か……」

現場には、被害者の返り血がベツトリと付着していた。

「相当、鋭利な刃物で裂かれたようだな……でも、いくら『小太刀御神二刀流』でも此処までやるか？」

顎に手を添えながら考える上条であったが、

「仕方無い、アイツに頼むか」

そう言つて上条はある人物に電話を掛けたのであった。

そしてその夜、

「……………」

なのはは、ポツンと椅子に座っていた。

「何で……………どうしてこうなったの？」

涙を浮かべながら小さく恋人の名前を呼ぶ。

「助けて……………ユーノ君」

しかし、その助けを呼ぶ声も届かなかった。

ダガンと扉を強引に開ける音がした。

「誰!？」

なのはが振り返ると、そこには複数の男達が現れ、その中心に小柄な初老の男と大柄な髭を生やした男が立っていた。

「初めましてお嬢さん」

「アナタは、確か不動産の!？」

「比留間喜兵衛と申します」

不気味な笑みを浮かべる比留間喜兵衛。

その顔を見た瞬間、なのははすぐに気付いた。

「まさか、アナタが!？」

「ほう、気付いたか。その通りだ」

「どうしてこんな事を!？」

なのはの問いに、喜兵衛は答えた。

「簡単だ、此処の土地は売り払えば大儲けになる。喫茶店などに使うのは勿体無いと判断したからだ」

「卑怯者!」

「フフフフ……褒め言葉として貰っておくよ」

悔しさの涙を流すなのはを貶すように笑う喜兵衛であったが、

「成る程、事情は良く分かりました」

そう言って一人の青年が立っていた。

「上条君!」

「人ん家の伝統を汚すわ、人の名前を騙るわ、テメエ等相当腐って

んな」

怒りを見せる上条に大柄の男・比留間五兵衛が立ちはだかる。

「兄者、コイツはどうする？」

「殺せ、余計な事を話されては面倒だ」

「んじゃ、そうさせて貰おうぜ」

【ソード】

懐から取り出したUSBメモリを首筋に突き挿す五兵衛。

その瞬間、彼の姿が刃を模した異形と化したのである。

「チツ、ドーパントかよ」

上条はその姿を見て、小さく呟いたのであった。

第1話・その名はW / 街の切り札 (後書き)

次回、その名はW / 幻想を殺す者

第2話・その名はW／幻想を殺す者（前書き）

遂に『変身』の 때가！

第2話：その名はW／幻想を殺す者

五兵衛の変身した怪人・ソードドーパントは、容赦なく上条を襲う。

「うおっとー！」

すぐさま上条は攻撃を回避する。

「刃物のドーパントか。流石に生身はきついぜ」

そう言っ上条は『右手』を構えていた。

しかし、ソードドーパントが先に攻撃を仕掛けた。

「オラア！」

彼の手から放たれたエネルギー状の刃が上条を襲う。

「真っ二つになれ！」

ソードドーパントが誇らしげにそう言ったその時であった。

バシユウウンという音と共に、エネルギー状の刃が消えてしまった。

「な!？」

これにはその場の全員が驚きだす。

「どうした、そんなに驚く事なのか？ まあ、そつだよなあ……」

「あ……あ……あ……」

驚きの余り、声が出ないソードドーパントに上条がこう言った。

「科学・魔術・神秘・怪異……それらを纏めた異能者を『特殊者』アヒリテイと呼ぶ。だがコイツはそんなものですら関係なく、全ての『異能』打ち消す。それが“イマジンプレイカー”……『幻想殺し』の名の由来だ」

「幻想殺し!？」

全員が驚きを隠せなかった。

『幻想殺し』……………三年前、この世界を恐怖に陥れた戦争『第三次マジックアヒリテイ世界大戦』を起こした魔術系特殊者・右方のスフィンマをたつた一人で立ち向かい、彼を倒した英雄の呼び名で、本名は不明であり、戦争が終わった後の消息も不明であった。

「まさか……………お前があのだ幻想殺しとはな」

驚くソードドーパントであったが、右手の刃を構えながら、

「ならその首、この比留間が貰ったあああああああ!！」

攻撃しようとするが、突如バイクに吹き飛ばされた。

「んが」

そのままソードドーパントは吹き飛び、バイクから一人の青年が降りてきた。

「すまない、遅くなったよ」

長い金髪に翡翠色の瞳の青年に上条は気ダルそうな顔でこう言った。

「遅いぞユーノ」

その言葉を聞いた瞬間、なのはは反応した。

「え？」

その青年の顔に見覚えがあったのだ。

「ユーノ……君？」

彼こそ、行方不明になっていた婚約者のユーノ・スクライアであった。

「ホントにすまない。バーゲンセールのおバサン達に勝てなくて」

「だよなあ〜。バーゲンセールのオバチャン達って特売になると強くなるからなあ〜」

こんな状況で呑気な会話をするが、

「じゃなくて、まずお前には、一番謝らなきゃならない相手がいるだろ？」

上条のその言葉に、

「ああ、そつだね」

悲しげに笑うユーノ。

「んじゃ、まずはこいつ等を片付けるか。」

そう言って上条は奇妙な形のベルトを自身の腰に巻きつけた。

ソレと同時にユーノの腰にも、同じデザインのベルトが出現する。

そして二人は、懐からUSBメモリを取り出した。

【CYCLONE】

ユーノは左手に緑のメモリを、

【JOKER】

上条は右手に黒のメモリを取り出し、互いにWを作るように構えた。

「「変身!」」

するとユーノが右のスロットにメモリを差し込むと、緑のメモリは上条のベルトへと転送される。

ソレと同時にユーノも気を失う。

そして上条は、緑のメモリを深く差し込み、今度は黒のメモリをスロットに差し込むと、それを横に倒したのであった。

【CYCLONE・JOKER】

その瞬間、上条の姿が“右半身が緑で左半身が黒の赤い複眼にW型の銀の触覚、そして首にマフラーを付けた戦士”へと姿を変えた。

ソードドーパントはその姿に驚きを隠せなかった。

「「さあ、その幻想をぶち殺す」「」

これこそが、この世界を守る戦士・仮面ライダーWであった。

ソードドーパントと激突するW。

「ハア、タア！」

凄まじい攻撃で、ソードドーパントを渡り合うが、

「動くな！」

「え？」

すると喜兵衛が、懐に隠していた銃をなのに向けていた。

「動けばこの娘の命はないぞ？」

「テメエ、人質なんて卑怯だぞ！」

Wがそう言うが、

「オラア！」

「ガア！」

隙を突いたソードドーパントに攻撃される。

「テメツ！」

「オイオイ、良いのか？ 人質がどうなっても？」

「このヤロウ……………」

卑怯極まりないk比留間兄弟であったが、

「邪魔！」

「んが！」

突如一人の少女が喜兵衛を蹴り飛ばした。

「アトリ！？ インデックス！？」

「全く、何かあったら呼んでよね」

「そうなんだよ！ とうまもユーノも無茶しないで欲しいかも！！」

そうやって黒い長髪の少女・紫馬アトリと銀髪のシスター・インデックスは、喜兵衛を何度も踏み付けていた。

「おゝい、その辺にしろいてやれよ」

そうやってWは立ち上がると、

「さっきの借り、倍にして返すぜ！」

【HEAT】

【METAL】

赤いメモリと銀色のメモリをベルトに差し込んだ。

【HEAT・METAL】

するとWの右半身は赤に、左半身は銀に変わり、左背部からは、棒状の武器・メタルシャフトが出現し、Wはそれを手に持った。

「行くな、この刀の化物！」

そうやってWは、メタルシャフトを豪快に叩き付けた。

「オラア！」

「ガア！」

「まだまだ行くな！」

Wの棍棒捌きに反撃する暇も無く、

「あらよっ」とー」

ソードドーパントは、そのまま吹き飛ばされてしまった。

「くそ、何やってるんだ！ お前等も……………」

仲間に加勢させようとするソードドーパントであるが、

「アトリ、何かこの人達に用があったみたいなんだよ？」

「え、そうなの？」

既にアトリに全員が倒されていたのであった。

「な!?!」

たった一人の少女に呆気無く部下たちが倒されたため、

「こっぴなつたら 逃げろ!」

逃走をはかろうとするが、

「逃がすかよ!」

【LUNAR・TRIGGER】

今度は右半身を黄色に、左半身を青に変えたWが銃型武器・トリガーマグナムの引き金を引いた。

黄色い弾丸は、軌道を変えながらソードドーパントに接近してきた。

「グハア!?!」

そして弾丸は見事に当たり、ソードドーパントはそのまま吹き飛ばされる。

【CYCLONE・JOKER】

「当麻君、メモリブレイクだ」

「そのつもりだ!」

Wは再び右半身を緑に、左半身を黒に戻した後、黒のメモリをスロットから抜き取り、右腰の黒いスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

その瞬間、緑と黒の竜巻が出現し、Wはそれに乗るように宙へと上がった。

『ジョーカーエクストリーム!!』

そしてそのままドロップキックの要領で急降下していき、途中で半身が上下に割れながら、

「「「タア!」「」」

「ぐあああああああああ!」」

ソードローパントを倒し、元の比留間五兵衛の姿に戻し、彼から排出されたメモリも砕けたのであった。

変身を解き、なのはに近づくとユーノ。

「ユーノ君……」

「なのは、ゴメン。心配かけ」

謝るうとするユーノに、なのはは強く抱きついた。

「謝らないで。何があったのかは、ユーノ君が話したい時に話して。それまで待つてるから」

「なのは……」

するとユーノはなのはにこう言った。

「なのは、キミに言いたい事があるんだ」

「私も、ユーノ君に言いたい事があるの」

この瞬間二人の声が重なった。

「結婚してください！」

その言葉の後、二人は互いの唇を重ねあっていたのであった。

翌朝、上条はその日の出来事の始末書を書いていた。

「ったく、『幻想殺し』の呼び名に未練も愛着も無えけど、あんな奴等にくれてやるつもりは全くねえよ！」

「そう言えばとうま、ユーノは？」

「え、なのはとデートだってよ」

インデックスにそう言った後、上条は窓の外を見下ろしていた。

そこには、オシャレな私服に着替えたなのはとユーノが、何処かに出かけている様子が見え、

「良かったな、ユーノ」

そう言って上条はテーブルの上のコーヒーを飲もうとするが、

「あー！」

誤って落としてしまい、カップを割ってしまう。

「不幸だ」

第2話・その名はW / 幻想を殺す者 (後書き)

というワケで、Wの変身でした

第3話：魔獣W / 異界からの訪問者（前書き）

新キャラが登場します。

第3話：魔獣W / 異界からの訪問者

その夜、奴は動く。

それはまさに狼のように獲物を狙っていた。

「グルルルル・・・」

それも満月の夜に。

魔獣W / 異界からの訪問者

二手に分かれて別々のスーパーに向かった。

その帰り、ユーノは品物の入ったビニール袋を手に持ちながら事務所へと帰る。

「随分遅くなったな。大丈夫かな……」

そう思いながら街を歩くが、まさにその時であった。

「グルルルル……」

「ん？」

動物の呻き声が聞こえて来たので、振り返ると、

「アオオオオオオオオン！」

そこには狼をイメージした異形がいた。

「まさか、ドーパント!？」

突然の登場に驚き、ユーノは驚愕する。

「グオオオオオオオ!!」

「うおっ!!」

狼男の攻撃をすぐさま回避するユーノであったが、

「クッ、このままじゃ……」

後ろの壁が行き止まりになってしまい、逃げ場をしながら、

「クロスファイヤーシユート!!」

突如、謎の光が狼男に当たったのだ。

「グアアアア!!」

狼男はその光に当たったため、すぐさまその場を後にした。

「大丈夫ですか!?!」

そう言ってオレンジ色の長髪の女性と青い短髪の女性が現れる。

「あ……ああ、有難う」

ユーノは立ち上がってそう言うが、

「え!?!」

「嘘!？」

二人は突然驚きだす。

「アナタは、ユーノさん!？」

「な!？ 何故僕の名前を!？」

自分の名前を口に出した二人に驚きを隠せなかったユーノであった。

急いで事務所に戻ったユーノ。

「当麻君!」

「どづしたユーノ!？」

すぐさま上条に声を掛けるが、

「……………その人達、誰？」

そこには赤の長い髪を結んだ男性とセミロングの黒髪の小柄な女性がソファに座っていた。

「話しは後だ。それで俺に何か用なのか？」

「ああ、そうだった。あのさ当麻君、キミ…………『異世界』を信じ
るかい？」

それを聞いた上条は、

「奇遇だな、俺も同じ事を言おうと思ってた」

溜め息混じりに答えた。

果たして、ユーノが出会った二人と、上条が出会った二人は何者なのか、次回を待て！

第3話：魔獣W / 異界からの訪問者（後書き）

次回、魔獣W / 闇の暗殺者

第4話：魔獣W / 訪問者の正体（前書き）

四人の正体が明らかに！

第4話：魔獣W / 訪問者の正体

「で、アナタ方は？」

上条の問いに、四人は答えたのであった。

「時空管理局のティアナ・ランスター執務官と言います」

「同じくスバル・ナカジマ防災士長です」

「護廷十三隊六番隊副隊長・阿散井恋次だ」

「同じく、十三番隊の朽木ルキアだ。宜しく頼む」

「テメエ！ アレだけ説明させておいて、信じねえつもりかよ！」

「当たり前だ！ 第一上条さんは、死神なんざ一回も見たことがねえんだ！」

「そりゃそうだな。今の俺達は義骸キガイに入ってるからな」

「義骸？」

上条の問いに、恋次は誇らしげに答えた。

「俺達死神はな、本来は霊体だから普通の人間には見えねえんだよ。義骸は普段死神が現世で活動できるようにするための仮の肉体なんだよ」

「・・・・・・・・・・」

流石に上条の頭では追いつけない説明であった。

「まあ、無理に信じてくださいって言いませんから、気にしないで下さい」

そんな上条にティアナは優しく答えた。

「んじゃ、今度は俺の番だな。この世界には特殊な能力を才華させてる人達がいるんだ」

次に上条は、この街の人々の能力・特殊者の説明をする。

「特殊者には、四つの分類が存在するんだ。一つは科学技術から生み出させる化学系特殊者、魔術や魔法などの使う魔術系特殊者、妖怪または魔物の力を使いこなす妖魔系特殊者、そして神秘や精霊術の類を使う神聖系特殊者が一人の人間にどれかが存在するんだ。でも、同じ能力でも使用者のランクで強さが変わるんだ」

説明を聞いた四人の内、恋次は小難しそうな顔で眉を歪めた。

「ランク？」

「ああ、特殊者にはレベルがあつてな、例え同じ能力でもレベルが高い奴ほど強いって事なんだよ」

「では当麻、お前の能力ランクはどのくらいなんだ？」

「……………」

ルキアの問いに、上条は一瞬暗い表情を見せながらこう言った。

「……………Eランク」

翌朝、万時屋で居候する事にした四人。

「ふあゝ、眠い」

「寝惚けてる場合か。早く起きぬと、朝食に間に合わぬぞ」

そう言つてルキアと恋次は居間に向かった。

「にしても、暇だよな」

「それだけ平和だつてことだ」

「ねえねえティア、テレビでも観ようよ！」

「アンタね、少しは緊張感を持ちなさいよ」

そう言つてテレビを観るスバルに呆れるティアナであつたが、

『此方は、最近生きている「連続狼男事件」の殺害現場です』

アナウンサーの説明を聞いてすぐに画面に目を向けた。

「狼男!?!」

すると、上条の携帯電話が鳴り出し、本人も電話に出た。

「もしもし。カリムさん? 分かつたすぐに行くぜ」

そう言つて上条は電話を切つた。

「どうしたんですか？」

「依頼だ。今から教会へ行く」

依頼を引き受けた上条は、直ちに外へ向かつた。

『神都』にある大きな教会がある。

名は『聖王教会』。

その管理者のカリム・グラシアから依頼を受けた上条当麻。

無論、ルキア達四人も来ていた。

「すみません上条さん。何時もながら事件に関わつてしまつて」

「気にすんなよ。俺は依頼人の願いを叶えるために来たんだから」
申し訳ない顔をするカリムに、上条は笑顔で答える。

「それで、依頼は最近横行してる狼男か？」

「ええ。お分かりの通り、このままでは街に住む人々が夜道を歩けなくなってしまうのです。毎晩教会でお祈りをする方々も居りますので……………」

それを聞いた上条は、立ち上がってこう言った。

「分かった。この依頼、引き受けるぜ」

「い……………良いんですか？」

「ああ。任せとけて」

その言葉を聞いたカリムは笑顔を見せ、上条達もそれを見て教会を後にした。

事務所に戻った上条は、ユーノに『検索』を頼んだ。

「行くよ」

するとユーノは目を閉じ、己の空間へと入った。

「何……………やってるんだ、アイツ？」

恋次の問いに、上条は答える。

「ユーノの能力は『ワインズマン賢者』つってな、パーソナルリアリティ自己現実に入ってあらゆる知識を探し出すことが出来るんだ」

「パー……………何だ？」

「パーソナルリアリティ自己現実……………簡単に言えば“自分だけの現実”を作り上げる事で、それはAランク以上のアビリティ特殊者しか使えないんだ」

「ではユーノ殿は、現在その中に入り込んでいると？」

「そう言うこと」

それを聞いたスバルとティアナは念話でこう話していた。

「（てことはティア、ユーノさんがその気になれば……………）」

「（無理よ、いくらユーノさんでも、能力が万能ってワケじゃないから）」

「終わったよ」

そう言ってユーノは『検索』を終わらせていた。

その夜、狼男が再び動き出した。

「グルルルルル………」

呻き声と共に新たな標的^{ターゲット}を狙い、襲い掛かる。

「グオオオオオオオオオオ！」

「オラァ！」

しかし、そのターゲットに返り討ちにされてた。

「ガア！」

吹き飛ばされる狼男。

「待ってたぜ、狼男さん」

すると上条当麻が暗闇の中から現れた。

「まさか、こんな罠に引っかけられてくれるとはなあ。正直嬉しい限りだぜ」

そう言つて上条は、ダブルドライバーを装着し、ジョーカーメモリを構える。

「さあて、この街を泣かせた罪……数えて貰うぜ！」

【JOKER】

そして事務所にいるユーノも、サイクロンメモリを構えた。

【CYCLONE】

「変身！」

差し込まれたメモリは、上条のベルトへ転送され、ユーノは同時に気を失う。

転送されたメモリを奥へ差し込んだ上条は、自身のメモリを差し込

み、スロットを横に倒した。

【CYCLONE・JOKER】

その瞬間、上条は仮面ライダーWへ変身し、

「うっしゅ、行くぜ！」

狼男に突撃した。

その光景を見ていたルキア、ティアナ、スバル、そして女装姿の恋次。

「何で俺が女の格好なんか……………／＼／＼」

「でも似合ってるぞ？」

「コノヤロウ……………」

ニヤニヤと黒い笑みを見せるルキアにキレル恋次。

「でも凄いですよね、上条さん」

「まさかあんな姿に変わるなんて……………」

その姿に驚きを隠せなかったスバルとティアナ。

一方のWは、狼男と激突を繰り返していた。

「オラァ！」

「グオオオオオオ！」

しかし、狼男には全く通用していなかった。

「ガLLLLLLLL……………」

「頑丈な奴だな！」

「当麻君、こつ言う場合はヒートジョーカーだ！」

「よし！」

【HEAT・JOKER】

するとWは、右半身が赤のヒートメモリの能力を宿すヒートジョーカーにメモリチェンジした。

「うおおおおお！」

炎を纏った右手の拳を握り締め、その拳で思いっきり狼男を殴った。

「ガア！」

「結構効くじゃねえか！」

「どんな獣でも、火に弱いつて言うからね」

「いや、言わねえと思う」

「そうかい？」

会話をしながらWは狼男に接近する。

「う……………うう……………」

徐々に弱まっている狼男に、Wはジョーカーメモリをマキシマムスロットに差し込んだ。

「さあ、その幻想をぶち殺す！」

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

「ハアアア……………タア！」

するとWは、拳に纏った赤と紫の炎で飛び、半身を割れだした。

「ジョーカーグレネード！」

そのまま狼男に向かいながら、連続でパンチを喰らわせる。

「オラア！」

「グアアアアアアア！」

最後の一撃を喰らい、狼男は爆発する。

「どんなモンだ！」

狼男の正体は若い男で、『狼の記憶』を宿したウルフメモリの所有者であった。

事件を解決した上条は、カリムから報酬を貰い、そのまま街を歩いていた。

「……………」

静か過ぎる街の中、上条は笑いながらこう言った。

「今日も平和だな」

そんな彼とすれ違うように一人の青年が歩き出した。

その姿は、白を基調とした服に白い髪、そして赤い瞳を持ち、現代的なデザインの杖を突いていた。

彼は一瞬、上条を見ると、

「これ以上、お前に戦わせねえよ」

そう言って一本のメモリを見詰める。

【ETERNAL】

第4話：魔獣W／訪問者の正体（後書き）

次回・白き悪魔Eノシスコンとデートの阻止と黒い切り札

第5話・白き悪魔Eノシスコンとデートの阻止と黒い切り札（前書き）

イキナリ『J』と『E』が!?

第5話・白き悪魔Eノシスコンとデートの阻止と黒い切り札

上条当麻は、神都で有名な遊園地の正門の前にいた。

別に遊びに行くためではない。

その理由は、彼の目の前にあった。

白き悪魔Eノシスコンとデートの阻止と黒い切り札

遊園地の正門前、ユーノはある人物を待っていた。

「ごめくん、待たせた？」

婚約者のなのではあった。

「うっん、全然平気だよ。 行こうか」

「うん／＼／＼」

そんな二人をライフルのスコープで見ていた人間がいた。

「ふざけやがって……何が“全然平気”だ！ 普通お前が待たせる方だろうが！！ 上条、お前土台になれ！」

「待たんかいイイイイイイイ！！」

茂みの中、なのはの兄・恭也がサングラスを掛け、ライフルを構えていた。

無論、父親の士郎もである。

「昨日の依頼であった“手助けが欲しい”ってそう言うことなの！？ なのはとユーノのデートを邪魔しろって言う意味だったの！？」

ツッコむ上条に士郎と恭也は怒鳴った。

「お前に分かるか！ 可愛い娘（妹）をあんな男に疵物にされる父親（兄貴）の気持ちか！！」

「知らねえよ！ アンタ等の歪んだ愛なんざー！！」

「全くだな」

怒る任せのツッコミをする上条に対し、ルキアは呆れてしまう。

「……………」

『高町家』の人々を良く知っているティアナとスバルは苦笑せざる終えなかった。

「ん？ 恋次、何をやってるのだ？」

「誰が恋次だ」

「は？」

すると恋次はサングラスに黒いスーツ、そしてライフルを手にしていた。

「俺は殺し屋『RENNJ13』だ！」

「何が『RENNJ13』だ！？ 貴様までこの悪ふざけに参加するつもりか！！」

幼馴染のポケに付いて行けなくなったルキア。

「土郎さん、恭也、俺も手伝うぜ！ 俺もユーノみてえな軟弱野郎が一番気に喰わねえんだ！！」

「お前……………」

「恋次君……………」

「行くぜ二人とも！」

「「おう！」」

「ってオiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！」

上条が叫ぶも、既に三人は正門を潜っていた。

「不幸だ……………何でこんな事に……………」

「言ってる場合でないぞ上条！ 行くぞー！」

「ホラ、行くよ当麻」

こうして上条達六人は、追い掛けるのであった。

「まったく、本当に此処で間違い無エンだろオな？」

白い姿に白い髪、そして赤い瞳の青年・一方通行は携帯電話を手に持ち、電話を通じて誰かと話していた。

『ああ、間違いない。問題は“奴”がどうしかけてくるかだ』

「チツ」

『まあ、そんな苛立つな。いずれ標的は自分から現れるさ。んじゃ任せませよ、一方通行』

電話の相手・土御門元春はそう言って電話を切った。

「ハア……………大体遊園地何ぞ俺の性に合わねエしよ」

「早く早くうゝってミサカミサカは大きく手を振ってみたり！！」

溜め息をつく一方通行アクセアレータに向かって、十代前半くらいの少女・打ち止めラストオーダーは大きく手を振っていた。

「まったく、コレだからガキはよオ……………」

「あら、良いじゃない？ ミサカも遊園地に行ってみたかったし」

打ち止めを一方通行と同じくらしい体格にした少女・番外固体がニヤニヤした顔で笑う。

「チツ」

舌打ちしながらも一方通行は二人と共に遊園地へ向かったの
た。アクセアラータであつた。

一方その頃、

「御坂さん、早く!」

「ちょっと初春さん、そんなに焦らなくても皆逃げないわよ」

茶髪に学生服姿の少女・御坂美琴は、後輩の白井黒子と風紀委員
同僚の初春飾利、そして初春の同級生の佐天涙子と共に遊園地に遊
びに来ていた。ジャツジメント

「それで? 最初は何処に行くの?」

「私、ジェットコースターに行きたいです!」

そんなガールズトークを広げていたが、

「!?!」

御坂は突如何者かの気配を感じ取った。

「御坂さん？」

「あ、ううん。 何でもないわ」

気のせいだと思いつつ、御坂は三人の元へ向かった。

「それより二人とも、この馬は何時になったら止まるんだ？ 距離が一向に縮まらない！」

「縮まるか！ これメリーゴーランドだぞ！ この土台ごと回ってるんだよー！」

「貴様等は永遠に回り続けるー！」

メリーゴーランドに乗っていた。

「何だオメエ等？ 殺し屋同盟に入りてえのか？」

「アナタ達が余計な事しないか見張りに来たのよー！」

「頼むから止めてくれない？ 上条さんは相棒の休日を誰にも邪魔して欲しくないんだけど」

「奴がなのはから離れるまで絶対に邪魔するからな！」

「……………兄の風上にも置けぬ台詞が出てきたな……………」

三人の人騒がせっぷりに、上条達はお手上げであった。

その同時刻、一人の男が何かを眺めていた。

男は一本のメモリを使い、それを自分の首筋に当てた。

【イーグル】

その瞬間、男の姿は鷲を模した異形と化した。

果たして、彼の目的は！？

どのアトラクションに乗るかを迷う御坂達であったが、

「キヤアアアアア！」

「え!?!」

突如悲鳴が聞こえたのだった。

「お姉様、アレを!」

「嘘!?!」

黒子が指を差す方へ顔を向けると、そこには鷲をイメージした怪人がいた。

「黒子、サポートをお願い! 初春さんと佐天さんはこの場にいる人達の非難を!」

「はい!」

「御坂さん、気を付けて!」

「行きましようお姉様!」

「ええ!」

すると御坂は、右にスロットが付いたベルトを腰に巻くと、懐から紫で「と書かれた黒いメモリを取り出す。

【JOKER】

御坂は、メモリをスロットに差し込むとそれを横に倒した。

「変身！」

【JOKER】

その瞬間、御坂はWに酷似した黒い戦士に姿を変えた。

『切り札の記憶』を宿す漆黒の戦士・仮面ライダージョーカーが、
此処に参上した。

「さあ、これで決まりよ！」

第5話・白き悪魔Eノシスコンとデートの阻止と黒い切り札（後書き）

次回、白き悪魔Eノ観覧車と超電磁砲と『永遠の記憶』
レールガン

第6話・白き悪魔E / 観覧車と超電磁砲と『永遠の記憶』(前書き)

今回はWは出ません

第6話：白き悪魔E / 観覧車と超電磁砲と『永遠の記憶』

御坂美琴が変身した戦士・仮面ライダージョーカーは、鷲の怪人・イーグルドーパントと激突を繰り出していた。

「ちえいさー！」

白き悪魔E / 観覧車と超電磁砲と『レールガン永遠の記憶』

ジョーカーの爆発的な身体能力による格闘戦法に翻弄されるイーグルドーパント。

「止めよー!」

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

右足に紫色のエネルギーを纏わせたジョーカーは、跳び蹴りを叩き込んだ。

「ライダーキック!」

しかし、イーグルドーパントは翼を広げ、空へと飛び去ったのであった。

「嘘!? ソレあり!?!」

流石のジョーカーも、空中戦までは出来なかった。

その頃、上条達はどうして...

「ハア……やっと飯の時間だ。コレなら二人を見張る事ができる」

「しかし……二人は本当に幸せそうな雰囲気を見せてるな」

なのはは、自分のお手製のサンドウィッチをユーノに食べさせていた。

そんな様子を陰で見ていた土郎と恭也は、ドス黒い殺気を放っていた。

「嫉妬つて怖えな」

上条はそう言いながら、

「食欲も怖いかな」

バクバクと皿の塔をつくりながら料理を食すインデックスとアトリを見ていた。

「すまぬが、トイレに行ってくる」

「ああ、構わねえよ」

ルキアは席を外し、トイレへと向かった。

「フウ……………」

トイレを出たルキアは、上条達の元へ向かった。

だがその時、一人の人物とすれ違った。

「!?!」

その時、ルキアはある悪寒を感じ取った。

「(な……………何だ、今の気配は!?! とても人間のモノではなかった
……………まるで……………怪物!?!)」

振り返ったルキアは、その人物を見る。

無論、彼もルキアに気付いたのか、彼女の方を見た。

「何だア、お前?」

「……………」

ルキアは心の中で、こつ叫んだはずである。

もし、この世に悪魔と呼べる存在がいるとしたら、それは目の前にいるのかも知れないと。

その人物は白い姿に白い髪、そして赤い瞳をした青年であった。

「ルキア、どうした？」

「!？」

すると、上条が声を掛けてきた。

「と、当麻!？」

「あん？」

すると、彼も上条を見る。

「あれ、アクセアラレータ一方通行じゃん、久しぶり」

「……………ああ、じゃあな」

青年・アクセアラレータ一方通行はそう言って返事をした。

アクセアラレータ一方通行が立ち去った時、ルキアは全身の汗腺から一気に汗が噴き出してしまう。

「ハア……………ハア……………ハア……………」

ルキアはこの時、初めて人間に対する恐怖を覚えてしまったのであった。

昼食を終えたなのはとユーノを追跡する恋次達三人　を追う上
条達六人。

すると恭也は叫びだした。

「まずい父さん！　二人が観覧車に向かってる！　観覧車と言えば、
キスの代名詞と言われるアトラクションだ！！」

「何イイイイイ！？　なのはの貞操が危ないイイイイイイイ
！！」

「二人とも、行くぜ！」

そう言っつて三人は駆け出すが、

「もう、疲れた」

上条はそう言っつて溜め息を付いた。

「何やってるのアンタ？」

「あ、御坂に白井。あと初春と佐天だったな」

すると偶然美坂達四人に会った。

「だいぶお疲れのご様子ですわね。何があったのですの？」

「うん、実は……………」

上条は、御坂達にこれまでの経緯を話したのであった。

その頃、そんなことも知らないなのはとユーノは……

「綺麗」

「そうだね」

観覧車から見た景色に和んでいた。

「なのは」

「……………何だったんだろう、あの人達？」

そう思ったなのはであったが、

「あの、なのは……………良いかな？」

「あ、はい！」

ユ一ノが自身の思いを伝えるのであった。

「なのは、これからもずっと……………いや、キミと一生を共にしたい！
僕と結婚して欲しい！！」

それを聞いたなのはは、強く抱きしめ、

「私の全て、アナタに捧げます」

返事を返したのであった。

因みに、『翠屋13』の三人は……

「ハア、ハア、偉い目に遭った」

「まさか閃光がへりを破壊するとは……」

そう言ってボロボロの姿で歩くが、

「はあくい、そこまで」

「あ……あれ、上条さん？」

そこには、何時でもスタンバイOKの上条や御坂達がいた。

「事情は上条さん達から聞きました」

「一組のカップルの恋路を邪魔するとは、許しがたい行為ですの」

「すこおし、頭を冷やしましょうか？」

すると御坂は、自身の異名にして十八番の必殺技『レールガン超電磁砲』を放った。

レールガン超電磁砲は三人の顔を横切る。

恋次はこの光景を見て、先ほどのへりを破壊したのが御坂であると感付いた。

「そんなワケで……………」

せーのと10人は、上条の決め台詞を良いながら、

『まずは、その幻想をぶち殺す!!』

一斉に飛び掛った。

「「「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」「」

士郎、恭也、恋次の三人は、見事にボコボコにされてしまう。

後に、桃子にキツイお説教を受けることになるのは、また別の話である。

一方その頃、別の場所では……………

「まさか、仮面ライダーに出くわすとは……………」

仮面ライダーから逃げる事が出来たイーグルドーパントであったが、

「!? 誰だ!?!」

突如何者かの気配を感じ取った。

「つうーかよオ、ワザワザこんなどころまで足を運んだっていうのによオ……………何だア、このバカみたいな三下はよオ?」

白い髪に赤い瞳の青年がイーグルドーパントを見ながら歩き出してきた。

イーグルドーパントは、相手が誰なのかが見当がついた。

「まさか……………一方通行? アクセアレータ 科学系最強と呼ばれている、Sランク特 サイエンス 殊者!?!」

彼の正体を知った途端、イーグルドーパントの頭の中は、恐怖に支配されていた。

「(む……………無理だ! あんなドーパント以上の怪物に、勝てるワケがない!!)」

「さアてと、この俺を相手にするんだ。 覚悟は出来てんだろオな! あア!?!」

その瞬間、アクセアレータ 一方通行は右側のみにスロットが付いたベルト・ロストドライバーを装着し、一本のガイアメモリを取り出した。

【ETERNAL】

「変身！」

メモリをスロットに差し込み、横に倒した。

【ETERNAL】

すると、アクセラレータ一方通行の体は徐々に白いボディに横向きのEを模した白い触角、そして黄色い複眼に青い炎に包まれたような装甲を纏った手足の戦士に変身した。

『永遠の記憶』を宿す戦士・仮面ライダーエターナルの参戦である。

「さア、地獄を楽しめエ！」

エターナルはそう言って、拳を振るいだす。

しかしイーグルドーパントは、翼を広げて空へと逃げる。

「ハッ！ いくら貴様でも、空中戦までは出来ないようだな！！！」

地上を見下ろしながら勝ち誇るイーグルドーパントであった。

だがエターナルは、それを全く気にしてはいなかった。

「ギャハハハハハ！ ワザワザ的になってくれてどオモ有難オ！！！」

エターナルは四つの竜巻を背中に接続して、イーグルドーパントを追いかけるように飛び上がった。

「!?!」

流石のイーグルドーパントも、心の中で叫んだ。

逃げられないと……

「悪いが、こつから先は一方通行だア！」

するとエターナルは、銀色のメモリをマキシマムスロットに差し込んだ。

【WEATHER MAXIMUMDRIVE】

その瞬間、背中の竜巻は数倍に大きくなり、

「大人しく尻尾巻きつけて、無様に元の場所へ引き返しやがれエ！」

竜巻と雷を纏った拳で、容赦なくイーグルドーパントを殴り落とすた。

「グアアアアアアアアア！」

攻撃を喰らったイーグルドーパントは、地面に叩きつけられると同時に爆発し、元と青年の姿に戻ったのであった。

「つたく……調子に乗ってんじゃねエぞ、三下が」

そう言って変身を解いた一方通行は、アクセアラレータ現代的なデザインの杖を突き

ながらその場を後にした。

第6話・白き悪魔E / 観覧車と超電磁砲と『永遠の記憶』 (後書き)

次回・Lの話術 / アクセル参戦と放課後ティータイム

第7話：Lの話術／アクセル参戦と放課後ティータイム（前書き）

アクセル登場です。

第7話：Lの話術／アクセル参戦と放課後ティータイム

平和な時間を過ごしている万時屋一向。

「ハア……平和だな」

するとインデックスはテレビの音楽番組に夢中であった。

「音楽って良いよね」

すると、インターホンが鳴り出した。

「はぁーい」

ユ一ノは玄関を開けると、そこには長い茶髪に眼鏡を掛けた若い女性が出た。

「学校の先生ですか？」

依頼人の名前は山中さわ子。

桜ヶ丘高校の教師を務めている。

「実は、私の生徒の平沢さんと言う子が、様子が可笑しいんです」

「おかしい？」

「なあなあ、平沢ってあの平沢唯ちゃんか？」

「ええ、そうですけど……ん？」

聞き覚えの無い声に応えるさわ子であったが、

「って何でいるのオオオオオ！？」

そう言って上条は、短い茶髪に腰まで長い長い金髪の女性に驚く。

茶髪の女性は八神はやて、金髪の女性はフェイト・T・ハラオン。

なのはの幼馴染で、ユーノの友人でもある。

「いやあ、久々にユーノ君に会いに来たんやけど、お取り込み中みたいやし」

「てか、その平沢って子のこと、知ってるのか？」

「え、まさか当麻君……『放課後ティータイム』の事知らんのか！？」

「何それ？」

その一言で全員が驚いた。

「放課後ティータイムといえば、桜ヶ丘高校の女子生徒で有名な人気ロックバンドで、平沢唯ちゃんはそのボーカル兼ギター担当なんやー!」

「尚更知らん」

本当に知らない上条であった。

「それで、その子がどうかしたんですか？」

「実は平沢さん……最近調子が出ないと言っか、何かスランプに陥りやすくなってるんです」

それを聞いた上条は疑問を感じた。

「スランプは誰にもあるんじゃないのか？」

「でも平沢さんの場合、それが酷くなってるというか、徐々にエスカレートしてるんです」

「何か心当たりは？」

それを聞いたさわ子は首を横に振った。

「そうか……分かりました。この依頼、引き受けます」

上条はそう言っ立ち上がった。

午後5時、平沢唯が自宅に帰っているところであった。

「無駄だよ唯ちゃん。私からは逃れられない」

一体の異形が彼女を見ていた。

「なに女子高生をコッソリ見てんだよアンタ？」

すると異形の後ろで茶色を基調としたジャージにGパンを穿いた青年・浜面仕上が立っていた。

「電波塔の道化師”ってのはアンタの事か？」

「な、誰だいキミは!？」

「質問を質問で返してんじゃねえ！」

浜面はバイクのハンドル部に良く似たベルトを腰に巻いた。

【ACCEL】

「変身！」

【ACCEL】

スロットにメモリを差し込み、ハンドルを右のハンドルを捻る浜面。

その瞬間、浜面の姿がフルフェイスヘルメットを模した仮面に青い複眼、そしてオートバイクを模した赤いボディの戦士・仮面ライダーアクセルへと変わった。

「さあ、振り切るぜ！」

「『電波塔の道化師』？」

情報収集を行っていた上条は、高校時代の友人で青い髪にピアスを付けた関西弁の青年（以下青髪ピアス）からある情報を聞いていた。

「そうなんや。 正体不明の詐欺師でな、ソイツの被害に遭った若者達も数多くいるんや」

「（ドーパントってことか……）」

「カミヤん、気を付けた方がええで」

「へ？」

「何でもソイツに出遭った人達は、皆まるで夢を失ったような顔をしてしまって、中には自殺未遂をしようとした奴もおるんや」

それを聞いた上条は、拳を握りながら呟いた。

「（もし、それがドーパントの仕業なら、絶対に許すわけにはいかねえ）」

一方でドーパントと戦闘を繰り広げていたアクセルは、

「強いなキミは、面白くなってきたよ」

「フザケンな！」

ドーパントの発言にアクセルは、大剣型武器・エンジンブレードを振るい上げる。

人気の無い公園まで吹き飛ばしたアクセル。

「流石は仮面ライダーだ。だが、そんな攻撃じゃ私は倒せないぜ！」

ドーパントは口部分から針状の飛び道具を飛ばすが、アクセルはそれを左腕で弾いた。

「だったら試してみるか？」

アクセルは、エンジンブレードの内部にギジメモリ・エンジンを挿入し、引き金を引いた。

【ENGINE MAXIMUMDRIVE】

「ふ、は、たあ！」

そしてAの字を描くように飛ばしす斬撃『エースラッシャー』を放った。

「ぐあああああああ！」

攻撃を喰らったドーパントは、その場で爆発する。

「絶望がアンタのゴールだ！」

「わ、私のメモリがバラバラに！！！」

ドーパントは最後の悪足掻きに再び針を飛ばしたが、アクセルはそれを再び腕で弾いた。

「本体は逃げたか……！」

変身を解いた浜面は、メモリをハンカチで包む。

「これで事件解決だな………ん？」

しかし、一瞬違和感を覚えた浜面は、ハンカチを開くと、

「『酔………昆布』？」

丁度ガイアメモリくらいの大きさをしたお菓子の小箱を目にして、

「やられたアアアアアアアアアアアア！！！」

思わず絶叫したのであった。

「もしもし、浜面？ どうした？」

浜面から電話を受けた上条は、彼からドーパントの情報を受ける。

「ドーパントが、平沢唯を！？」

『ああ、良く分かんねえけど、ソイツその子を狙ってるんだ』

「戦ったのか？」

『ああ！ でも相手は暗示をかける能力があるみてえなんだ。俺もさっきやられたばかりだ』

「分かった、その事をユーノに連絡しといてくれ。俺、手が離せない状況なんだ」

『悪いな、助かるよ』

そう言って浜面は電話を切った。

「暗示を掛けるドーパントか……厄介だな」

上条も同じ事を考えながら走って行った。

とある広場まで歩いた上条は、少し休んでいると、

「ちよいと、そこのお兄さん」

「ん？」

一人の中年男性に声を掛けられる。

「アンタは？」

「沢野幸男。 此处で詩を書いて送ってるんだ」

「へえ」。 そう言えばさ、幸男さんはこの辺で茶髪の女子高生を

見なかった？」

「もしかして唯ちゃんの事かい？」

「あ、知ってた？」

「あの子ね、中々面白い子だったよ。夢は軽音部の友達と武道館ライブに行くとかでっかい夢持ってたさ」

「ふうん。 凄い子なんだな」

幸男から唯の情報を少しばかり聞くことが出来た上条であった。

一方ユートノは、浜面からドーパントの情報となる手掛かりを『検索』していた。

「道化師……嘘……針……此処までは分かった。他にキーワード

は？」

「掴み所が無い奴だったからな。口の軽い……ふざけた奴だった」

「口が軽い？」

その瞬間、ユーノの頭の中のパズルには、全てのピースが揃った。

「浜面君、分かったよ！ 敵のメモリの正体が……！」

一方の上条も、ルキアと恋次、スバルとティアナと共にある廃工場の近くまで唯の通学路を辿っていた。

すると、ある声が聞こえた。

「アナタね、最近平沢さんを付き纏っていたのは……！」

声のする方へ向かうとそこにはさわ子がいたが、

「アイツは!?!」

彼女と口論してるのは、異形存在であった。

「まさか、浜面の言っていたドーパントか」

さわ子は、ドーパントにこう言い出した。

「コレ以上、私の生徒に近づかないで!?!」

「そういうワケにはいかないなあ。なんせ折角面白くなってきたのになあ」

その瞬間、上条が飛び蹴りを叩き込む。

「ワケ分かんねえ事言ってるじゃねええええええええええええ!?!」

「んが!」

見事に吹き飛んだドーパント。

「ルキア、中山先生を!」

「さわ子殿、此方へ!?!」

さわ子を避難させ、いるのは上条とドーパントのみであった。

「テメエ、ナニモンだ!」

「私かい? 私は……」

そう言って手で口元を隠すような体勢に入り、

「私はお前のご主人様だ!!」

口から針を飛ばすが、

「好き勝手やってくれたコノヤロー!!」

アクセルに受け止められてしまう。

「げ!?!」

「上条、コイツのメモリの招待は『라이어』だ!」

「『L A E』……『嘘の記憶』ってことか!」

「奴は言葉を凝縮した針を刺す事で、相手に自分の嘘を信じ込ませる事が出来る!」

アクセルの説明を聞いた上条はダブルドライバーを装着しながら納得する。

「成る程な、その針を使って……平沢に“自分はネガティブになりやすい”っていう嘘を信じ込ませたのか!」

「嫌な雲行きだな……逃げるが勝ちかな?」

そう言ってライアードーパントは逃げようとするが、

「逃がさずと思ったかしら？」

「甘エンだよ」

アクセラレータ
一方通行と御坂が現れた。

「いくぜユーノ！」

【JOKER】

「ああ」

【CYCLONE】

「行くわよ！」

【JOKER】

「地獄を楽しめよ、三下！」

【ETERNAL】

「」「」「」「」
「変身——！」

【CYCLONE・JOKER】

【JOKER】

【ETERNAL】

上条 & amp; ユーノは仮面ライダーW、アクセラレータ一方通行はエターナル、
御坂ジョーカーへと変身した。

「ハッ、タア！」

「逃がさない！」

「騙された分の利子、払ってもらっぜー！」

【ENGINE・ELECTRIC】

電気を纏ったエンジンブレードでライアードーパントを斬り裂く。

「奴の針には要注意だ」

「だつたら！」

【LUNAR・TRIGGER】

「喰らえ！」

追撃能力を持つルナトリガーで仲間をかわしながらライアードーパ

ントを狙撃する。

「ガア！」

「メモリブレイクだ！」

そう言っつてメモリを抜こうとしたその時であった。

「あれ？ これ、どう言うこと？」

偶然か必然か、平沢唯がこの場所に来ていた。

「ニヤリ」

その瞬間、ライアードーパントは何かのボタンを押した。

ドガンと小さな爆発音が聞こえ、鉄材が唯に向かって落花してきた。

「!?!」

「危ない！」

すぐさまジョーカーが走り出した。

果たして、唯の運命は!?!?

第7話：Lの話術／アクセル参戦と放課後ティータイム（後書き）

次回、Lの話術／ふわふわ時間タイムと騙し撃ち

第8話・Lの話術／ふわふわ時間と騙し撃ち（前書き）

後編です。

第8話：Lの話術／ふわふわ時間と騙し撃ち

唯の頭上に落ちる鉄材。

「危ない！」

駆け寄るジョーカー。

そして、ババババと落ちる鉄材。

「御坂！」

果たして、唯とジョーカーこと御坂の運命は！？

Lの話術／ふわふわ時間と騙し撃ち

突然の攻撃にアクセルは攻撃される。

「よせ！ アンタは騙されてるだけだ！！」

「そんな嘘に騙されるかよ！！」

完全にライダーパントの思う壺になってしまった恋次。

「だったら私が！」

そう言つてスバルがデバイス・マツハキヤリバーを起動させたが、

「“白い仮面ライダーがドーパントだ”！」

ライダーパントの針をモロに喰らい、

「うおおおおおおお！！」

エターナルに狙いを変えた。

「はア……だろオと思つた」

変身を解いた一方通行は、
アクセアラータ

「はあああああ！！」

攻撃してきたスバルの顔面を鷲掴みし、

「暫らく寝てる！！」

そのまま思いつきり恋次の方へ投げ飛ばした。

「コレで終わりだ　んが!？」

そして恋次の頭にスバルの頭がぶつかり、二人は気を失った。

「……互いに大変だな」

「ですね」

その様子を観ていたルキアとティアナは、一瞬の共感を覚えたのであった。

一方のWは、ライアードーパントを睨みつけ、

「テメエ……いい加減にしやがれ!!」

走り出したのである。

「フフフフ……無駄だよ」

そう言っつてライアードーパントは再び針を飛ばした。

「“その黒髪のお嬢さんとオレンジ髪のお嬢さんがドーパントだ”！」

Wは右手を振るい、針を刺された。

「当麻！」

これにはルキアもティアナも動揺してしまう。

「ハハハハハ、これで私はおさらば出来」

「出来ると思っただか？」

「へ？」

突然の声にライアードーパントは顔を向けると、そこにはWが拳を握りながら突撃していた。

「オラアアアアアアアア！」

「ンガア！？」

Wのパンチを喰らったライアードーパントは、吹き飛ばされてしま
う。

「ど、どついつことだ!?!」

「どつした?」

「なら、 “お前は私の召使いだ”!」

再び針を飛ばが、

「効かねえよ」

Wが右手を突き出すと針はその場で消滅した。

「何!?!」

驚くライアードーパント。

「それじゃ、止めといくぜ!」

「こつなつたら………」

しかしライアードーパントは、懐からあるモノを叩き付けた。

「さいなら!」

すると煙が出現し、ライアードーパントも姿を消した。

「ヤロツ! 逃げやがった!」

「今は平沢さんと美琴ちゃんが先だ」

「ああ、そうか！ 御坂！！」

鉄材の山に向かうと、

「全然、大丈夫よ」

そう言って御坂が唯を抱きながらサムズアップをしていた。

その際、一方通行はライアードーパントアクセアレータが立ち去った場所で、あるモノを拾った。

「何だア、コリヤ？」

事務所で茶を飲む一同。

「大丈夫か？」

「うん」

「平沢さん、何があったの？」

さわ子の言葉に、唯が口を開いた。

「明日のライブで失敗しそうな気持ちになって、都市伝説で『神都神社でお参りをすると一番強い願いが叶う』っていうお呪いがあるのを思い出して、それで神社でお参りをしたんだけど……」

「最近、不運な出来事が起きてしまったと？」

「うん、『願いが叶う代償に不幸な出来事に見舞われる』って……」
そう言っただけで落ち込む唯に、どう言えば良いのかが分からない一同であるが、上条がこう言った。

「別に気にする事無いと思うぞ？」

「え？」

「“願いが叶う代償に不幸な出来事に見舞われる”？ 知るかよそんなもん。 だったら不幸に負けずにその幻想に打ち勝てば良い。 そうだろ？」

上条の言葉に唯は笑顔で首を縦に振った。

「うん！」

その頃、席を外していた御坂と一方通行に浜面、そしてユーノの四人は事務所のクローゼットにある隠し部屋にいた。

「最初の戦いで俺は奴の“嘘”^{はり}を二度刺されたってことか」

浜面はライアードーパントとの戦いを思い出してそう言った。

「しかも本人はやられず、メモリも偽者だった」

「恐らく戦闘力自体は低いが、能力自体は厄介な方だ」

「しかも、相手の挫折を観るのが好きな愉快犯ときたまもんだぜ」

「何かムカつく相手ね」

「もう一度調べ直す必要があるようだね」

再び捜査が行われたのであった。

ライアードーパント捜索を開始したユーノは、『ワインズマン賢者』を発動していた。

「それにしても、相手が分かったのに居場所が特定出来ないとは難しいものだな」

「だったら良イのがあるぜ。和紙だ」

アクセアラータ一方通行の一言で、全ての欠片ピースが揃った。

「ビンゴだ、アクセアラータ一方通行！」

「野郎が立ち去った場所でコイツが落ちたのを見つけた」

そう言つてアクセアラータ一方通行は小さな長方形に切り取られた和紙を見せる。

「分かったよ。その和紙を使う職業を持っている人物……つまりドーパントの正体は、路上作詩家の沢田幸男だ！」

それを聞いたインデックスがこう叫んだ。

「そう言えば、ゆいもその人からお呪いの話を聞いたって……！」

上条は彼と始めてあった公園に向かうが、物気空であった。

「いない……………」

「カミヤくん」

「青髪？」

すると青髪ピアスが上条の前に現れた。

「さつき幸男っておじさんが、カミヤんに渡してくれて」

「ん？」

手渡された色紙には、「ご苦労さんでした」と墨字で書かれていた。

「やられたあああああああ！」

コレを見た上条は、絶叫してしまった。

上条からの連絡を受けた一同は、苛立ちを覚える者もいれば、怒りを爆発させるものもいた。

「どうやら、僕等が察した事を予想していたようだね」

「本当にムカつくうゝゝゝゝゝ！」

「ふざけた野郎だア！」

「何か方法がねえのかよ！ 誰かが奴のフリをして願い事を叶える演技をするとか……」

「そんな都合の良いことがあるワケないじゃない！」

浜面の発言を聞いてツツコミを入れる御坂であったが、

「成る程、それだ！」

ユーノがある作戦を閃いた。

ライダー・ドーパントこと沢田幸男は、移動用のワゴン車に乗っていた。

「今日で“電波塔の道化師”は休業しようかな」

満足した顔でそう言うが、ラジオからある声が出てきた。

『こんにちは！ 『神都ラジオ』の時間です！ 今回のゲストは、桜ヶ丘高校の軽音部員で結成されたロックバンド・放課後ティータムのギター担当の平沢唯さんです！』

『ど、どうも！ 平沢唯です』

神都の人気ラジオ番組のゲストで、唯が登場していた。

『そう言えば平沢さん、ある人と待ち合わせしてるそうですが、どんな人なんですか？』

『は、はい！ 実は、あの有名な“電波塔の道化師”さんと公園で会う約束をしたんです』

「へえ、 “電波塔の道化師” って何い~~~~~!?」

まさか自分と会う約束をしたという唯の発言に、電波塔の道化師本人は驚きを隠せなかった。

『それは何時頃ですか？』

『はい！ この番組の収録を終えた一時間後です』

『良かったですね』

『はい！』

『という事で、放課後ティータイムのギター担当の平沢唯さんでしたあ〜！』

番組が終わり、慌てだした幸男。

「こ、こうなったら！」

【ライアー】

幸男は、ライアードーパントに変身し、そのまま車を走らせた。

そして一時間後。

「見つけた……」

唯と思われる後姿を見付けたがライアードーパントであったが、

「ヤッホ〜唯ちゃん！ 電波塔の道化師だよ〜ん！」

変な格好に厚化粧をした男が唯の前に現れた。

「嬉しいなあ〜、唯ちゃんが僕に会いに来てくれるなんて……これは何かの運命なんだよ〜ん！」

自分の名前を汚されたライアードーパントは、咄嗟に車から降りてきた。

「ふざけるのもいい加減にしろ貴様あ！ 違うんだ唯ちゃん。私が電波塔の道化師なんだ！！」

唯の下へ駆け寄ったまさにその時であった。

「ちえいさー！」

「んが！」

突如蹴り飛ばされてしまった。

「待ってたわよ、嘘つきドーパント！」

そう言って仁王立ちをしていたのは唯ではなく、彼女に近い髪型に

桜ヶ丘高校の制服を着た御坂と、

「嘘つきも騙されるって事か」

先程の変な格好から厚化粧のみを拭い取った恋次の姿であった。

これを見たライダーパントは、すぐさまコレが何なのかが分かった。

「まさか、罠か!?!」

「そつだ」

「アンタが自分の呼び名を汚されたら必ず来ると考えて、ワザと誘い込んだんだ。もう逃げ場はないぜ、ライダーパント! いや、沢田幸男!!--」

「因みに唯さんの協力は、ラジオだけよ」

上条達の策にまんまと引っ掛かったライダーパントは、怒りを爆発させる。

「良くも私を騙したな 許さあーん!」

「許さねえのはコツチだ! 騙される側の身にもなりやがれ」

そう言って上条達は、ドライバーを装着した。

「行くぜ皆!」

「ハア！」

「オラア！」

「ハア！」

ライダー達の隙の無い攻撃に翻弄されるライダーズは、再び『言葉の針』を飛ばす。

「お前達は敵同士だ！」

「効かねえよ！」

しかしWの右手によってその攻撃は阻まれた。

「こつなったら……無敵の必殺技！」

「何!?!」

ライアードーパントの奥の手に一瞬驚く四人であったが、

「なぐんてね、嘘だよ〜ん！」

そう言って武器を手に取ったライアードーパントは、その武器からエネルギー弾を放つ。

「喰らうかよ！」

Wが右手を盾に打ち消していく。

「くっ、何で効かないんだ!？」

自分の攻撃を無効化するWに驚きを隠せないライアードーパントであったが、

「振るきるぜ！」

そう言って、バイクフォームに変形したアクセルの体当たりを喰らい、吹き飛ばされてしまう。

「喰らいやがれエ！」

【HEAT MAXIMUMDRIVE】

ナイフ型武器・エターナルエッジのマキシマムスロットにヒートメモリを差し込み、炎を纏った斬撃を放った。

「ガア！」

「今だ！」

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

そのままWとジョーカーは、ジョーカーメモリをマキシマムスロットに差し込み、

「ジョーカーエクストリーム！」

「ライダーキック！」

同時に必殺技を叩き込んだ。

「グアアアアアアアアア！」

喰らったライダードーパントは、爆発し元の沢田幸男に戻った。

そして地面に落ちた和紙に、彼の涙が染み込んだのは言うまでも無い。

「ふう〜、間に合った」

コンサート会場の観客席に着いた上条とユーノ達は、放課後ティータイムのライブを観に来た。

「皆さあ〜ん！ 放課後ティータイムです！」

ギターを持ち、マイクに近づけた口から大声で観客に挨拶する唯のが見えた。

「それじゃあ聞いてください！ 放課後ティータイムで、『フワフワ時間』！！」

そして、このライブも成功を果たし、会場は大盛り上がりであった。

第8話・Lの話術／ふわふわ時間と騙し撃ち（後書き）

次回、Fの暴走／捕らわれる幻想殺し

第9話・Fの暴走／捕らわれる幻想殺し（前書き）

まさかのあの人が登場！？

第9話：Fの暴走／捕らわれる幻想殺し

「あれ？」

甚平姿の男・浦原喜助が何かの捜していた。

「オカシイツスねえ」

困った顔で頭をかく浦原。

「喜助さん」

すると、浦原の言んでいる店の店員・雨フルルが現れた。

「さっき恐竜が店の外にいたけど……何ですかアレ？」

「え？」

Fの暴走／捕らわれる幻想殺し

神都にある駄菓子屋『浦原商店』。

しかしその実体は、ガイアメモリを対応させたアイテムを開発し、ライダー達を支援する『ガイアメモリアイテム開発工場』である。

「不幸だああああああああああああああああ！！！」

あるモノを受け取りに店を尋ねた上条は、ソレがなくなったと知って絶叫した。

「いや、すみませんね。アレの思考は開発者のあたしも知りませんので」

「ハア、良いよ。浦原さんですら分からないなら……」

そう言って上条は店を後にした。

その様子を少し離れた場所で見っていたルキアと恋次。

「まさか、浦原までいたとはな」

「駄菓子屋を装ったメモリ開発って、まるっきり俺等に近いな」

「そうか、『彼』は逃げ出したのか」

事務所に戻った上条の説明を聞いたユーノは、すぐさま納得する。

すると、買い物で外出していたティアナとスバルが帰ってきた。

「上条さん、手紙が入ってましたよ」

ティアナから渡された封筒を取り、封筒の中身の手紙を見る。

「!？」

そこには、とんでもない内容が書かれていた。

『高町なのはは預かった。返して欲しければ、神都大橋の下の河原に
来い 比留間』

「なのは!？」

「比留間の野郎！」

「これは……誘拐の脅迫状!！」

「しかもなのはさんを!？」

「クソツタレ！」

上条はそう言ってハードボイルダーに乗り、河原へ向かった。

「オイ、当麻！」

それを見たルキアと恋次は、上条の後を追った。

神都大橋の下にある河原。

そこに比留間兄弟と縄で縛られているのがいた。

「比留間兄弟！」

そこへ上条が現れた。

「当麻君！！！」

「良く来たな幻想殺し」

「テメエ！ 脱獄してたのか！？」

「その通りだ。 伍兵衛」

「ああ！」

【アームズ】

すると伍兵衛は、赤いのガイアメモリを腕のコネクタに差し込んだ。

その瞬間、彼の姿は赤いボディに背中に欠けた剣のような物を付けたドーパントに変わった。

『武器の記憶』を宿すアームズドローパントであった。

「くそ！」

すぐさま上条は、ダブルドライバーを装着し、ジョーカーメモリを構えた。

【JOKER】

無論、ユーノもサイクロンメモリを構える。

【CYCLONE】

「変身！！」

【CYCLONE・JOKER】

仮面ライダーWに変身し、アームズドローパントに立ち向かった。

「うおおおおおおお！」

「ハア！」

攻撃を仕掛けようとしたWであったが、アームズドローパントは右手をマシンガンに変えて弾丸を発射した。

「ガア！」

「不味い！ 『武器の記憶』のを宿すメモリだ。 此処は遠距離戦で決めるよー！」

「よし！」

Wはすぐさまジョーカーメモリをトリガーメモリに替えようとしたが、

「おっと、そこまでだ！」

そう言って喜兵衛が銃口をなのはに向けていた。

「ンフフフフ…… 幻想殺し、この娘の命が欲しかったら変身を解くんだな」

「クツ！」

「どうした？ 変身を解かないのか？」

「……………」

Wはサイクロンメモリに手を当てる。

「（ユーノ、変身を解くフリをしてルナトリガーに変わるぞ）」

そう言ってサイクロンメモリを取り外した。

しかし、その時であった。

「今だ伍兵衛！」

「オラア！」

アームズドローパントは右手の銃口から特殊な粘着弾を撃ち、ダブルドライバーの右スロットに命中させた。

「な!？」

驚きを隠せないWであったが、

「オラア！」

「グアアアアアアア！」

今度はグレネード弾を発射し、喰らったWは強制的に変身がが解けてしまった。

「当麻君！」

「ハハハハハハ！ 嘗て戦った相手の弱点を見抜けんワシじゃないわい!!！」

「か……は………」

血を吐きながら、倒れてしまった上条は、そのまま比留間兄弟に捕まってしまった。

「そんな……当麻君……なのは……」

相棒と恋人を人質にされ、どうすれば良いか分からなくなってしまったユーノ。

「どうすれば……」

「ユーノさん、しっかりして下さい!」

ティアナとスバルも励ます。

するとその時であった。

『クワァー!』

突如、恐竜の鳴き声のような音声が響いた。

「え?」

声のする方へ顔を向けると、そこには銀色のボディの恐竜型ガジェットが本棚の上に立っていた。

『クワァー!』

「キミは………」

この恐竜型ガジェットの正体は一体何者なのか？

そして、上条となのはの運命はいかに！？

第9話・Fの暴走／捕らわれる幻想殺し（後書き）

次回、Fの暴走／牙の切り札

第10話：Fの暴走／牙の切り札（前書き）

遂にFへの変身の時が!!

第10話：Fの暴走／牙の切り札

恐竜型ガジェットを翡翠色の瞳で見るユーノ。

「……………」

一瞬の戸惑いを感じたが、すぐに答えを出した。

「僕と、戦ってくれるかい？」

『クワァー!!』

果たして、このガジェットの正体は!?

Fの暴走／牙の切り札

とある廃工場。

「くそ、グルグル巻き付けやがって！」

上条となのはは、縄で縛られて捕らわれの身となっていた。

「ゴメン、私が買い物途中で気付けば……」

「……気にすんな、お前のせいじゃねえよ」

謝るなのはに優しく答える上条。

「アイツが……ファングさえあれば……」

「ファング？」

聞きなれない言葉になのはは反応した。

「何ソレ？ 聞いたことないんだけど」

「簡単に言つとWの“第七のメモリ”で、唯一ユーノを基本にした
Wに変身出来る代物だ」

ベース

フアングの説明を聞いたのはは驚きを隠せなかった。

「嘘、そんなメモリがあるの!? でも、何処に?」

「それが、あのメモリはガジェットと一体化したような感じだから、
何処ほつつき歩いてるのが分かんねえんだ」

「え、動くの!?!」

“動くガイアメモリ”という言葉に再び驚きを隠せないのは。

「でも……仮にフアングが現れても、ユーノが変身を拒む」

「どうして!?!」

今度はユーノが変身を拒む事を知って、驚きを隠せなくなったが、
上条が説明した。

「一年前、ある組織から脱出しようと、初めてフアングで変身した
んだ」

上条は、その時の記憶を遡らせる。

「でも……そんな時の記憶、全然覚えてないんだよな」

「ええ!?!」

「だけど、変身を解除した時のユーノの怯えようは忘れられなかった」

（もう………ファングは二度と使わない。アレを使えば、僕が僕でなくなる！）

「暴走するメモリなんだ」

「だから、暫らくあのメモリを知り合いに同じことがないように再調整してもらってたんだけど………逃げられた」

「逃げられたあ！？」

驚くのはに、上条はコクリと首を縦に振った。

翌朝、比留間兄弟が上条の前に現れ、

「ククク……悪く思うなよ幻想殺し。貴様を殺せば、闇社会での俺達の株が上がるんでな」

既に伍兵衛はアームズドローパントに変身し、右手の銃口を彼の眉間に近づけていた。

「最後に何か言いたいことはあるか？」

その言葉に、上条はこう言った。

「後悔する事になるぜ？」

「それがお前の最後の言葉か。悲しい台詞だぜ！」

そう言っアームズドローパントは弾丸を放とうとする。

もうダメだと思った上条であったが、まさにその時であった。

シュバンと何かが突如現れ、

「ガア！」

「な!？」

アームズドローパントを攻撃した。

まさかと思い、上条は真っ直ぐ前を向くと、

「すまない、遅くなった！」

そこには恐竜型ガジェットを肩に乗せたユーノが、ハードボイルダーに乗ってやって来ていた。

「ユーノ！」

「ユーノ君!!！」

ユーノの登場に二人は驚きを隠せなかった。

「兄者、アイツは……」

「幻想殺しの相棒の小僧か……」

「どっしるっ」

「無論、殺せ！」

兄の指示を受けたアームズドローパントは、戦闘態勢に入った。

「でもよ兄者、奴も変身するんじゃないかねえのか？」

「忘れたのか？ あの小僧は変身の際、身体だけは抜け殻状態になる事を」

「あゝ、そうか。それに、幻想殺しのベルトの右スロットは使い物にならないしな」

誇らしげな比留間兄弟にユーノは普段とは違う一面を見せながらこう言った。

「後悔するなよ……僕はもう知らないぞ」

そう言つて恐竜型ガジェットを右手に乗せた後、そのままガジェットを折り畳むように変形させた。

するとガジェットは、大きな恐竜の頭部のような形状になり、その下に獣の牙をイメージしたFが描かれたガイアメモリが出現する。

それをクルッと回転させながら左手に持ち換え、右手でスイッチを押した。

【FANG】

音声と同時に上条のダブルドライバーの左スロットに差し込まれた

ままのジョーカーメモリが、ユーノのドライバーに転送され、ユーノはそれを奥に差し込んだ。

「まさか…………お前!？」

嫌な予感を感じ取った上条は、すぐさま叫んだ。

「よせ、ユーノ!!!」

上条の叫びも虚しく、ユーノはそのメモリをドライバーに差し込んだ。

「変身!!!」

【FANG・JOKER】

恐竜の鳴き声のような音声とジョーカーメモリの音声が鳴り響き、ユーノの身体は右半身が白で左半身が黒、そして複眼やボディが凶暴さを見せるような姿のWへと変わった。

仮面ライダーW・ファングジョーカーの誕生であった。

「な!？」

「バカな! ガード無視だと!？」

そのままWは、アームズドールパントの顔面を左手で鷲掴みし、容赦の無いパンチの嵐を叩き込んだ。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

「が!？」

「ウオオオオオオオオオオオオ!!」

さらにそのまま思いつきり投げ飛ばし、バックルにあるファングメモリの鼻先の角部分・カクティカルホーンを弾くと、

【ARM FANG】

右腕の白い刃・アームセイバーが出現し、Wは容赦の無い斬撃を叩き込んだ。

ズバズバと斬られるアームズドールパントも、右手を今度は剣に変えて反撃しようとするが、全く歯が立たない。

「うあああああああ!!」

「おい、落ち着けユーノ!!」

左目の点滅と同時に上条の声が発せられた。

なのはも叫ぶが、Wは止まらない。

「よせユーノ！ 落ち着んだ！！」

上条も必死で呼びかけるも、ユーノは全く止まる気配が無い。

「グアアアアアアアアアアアア！」

そのままアームセイバーがなのはごと斬ろうとしたその時、

「止まれ相ぼオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

上条当麻は、ある場所にいた。

とても深く、恐ろしい闇の中であった。

「此処は……………何処だ？」

その時、彼の耳元である声が聞こえた。

「あああああああー!!」

「ユーノ!? まさか此処は……」

ユーノの精神こころの中に自分はいると確認した上条は、闇の中を走り出した。

奥へ奥へと走ると、そこにはうなされているユーノがいた。

「おいユーノ! 俺だ! 当麻だ! 分かるか!?!」

苦しみから解放されるかのように目を覚ましたユーノ。

「ハア……ハア……来てくれると思ってたよ」

その言葉に上条は答える。

「当たり前だろ。俺達は何だ?」

二人は立ち上がり、こう言った。

「二人で一人の仮面ライダー」

その瞬間、深い闇と化していたユーノの精神世界は、美しい草原へと変わった。

「ん……………うあ!？」

目を瞑っていたなのはは瞼を開けると、丁度ギリギリのところであームセイバーが顔の近くにあった。

「なのは、もう安心して」

Wの中のユーノの声も何時もの優しさを見せ、

「ユーノ君……………うん!」

嬉し涙を流しながら頷いた。

「ハア!」

「ガア!」

人質を取り返されたアームセイバーは、吹き飛ばされてしまい、Wも何時もの決め台詞を彼に放った。

「さあ、その幻想をぶち殺す」

完全に正気を取り戻し、迷いの無い戦士の姿勢を見せるWにアームズドローパントは恐怖を覚えてしまう。

「う……………クソオオオオオオ！」

右手を剣に変え、攻撃しようとするが、Wはタクティカルホーンを二回弾いた。

【SHOULDER FANG】

すると右肩の白い刃・ショルダーセイバーが出現し、それを手に取ったWは思いっきり投げつけた。

「ウオオオオオオオ！」

ブーメランの如く投げ飛ばされたショルダーセイバーは、アームズドローパントを斬り付ける。

「グアアアアアアア！」

吹き飛ばされたアームズドローパントにはもう、反撃できる余裕と体力は無い。

「昨日の借りを倍にして返そう」

「メモリブレイクするには、二人の呼吸を合わせないといけねえからな。ファングの必殺技だから……………」
『ファングストライザー』
でどうだ？」

「名前はキミの好きにすると良いよ」

そう言つてWは、タクティカルホーンを三回弾いた。

【FANG・MAXIMUMDRIVE】

右足の刃・マキシмумセイバーが出現し、跳び上がった瞬間に身体を回転させた。

「「フアングストライザー!!!」」

回転しながら接近していくWは、回し蹴りの要領で斬り裂く。

その姿に恐竜の顎のような水色のオーラが敵を噛み砕く光景であった。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

W・フアングジョーカーの必殺技を喰らったアームズドーパーントは爆発し、元の比留間伍兵衛の姿に戻り、メモリも砕けた。

「やったな、相棒」

「キミのお陰だよ、当麻君」

恐怖を感じた喜兵衛は、すぐさま逃げようとするが、

「待て!」

「黒幕のテメエは、このままで返すつもりはねえぜ？」

「ヒッ！」

恋次とルキアに刃を向けられていた。

「二度とこのような事が無いよう……」

「頭の芯まで『恐怖』って奴を叩き込んでやるよ」

二人の放つ殺気に喜兵衛は気絶と同時にその場で倒れてしまった。

その後、比留間兄弟は逮捕され、留置場に送られたのであった。

ファンゲメモリも浦原商店で再調整され、いつでも呼べるようにプログラムされた。

「全く、一時はどうなるかと思ったぜ」

「まあ、事件が解決できただけでも良かったんじゃないかな？」

『クワァー』

「ハア……………それもそうだな」

上条はそう言っつて椅子の背もたれに体重を掛けたが、

「オワツ!?!」

ドスンと倒れてしまった。

「アハハハハ……………大丈夫？」

「不幸だあ〜」

第10話：Fの暴走／牙の切り札（後書き）

遂に、新章突入！

万時屋に現れた一人の女性。

彼女の依頼は、死んだ筈の姉を見つけて欲しいとのこと。

そんな奇妙な依頼を引き受けた上条は、一体のドーパントと遭遇する。

しかし、そのドーパントとの戦いが全ての始まりでもあった。

「どうすれば良いんだ……………」

苦悩に苦しむ上条。

「それでも僕達は、過去を背負わなくちゃいけないんだ！」

相棒を励ますユーノ。

「お前の幻想は、この二人がいる限り、それは不可能だ！！」

そして、神地剣護Ⅱ 仮面ライダーディケイド・参戦！！

「俺達（僕達）は、二人で一人の……………」

「覚えておけ、通りすがりの……………」

「『仮面ライダーだ!!』」

遂に明かされる、Wの誕生の秘密!

今此処に、新たな物語が始まる。

死んだ筈の大切な人が甦ったら……アナタはどうしますか?

仮面ライダーWのanother world story・ピ
ギンズナイト篇、解禁!!

第11話：Dの悪夢／死人還り事件（前書き）

ビギンズナイト篇・開幕！

第11話：Dの悪夢／死人還り事件

今から2年前……即ち『第三次世界大戦』から1年後の出来事。

「ただいま」

忌まわしき戦いから帰還する事ができた上条当麻は、ある人物と出会い、彼の下で働く事になったのだ。

「おう、ジャンプ買って来たか？」

上下が黒い服の上に白を基調とした着物、そして銀髪の天然パーマが特徴の腰に木刀を差した男・坂田銀時。

この『万時屋』のオーナーである。

「ったく、ジャンプなら自分で買いに行けよな」

「良いじゃねえか、買い物ついでだぜ？」

「ハア、不幸だ」

「いや、何でそこでその台詞!？」

上条の発言にキレる銀時であったが、

「銀時、あまり子供に無茶をさせるな」

白を基調にしたスーツにソフト帽を被った40代の男性が静かにそ

う言った。

彼の名は鳴海壮吉。

銀時以上にこの街で頼りにされている人物で、ハードボイルドを貫く男。

当時、上条は彼に憧れを抱いていた。

「こんにちは」

するとなのはとユーノが事務所を訪れていた。

「おいおい、ご両人。随分と見せ付けるじゃねえか！未婚者の銀さんに対する嫌がらせですか？」

「アンタ、どれだけ嫉妬深いんだよ？」

「全くだぜ」

当時、神都の中央図書館の館長を務めていたユーノとなのはは、結婚を間近に控えていた。

しかし、上条は知らなかった。

2年後にあの恐ろしい事件に遭遇する事になるとは……………

Dの悪夢／死人還り事件

「ハッ！」

デスクで眠っていた上条は、すぐさま目を覚ました。

「夢……………か……………」

ハアと溜め息を付くと、

「オイオイ、何溜め息付いてんだよ当麻」

恋次が脇にサッカーボールを抱えて立っていた。

「……………何じゃそれ？」

「秋つつたら、スポーツの秋じゃねえか！！」

「何を言っておる恋次！」

すると今度は、ペレー帽を被ったルキアがウサギ(?)の絵が描かれたキャンバスを持ちながら叫んだ。

「秋と言ったら、芸術の秋ではないか！！」

「いゝや、どう見たってスポーツの秋だぜ！」

「食欲の秋はダメなの？」

さらにインデックスとアトリが大きめの紙袋に一杯詰まったハンバーガーの一つをほうばり、スバルが10段以上も乗ったアイスクリームを食べながら答えた。

「あのさ、そんな事してる場合じゃないと思うけど……………」

ティアナがそう言おうとしたその時であった。

「すみません、此処『万時屋』ですよね？」

一人の女性が尋ねて来た。

「え〜と、お名前は？」

「丑宮風鈴です」

「丑宮風鈴やとオオオオオオオオオオオオオオ！？」

「あ、いたんだはやて」

「ええ！？ もうツツ」
「む気なしかいな！？」

神出鬼没なはやてであったが、上条は呆れながら切り捨てる。

「それで、依頼は何ですか？」

「しかもスルー！？」

「実は、死んだ姉を捜して欲しいんです」

「ハア？」

どう言う意味かが分からず、全員が啞然となった。

丑宮風鈴うしみやふうりんは、双子の姉・雷鈴らいりんとのユニット『風雷』で18歳の時にデビューを果たした。

その5年後、姉の雷鈴が交通事故に遭い、帰らぬ人となった。

姉の思いを背負いながら一人芸能活動を行う風鈴であったが、ある出来事と遭遇する。

それは一週間前、初の武道館ライブが決まった事で、多くの記者からのインタビューを受けていた。

その時、彼女は自分の目の前でありえない出来事に遭遇する。

それは、死んだ筈の姉が遠くから此方を見ていたのだ。

「!？」

驚いてしまった風鈴は、疲れによる幻覚なのかと考え、一度病院で検査を受けることにした。

しかし医者からは以上はないと言われたが、気になってしまったので事務所を訪れたのであった。

「幻覚だと思うんですけど、でも……気になってしまって」

それを聞いた上条は、そんな彼女を見ながらこう言った。

「分かりました。この依頼、引き受けます」

そう言って事務所を後にしたのであった。

現在上条は、彼女の姉が眠っている墓地にいた。

雷鈴の墓前に、花を添えるためである。

「なんとも善き心の方。見知らぬ死者に花を添えるなんて、こんな良い日に恵まれるとは……………」

墓地が建てられてある教会の神父・デビット賀川は、そう言ってシスターの橘御幸たぢはなみゆきと共に上条に近づいてきたのであった。

「生きている人間に出来る事は、コレくらいしかないからな」

淋しげな表情をする上条は、そう言って墓地を後にした。

聞き込みを開始するが、情報は何処にも入らなかった。

「なあユーノ、コレってあの『死人還り』に関わってるんじゃないのか？」

上条は、スタッグフォンでユーノとコンタクトを取る。

死人還り……それは神都で起きた都市伝説の呼び名で、その名の通り死んだ筈の人間が、同時に姿のまま友人、家族の前に現れるという現象の事である。

「何を言ってるんだい？ 死者が甦るなんて論理上ありえない」

「そりゃ、そうだけどさ……」

相棒の正論に反論が出来ない上条。

だが彼は知らなかった。

この事件こそが、自分とユーノの心の傷を呼び起こす鍵になってしまっことだ。

聞き込みを行って4時間後。

「にしても、死者蘇生なんて本当に出来んのかな？」

「そうだよな」

「っておわあああああ！ フェイト、アンタ居たのかよ！？」

「人をお化けみたいに言うな」

突如後ろから現れたフェイトに上条は驚いてしまう。

その瞬間、冷たい風が吹き出した。

「！？」

上条は振り向くと、そこには髑髏の装飾を付けた大鎌を持つ死神を連想させる怪人・デスドーパントであった。

「フフフフ……私の起こした死人還りはとても満足したかな？」

デスドーパントの言葉を聞いて、上条はダブルドライバーを装着する。

「ヤッパ、ドーパントが絡んでたか。 相棒！」

そう言つて上条はジョーカーメモリを構える。

【JOKER】

事務所にいるユーノもサイクロンメモリを構える。

【CYCLONE】

「「変身！」」

【CYCLONE・JOKER】

仮面ライダーWに変身し、デスドーパントに立ち向かう。

「仮面ライダーだったのか！ なら、私に歯向かえぬようにしてやるっ！！」

そう言つて大鎌を構えたのであつた。

「ハッ！ タア！！」

「グッ！」

大鎌を振るうデスドーパントであったが、得物が大きいためかWは簡単にかわす。

「これなら簡単に倒せるな！」

「一気に決めるよ！」

【CYCLONE・TRIGGER】

サイクロントリガーにチェンジしたWはトリガーマグナムの引き金を引いた。

「ハッ！」

「グアアアアア！」

風の弾丸を連続で放たれ、吹き飛ばされるデスドーパントであったが、

「くそ……見せてやる、私の死人還りの力を！」

すぐさま姿を消した。

「くそ、何処に逃げやがった！」

追いかけてようとするWであったが、突如足音が聞こえてきた。

「ん？」

振り向くとそこには、二人の男性がいた。

「な!？」

一人は白を基調としたスーツに帽子を被った40代の男性・鳴海壮吉、もう一人は黒い服の上に羽織った白い着物に腰に木刀を差した銀色の天然パーマの男性・坂田銀時であった。

Wはその二人の名を口にした。

「まさか……銀さん……鳴海さん？」

「そんな、ありえない!？」

驚くWの前で壮吉はロストドライバーを装着し、紫で骸骨の横顔を模したS字の書かれた黒いガイアメモリもスイッチを押した。

【SCULL】

「変身」

帽子を一度脱ぎ取り、メモリを差し込んだスロットを倒した。

【SCULL】

その瞬間、壮吉は骸骨を模した銀色の仮面、黒いボディに白いマフラーを付けた仮面ライダーに変身した。

そしてそのライダーは、壮吉の帽子を額のS字型の傷を隠すように深く被った。

『骸骨の記憶』の戦士・仮面ライダースカルが甦ったのだった。

そして、銀時も愛用の木刀と銀色の刀を構え、二人はWに襲い掛かった。

スカルの格闘技と銀時の剣術により翻弄されるW。

「ガア！」

吹き飛ばされるW。

「クソ！」

【LUNAR・TRIGGER】

ルナトリガーにチェンジしたWは、トリガーマグナムの引き金を引いた。

しかし、スカルは専用の銃型武器・スカルマグナムで弾丸を全て打ち落とした。

「落ち着くんだ当麻君！ 彼等は本人じゃない！」

「けど、鳴海さんはスカルに変身してるし、銀さんだってソウルブレードを持つてるんだぞ！ どう見たって本人じゃねえか！！」

【SCULL MAXIMUMDRIVE】

【SCULL MAXIMUMDRIVE】

取り乱す上条を落ち着かせるユーノであったが、スカルはマグナム、銀時はブレードの柄のスロットにメモリを差し込んでいた。

「それは絶対じゃない！ 何故なら、銀さんも……鳴海さんも……」

「言っな、ユーノ！」

Wがスカルと銀時に圧倒されていた同時刻、

「新たな世界か……」

一人の青年が街を歩いていた。

「ここも『Wの世界』みてえだな」

そう言って周りを見渡していた。

果たして、この青年の正体とは？

「当麻君、入るよ」

そう言って神都署の刑事・笹塚衛士が事務所を訪ねる。

すると上条は、すれ違うように事務所を出ようとしていた。

「ん？」

「悪い笹塚さん。一人にしてくれないか」

とても悲しい顔をして姿を消した上条を見て、疑問を感じる笹塚。

「何があつたんだ？」

「ハハハハハハ！ 気にすること無いツスよ先輩！」

「そうですよ！ あのガキは所詮この程度の奴だつたんですから」

そんな彼の気持ちを知らずに罵る後輩の石垣筍と真倉俊。

「……………」

沈黙していた笹塚は、ある封筒をなのは達に渡す。

「何があつたのかは知らないが、彼の居場所は此処しかない。彼は自分で何でもかんでも背負って生きてるようだからね、キミ等が支えてやれよ」

そう言い残し、事務所を後にした。

「え、ちよちよちよちよちよつと先輩!？」

「置いてかないで下さいよ!…」

無論、石垣と真倉も彼を追うように事務所を後にした。

翌朝、上条は花束を持ちながらある場所へ向かった。

そこはとても小さな無人島で、そこには大きなビルが全焼したかのような後があった。

「……………」

「あれから一年経つんだね」

「ユーノ？ お前どうやって？」

突然現れた相棒に驚く上条であったが、ユーノは浜辺に停めてある水上移動型のハードボイルダーを指差した。

「ここで僕等は、初めてWに変身したんだっただね」

「ああ……………そうだな」

二人は、当時の出来事を遡る。

遂に明かされる、W誕生の秘密。

第11話：Dの悪夢／死人還り事件（後書き）

次回・Wの誕生／ビギンズナイト

第12話：Wの誕生／ビギンスナイト（前書き）

真の序章が始まる

第12話：Wの誕生ノビギンズナイト

上条とユーンは、自分達が始めてWに変身した時の記憶を遡らせる。

何故、二人がWとなったのか？

何故、二人にこの戦いを背負う事になったのか？

遂に明かされる、本当の始まり・ビギンズナイト。

Wの誕生ノビギンズナイト

一年前…即ち『第三次世界大戦』から2年後の出来事。

「ユーノが？」

「ああ、最近連絡が取れねえようなんだ」

「アイツの能力は、連中から見れば喉から手が出るほど欲しいものだ。恐らくは……」

巨大なビルに潜入した上条、銀時、壮吉の三人。

銀時はなのはの依頼、壮吉は神都図書館の司書の依頼でユーノの捜索を頼まれたのである。

「でも……俺がいると、はっきり言って邪魔なんじゃ？」

上条は、自分の不幸体質が他人を巻き込んでしまっんじゃないかと不安に感じるが、

「気にすんな、そんな事ねえよ」

「お前と一緒にいて、俺達が怪我をおった事があるか？」

励ますように二人がそう言った。

「……………でも」

「当麻」

壮吉は上条の肩に手を置き、

「自分を信じろ」

そう言って優しく声を掛けた。

ビルの中央部と思いわしき場所に辿り着いた三人であったが、扉が三つ存在した。

「ここから先は別れて入れと言う事か」

「みてえだな」

「……………」

右から赤、青、黄の色で分けられたを見て、壮吉は答えた。

「俺は赤だ」

「決断早っ!?!」

「男の仕事の8割は決断、それ以外はオマケみたいなもんだからな」

「じゃあ……………俺は青!」

「当麻も!?!」

そう言っって銀時は黄色の扉に向かう。

「じゃあ、また後でな」

「うん」

「ああ」

こうして三人は、それぞれ違う扉を開き、先へと進んだ。

く壮吉パートく

鳴海壮吉は赤の扉を開き、その中へ入った。

「随分と静かな場所だな……そう思わないか？」

「あら、気付いてたの？」

そうやって炎を模したボディのドーパント・ヒートドーパントが現れた。

「好みのタイプだけど、此処で殺してあげるわ」

ヒートドーパントは右手に炎を纏いながら接近していく。

「撃つて良いのは撃たれる覚悟のある奴だけだぜ、レディ？」

「!?!」

その瞬間、場の空気が一瞬で変わった。

「ガイアメモリを仕事で使うのは俺の流儀ポリシーに反するが、止む負えん」

壮吉はロストドライバーを装着し、スカルメモリを構えた。

「そのドライバー！？ 何故お前が！？」

【SOUL】

「変身」

【SOUL】

スロットを倒し、仮面ライダースカルに変身し、頭部に帽子を被りながらこう言った。

「さあ、お前の罪を……………数えろ」

スカルとヒートドーナツは、格闘戦による激戦を繰り広げる。

「ハア！」

「クッ！」

ぶつかり合う拳と拳。

しかしヒートドーパントは、右手から火炎弾を放った。

「ハア！」

「無駄だぜ」

しかしスカルはマグナムを抜き、その弾丸で落ち落とした。

「く……………此処は退いた方が良いわね」

そう言ってヒートドーパントは姿を消した。

「……………逃げたか」

変身を解除した壮吉は、すぐさま先へと進んだ。

「銀時パート」

黄色の扉を開けた銀時は、

「おいおい、何者ですかアンタは？」

白いボディに侍のようなデザインの丁髷頭のドーパント・ウエザー
ドーパントが立っていた。

「貴様を殺す。悪く思っなよ」

「やっぱり、こうなるのか」

銀時はソウルブレードを構えながら戦闘態勢に入った。

「ハア！」

「グッ！」

ウエザードーパントの放つ雷撃や吹雪に翻弄される銀時。

「ハハハハハ、これで終わりだ！」

再び雷撃を放ったその時、銀時は素早く後ろに着いた。

「な!?!」

「何処見てんだよ」

振り返るウエザードーパントであったが、銀時の斬撃の方が速く、その攻撃で吹き飛ばされる。

「ガア！」

「まだまだ!?!」

さらに銀時は素早い剣捌きで、ウエザードーパントを切り裂いた。

「グアアアアアア！」

その場に倒れるウエザードーパントに銀時はこう言い放った。

「悪いが、先を急ぐんでな」

（上条パート）

青の扉を開けた上条当麻の行く手を阻むのは、黄金の甲冑を纏った騎士のようなドーパント・ユートピアドーパントが現れる。

「クソ、イキナリかよ！」

右手を構える上条は、歯を噛み締めながら戦闘態勢に入る。

「喰らえ！」

ユートピアドーパントは、専用のステッキ・理想郷の杖を振り、雷を放つ。

「ッラァ！」

上条は『幻想殺し』の力で打ち消す。

その様子を見ていたユートピアドーパントは、

「『理想郷』の力を持つ私とあらゆる幻想を“殺す”キミの右手…
…まさに似て非なる、似たもの同士の力」

「一緒にすんじゃねえ！」

上条は右手の拳を握りながら接近するが、

「ハッ！」

「ぐあー！」

ユートピアドーパントは斥力を操り、上条を吹き飛ばす。

「ハア……ハア………」

「どうやらキミも、咄嗟の攻撃までは対応できていないようですね」

「クッ………」

立ち上がる上条に、止めをさそうとするユートピアドーパント。

「終わりです」

上条もここまま死ぬのかと考えたまさにその時であった。

バシユンという音と共にユートピアドーパントの腕を弾いた。

「誰だ！」

「おや、すみませうん。その人を死なせるわけにはいかなかった
ものですから」

そこには帽子に甚平姿で下駄を履いた男が現れた。

「上条当麻さんですね？」

「何で？」

「“自分の名前を知っている”って顔してるみたいッスね。それ
はまたの機会に」

男は小さなケースを上条に投げ渡す。

「何だコレ？」

「それは、アナタの運命を大きく変えるかもしれません」

そう言って男はユートピアドーパントに仕込み杖の刀を向けながら
こう言った。

「此処からは、あたしが相手ッス」

「何だと……」

「行って下さい上条さん。此処は任せて下さい」

「でも！」

「良いから早く！」

男の声に上条は戸惑うが、

「ありがとな！ アンタ、名前は!?!」

「浦原喜助………しがない駄菓子屋っス」

浦原に後を任せて上条は先へ向かったのであった。

合流に成功した三人であったが、

「1」……これは!？」

「……………実験室!？」

「酷すぎる!」

沢山の遺体の山を目撃してしまった。

数年前から行方不明になっていた人々である。

「まさか……人体実験!？」

「連中から見りゃ……………」

「商品テストだがな」

そう言っつて三人は先へと進んだ。

最上階に着いた三人は、そこで実験を行う傭兵達と出くわす。

「何だ貴様！」

「そこどけ雑魚共オオオオオオオオオ！」

「グアアアアアアアアアア！」

銀時の怒涛の攻撃で、傭兵達は吹き飛ばされたのであった。

傭兵達を退けると、

「銀さん！」

今、実験台にされそうなユーノが拘束されていた。

「貴様、邪魔を！」

「うっせエエエエエエエエ！」

研究者と思われる科学者が怒りを露にするが、思いっきり蹴り飛ばされてしまう。

「ブヘア！？」

ユーノを救出する事が出来た三人は、すぐさま脱出を試みるが、パンという音が後ろから聞こえた。

「銀さん！？」

振り返ると、銀時が背中を撃たれて倒れていた。

「銀さん、しっかりして下さい！ 銀さん！」

涙目で叫ぶユーノ。

すると、マスカレイドの軍団が重火器を持って構えていた。

「（くそ……………どうすれば……………）」

戸惑う上条であったが、引き金は引かれた。

しかし、そこには壮吉が二人の盾になるように弾丸を受けながら倒れた。

「鳴海さアアアアアアアアアん！」

倒れる壮吉に上条は抱える。

「鳴海さん、しっかり！」

すると壮吉は、上条に自分の帽子とスカルメモリを手渡す。

「後の……………ことは……………任せませ」

「何言っただよ！？ 俺みたいな奴にアンタや銀さんの後を継げないよー！」

今にも泣きそうな上条に、壮吉は優しくこう言った。

「うおおおおおおおおお！」

二人がメモリをドライバーに装着した瞬間、膨大なエネルギーが放たれ、マスカレイド軍は吹き飛ばされてしまう。

「な………何だよコレ!？」

コレこそが、仮面ライダーW誕生の瞬間であった。

突然変わった自分の姿に戸惑う上条であったが、

「ウワアアアアアアア！」

地面が崩壊し、そのまま落下してしまう。

落ちていくWとユーノの肉体。

しかし、ユーノの肉体は恐竜のような機体が救助していた。

「うおっ」

一番下の階まで落下したW。

「くそ……………どうすれば……………」

「まずは、此处を出よう」

ユーノがそう言うと、Wは変身を解除した。

すると恐竜を手を取ったユーノは、それをガイアメモリに変形させた。

【FANG】

すると、ドライバーに刺さったままのジョーカーメモリは上条の気絶と同時にユーノのドライバーに転送される。

「変身！」

【FANG・JOKER】

その瞬間、今度はユーノの身体が右半身が白で左半身が黒のWに変身する。

仮面ライダーW・ファンゲジョーカーの誕生であった。

暫らく沈黙であったが、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

突如Wは雄叫びを上げた。

この頃のファンゲジョーカーは“あらゆる敵を排除する”ために開発されていたため、バーサーカー状態となっていた。

マスカレイド軍が集まり、Wを攻撃するが、

【ARM FANG】

「ウオオオオオオオオ!!」

アームセイバーを出現させ、マスカレド達を一掃するW。

「バカな………強すぎる!?!」

「此処は退いた方が良いな」

ユーノピアドーパントとヒートドーパント、そしてウェザードーパントはそう言っただけでその場を後にし、

「がっ!」

Wもまた、残った自我で上条の肉体を担いでその場を後にしたのであった。

後に、ユーノピアドーパントと戦っていた浦原にファンゲメモリを再調整のために預けたのは、その数時間後の話である。

「俺の罪は“目の前の命を救うこと出来なかった”という己の無力だ」

「その罪は、僕も同じさ。僕も、自分を助けてくれた人の死を見届ける事しか出来なかった」

悲しく、忌まわしい過去を振り返る二人であったが、

「知ってるかい？ 実は君でも知らない、もう一つのビギンズナイトがあることを」

「え？」

その言葉に言葉が出ない上条。

それは、壮吉が倒れてしまった同時刻である。

(しっかりしてください！)

銀時の身体を抱きかかえるユーノに、銀時は残りの最後の力を振り絞りながらこう言った。

(ユーノ、お前は……………絶対に生きるよ)

(何言ってるんですか?)

(オメエには、惚れた女を守る……………と言う……………重要な義務が……………あんだからよ……………死ぬな……………よ)

そう言っつて銀時は、ソウルメモリを彼に託し、息を引き取ったのであった。

「銀さん……………」

それを聞いた上条は拳を握り締める。

「当麻君、もう一度聞くとよ。魔術師と契約する覚悟はあるかい？」

あの頃と同じ台詞を聞いて、上条は迷わず答えた。

「決まってるだろ、そんな事。地獄の底まで付き合っつてやるよ」

決意を固めた二人は、強く拳を握り合った。

第12話：Wの誕生／ピギンスナイト（後書き）

次回、Wの覚悟／復活の探偵

第13話：Wの覚悟／復活の探偵（前書き）

遂に復活！

第13話：Wの覚悟／復活の探偵

「これまでの“死人還り”を調査した結果、二人はある共通点を見する。

「今までの“死人還り”が発生した場所は、ある場所を中心に起きている」

「しかもその場所は……」

「かなり近い！」

こうして二人はその場所へと向かった。

丑宮風鈴は、姉の墓地が建てられている教会に向かった。

「あの……………」

「何か？」

デビット賀川を尋ねた風鈴であったが、まさにその時であった。

バシユンとスタッグフォンが二人の間に飛び込んだ。

「!?!」

驚く二人であるが、

「やっと見つけたぜ“死人還り”の犯人さんよ」

突如上条とユーノ、さらにインデックスやアトリ達もいた。

「何のことでしょうか？」

戸惑うデビット賀川であるが、上条があるモノを見せる。

それは“死人還り”が起きた場所の特定位置の記された図であった。

「一見何ともないように見えるが、こいつには共通点があるんだ」

「共通点？」

「全て……この教会からそんなに遠く離れていないと言っ事ですよ」

「!？」

「しかも、ガイアメモリの能力を使えば簡単だよな？」

二人にトリックを見破られたデビット賀川は、メモリを取り出し、デスドーパントに変身した。

「良いだろう、再び我が力を見せてやる！」

再び霞の如く消え去ったデスドーパント。

ソレと同時に、

「今度は加減無しだぜ？」

【SKULL】

置くの棺から現れた壮吉が、仮面ライダースカルに変身した。

「さあ、再び俺と戦うか？ 当麻……」

「此処で終わりだな」

上条の元まで近づくスカルと勝ち誇るデスドーパント。

しかし、上条が見せた行動は、意外なモノであった。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

バキンと右手で思いっきりスカルの顔を殴りつけた。

「な!?!」

全員がそれに驚く。

「俺の知ってる鳴海さんはもついない。 けどな……あの人と銀さんの魂と想いは、心の中で生き続けてるんだ！」

【JOKER】

「だからもう、僕達は迷わない。 この手で、未来を掴んでみせる
」!

【CYCLONE】

上条とユ一ノはメモリを構え、デスドーパントは問い出す。

「貴様等は、一体何なんだ!?!」

その問いに、二人は答えた。

「二人で一人の探偵にして、仮面ライダーだ! 変身!」

【CYCLONE・JOKER】

二人は仮面ライダーWに変身し、スカルに立ち向かったのだった。

「オラア！」

「ぐお！」

Wの一撃で外まで吹き飛ばされたスカルは、立てるのがやっとであった。

「待て、当麻！ 俺が……俺が消えても良いのか！？」

スカルの言葉を聞いたWは、小さく呟いた。

「……本物はどんな時でも命乞いをするような、弱い男じゃなかったぜ！」

【HEAT・JOKER】

炎を纏った拳を強く握り、強烈な一撃を叩き込んだ。

「ウラァ！」

「グアアアアアア！」

吹き飛ばされたスカルの姿が消え、そこにはデスドーパントの姿があった。

「クソ……………」

「諦める。お前の正体は既に分かってる」

【HEAT・TRIGGER】

Wはそう言って、トリガーマグナムの引き金を引いた。

「ガアアアアアア！！！」

高熱の弾丸を喰らったデスドーパント。

しかしその姿も消え、そこにいたのはしよぼいと言って良い程の姿のドーパントであった。

「アンタのメモリの正体は、ダミー……………つまり『擬態の記憶』だ！」

「おのれえ〜」

「シヨボ！？アレが敵かよ！？」

敵の正体を見て、恋次はハッキリそう言った。

「まあ良いさ。お前たちから逃げれば、私は再びバカな信者達の金でゴージャスな生活を送れる」

「聖職者の風上にも置けない台詞なんだよ!」

「全くだ。二人とも、頼むぞ!」

インデックスとルキアの怒りに答えるように、

「当たり前だ」

「勿論!」

「さあ、その幻想をぶち殺す!」

そう言ってトリガーマグナムから弾丸を放つが、

【ファントム】

突如黒いマントを付けた白い仮面のような頭部の怪人・ファントムドーパントが現れた。

「お〜! シスター橘、来てくれたのか!」

「やっぱりシスターもグルだったか」

「いくらダミーでも、二人に化けることは出来ないからね」

Wは目の前の敵を見ながらスカルと銀時に敗れた時の事を思い出す。いくらダミードーパントでも、二人の人間に化けることは出来ない。即ち共犯者がいると言う事が考えられたが、その答えが目の前に現れたのであった。

だが次の瞬間、ドスとファントムドーパントがダミードーパントをナイフで刺したのである。

「何!？」

突然の事に驚くWであったが、

「な………ぜ?」

ダミードーパントことデビット賀川も疑問に思いながら息絶えた。

「何故殺したか？ そうね……分かり安く言えば、私……元々狂った人間なのよねえ……アハハハハハハハハハ！」

フロントムメモリの毒性にやられたのか、シスター自身の本性なのか、Wは拳を握りながらこう言った。

「だったらまずは、その幻想をぶち殺す！」

「面白い事になってるな」

「!？」

するとWの横から、一人の青年が現れた。

「俺も手伝うぜ、仮面ライダーW」

「貴様、何者だ！」

フロントムドーパントの問いに、青年は答えた。

「神地剣護。 またの名はディケイド……通りすがりの仮面ライダーだ、覚えておけ！ 変身！」

【KAMEN RIDE DECADE】

その瞬間、ベルトのバックル部にカードを装着した青年・神地剣護は、マゼンタを基調としたボディの戦士に変身した。

世界の破壊者・仮面ライダーディケイドの参戦であった。

ディケイドは、ライドブツカーから一枚のカードを取り出し、ベルト・ディケイドライバーのバックルに差し込んだ。

【FINAL FORM RIDE DODODOW】

「ちよつとくすぐったいぞ」

「え？」

するとディケイドは、Wの後ろに回るとセントラルパーテーションに手を突き出し、

「ウオオオオオオオ！？」

Wを二人の仮面ライダーに分けたのだった。

【CYCLONE・CYCLONE】

【JOKER・JOKER】

仮面ライダーWのファイナルフォームライド形態・サイクロンサイクロン&ジョーカージョーカーである。

「これは!?!？」

「一体!?!？」

「コレが俺達のだ! 行くぜ!!!」

「ああ！」

「勿論さ！」

【FINAL ATTACK RID D O D O D O D O W】

上空へと跳び上がった三人は、強烈なキック『トリプルエクストリーム』を叩き込んだ。

「タアアアアアアアアアア！」

「グアアアアアアアア！」

仮面ライダー三人分の攻撃を受けたファントムドーパントであったが、

「お……………の……………れ……………」

再び立ち上がったのであった。

「まだやれんのかよ!?!」

驚く上条であったが、咄嗟にあることを思い出し、あるモノを取り出した。

「待てよ……………」

それは壮吉から託されたスカルメモリであった。

「当麻君……………」

そう言ってユーノが銀時から託されたソウルメモリを取り出した。

するとWは、ドライバーの右スロットにスカルメモリを、左スロットにソウルメモリを差し込んだのである。

「行くぜ、変身！」

【SKULL・SOUL】

託された二本のメモリ力が共鳴し、Wは白いラインの入った黒い右半身と青いラインが入った白い左半身に変わった。

「何だ、その姿は!？」

驚くフロントムドーパントに、Wは答えた。

「仮面ライダーW……スカルソウルだ」

『骸骨の記憶』と『魂の記憶』を宿す二つのメモリの新たな力が今、解放されたのであった。

新たな姿・スカルソウルに変身したWは、隙の無い容赦無い攻撃を叩き込んだ。

「ハア、タア！」

「グッ！」

ファントムドールパントはナイフを取り出し、攻撃するが、

「ハア！」

ソウルメモリの専用武器・ソウルブレードで防がれてしまう。

「行くぜ！」

高速でブレードを振るい上げるWは華麗な剣捌きで切り裂いた。

「グアア！」

ファントムドールパントも遂に体力の限界が近づいた。

「決めるぜ！」

【SOUL MAXIMUMDRIVE】

シスター橘は、その後警察に逮捕された。

二人の恩師から託されたメモリを眺めながら、二人はこう言った。

「俺達、あの人達の意志……受け継げるかな？」

「“受け継げるかな”じゃなくて、“受け継ぐ”んだろ？」

「そうだな。行こうぜ、相棒」

「勿論さ、相棒」

因みに丑宮風鈴はあの事件後、二人への感謝を込めたメッセージを歌にし、そのCDが大ヒットしたのだった。

タイトルは『繋がる絆』である。

第13話：Wの覚悟／復活の探偵（後書き）

次回、ストーリーカーはK／依頼人は女教皇様

～W・オリジナルフォーム紹介～

スカルソウル

スカルメモリとソウルメモリの力を宿したWの新たな姿。

右半身は白いラインの入った黒で、左半身は青いラインが入った白になっている。

スカルの驚異的な格闘能力とソウルの剣術が加わったため、現在のWのメモリの中では最強クラスである。

必殺技はソウルブレードの刀身から放たれる黒と白の斬撃・ソウルスラッシャー。

スカルメモリ【SKULL】

『骸骨の記憶』宿したガイアメモリ。

ジョーカーを上回る優れた格闘戦を得意とする。

元々は壮吉が上条に託したのだが、ソウルメモリとしてユーノが所有している。

色は黒。

ソウルメモリ【SOUL】

『魂の記憶』宿したガイアメモリ。

剣術による接近戦優れ、専用武器のソウルブレードの柄にはマキシ
ムスロットが付いている。

元々は銀時がユーノに託したものだが、ボディメモリとして上条が
所有している。

色は白。

第14話：ストーカーはK/依頼人は女教皇様（前書き）

今回はWはおろか、ドーパントは出ません。

ストーリーカーはKノ依頼人は女教皇様

「で……………真つ先に俺を呼んだってことか」

「他に相談できそうな方はいなかったの……………」

神裂の依頼を受けた上条は、恋次とティアナ、そしてルキアと共に
天蘭組屯所を訪れた。

「でもよ、別に断ったんなら良いじゃねえのか？」

恋次がそう言うが、五和がこう言い出した。

「そう言う訳にもいかなかったんです」

「とうとう?。」

「最近では、女教皇様フリエステルが外出してる時や、鍛錬している時も……ま
してやお風呂に入ってる時にも現れて……」

「完全なストーカーだな」

男の好意が遂にストーカー行為となってしまうたど分かった上条は、
恋次に目を向ける。

「恋次。お前、神裂の恋人役出来ねえか?」

「何で俺が!? 元々お前にきた依頼なんだからお前がやれよ!!」

反論する恋次に、ルキアがこう言い出した。

「恋次、貴様最近文句が多いぞ! ワガママ言うなら、今此処で当
麻にバイト代減らしても良いんだぞ?」

「ストーカーめえええええ! この阿散井恋次が成敗してくれるわ
ああああああああ!!」

「……(単純だ、この人)……」

減給で動いた恋次に、神裂達三人は、心の中でそう思った。

「やれるもんならやってみろおおおおおおおおお!」

すると、男が突然現れた。

「ホントにいた!?!」

これにはティアナもツツコミを放った。

「テメエか……自分から現れたと言う事は、ストーカーであることを自覚してるみてえだな」

「人は皆、愛を求めるストーカーよ!」

「勝手に言つな」

二人の会話に入るように、上条はツツコミを放つ。

「ソレよりもお前、さつき親し気に火織さんと話してたな。一体彼女とどう言う関係なんだ?」

それを聞いたルキアは、黒い笑みを浮かべながらこう言った。

「許婚だ」

「は!?!」

「実は恋次と神裂殿は共に結婚を誓った許婚同士でな。あんな事やこんな事という過激で妖艶な大人の関係も持っているのだ。だから諦めた方が身のためだ」

「……って何勝手に設定作ってんだテメエはアアアアアアアアアアアアアアアア!?!」

「……過激とか、大人の関係とか使わないで下さい! 恥ずかしい

とある河原。

「やはりあんな嘘では無理であつたか」

「まあ、咄嗟の嘘だったからな」

「大丈夫でしょうか？」

「そうですね、あの落ち着きようは相当死線を潜り抜けた証拠ですから」

「にしてもあの刺青君、遅いのよ。一体何してんのよ？」

「ああ、さっきトイレに行くって言ってたな」

全く来ない恋次が気になる建宮に、上条は即答で答えた。

一方の恋次はというと……

「さてと、早く行くか」

すると、目の前を歩いた男が財布を落とすのを見て、

「おい、アンタ。 財布落としたぞ」

そうやって財布を持ち主に渡した。

「悪い、助かったぜ」

その人物は、何故か瞳孔が開いた啞え煙草がトレードマークの男であつた。

男が去っていく姿を見た恋次は、すぐに河原へ向かった。

男は失神し、恋次も笑いながらこう言った。

「ダーハハハハハハ！ 誰も正々堂々戦ったあ言ってるねえからよ！」
しかしその瞬間、上条とルキアのドロップキックが炸裂した。

「だからってそれはねえだろうが卑怯者！」

「見損なつたぞ恋次！ 男の風上にも置けぬ奴だ！」

「ギヤアアアアアアアアアア！！！」

決闘が終わり、上条達が河原を去った二十分後。

「ん？」

瞳孔が開いた啞え煙草の男・土方十四郎が橋の下の河原で失神する男を見て、彼の名前を呟いた。

「近藤局長？」

神都に存在するテロ対策の警察組織『真選組』局長の情けない姿に
啞然とする副長であった。

第14話：ストーカーはK/依頼人は女教皇様（後書き）

次回、ストーカーはK/鬼の副長VS死神

第15話：ストーカーはK/鬼の副長VS死神（前書き）

遂にこの時が！

第15話：ストーカーはK/鬼の副長VS死神

ある朝、真選組屯所内は大騒ぎであった。

「副長オオオオオオオ！ 局長が女に振られたってホントツスカ！？」

「しかもその女賭けた喧嘩で汚え手を使われたって本当っすか！？」

「女にフラれんのは何時もの事だけど、喧嘩に負けるなんざありえねえ！」

「赤髪の侍ってナニモンですか！？」

自分達の局長たいしょうがやられたという報告を受け、落ち着いてはいられなかった隊士達。

「おい、会議中に騒がしいぞ。大体近藤さんが負けるわけねえだろ。誰だそんな事話したバカは？」

クールに隊士達をフォローする土方であったが、

「沖田隊長が、スピーカーで回ってたんです」

隊士達全員が沖田を指差す。

「俺は土方さんから聞きやした」

「コイツに話した俺がバカだった」

ストーカーはK/鬼の副長VS死神

「斬る？」

「ああ、斬る」

パトロールをしていた土方と沖田は、イキナリ物騒な顔をしていた。

「相手がどうあれ、このままじゃ俺達真選組の面子が丸潰れだ。だからその赤髪の侍を斬る」

「あのですね土方さん。 どの世界にも暗殺を成功させた暗殺者はいないんですぜ？」

「暗殺じゃねえよ、直接斬るんだよ」

その言葉に本気を感じ取った沖田であったが、

「でしたら、赤い髪の野郎を見つけてそいつを隊士達を見せれば納得するんじゃないですかい？」

そう言っつて沖田は、

「んじゃ頼みますぜ、神父の旦那。それと刀も持っつてくだせえ」

「何で僕が？」

天蘭組の一番隊隊長・ステイル「マグヌスをどっからか連れて来た。

「……………ステイル、その刀でソイツの頭をかち割っつてくれ」

ステイルと別れ、再びパトロールを続行する二人。

「それにしても赤い髪の侍なんぞ、本当にいんのかよ？」

「おゝい、オメエ等あゝ。危ねえゝぞ」

「え？」

突然の声に上を見上げる土方。

ドゴオオンという音と共に木材が落ちてきた。

「ウオオオオオオオ！」

驚いてしまい、尻餅をついてしまう土方。

「チツ、惜しい」

それを見ていた沖田は小さく呟いた。

「危ねえじゃねえか！」

「ウルセエな。ちゃんと危ねえって言っただろっが」

「もっとテンション上げろよ！」

「あーあー、悪かったな」

そう言ってヘルメットを取る作業員の顔を見た瞬間、土方は驚きだす。

「お前は!？」

それは昨日、自分の財布を拾ってくれた男・阿散井恋次であった。

「そう言えば、テメエも赤い髪だったな」

そんな土方とは逆に恋次本人はというと、

「誰だお前？　もしかして大串君？　久しぶりじゃねえか。でも今取り込んでいるから、また後でな」

全く覚えてないようで、そのまま屋根の修理に向かった。

「行っちゃいやしたぜ。　どうしやす、大串君？」

「誰が大串君だよ！　あのヤロウ…人の顔をもう忘れやがって……」

「どうするんですかい？」

「総悟、刀貸せ」

そう言って土方は沖田の刀を持って、恋次が修理している屋根へと向かった。

「　　ったく、何で俺が屋根の修理なんかしなきゃならねんだ」

文句を良いながらも槌を打つのを止めない恋次であったが、

「財布を拾った次は、屋根の修理か？」

そう言っつて土方が上つて来た。

「ワケ分かんねえヤローだぜ」

「財布……………あん時の!？」

「やっと思い出したか……………」

そう言っつて土方は歩み寄る。

「近藤さんを負かした奴がいるって聞いてたが、まさかテメエか？」

「近藤さん？」

すると土方は沖田の刀を投げ渡した。

「女取り合つた仲なんだろ？　そんなに良い女なのか？　今度俺にも紹介してくれよ」

「お前、あのストーカーゴリラの知り合いか？ 何で来たんだ」

刀を受け取った恋次であったが、その瞬間であった。

ピンゴと呟きながら土方は豪華いに刀を振るった。

それにより恋次は吹き飛ばされた。

「ストーカーだろうがゴリラだろうが、俺達にとっては『真選組』の大切な大将なんだよ」

土方は刀を構えながら、接近していく。

「あの人の顔に泥を塗るような奴がいるなら………たたつ斬る！」

その刃をかわした恋次は、そのまま回し蹴りを叩き込んだ。

「刃物を振り回してんじゃねえ！」

しかし土方も吹き飛ばされる寸前に恋次の方を斬った。

「な!？」

驚く恋次と吹き飛ばされる土方。

「誰かアアアアアア！ 警察呼べ、警察！」

「ククク……俺が警察だよ」

「マジで!？ じゃあ、世の末じゃねえか」

「違えねえ」

しかし土方は、こんな事を考えていた。

「（しかし妙な奴だな……………近藤さんの時は、汚え手を使ったらしいが、そんな素振りは全くねえ。まさかコイツ、俺に気い使ってるのか？）」

すると恋次は、鞘から刀を抜いた。

「（やっとその気になったか。そんじゃ、楽しもうぜ……………命の取り合いを！）」

そしてやる気を出した土方は突進し、

「ラアアアアアアア！」

刀を振り下ろした。

「（取った……………）」

しかし土方が斬ったのは、恋次が首に掛けていた手拭いであった。

「な!？」

驚く土方の間合いに詰め寄った恋次。

「（マズイ……………）」

斬られる……そう確信した土方であったが、パキンと恋次は土方の刀を折った。

「はい、終了っ」と

出血する肩を抑えながら、恋次はその場を去ろうとする。

「待て！」

しかし、それを見た土方に呼び止められた。

「オメエ……俺に情けをかけたつもりか!？」

「情けだあ？ そんなもんにかけるくらいなら、ご飯にかけるわ！」

「じゃあ、何でだ!？」

「オメエが真選組とやらを護ることを大将に誓ったように、俺も戦う事を誓ったんだ」

「誰にだ？」

「誰でもねえ……俺自身の魂にだ」

そのまま立ち去った恋次の背中を見ながら、土方は煙草を一服する。

「悪い、近藤さん。俺も負けちゃったよ」

第15話：ストーカーはK/鬼の副長VS死神（後書き）

次回、キャラ紹介です。

特別篇：神都のR達／ライダー紹介（前書き）

キャラクター紹介です。

特別篇：神都のR達／ライダー紹介

（キャラクター紹介）

御坂美琴／仮面ライダージョーカー

年齢：16歳

作品：とある魔術の禁書目録、とある科学の超電磁砲

能力：超電磁砲^{レールガン}

ランク：S

詳細：常盤台中学出身で、『常盤台の超電磁砲^{レールガン}』の異名を持っている。
た。

気にしていた胸の悩みも解消している。

外見も母の美鈴に近い顔立ちになっている。

^{アクセラレータ}
一方通行／仮面ライダーエターナル

本名：不明

年齢：???歳

作品：とある魔術の禁書目録

能力：一方通行^{アクセラレータ}

ランク：S

詳細：あらゆる『方向性』^{ベクトル}を操作できる能力を持つため、“科学系”^{サイエンス}最強の特殊者”の異名を持つ。

脳にダメージを負っているため、戦闘時間が限られているが、『最強』の名に恥じない戦闘力を持つ。

言葉には出さないが、上条に対しては理想と憧れを抱いている。

『第三次世界大戦』に足を踏み入れた経験を持つ。

浜面仕上 / 仮面ライダー アクセル

年齢：18歳

作品：とある魔術の禁書目録

能力：不明

ランク：E

詳細：特殊チーム『アイテム』の構成員。

自らを『脇役』と称しているが、戦闘力は高くない方ではない。
地形や武器、そして乗り物扱い方に長けていて、そこから相手の隙
を付く戦法を得意とする。

『第三次世界大戦』に足を踏み入れた経験を持つ。

第16話：改造するCノ人の恨みを買つとメチャクチャ怖い（前書き）

一話完結です。

第16話：改造するCノ人の恨みを買うとメチャクチャ怖い

『それがねえ、昨日牛の様子を見に行ったら、角がドライバーになつてたんだよ』

“牛の角がドライバーになる”という事件をニュースで見っていた恋次とルキアとティアナ。

「そう言えば、当麻とユーノ殿は？」

「仕事だつてさ」

「そう言えば最近あの二人見て無いような……」

すると、テレビの映りが悪くなってしまう。

「オイオイ、何だよ。こりゃ修理が必要じゃねえのか？」

「あ、ドライバーならありますけど……使います？」

そう言つてティアナはプラスドライバー……と一体化した右手の人差し指を見せる。

「」

「」

「エエエエエエエエエエエ！？」

長い沈黙の後、ティアナは自分の指を見て驚愕してしまう。

〈回想〉

それは昨日の夜、風呂に上がったティアナは寝巻きに着替えようとした時である。

「こんばんは……」

「!？」

突然聞き覚えのない声が聞こえたので振り返ったが、そこには誰もいなかった。

「コツチだよ」

そう言われて振り返ると、そこにはドライバーやペンチなどの修理道具を体中に付けたような容貌のドーパントがいた。

「何者!？」

警戒するティアナであったが、ドーパントは突如何かのスプレーを彼女にかけた。

「な!？」

催眠スプレーだったらしく、ティアナはそのまま眠ってしまったの

であった。

〈現在〉

「つまり、そのドーパントが改造を施したというわけか」

冷静に推理するルキア。

すると、スバルが二人の元へ現れた。

「あ……………ルキアさんにティア、おはよう」

「おはようスバ」

二人は振り返ったが、そこでとんでもない光景を目の当たりにする。

「ん、どしたの？」

「（恋次さんのアナログスティックがやられたアアアアアアアアアアアアアアアア！）」

「さあて、次はどいつを狙おうかなあ〜」

修理道具を体中に付けたような容貌のドーパント・カスタマイズド
ーパントは、新たなるターゲットを捜していた。

するとそこへ、上条当麻と相棒のユーノスクライアが現れる。

「坪内地丹だな？」

「ん？ 誰だいキミは？」

「お前の幻想を殺す男だ」

【JOKER】

「行くぜ、相棒」

そう言つて上条はジョーカーメモリを構え、ユーノもサイクロンメモリを構える。

「勿論」

【CYCLONE】

「「変身!」」

ユーノの意識を宿したサイクロンメモリは、上条のダブルドライバに転送され、上条もそれを奥に差し込み、ジョーカーメモリを差し込む。

【CYCLONE・JOKER】

「「さあ、その幻想をぶち殺す!」」

仮面ライダーWは、カスタマイズドローパントと激突するとであった。

一端外に出ることにした恋次達四人。

「犯人はドーパントで、恐らくは『改造の記憶』を宿してる可能性が高いわ」

「だったら、メモリ持つてる奴を片っ端から探し出して血祭りにしたやるしかねえな」

「……………完全に壊れてますよ」

「当たり前だろうが！ コッチはチ コを改造されたんだぞ、チコを！！ お前等に分かるかこの気持ちか！！」

「チ コって言わないで下さいよ大声で！ 聞くだけでも恥ずかしいじゃないですか！！」

とまあ、ある意味で大変な四人であった。

「ハア！」

「クッ！」

スピードを主体としたサイクロンジョーカーの攻撃に翻弄される力スタマイズドーパント。

「クソッ、喰らえ！」

するとプラスドライバー型のミサイルを飛ばしてくるが、

【LUNAR・TRIGGER】

追跡弾を放つルナトリガーの弾丸に破られてしまう。

「そうだ当麻君。ソウルメモリを使うよ」

「よっしゃー！」

するとWは、ソウルメモリを差し込んだ。

【LUNAR・SOUL】

『幻想と魂』の記憶を宿した力、W・ルナソウルにチェンジした。

ルナメモリの幻想の力により、ソウルブレードの刃からエネルギー波が放たれ、そのままカスタマイズドーパントに命中させる。

「まだまだ行くぜ」

【HEAT・SOUL】

今度はヒートソウルにチェンジし、その刀身からは炎が宿されていた。

「ウラァ！」

「ガァ！」

豪快な一撃で薙ぎ払うWの攻撃に驚きを隠せないカスタマイズドーパント。

「今度はサイクロンだ」

【CYCLONE・SOUL】

サイクロンソウルにより、風を纏った刃で攻撃するW。

「オラァ！」

その一振りだけで膨大な風を起こすため、カスタマイズドーパントは動く事ができない

「今度はスカルで行くよ」

「うっし！」

今度はスカルメモリとメタルメモリを差し込んだ。

【SKULL・METAL】

棍棒型武器・メタルシャフトから生まれる不吉の風でカスタマイズ
ドーナントを薙ぎ払う。

「お次はコレだな」

【SKULL・TRIGGER】

さらにスカルトリガーで遠距離攻撃に入る。

ドンドンと撃ち込まれるトリガーマグナムの弾丸。

その威力は相当なモノであった。

「どうやら、スカルとトリガーは相性が良いみたいだね」

「まあ、スカル自体もマグナム使ってたからな」

そう言ってWはジョーカーメモリを差し込んだ。

【SKULL・JOKER】

装甲のラインが違うのを除けばボディカラーは同じ黒のスカルジョ
ーカー。

身体能力の上昇を特性に持つ二つもメモリ同士の力によって、隙の
無い格闘戦が可能になった。

「それじゃ、止めと行くぜ」

【CYCLONE・JOKER】

サイクロンジョーカーにチェンジしたWは、ジョーカーメモリをマキシマムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

緑と黒の竜巻で宙に浮き、そのままドロップキックを叩き込んだ。

「ジョーカーエクストリーム!!」

切り離された半身が一撃ずつキックを叩き込んだ。

「グアアアアアアアアアアアア！」

カスタマイズドーナツは爆発し、元の姿である眼鏡の少年・坪内地丹へと戻ったが、

「ん、恋次？」

偶々恋次達四人と遭遇した。

「成る程………テメエが元凶か………」

異常なまでの殺気を放つ恋次に地丹は、

「すみませんでしたアアアアアアアアアア！」

とても綺麗な土下座で謝るが、

第16話：改造するCノ人の恨みを買つとメチャクチャ怖い（後書き）

次回、忍び寄るVノ幽霊大騒動？

第17話：忍び寄るV/幽霊大騒動？（前書き）

真選組屯所でとんでもない事が！

第17話：忍び寄るV/幽霊大騒動？

「あれは、蚊がたくさん飛んでいた暑い夜だったね」

隊士の一人・稲山が一同に怪談話をしていた。

「俺、友達と花火やってて、夢中になりすぎて夜になっちまったんだよ」

話を聞いた隊士の一人ひとりが震えだしてしまう。

「すぐに帰ろうとしたら、赤い着物を着ていた女にあっただ。」

それで“何やってるのこんな時間に”って聞いたら、その女……「ヤツと笑って……………」

そして物語は終盤に差し掛かろうとしたその時、

「マヨネーズが足りないんだけどオオオオオ！」

「『ギヤアアアアアアアアアアアア！』」

後ろから土方の声がしたのであった。

忍び寄るV / 幽霊大騒動？

隊士の一人が明かりを点ける。

「副長、何するんですか！ 大切なオチを！！」

「知るか、マヨネーズが切れたんだよ。 買ったけって言っただろ
うが、焼きそばが台無しじゃねえか」

文句を言う隊士に土方は、マヨネーズたっぷりの焼きそばが盛りられた皿を彼等に見せる。

「もう、十分かかってるじゃねえか！」

「何だよソレ、最早焼きそばじゃねえよ！ 黄色い奴だよ！！」

たっぷりかけているにも拘らずまだマヨが足りないと言う土方にツッコミを入れる隊士達であるが、

「局長！」

「へ？」

彼等に囲まれるように近藤が泡を吹いて気絶していた。

「大変だアアアアアアアアアア、局長がアアアアアアアアアア！」

「マヨネーズで気絶した！」

「最悪だアアアアアアアアアア！」

騒ぐ隊士達を無視して、土方は隣の部屋に向かう。

「下らなねえ、どいつもコイツも怪談何ぎにはまりやがって……………」

煙草を吸いながら焼きそばに箸を伸ばす土方。

「幽霊何ざいてたまるかよ」

すると、蚊の羽音が耳元で聞こえた。

「何だあ？ 随分と蚊が多いじゃねえか」

だが、その時であった。

コーン、コーンと何かを木槌で打つ音が聞こえたのであった。

「死ねえ〜、死ねえ〜土方ア〜。お前頼むから死んでくれよお〜」

「（まさか……………」

そう思いながら土方は、襖を開けるとそこには、

「し
」

「……………」

白装束に火の点いた蠟燭を頭に巻いた鉢巻に差し込んだ沖田が、何かを後ろに隠しながら立っていた。

「何やってるんだ、こんな時間に？」

「じよ……………ジヨギング」

「嘘付くんじゃねエエエエエエエ！ そんな頭で走ったら、火達磨になるわ！ 儀式だろ！ 俺を抹殺するための儀式を開いていただろ！！」

「ハア、自意識過剰なひとだあ。 そんなんじゃ、ノイローゼになりますぜい？」

「何を！」

翌朝、うなされる隊士達を見ながら土方と沖田は呆れていた。

「ハア、これで20人でさあ。まさか此処までいくたあ思いませんでした」

「まったく、冗談じゃねえぞ。天下の真選組が、幽霊にやられたなんて知られたら、笑いもんだぞ！」

すると近藤は力強くこう言った。

「トシ、俺は違うぞ。きつとマヨネーズにやられたんだ！」

「余計言えるか！」

すると、沖田がこんな事を言い出した。

「もしかして、稲山さんの怪談に登場した赤い着物の女じゃないですかい？」

「んなワケねえだろ」

「幽霊を甘く見ると痛い目に遭うぞトシ。きつとこの屋敷は呪われてるんだ」

「下らねえ、幽霊なんかいるワケ……………」

否定する土方であったが、昨夜の出来事を思い出す。

「いや、ナイナイ」

すると、山崎がある人物を連れて来た。

「局長、連れてきました」

そう言って果てしなく怪しいの四人を連れて来たのであった。

「何だコイツ等？」

「拝み屋だよトシ。『グループ』の紹介で、幽霊を退治してくれるそうなんだ」

そう言って近藤が紹介した。

「……………怪しい」

「ご心配なく、我々にかかれば怖いもの無しです」

顔をターバンで巻いた男がそう言った。

「ホントかよ？」

「勿論だよ」

「……………」

しかし同じ拝み屋の三人は沈黙であった。

「おい、お前等からも何か言えよ！」

「しまった」

「げっ!？」

その正体は朽木ルキア、ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマの三人と、気絶している阿散井恋次であった。

「信頼できる奴、連れて来たぜ」

そう言って一方通行はアクセアラレータ番外固体と共に、上条当麻とユーノ・スクライア、インデックスとアトリを連れてくる。

「あれ、何で恋次達が此処にいんの」

正体がばれた恋次達四人は、逆さ吊りにされてしまう。

「悪気はなかったんです」

「仕事もなかったんで……」

「言いだしっぺは恋次でな、我々は無実だ」

「フザケンじゃねえよ！ テメエ等だけ助かりたいなんてそうはいかねえよ！」

弁解するルキア達三人にキレル恋次。

「分かりやした。刺青の旦那、コレを鼻から飲んで下させい。それで水に流しますぜ」

そう言つて沖田は山葵醤油を恋次の鼻腔に流し込む。

「イギヤアアアアアアアアア！ キツツ！ 鼻キツツ！ マジで止めて！…！」

「うわぁ……………」

余りの光景に青ざめるティアナとスバル。

「んじゃ、そつちのお姉さん方は下の口で飲んで貰うね」

「「え？」」

そう言つて番外固^{ミサカワースト}体は、二人の下半身を集中的に弄つた。

特に股間を強調的に。

「ちょッ、何すんの！？／／／／」

「やめつ　　んあ／／／／」

「おーおー、なかなか良い声で鳴くじゃないの　　んじゃもつと気
持ち良くしてあげる　　」

徐々にエスカレートしていき、ティアナもスバルも感じていく。

「ああ、ダメ……も……これ以上は／／／／」

「私も……もう……ダメえ／／／／」

「ウホ　　」

そんな光景を見た恋次は興奮してしまい、男のバベルの塔が立つて
しまつ。

「どつやら興奮しちまつてるみたいですね。　　んじゃ、そろそろシ
メといきますか」

そう言つて黒い笑みを浮かべる沖田は、恋次のナニをガシツと掴ん
だ。

「え……」

やっとの事で降ろされた四人。

「頭がガンガンする」

「うう、パンツとズボンが濡れちゃったあ、／＼／＼／」

「もう、お嫁に行けない／＼／」

「……………」

頭を抑えるルキア、顔を真っ赤にするティアナとスバル、そしてナニをやられて泡を吹く恋次。

「本来なら此処で逮捕するところだが、生憎テメエ等と関わってるほど暇じゃねえんだ。消えろ」

土方が四人にそう言うと、ミサカワースト番外固体が嘲笑つかのようにつつ言った。

「え、何？ お化けが怖くて、トイレに行けないの？ だったらミサカが連れてってあげようか？」

「武士を愚弄するかアアアアア！」

それを聞いて怒りを露にした近藤であったが、

「トイレの前まで、お願いします！」

思いつきりお辞儀をして頼んだ。

「お願いするんかいイイイイイイイイイイイイ！」

これにはツッコミをせざる終えない土方。

「いやあ、今朝から我慢してたんだ。でも怖くてな」

「ほら行くよ」

「ハイ！」

こうして、ミサカワースト番外固体と共にトイレに向かう近藤であった。

「おいいいいいい、アンタそれで良いのか！？ アンタの人生、ソレで良いのかオイ！？」

ツッコむ土方であったが、すぐに上条達に振り向いた。

因みに恋次はナニが回復したため、なんとか立ち上がった。

「お前等……………」この事は誰にも言わないでくんない？ 頭下げるから」

「何かヤバそオな状況だが、大丈夫かア？」

「ったく情けねえよ。 幽霊相手にここまで隊が乱れるたあ……………」

土方は腕を組みながらこう言い出す。

「まあ、相手に実体がありゃ、刀で何とかなるんだが……………無しとくればお手上げだ」

「何だ、お前信じてるのかよ幽霊なんて？ 痛い痛い、痛いよお母さん。 此处に頭打ってる人がいるよ」

それを聞いた恋次は、ワザとらしく言うが、

「死神がソレ言ったら不味いだろ？」

ルキアがビシッとツッコミを入れた。

「テメエ……………何時か殺すからな」

流石に血管が浮き出るほど怒る土方であったが、

「まさか、土方さんも見たんですかい？ 『赤衣着物の女』」

沖田の問いに土方はこう言った。

「分からねえ。だが妙なモンの気配を感じた。アリヤ人間のもんじゃなかった」

それを聞いた恋次と沖田は、

「痛い痛い、痛いよお父さん」

「絆創膏持って来て。出来るだけ大きな人、包み込めるくらいの」

「お前等打ち合わせでもしたのか！」

見事な連携を見せ、土方はそれにキレる。

『赤衣着物の女』という言葉にユーノは、何かを思い出した。

「『赤衣着物の女』……そう言えば、図書館の本にそんな怪談が載ってましたね」

「え？」

すると、ユーノは『赤衣着物の女』の怪談について語りだした。

「夕焼け時に、子供が一人で神社で遊んでいたら……誰も居ないハズの賽銭箱の前に、赤衣着物の女がいたんだって。それで、何やってるんだって聞いたたら」

「ギヤアアアアアアアアアア！」

「な!？」

物語の終盤を言おうとしたその時、近藤の叫び声があった。

「オッサン、どうしたの？」

個室トイレのドアをノックをするミサカワースト番外固体であったが、返事が返ってこない。

「オイ、どオした！」

「オッサンが返事しないの」

「何！？」

「ドケドケえ！」

土方はすぐにドアを蹴る破るとそこには、

「……………」

「何でそうなるの？」

便器に頭を突っ込んで逆立ちになっている近藤がいた。

第17話：忍び寄るV / 幽霊大騒動？（後書き）

次回、忍び寄るV / 似たもの同士？

第18話：忍び寄るV/似たもの同士？（前書き）

果たして、幽霊の正体は？

第18話：忍び寄るVノ似たもの同士？

その夜、近藤の寝室にいた一同。

「あ……赤い着物の女が来る……コツチに来る……」

うなされている近藤を見て沖田と番外固ミサカワースト体はこう言った。

「近藤さん、見苦しいですぜい。良い齡こいて寝言何ぞ」

「そつだよ、何ならミサカ達ミサカワーストが楽にしようか？」

近藤の首を絞める沖田と鼻を思いつきり引つ張る番外固ミサカワースト体。

こいつ等トンでもない程相性が良いな、オイ！

そんな彼等をスルーし、恋次と土方はこんな事を言い出す。

「こりゃアレだ。昔泣かした女の夢見てるんだ」

「近藤さんは女に泣かされても、泣かした事はねえぞ」

「じゃあアレだ。昔オメエが泣かした女の夢見てるんだ」

「俺はそんな性質の悪い女と付き合った経験はねえ」

「じゃあ、何だよ？」

「そんなの知るか！」

すると一方通行アクセアレータがこんな事を言い出す。

「だがよオ、この建物内に何かがいるって事は間違いないエな」

忍び寄るV / 似たもの同士？

「まさか……本当に幽霊が？」

少し怯えるスバルに、恋次はすぐさまこう言った。

「下らなねえ、んなモンがいるわけねえだろうが」

「だから、死神がソレ言ったら不味いであろう」

「ほら行くぞ」

ルキアのツツコミを無視して恋次はティアナとスバルの手を握る。

「恋次さん、何ですかコレ？」

ティアナに問われた恋次は一瞬びくりとしながらこう言った。

「な………何って、オメエ等が怖がるかも知れねえから、手エ握ってやってんだよ」

「恋次さんの手、汗でヌルヌルですよ」

「何言ってるんだよ！」

徐々に慌てだす恋次を見て、一度顔を見合わせた上条と一方通行は
サラッとこう言った。
アクセアレータ

「あ、赤衣着物の女が」

ドーンと恋次は押入れの中に潜りだした。

「恋次さん、何やってるんですか？」

「あ……いや、穿界門の入り口が………」

ユーノの問いに慌てて答える恋次であるが、ルキアと番外固体は意ミサカワースト地悪な顔でこう言った。

「恋次、貴様さてはあゝ（棒読み）」

「ええゝ、ミサカ超信じらんなあゝい（棒読み）」

「何言ってるんだよ！ 間違いに決まってるだろ！！」

そんな恋次を見ていた沖田であったが、

「土方さん、この旦那 　ん？」

大きな壺の中に上半身だけを隠す土方の姿を見た。

「土方さん、何やってんですかい？」

「あ、いや………マヨネーズ王国の入り口が………」

言い訳をする土方と恋次に、その場の全員が冷たい目で見ていた。

なお、ルキアと沖田と番外固体ミサカワーストは黒い笑みを浮かべていたが、

「待て待て違う！ コイツはそうかもしれねえけど、俺は違うぞ！」

「ビビッてんのはオメエだろ！俺はアレだ、胎内回帰願望があるだけだ！！」

大人気ない言い訳をする二人を見ながら、一方通行がこう言った。
アクセラレータ

「分かった分かった、分かりましたア。穿界門でもマヨネーズ王国でも何処にでも行けよ」

「何だそのさげすんだ目は！」

するとその時であった。

「！？」

上条達九人は、二人の後ろを見て驚愕した。

「おい……」

「何だよ……」

「ウワアアアアアアア！」

「あ、待て二人とも！」

「……………」

出て行くように逃げるスバルとティアナと二人を追い掛けるルキアと無言で追い掛ける沖田と番外固体。
ミサカワースト

残ったのは上条とユーノとインデックスとアトリにアクセアレータ一方通行、そして恋次と土方であった。

「　　ったく、手の込んだ悪戯を」

「コレだからガキは……」

そう言って二人は後ろを振り向いた。

「「引っ掛かるかってんだよ」「」

しかしそこには、赤い着物の女がいた。

「「……こんばんは」

全力疾走で走るルキア達五人。

「見ちゃった！ 本当に見ちゃったよ！！」

「上条さあ〜ん！」

「奴等の事は忘れる、もうダメだ！」

すると、ドガンという音が後ろから聞こえたので、ティアナは振り向くと恋次と土方が走ってきた。

「切り抜けた？」

しかし良く見ると、

「ウソ……背負ってるウウウウウウ！ 何か女の人背負ってるんだけどオオオオオオオオオオ！！」

そんな五人を追い掛ける恋次と土方。

「オイイイイイイイ！ 何で逃げてんだよオメエ等アアアアアアアアア！」

「あれ、何か俺の背中重くねえ！？ 何か重くねえか！？」

「知らん！ 俺は知らんぞ！」

「いや、マジで重いんだって！ ちょっと見てくれない！？」

「何で俺が！」

「良いだろうが別に！」

「よし分かった。 “セーの” で同時に振り向くぞ、良いな！」

「裏切んなよ、お前絶対裏切んなよ!!！」

二人は一度止まると後ろを振り向いた。

「「セーの!!！」

そこには、赤い着物の女がいた。

「「……………こんばんは」

逃げ切れた五人は、物置小屋にいた。

「まさか……………本当に幽霊がいたなんて」

怯えるティアナであったが、

「しめたぜ、コレで副長の座は俺のもんでい」

「フツ、恋次め。死神のくせに幽霊を恐れるとはな」

「ちえ〜ミサカ、一方通行のビビる顔が見たかったなあ〜」
アクセアラレータ

「言ってる場合か!」

緊張感の無い台詞を吐く沖田とルキアと番外固体にツツコミを入れた。

「でもティアあ〜、何であんなのがいるのお〜」

涙目でティアナにしがみ付くスバル。

すると三人が、こっぴ言い出した。

「実は前に、土方さんを亡き者にするために……」

「確か以前、恋次の腰を抜かせる為に……」

「そう言えばミサカ、一方通行に赤っ恥かかせるために……」
アクセアラレータ

「「「外法で妖魔を呼び出そうとした事があつたんだっけ。ありや、もしかしたらその時の……」「「「

「アンタ等どんだけ腹ん中真っ黒なのオオオオオオオオオオオオ
!?!」

その腹黒さに怒涛のツッコミを入れたティアナであった。

ブンブンと跳ぶ蚊の羽の音。

「ウルセエんだよブンブンよ!!!」

そう言つて頭に巻いた鉢巻に木の枝を差した恋次と、池に潜つていた土方が出てきた。

「ん?」

「何だ? お前生きてたのか?」

「悪運の強え野郎だな」

そう言つて大害に睨み合う二人。

「やっぱアレ効いたな。 実はあん時、あの野郎を睨み返してたん

だよ

「ほざけ、俺なんかずっと奴をつねってた」

「小せえんだよ、やることが！」

その瞬間、恋次が隠れていた茂みから何かが出てきた。

ザパーンと池に潜った二人であったが、出てきたのはカエルであった。

「さ、さあ〜て。水浴びも終わったし、そろそろ反撃でも行くかなあ〜」

「おい、震えてんぞ」

「な、何言ってるんだよ？俺がびびるワケねえじゃん！」

「ほう、そうかい？だったら此処であの時の借りを返してやろうか？」

口論する二人であったが、耳元でバサバサと音が聞こえ、

「ウルセエんだよさつきから！」

そう言っ上を見上げると、そこにはコウモリのような異形が跳んでいた。

それはまるで、西洋の妖怪・ヴァンパイアのような姿であった。

近藤の部屋から、隊士達が寝ている部屋に向かった上条達五人。

「思ったとおりだ」

「この人も、この人も……」

「幽霊にやられた人達は、全員動物に噛まれた様な傷があるんだよ」

「……て事ア……アレは……」

「幽霊じゃない、ドーパント」

今回の事件がドーパントの犯行だと確信し、上条と一方通行はドラ
アクセアレータ
イバーを装着する。

「まったく、面倒臭えぜ」

「全くだなア」

「同感だね」

【CYCLONE】

【JOKER】

【ETERNAL】

「」「」「」
「变身!」

【CYCLONE・JOKER】

【ETERNAL】

こうして、仮面ライダーWとエターナルは、倒すべき敵の元へ向かった。

一方、土方と恋次は唾然としていた。

「シャアアアアアアアア！」

ヴァンパイアのような怪人・ヴァンパイアドーパントに驚いてしま
う。

「ななななななな何だありやアアアアア！」

「しししし知るわけねえだろうがアアアアアアア！」

「まままままさかお前、びびびびびびびビッてんのおおおお
おおおおおお！！」

「びびびびびびびびびビビるワケねえだろうが！」

「じよじよじよじよじよ上等じゃねえか！」

完全にビビッてる二人であったが、

【LUNAR・TRIGGER】

ルナトリガーにチェンジしたWの弾丸が、ヴァンパイアドーパント
に命中した。

「オラア！」

さらにエターナルが追い討ちを仕掛ける。

攻撃を喰らったヴァンパイアドーパントは地面へと落ちた。

「クッ！」

立ち上がるヴァンパイアドーパントにWとエターナルは戦闘態勢に入った。

「「さあ、その幻想をぶち殺す！」」

「さあ、地獄を楽しめ！」

【ACCEL】

エターナルはアクセルメモリをナイフ型武器・エターナルエッジのマキシマムスロットに差し込み、

【SKULL・JOKER】

Wはスカルジョーカーにチェンジした後、ジョーカーメモリをマキシマムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

【ACCEL MAXIMUMDRIVE】

アクセルの『加速』の力で急接近したエターナルは、ヴァンパイアドーパントを斬りつけた後、一端後ろに下がり、Wは半身を分裂させる。

分裂と同時にスカルサイドから出現した紫色で髑髏を象ったエネルギー状の球体を三つ出現させ、

「ジョーカーシュート!!」

各半身で回転しながら一つずつ蹴り飛ばし、最後に元に戻ると同時にサッカーの要領で三つ目を蹴る飛ばした。

「オラア！」

「ゲアアアアアアアアア！」

ヴァンパイアドーパントは爆発し、元の姿である赤い着物の女に戻った。

翌日、女は真選組に逆さ吊りにされていた。

「あの、本当にすみマセンでした。実は私、人々で言う『吸血鬼の記憶』を宿したメモリを持ってまして、以前上司にセクハラされた鬱憤を晴らすためにメモリを買ったんですけど、でも血を飲んだら病み付きになりました、本当にすみマセンでした……湯！」

「すみません、その顔の影強くすんの止めて貰いませんか？」

そんな状況を見ていた土方と恋次。

「言っておくが、報酬はやんねえからな！」

「んだとコラ、一緒に退治してやっただろうが！」

「退治したのは仮面ライダーであって、オメエじゃねえだろうが！」

「恋次、そろそろ帰るぞ　　って、二人して何しているのだ？」

襖を開けたルキアが地面に顔を伏せている土方と恋次にそう言つと、二人はこう言つた。

「「いや、コンタクト落とした」」

第18話：忍び寄るV／似たもの同士？（後書き）

次回、Wの呪い／怨霊車

第19話：Vの呪い／復讐心と怨霊車とメタルのライダー（前書き）

別のライダーも登場です

あとサブタイトルは変えています。

第19話：Vの呪い／復讐心と怨霊車とメダルのライダー

それは、一週間前に遡る。

一人の女性が、ひき逃げ事故に遭ってしまふ。

駆けつけた彼女の弟が、その身体を抱きかかえる。

「姉さん！　姉さアアアアアアアアアアん！」

目が覚めない姉を抱えながら、怒りを露にする青年。

それが、全ての始まりだった。

「その欲望、解放してやる」

Vの呪い／復讐心と怨霊車とメダルのライダー

それから一週間後。

「ヘックシユン」

風邪によるくしゃみが止まらないインデックス。

「37.9度……今衛宮先輩が粥作ってくれてるから、少し待つて
る」

「そつするかも」

「当麻、風邪薬買ってきたよ」

「悪いな」

「トウマ、水枕を持ってきました」

インデックスの看病を行う一同。

その中に恋次達から見れば、全く知らない人物がいた。

「インデックス、お粥出来たぞ」

お粥の入った鍋を運ぶ青年・衛宮士郎。

上条とは学年的に先輩後輩の関係で、マジックアビリティ魔術系特殊者のDランク能力者である。

白いブラウスに青いスカートを着た金髪の少女はセイバー。

士郎のパートナーで、真面目な性格である。

「それにしてもこの雨、嵐でも呼んでくるんあねえか？」

そう言っただけでアイスキャンディーをほっぺに貼る金髪の青年・アークは、窓の外を見ながらそう言った。

彼は800年の封印が解かれた怪人『グリード』の一人であるが、ある経緯で士郎と行動を共にしている。

すると、突如電話が鳴り出す。

「はい此方『万時屋』ですけど」

ティアナは受話器を取り、耳に当てる。

「少々お待ちください。上条さん、電話です」

「ん？ もしもし、お電」

『助けてくれ！ 警察でも取り合って貰えない事件を担当してるんだろ！』

「落ち着いて下さい。 今、何処にいるんですか？」

『港町の五番倉庫だ！ 早く来てくれ！』

そう言っつて相手は電話を切った。

受話器を電話に戻し、上条は出かける準備を行う

「俺も行くこうか？ 何か手伝える事は？」

士郎がそう言っつと、

「じゃあ、インデックスの看病を頼みます」

そう言っつて事務所を後にしたのであった。

港町の五番倉庫に向かった上条は、依頼人らしき人物と出会う。

「遅えよ！ 何やてるんだ！！」

怒鳴る男であるが、その直後であった。

真っ黒な車が突撃してきたのである。

「何だありゃ！」

「気タアアアアアアアア！」

男は逃げようとするが、車は追いかけていく。

「おわッ！」

上条を素通りした車は、男の身体を擦り抜けたのであった。

「な！？」

驚く上条であったが、男が倒れてしまう。

「おい、しっかりしろ！」

男を抱える上条であるが、既に息絶えていた。

「マジかよ……………」

警察に連絡した上条は、取調べを受けていた。

「万時屋！ 何で殺人を犯した！！」

石垣と真倉が尋問するが、上条は呆れてしまう。

「あのなあ、上条さんは事故の瞬間を目撃したと言いましたよ」

「ああ、そうかい！」

「でもな……ガイシャの体からは、ソレらしい外傷は見当たらないぞぞぞ！」

「あ・の・な！ 人の話を最後まで聞くのが警察だろうが！ あんた等みたいな奴がいるからこの国は平和じゃないんだぞ！」

「何だと！」

「喧嘩売ってんのか！！」

ア!」「」

上層部への報告という言葉に動揺を隠せない二人。

「それがイヤやったら、今後の態度を改めやアアアアアア!」

「は、はいイイイイイイイイ!」「」

上司に怒鳴なれ、二人は取調室を後にした。

「悪いな、はやて」

「なに、コレくらい当然や」

するとはやては、資料を見せる。

「シヤマルが司法解剖したんやけど、被害者はウィルスに感染したような痕跡があったらしいで」

「ウィルス?」

はやてのお陰で釈放された上条の元に、ルキアと士郎とアングがいた。

「大丈夫か？」

「重要参考人という形ですぐに出してくれたよ」

そう言つて四人は外に出た。

「それで、依頼はどうするんだ？」

「俺は降りない。目の前で依頼人が死んだんだ、引き下がれねえよ」

「上条………分かった。俺も手伝うよ」

「助かるよ」

こうして、四人は聞き込みに向かった。

「お待たせ」

フェイトとカフェで待ち合わせした四人は、彼女から情報を得る。

因みに彼女の職業はジャーナリストである。

「当麻に頼まれて、昨日の被害者の事を調べただけど……どうやら彼、ある不良チームの一員なの」

「成る程な、被害者の方にも非があるということか」

沈黙であったアंकがそう言った。

「それでね、一週間前に似たような事件が起きてたの」

そう言ってフェイトは資料の入った封筒を渡す。

「んじゃ、そのリーダーの名前は？」

「確か……黒田朋樹……だったかしら」

「言ってみるか」

「そいつ等が居そうな場所は？」

神都のとある酒場・ストームで黒田一味と対面する上条たち。

「ほう……万時屋さんが何の用だい？」

リーダーの黒田はそう言ってダーツを投げていた。

「あんた等の仲間の一人が殺されたのは？」

「知ってるけど」

「一週間前にも一人殺されたのも？」

「ああ」

「じゃあ、犯人が黒い車に乗っていたというのは？」

それを聞いた部下の今野は驚いた。

「黒い車！？ 黒田さんそれってまさかあの事故の事じゃ

」

今野が何かを言おうとしたが、黒田に殴られてしまっ。

「ガア！」

「やっぱあるみてえだな」

「おい、それ以上喋れば……」

黒田は銃口を向けるが、

「邪魔したな」

そう言っ上条たちは酒場を後にした。

外に出た上条たちは黒田一味が動くのを待った。

因みにルキアには黒田の見張りを頼んだ。

「動くか？」

「仲間を殴って黙らせるほどだ。相当動揺してるハズだ」

すると、黒田の部下である今野と金田はある場所へ向かっていた。

「本当に確認するのかよ」

「でも、黒田さんの慌てようは相当ですよ」

そう言っつて二人は駐車場に向かい、上条たちも尾行する。

そして十分後、今野と金田はシートを取り、隠されていた黒い車を見る。

「何ともないッスね」

しかし、その時であった。

黒い車が動き出したのだった。

「うあああああああああああ!」

すぐに逃げる二人であったが、金田は転んでしまつて車はそこを擦り抜けた。

「あ………が………」

金田は息絶えてしまった。

「わあああああああ!」

「止める！」

逃げる今野を救うために上条は車に飛び掛かる。

「早く逃げてください！」

そう言つて士郎は今野を逃がす。

「つてのわああああああ！」

跳びかかったのは良いが、すぐに振り落とされた上条であったが、

「バットショット！」

カメラ機能を持つコウモリ型ガジェット・バットショットを飛ばす。

「ユーノ！」

すぐさまダブルドライバーを装着した上条は、ジョーカーメモ리를構える。

【JOKER】

ユーノもサイクロンメモ리를構える。

【CYCLONE】

「「変身！」」

一方の士郎も、ベルトの溝にメダルを差し込む。

右から赤、黄、緑のメダルを差し込んだ後、スキャナーでスキャンする。

「変身！」

【CYCLONE・JOKER】

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

すると士郎は、鷹をイメージした赤い頭部に虎をイメージした黄色い腕部、そして飛蝗をイメージした緑の脚部を持つ、胸部のプレートにメダルの絵柄と同じ生物が描かれた戦士に変身する。

二人で一人の戦士・仮面ライダーWと、欲望の王『グリード』と戦う戦士・仮面ライダーオーズがここに光臨した。

「いくぞ！」

しかしその時であった。

「「うわ！」」

突如一人の怪人が、Wとオーズを襲撃する。

外見はクワガタのような頭部に螳螂の鎌のような装飾、そしてバッタのような脚部を持つ怪人である。

「ウヴァ！」

アंकはその怪人の名を呼ぶ。

彼こそ欲望の王・グリードの一人、ウヴァであった。

「久しぶりだな、アंक！」

「チツ、士郎！　まずはコイツを何とかするのが先だ！！」

「言われなくても、そのつもりだ！」

そう言つてオーズは、腕部のトラクローの専用武器・トラクローを展開してウヴァに斬りかかる。

「ハア！」

「フン、遅い！」

「グア！」

しかし、グリードは自分達が生み出す怪人・ヤミーとは違い、桁外れの戦闘力を持つ。

「クソツ！　アंक、蠍のメダルある？」

「あるぞ！」

アंकは蠍の絵柄が描かれた緑のメダルを投げ渡すと、受け取ったオーズは真ん中のメダルを替え、スキャンする。

【タカ・カマキリ・バツタ】

するとオーズの腕部が黄色から螳螂をイメージした緑色になり、胸部のプレートも真ん中が螳螂に変わる。

オーズは腕部のカマキリアームの専用武器・カマキリソードを構え、ウヴァに立ち向かう。

「ハア、タア！」

「何！？ 何だこの戦い方は！？」

基本形態・タトバコンボでの戦闘以上の戦い方を見せるオーズに驚きを隠せないウヴァ。

「ハッ！」

そしてオーズは、そのままウヴァを跳び越えると、そのまま今野の元へ向かう。

「オーズ！」

追いかけてよとするウヴァであったが、

「コッチを忘れんなよ！」

サイクロンメタルにチェンジしたWが、メタルメモリを専用武器・メタルシャフトのマキシマムスロットに差し込んだ。

【METAL MAXIMUMDRIVE】

その瞬間、メタルメモリが風を纏いだす。

「ハア！」

そのままWは、回転しながらウヴァをシャフトで殴り付けた。

「「メタルツイスター！」」

「グアアアアアアア！」

攻撃を受けたウヴァの体からは彼等グリードの力の源であり、オズの変身の鍵となる硬貨・コアメダルが飛び出る。

「ハア！」

すぐさまアंकはそれをキャッチする。

「コイツは儲けたな」

そう言ってアंकはニヤリと笑う。

「クソッ、覚えてろ！」

そう言ってウヴァは姿を消した。

今野の元へ向かったオーズであったが、

「ぐあ！」

突如、蜘蛛のような怪人が現れ、彼を襲撃した。

「ヤミーか！」

グリードが人の欲望から生み出す怪人・ヤミーである。

クモヤミーは背中に生えてある四本の『爪』で攻撃を仕掛ける。

「うおっと！」

それを回避するオーズであるが、

「ウワアアアアアアアア！」

「しまった！」

今野が車に擦り抜ける光景を目にしてしまう。

「やった……」

クモヤミーはそう言って姿を消した。

「くそオ！」

目の前の命を救えなかったオーズは、アスファルトの地面を殴り付けたのであった。

事務所に戻った三人は、バットショットで撮った写真を現像させる。

「運転手の正体があったよ」

そう言ってユーノは、写真の青年の詳細を説明する。

「北川公平、大学二年生。彼には、事件と関わる重大な事が分かった」

「重大な事？」

「一週間前、彼のお姉さんがひき逃げ事故に遭っている」

「！？」

「成る程な、その事故の犯人が黒田とその一味って事か」

驚く上条と土郎とは対照的に、アंकは納得する。

「ああ、しかし証拠不十分で起訴されなかったそうだな」

「つまり公平さんは、お姉さんの復讐でドーパントになった」

「まさか一週間前の事件も彼の仕業……」

「“復讐心”か……ウヴァの奴め、人間の感情の中で恐ろしいものを『欲望』に選んだな」

「因みに彼のお姉さんの静子さんは、病院で今の意識不明だそうだな」

上条と土郎は、すぐさま事務所を後にした。

「“愛する者の復讐をしたい”……それも立派な欲望だからな」

そう言ってアंकも追い掛けて行った。

ある場所で北川公平は、呟いていた。

「姉さん、もうすぐだから」

「北川さんですよね？」

そう言つて上条と土郎、そしてアंकが現れた。

「何だよ、お前等？」

「万時屋です。あなたが今回のドーパント事件の犯人であることは既に分かっています」

「すぐに復讐を止めてくれませんか？ お姉さんも喜びませんよ」
説得に向かう二人であったが、

「お前等に……………何が分かる！」

そう言つて公平は走り出した。

「ハア……逆効果だったな」

それを見たアंकは呆れてしまう。

「あ、ちょっと!」

「西田さん。アイツに追い掛けられてるんです!」

偶然合った知り合いそう言ってバスに乗り込んだ公平。

「ちょっと!」

追い掛ける上条であるが、

「お前、彼に何するつもりだ!」

男に阻止されてしまう。

「離してくれ!」

抵抗する上条であるが、バスが走り出してしまい、

「あゝもう、不幸だあゝ」

そう言って頭を抱えてしまった。

「さつきは申し訳ない。 てっきり奴等の仲間かと思ってしまって」

「いえ、良いんですよ」

男の名は西田純一。

公平の姉・静子の婚約者である。

「美術大学の先生ですか？」

名刺を渡された土郎がそう言った。

「とは言っても、まだ駆け出しで……」

「つかぬ事を聞きますが、公平さんのお姉さん 静子さんとは何
処で出会ったんですか？」

「行きつけの美術館で偶然出会って、そのまま彼女の優しさに惹か
れました」

「それじゃ、静子さんが事故に会った時は？」

「勿論、悲しみました。でも……」

「公平さんの方が、もっと悲しんでいた」

「当たり前です。ご両親を幼い頃に亡くした彼にとって、静子はたった一人の肉親ですから」

失礼と言って西田はその場を後にした。

すると、上条のスタックフォンが鳴り出し、

「もしもし？ ルキアか、今何処にいる？」

ルキアに場所を聞き出す上条。

『今、黒田を尾行していたのだが……あやつ、銃を手にしていてその先が見えんだ』

「場所は何処だ？」

『え〜と……亀田という看板が書かれた廃工場だ　　ってうわぁ！』

その瞬間、ドドドドドと銃声が鳴り出した。

「ルキア！？ クソ、衛宮さん」

「ああ！」

すると士郎とアークは、その場に会った自動販売機に銀色の硬貨・セルメダルを挿入し、真ん中の黒いボタンを押した。

その自販機は、バイク・ライドベンダーに変形した。

ライドベンダーに乗った土郎とアंक、そしてハードボイルダーに乗った上条は、そのままルキアの元へ向かった。

走行中、アंकは二人にこう言った。

「当麻、土郎。お前等に聞きたい事がある」

「ん？」

「今回の事件は、黒田って男の自業自得によるものだろ？世間の目で言えば、復讐をさせるのが良い手だと思わねえか？」

それを聞いた二人はこう言った。

「確かにそうかもしれない。だけど……どんな奴だろうと、目の

前の命を見捨てることは俺には出来ない」

「それに……復讐させたところで、公平さんの心が救われハズが無い」

その言葉を聞いたアंकは、

「フン、お前等本物のバカだぜ」

そう言って笑みを浮かべた。

そんな彼は、士郎をオーズにした時のことを思い出す。

完全な肉体になるために士郎を利用しようとするが、彼からの交換条件としてこう言われた。

（分かった、手伝ってやる。ただし条件として、俺が変身したい時に変身させる。命より、メダルを優先するな）

それを聞いた途端、アंकは心置きなくドライバーとメダルを士郎に渡した。

「（どうやら、俺も士郎の甘ちゃんに移っちゃったようだな）」

そう思いながら走行して行ったのであった。

黒田はマシンガンを容赦なく放つが弾切れになってしまい、追い掛けられるハメになってしまう。

「ヒイヒイヒイヒイ！」

追い詰められたまさにその時であった。

ドガンと壁を突き破ったWとオーズが現れたのであった。

「当麻……と誰だ？」

オーズの存在を知らないルキアは、オーズを始めてみることになる。

「何故邪魔をする！」

公平の問いにWは答える。

「大切な人を失った気持ちは俺にも分かる。だから、これ以上復讐をさせるわけにはいかないんだ！」

「まずはお前からだ！」

そう言って公平は標的をWに変えた。

クモヤミーも出現し、オーズはベンダーから降りる。

くオーズVSクモヤミーく

「ハア！」

トラクローを展開させたオーズは、クモヤミーの爪を防ぎながら攻撃する。

「シャアアアア！」

しかしクモヤミーは糸を吐き出し、オーズの動きを封じる。

「しまった！」

足を封じられたオーズであるが、

「士郎、コイツを使え！」

そう言ってアंकが鰻の描かれた青いメダルを投げる。

「サンキュー！」

受け取ったオーズは、真ん中を差し替えてスキャンした。

【タカ・ウナギ・バツタ】

ウナギの能力を宿す腕部・ウナギアームへと変わり、専用武器・ウナギウィップでクモヤミーを攻撃する。

「ガア！」

ウナギウィップから流れる電流でダメージを受けたクモヤミー。

「よし！ アंक、ライオンのメダル！」

「分かった！」

ライオンが描かれた黄色いメダルを鷹のメダルと差し替えてスキャンすると、

【ライオン・ウナギ・バツタ】

オーズの頭部がライオンの鬣をイメージした金色に変わった。

「ルキア、暫らくは目え瞑っとけ！」

「はあ？」

アंकの言葉に疑問を感じながらも目を瞑るルキア。
するとソレと同時に、

「ハアアアア……………タアアアアアア！」

突如オーズの頭部から高熱の光が放たれ、

「グアアアアア！」

足を封じていた糸も一瞬で吹き飛び、クモヤミーも視覚を封じられてしまう。

「今だ！」

そうやってオーズは鷹のメダルと虎のメダル、そしてバツタのメダルを差し込み、基本形態・タトバコンボに戻った。

【タカ・トラ・バツタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

さらにオーズは、ベルトのメダルをそのままスキャンした。

【スキャンニングチャージ】

するとバツタの形状となった脚部で上空へと飛び上がり、同時に出現したリングを潜るようにドロップキックの要領で放つ必殺技・タトバキックを叩き込んだ。

「セイヤアアアアア！」

「グアアアアアアアア！」

クモヤミーは爆発し、セルメダルへと変わり、

「メダルメダル」

それを嬉しそうに手に取るアंकであった。

〜WVS謎のドーパント〜

バイクと車……二台のマシンが一直線に走り出す。

しかし、Wはその瞬間にメタルメモリを差し込む。

【CYCLONE・METAL】

メタルメモリの防御力を利用し、車をひっくり返したWであったが、

「ヒィ！」

「逃がすものかアアアアアアア！」

逃げ出す黒田を追いかけようと、公平は車ごと起き上がった。

「マジかよ！」

Wはその光景を見て驚きを隠せなかった。

外に出た黒田を追いかけようとした公平の車であったが、Wが予め呼んだリボルギャリーが吹き飛ばした。

しかし車はと待つ事を知らず、Wは展開したりボルギャリーに移動し、ハードボイルダーの空中移動形態・ハードピューターで空へと飛んだ。

「あの車に当たったら奴は、ウィルスに感染しちまう……そうすれば俺も………」

一瞬考える上条であるが、ユーノがこう言った。

「当麻君、キミなら大丈夫だ」

「何でだよ？」

「キミには『右手』がある」

「あ、そうか」

そう言つてハードピューターを車に向かつて急降下させながら、

【HEAT・METAL】

ヒートメタルにチェンジし、メタルシャフトのマキシマムスロットにメタルメモリを差し込んだ。

【METAL MAXIMUMDRIVE】

シャフトの両端から炎を噴出しながら急降下し、必殺技を叩き込んだ。

「メタルブランディング！」

「ゲアアアアアアアアアア！」

攻撃を受けた車から公平は放り出され、車は爆発した。

〈第三者パート〉

炎上する車を見ながら、ユーノはこう言った。

「ドーパントを検索した結果、ウィルスは熱に弱い。その可能性に賭けてみたんだ」

「それでヒートか……流石相棒」

すると、逃げていた黒田は高笑いをしながらWを見る。

「アリガトな。誰だか知らないけど」

すると、ルキアとアंकに殴られてしまう。

「んが！」

それを見ながら苦笑してしまう土郎。

三人が駆け寄り、ルキアはWにこう言った。

「結局、助けたのだな」

「ああ」

しかし、土郎がある事に気付いた。

「なあ、メモリブレイクしたはずなのに、メモリが出てこないぞ？」

「え!?!」

「何だと!?!」

「ドーパントは公平さんじゃなかったのか!?!」

驚くWとルキアであるが、突如アंकが叫んだ。

「チツ! どうやら、まだ終わりじゃねえようだ!」

「「「「え?」「」「」

アंकの言葉で全員が振り返ると、

「アアアアアアアア!」

叫び声のような声で鳴く虫のような異形・バイラズドーパントがいた。

「ドーパント!?!」

これにはWも驚きを隠せなかった。

第19話：Vの呪い／復讐心と怨霊車とメダルのライダー（後書き）

次回、Vの呪い／怨念獣と復讐と怒りの鉄拳

第20話：Vの呪い／怨念獣と復讐と怒りの鉄拳（前書き）

仮面ライダーW（another world story）、前回の三つの出来事。

一つ…：上条当麻の目の前で、依頼人が殺される。

二つ…：Wとオーズは、復讐車とヤミーを撃破。

そして三つ…：W達の前に、ドーパントが現れた。

第20話：Vの呪い／怨念獣と復讐と怒りの鉄拳

「アアアアアアアア！」

「どうなつてんだよ!?!」

突如現れたドーパントに驚きながらも、ルナメタルにチェンジする。

【LUNAR・METAL】

鞭と化したメタルシャフトでドーパントを攻撃するが、

「ハアアアアアアア！」

バイラズドーパントは触手で反撃する。

「グアア！」

その瞬間、バイラズドーパントは触手で黒田を捕らえ、

「ウワアアアアアア！」

そのまま彼を殺害したあと、そのまま姿を消した。

「逃げられた！」

「どうしたんだい当麻君。動きが鈍くなつたけど？」

それを聞いた上条は、変身を解除しながらこう言った。

「分からない……けど、俺にはあのドーパントが……悲しんでる
ようにしか見えなかった」

Vの呪い / 怨念獣と復讐と怒りの鉄拳

インデックスの風邪の治り、一安心の一同。

そして全員が、顔を見合わせたのであった。

「まずは状況を整理しよう」

士郎がそう言うと、全員がコクリと首を縦に振った。

「まず、全ての発端は一週間前の事故から始まった」

「被害者・北川静子さんの弟の公平さんは、復讐のために黒田一味を殺害した」

「だけど、公平さんからメモリが出現せず、ドーパントも別にいた」

「他に公平さん以外で、静子さんの復讐をしたがってる人物は……」

「婚約者の西田純」

「行ってみよう！」

上条はそう言って事務所を後にした。

「俺達は情報収集だ。アंक、セイバー」

「ああ」

「分かりました」

そう言って土郎とセイバー、そしてアングの三人も事務所を後にした。

その時、ルキアはこう呟いた。

「じの話……我々の出番が無いのでは？」

とある美術教室。

生徒にデッサンの指導をしていた西田。

しかし、その時であった。

「アアアアアアアアアアアア！」

バイラズドーパントが出現したのだ。

「キヤアアアアアア！」

「ウワアアアアアア！」

生徒達は悲鳴を上げながら逃げ出し、西田も逃げようとするが、足が躓いて転んでしまう。

「ヒィ！」

怯える西田であったが、

「止める！」

間一髪で上条が登場した。

西田が逃げたのを確認した上条はダブルドライバーを装着する。

「ユーノ！」

【JOKER】

事務所に居るユーノもドライバーを通じて状況を把握する。

「これは予想外だ。西田さんはドーパントの疑いが掛かっているところか、命を狙われる立場になっている」

「何だと!？」

それを聞いた一同も驚きを隠せなかった。

【CYCLONE】

「変身!」

【CYCLONE・JOKER】

仮面ライダーWに変身して、バイラスドーパントに跳びかかった。

「オラア!」

「アアアアアアア!」

しかしバイラスドーパントは、すぐさま姿を消した。

「またかよ!」

そう思いながら変身を解除した上条であった。

スタグフォンで事務所に連絡する上条は、これまで得た情報を話し出す。

『フェイトや青髪から聞いた情報だと、北川姉弟は公平さんが幼い頃に両親を亡くして、暫らくは親戚の家に引き取られていたんだけど、その親戚も公平さんが高校卒業と同時に亡くなってるだから事故に遭う前は二人は一緒にアパート住まいだったらしいんだ』

「じゃあ……あのドーパントは一体………」

「もしかして……ひき逃げされた本人かな？」

スバルがそう言うと恋次が呆れながらこう言った。

「あのなあ、その静子って女は事故で意識不明の重体になってんだぞ？ 仮に彼女が犯人だとしても、どうやってドーパントになれんだよ？ 何で婚約者を殺そうとするんだよ？」

「う……そ……それは………」

質問責めを受け、涙目になるスバルであったが、

「『それだ！』」

上条とユ一ノは何か気付いたのであった。

「え？」

「スバル、キミ天才だよ！」

「え、ホントですか！」

神都にある総合病院。

そこに入院している北川静子の病室に向かったユーノ達一同。

するとすぐにユーノはあるモノを捜していた。

「ゆ、ユーノさん!？」

「何やってるんですか!？」

慌てる四人であるが、インデックスが彼女の右腕に何かがあるのを見つける。

「あつたんだよ!」

「何だ、その変な刺青は？」

まるで電子回路のような四角い刺青に疑問を感じる恋次。

「これは生態コネクタと言って、ガイアメモリの所有者がドーパントに変身するために必要なモノで、メモリが力を引き出す『鍵』なら、このコネクタは『錠』の役割だ」

「へえ〜」

「というか、以前その話を説明したよね？」

「え、そうだったっけ？」

「しましたよ」

「同じく」

「え？」

ユーノの言葉に続くように、スバルもティアナも頷くと、ルキアが呆れながらこう言った。

「忘れたのも無理も無い。勉強に関しては全くダメな貴様のことだ、どうせ途中で居眠りなどして説明を聞きそびれたんだろう」

「う／＼／＼」

凶星を疲れた恋次は顔を真っ赤にしてしまう。

「でも、何で静子さんが婚約者を？」

アトリが疑問に思うが、

「それについては説明してやる」

そう言ってアंकとセイバーが現れた。

「アंकにセイバーさん？」

「どつ言つことだ？」

アंकとセイバーは、知ってる情報をメンバーに話した。

「あのニシダという男、相当な女垂らしのようです」

「女垂らし!?!?」

それを聞いた恋次は驚いてしまう。

「ええ。絵のモデルになる女性を捜しては、その女性に手を出すらしいのです」

「しかもソイツ、同時に結婚詐欺まで働いてたらしい」

「結婚詐欺!?!」

するとセイバーは、ベッドの上の静子を見ながらこう言った。

「恐らく、彼女もその被害者でしょう」

「てこたあ、西田を狙っていた動機は……」

「自分を詐欺の標的にした復讐」

「本来なら西田って男に自業自得って言いたいところだが、そんな事を言ってる場合じゃないようだな」

そう言っただけで、静子の額に指を置くと、何かを探り出した。

「何やってんだ?」

「アंकは今、彼女がドーパントになった経緯を知るために、過去の情報を探っているのです」

「アイツそんな事出来る!?!」

これには恋次達四人は驚いた。

情報を得たアंकは指を離し、全員にこう言った。

「どうやら、轢かれる寸前にメモリを使ったようだぜ」

「そうか、では我々が見たドーパントは……………彼女の思念が生み出した存在」

「ああ、言わば“怨念獣”だ」

それを聞いた全員がゾツと背筋を凍らせた。

しかしユーノは、決心した顔でこう言い出した。

「なら、説得してみせるよ」

「出来るワケねえだろ！ 眠ってる、しかも精神だけがどっか行っただ人間にどう声を掛けるんだよ!？」

恋次がそう言うと、ユーノはサラッとこう言った。

「僕の『ワイルドスマン賢者』なら、今の彼女と精神に潜り込んでコンタクトが出来るよ」

「マジで!？」

「ユーノ、お願い!」

こうしてユーノは、生態コネクタを通して、北川静子の精神世界に潜り込んだ。

精神世界に入ったユーノは、一人の女性を見つける。

それは、ボロボロで黒く汚れたドレスに身を包んだ北川静子の姿であつた。

「北川静子さんですね？」

「アナタは？」

「アナタを救いたいと思っている人物がいます。僕はその代理人で来たんだ」

「私を……救う？」

「そうです。一つ聞きたいのですが、何故ガイアメモリに手を出したんですか？」

ユーノの質問に、静子はこう言った。

「最初彼と出会い、結婚も間近に迫ったとき……私は知ってしまったの……彼の本当の姿を……」

一週間前のあの日、静子が西田が自分以外の女性に手を出していた場面を目撃した。

すると、ガイアメモリの売人がメモリの入ったアタッシュケースを見せた。

(宜しければ、好きなメモリをどうぞ)

「最初は懲らしめるつもりで買った。でも弟と一からやり直そうと戸惑ってしまった……でも、その時だったの。あの事故に遭ったのは」

轢かれる寸前、彼女を生態コネクタにメモリを差し込んでしまう。

(【バイラス】)

「だから私は復讐を決意したの。最初は私を轢き逃げした黒田達……そしてあの男よ！」

「もう止めてください！ これ以上アナタに罪を重ねて欲しくない！」

説得を試みるユーノであったが、

「貴方達の気持ちは嬉しい……でも、私には復讐しかないのよ!!」

その威圧により、ユーノは精神世界から消えてしまう。

「ウワツ！」

現実世界に戻ったユーノは、吹き飛ばされてしまう。

「ユーノ！」

「ダメだ！ メモリの力と憎しみが強すぎて、説得が出来ない！」

憎しみに捕らわれた彼女を救うことは唯一つであった。

「戦うしかない」

士郎から西田の情報を知った上条は、すぐさま彼を探し出す。

「あのヤロウ……優しそうな面して、小汚ねえ野郎だったのかよ！」

そう呟きながら上条は、ある場所に着いた。

「ここか……」

それは西田のマンションであった。

しかし、その時であった。

「ウワアアアアアアア！」

西田が悲鳴を上げながら走り出したのだ。

「何だ!？」

走り疲れた西田が見たのは、ある教会に着いた。

それは静子を騙した際に、彼女を本気にさせた場所。

すると、そこから死人のような顔で静子が現れた。

「し……静子！」

「裏切り者」

そう言っただけで彼女の思念は、バイラスドーパントへと変わった。

西田を追って教会に着いた上条は、ダブルドライバーを装着する。

「止めるぞ、俺達が！」

【JOKER】

「ああ、そうだね！」

【CYCLONE】

「「変身！」」

【JOKER・CYCLONE】

仮面ライダーWは、バイラスドーパントに跳びかかった。

「オラア！」

【HEAT・TRIGGER】

「俺達に……出来る事は………」

すぐさまトリガーマグナムのマキシマムスロットにトリガーマモリを差し込んだ。

【TRIGGER MAXIMUMDRIVE】

「トリガー……エキスポージョン！」

その瞬間、Wはトリガーマグナムをバイラズドーパントに向ける。

それを見たオーズは、すぐに跳び上がり、同時にマグナムの銃口から炎が火炎放射のように放たれた。

「グアアアアアアアアアアア！」

バイラズドーパントは消滅し、病室で寝ている静子の体から排出されたメモリも砕けた。

「は……ハハハハハ、ざまーみる化物め！」

西田は本性を見せながら笑うが、

「さあ、その幻想をぶち殺す」

「え？」

振り返ると同時に上条に殴られた。

「ガア！ 何しやがる！！」

「自業自得だ！」

「その通りだ」

すると土方が現れる。

「西田純一。結婚詐欺の容疑で逮捕する！」

こうして、西田は真選組に逮捕されたのであった。

「今でも静子さんは意識不明なのか？」

「ああ、皮肉だね……本当の被害者が加害者になるなんて……」

「……そうだな」

コーヒーを飲みながら、上条は悲しい顔をする。

そんな上条は、あることを思い出した。

「そう言えば……結婚の話んだけど……」

「へ？」

「ユーノ……お前、なのはと結婚するんだろ？」

それを言われたユーノは、顔を真っ赤にした。

「なななななな何でそれを！？／／／／／」

「桃子さんから聞いた」

結婚の話を知られ、一瞬気絶しそうになったユーノであった。

第20話：Vの呪い／怨念獣と復讐と怒りの鉄拳（後書き）

次回、Yの結婚／鳥ヤミー出現！

虎龍

「次回は重要大事さんの『ユーノ・スクライア外伝・絆』とコラボです」

第21話：Yの結婚／鳥ヤミー出現！（前書き）

重要大事さんとのコラボです。

第21話：Yの結婚／鳥ヤミー出現！

三日後になのはとユーノの結婚式が開かれる。

そんな二人は、婚姻届を提出していた。

その籍を書く欄には、『なのは・スクライア』と『ユーノ・スクライア』と書かれていた。

そんな二人を覗いていたなのはの父・士朗と兄・恭也は、ドス黒いオーラを放っていた。

「「おお〜のお〜れえ〜!!!」」

しかし二人は知らなかった。

この嫉妬と殺意がとんでもない悲劇を招いてしまう事を。

「その欲望、解放してやるよ」

Yの結婚／鳥ヤミー出現！

神都にある屋敷・衛宮邸。

その家主である衛宮士郎は、屋敷内の道場で竹刀を振るっていた。

「フンッ！ フンッ！」

根っからの努力家と呼ぶべきその姿は、正義を貫こうとする戦士の目であった。

「……………」

屋敷の屋根の上に座る青年・グリードのアンク。

彼は目の前の光景をずっと観ていた。

すると、下から声が聞こえた。

「アंक！」

「ん？」

下を見ると、士朗とセイバーの二人が手を振っていた。

「今から『翠屋』に行くんだけど、お前も来るか？」

「ああ、そうする」

そう言って屋根から降りたアंकは、二人と共に屋敷を後にした。

しかし、その時であった。

チャリン　という音が、彼の耳元で聞こえた。

「士朗、ヤミーだ！」

「え、いきなり!？」

「行ってみましょう!」

そう言って士朗とセイバー、そしてアंकはヤミーの気配がする方向へ向かった。

その同時刻、四人と一匹がこの街にやって来たのであった。

「賑やかな街だね」

「そうだな」

「モモタロス、浮かれないようにね」

「ナーノの言うとおりだよ、先輩」

「何でそうなるんだよ！」

『ユーノ・スクライア外伝』シリーズの主人公のユーノ・スクライアから順に、ワケあってフェレットの姿になっている時空管理局創造主及び元帥のユーノス・スレイア、未来からやって来たユーノの息子のナーノ・T・スクライア、ユーノが店主を務める店『スクライア商店』の店員・浦太郎と鬼太郎がそう言った。

彼等は嘗てのユーノスに封印され、ミッドチルダに復活した『欲望の王』の呼ばれる怪人・グリードの作り上げる怪人・ヤミーを倒すと同時に、アングルモアの回収のためにこの世界にやって来た。

すると、ユーノスの耳元で硬貨が落ちるような音が聞こえた。

「ユーノ、ヤミーだ！」

「何処ですか！」

「すぐ近くだ！」

そう言ってユーノ達は真つ先に気配のする方へ向かった。

ユーノ達が向かった先は、森の中であった。

「お父さん、アレ！」

「!?!」

ナーノが指差す先には、

「ヤミー！」

カラスのようなヤミーと、孔雀のようなヤミーの二体がいた。

さらにその足元には、青年が倒れていた。

「ユーノ……スクライア……倒す」

「殺す！」

「な!?!」

カラスヤミーとクジャクヤミーはそう言って、ユーノに襲い掛かった。

「変身！」

【Slayer mode】

ユーノは完現術フルブリンゲによる変身・スレイアーモードになり、ヤミーに立ち向かった。

「変身！」

【GUN FORM】

ナーノもまた、バリアジャケットを装着し、父と共に立ち向かった。

「こりゃ見ものだな」

そんな二人の戦いを見ていたは、異形と化した右前腕部が特徴の金髪の青年。

彼こそ、ミッドチルダの怪人・グリードのアंकであった。

「アंक！」

ユーノから鬼太郎の肩に乗り替わったユーノスは、アंकを睨みつける。

「そう怖い顔で見るなよ」

「ふざけてるのか！」

アंकの言葉にユーノスは怒りを見せるが、その時であった。

「ほう……面白い展開になったな」

「!?!」

聞き覚えのある声を聞いた全員が、声のする方へ顔を向けた。

そこ似たのは、異形と化した右前腕部が特徴の金髪の青年・アंकであった。

「バカな……俺がもう一人だと!?!」

アंक自身もコレに驚きだす。

すると、金髪の少女と赤銅色の髪の青年が現れる。

「アंकク……これは一体!？」

「鳥のヤミーか!？」

この二人はアंकクが二人いる事と鳥のヤミーがいることに驚きを隠せない様子であった。

「とりあえず“アイツ”から話を聞いてみるか　とその前に、まずはヤミーだ。　士朗!」

「ああ」

士朗と呼ばれた青年は、ベルトの溝にコアメダルを差し込み、それをスキャンすると、

「変身!」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

赤い鷹の頭部に黄色い虎の腕部、そして緑色の飛蝗の脚部の戦士に変身した。

「何だそりゃ!？」

鬼太郎が驚くと、青年は自らをこう呼んだ。

「衛宮士郎……またの名を、仮面ライダーオーズ!」

遂に、メダルの戦士と絆の完現術士が出会ったのであった。

「ハア！」

オーズはカラスヤミーを攻撃すると、

「セイヤア！」

今度はクジャクヤミーを攻撃する。

「士朗！ 奴等が飛ぶ前に、羽を切り落とせ！！！」

「了解！」

アングの指示を受けたオーズは、真ん中と左端のメダルを取り替えた。

【タカ・カマキリ・チーター】

タカキリーターにチェンジしたオーズは、すぐさまベルトをスキヤ

ンした。

【SCANNING CHARGE】

「ハアアアアアア……………」

オーズは、チーターレグの高速移動から同時に出現したリングを
潜りながら、

「セイヤアアアアアア！」

カマキリソードでカラスヤミーの羽を切り落とした。

「ガアアア！」

翼を失ったカラスヤミーはもう上空へ逃げる事ができなくなった。

「よし、僕も！」

そう言ってユーノも続くように、カラスヤミーに止めを刺した。

「セイヤアアアアアア！」

「グアアアアアアア！」

カラスヤミーは爆発と同時にセルメダルとなり、クジャクヤミーは
その場から上空へ逃げ去った。

「チッ！」

無論、『アंक』もその場を後にした。

「逃げられたか……」

アंकは呟きながら、もう一人の自分が逃げたのを確認した。

「大丈夫ですか？」

そう言って土朗が倒れていた青年に近づくと、彼は驚きを隠せなくなる。

「な………ユーノさん!？」

それは紛れも無く、ユーノ・スクライア本人であった。

病院に運び込まれたユーノは、直ちに緊急治療を受けた。

救急車が来るまで、土朗やナーノが適切な処置を行ったため、大事

には至らなかつたが、意識不明の重体であつた。

「あ……………ああああああああああ！」

婚約者の姿になのはは涙を流した。

相棒である上条も、血が滲むくらい拳を握り締めた。

それを見届ける事しかできない士朗。

「また……………助けられなかつた」

自分の無力さを悔やみながら、彼は前へと進んだのであつた。

衛宮邸では、ユーノ達の話聞いていたセイバーとアング。

「成る程、貴方がたはそのアンモルゴアを回収するために？」

「そうです。一刻も早く回収しないといけないんです」

そんな一同の中で、無言であったアंकが口を開いた。

「それにしても、引っ掛かる点が一つだけある」

「引っ掛かる？」

そう言つてナーノがアंकの言葉に耳を傾けるも、鬼太郎が止めた。

「何考えてんだよテムエは！」

「何が？」

「何がって、相手はアंकだぞ!？」

「でも彼はこの世界のアंकであつて、僕等の知ってるアंकじゃないし」

「そりゃ、そうだけどよ……………」

「それで、引っ掛かる点って？」

ナーノの言葉にアंकはこう言つた。

「ヤミーだ。本来奴等は『親』の欲望から生み出される。違う

『親』で同じ相手を狙うヤミーは初めてのケースだ」

それを聞いた一同は頭を悩ませるが、ナーノはサラッとこう言つた。

「それってタダ単に…………『親』にされた人の欲望が同じか、もしくは似たようなものだからじゃないの？」

「あ……」

それを聞いた一同は成る程という顔をする。

「確かに、そう考えもあるな。アイツ……俺のクセに随分考え
じゃねえか」

「ややこしい言い方ですね」

アングの台詞にセイバーは溜め息混じりにそう言った。

「そうか……だとすれば……」

するとアングは携帯電話を掛けた。

電話の相手は士朗である。

「士朗！ ヤミーの親が分かった！！」

翠屋に向かった士朗は、中に入る。

「いらっしやい。おや衛宮君」

「どうした、衛宮？ そんなに慌てて」

高町士朗と恭也が迎えてくれた。

高町家の人々は、名前が同じであるために衛宮士朗のことは苗字で呼んでいる。

「二人とも……時間開いてますか？」

「ん？」

士朗は、二人にこう言い放った。

「俺にもう一度、剣を……御神流を教えてください！」

お辞儀をする士朗に、

「ああ、構わないよ？」

「先に道場へ待っていてくれ」

そう言って二人は背を向けた。

その背中を見ながら士朗は心の中で呟いた。

「（ウソであって欲しい……高町さんと恭也さんが……二人が……ヤミーの『親』だなんて……）」

アंकから残酷な真実を告げられながらも、二人の剣術の師の背中を見ていた土朗であった。

第21話：Yの結婚／鳥ヤミー出現！（後書き）

次回、Yの結婚／士郎の正義と復活のコンビと不死鳥コンボ

（キャラ紹介）

衛宮士郎／仮面ライダーオーズ

年齢：19歳

登場作品：Fateシリーズ

能力：投影術^{トレイス}

属性：魔術系特殊者^{マジックアビリティ}

ランク：D

設定：実家の土蔵で発見したオーズドライバー及びコアメダルを手にした事によって、グリードとヤミーとの戦い人の欲望の深さを体験する事になる。

幼い頃の自分を救ってくれた養父権恩人のような人間になるために、災害ボランテアに精を費やしている。

アंकとは彼の願いを叶える条件として“人命を優先”させている。能力のランクはDであるが、彼の覚悟の強さでSに跳ね上がる事もある

高町家の剣術『小太刀御神二刀流』を教わっているため、双剣を使った攻撃は得意。

オーズに変身した時も、「二刀流が使える」という理由でカマキリ

アームを好んで使用する。

セイバー

年齢：19歳（外見上）

登場作品：Fateシリーズ

能力：不可思議インヒジブル

属性：魔術系特殊者マジックアビリティ

ランク：A

設定：士郎のパートナー。

真面目な性格であるため融通利かないこともある。

食欲はインデックスやアトリに勝るも劣らない胃袋を持つ。

剣術の腕も高く、士郎の鍛錬の相手にもなることもしばしば。

アング

年齢：19歳（外見上）

登場作品：仮面ライダーオーズ

能力：火炎能力

属性：なし

ランク：S（人間に合わせているときはBに下げている）

設定：800年の眠りから覚めたグリードの一人。
完全な身体を手に入れるために士郎を利用するが、本人が心置きなく了解した。

また、彼からの交換条件として“人命を優先”にしている。
士郎のお人好しさには呆れているが、その魅力に徐々に惹かれていく部分があり、彼やセイバーを心配する事もある。
そのためか、人間の進化の可能性に期待を求めたりする。
たまにボケることもある。

アイスクャンディーが好物で、翠屋のアイスクャンディーはその中でもお気に入りである。

原作とは違い、最初から怪人態に変身できる。

第22話：Yの結婚／士朗の正義と復活のコンビと不死鳥コンビ（前書き）

仮面ライダーW（another world story）…前
回の三つの出来事。

一つ…オーズが別世界のユーノと対面する。

二つ…ユーノが鳥系ヤミーの犠牲者になる。

三つ…士郎はアンクから、高町家の男性陣がヤミーの『親』だと知らされる。

第22話：Yの結婚／士郎の正義と復活のコンビと不死鳥コンビ

剣術の師がヤミーの『親』だという事実を受け入れられない士郎であるが、

「（真相を……確かめないと！）」

そう言っつて木刀を恭也に構えた。

「いきますー！」

「来い！」

Yの結婚／士郎の正義と復活のコンビと不死鳥コンビ

アंकが士郎にした電話の意味を問い出す。

「どう言うことだ！ 士郎さんと恭也さんがヤミーの『親』になっているって！！」

ユーノはアंकの胸倉を掴むが、アंकは平然な顔でこう言った。

「ハッ！ お前もユーノ・スクライアなら知ってるはずだ。 高町家の男共の溺愛っぷりを」

「！！」

アंकの発言にユーノは一瞬、士郎と恭也のなのには対する溺愛っぷりを思い出してしまふ。

二人は、なのとは付き合っている自分を殺そうとするほどの殺気を放つ事がある。

その“なのへの愛情”をグリードに利用されたなら、まさにもう一人の自分が襲われてしまった事にも得心が行く。

ユーノスはアंकにある疑問をぶつけた。

「でも……それをどうして衛宮士郎に教えるんだ？」

「アイツはあの二人から剣術を学んでいる」

「それとどう言う関係が？」

「アイツは“正義の味方”って奴を目指している。その目標よくぼつを達成するために、アイツは強くなる。それが師匠がヤミーの『親』になったなら、必ず強くなると考えるはずだ」

「彼を……利用したのか！」

「訂正しろ、強くなるきっかけを与えたと言って貰おうか」

コーノスの言葉に否定の論を述べたアंक。

「ふざけんな！」

鬼太郎が反論しようとするが、

「私もアंकに同意です」

「な!？」

セイバーの言葉に驚いてしまう。

「シロウの優しさは、時に戦いで『甘さ』となってしまうんです。ですから、この件は恐らく士郎にとって、乗り越えなければならぬ壁になっているはずですよ」

騎士王である彼女の言葉に、ナーノ以外が驚愕していた。

「要するに、衛宮の修行になるってこと?」

「そういふことです」

ナーノの言葉にセイバーは肯定した。

すると、その時であった。

「!!! セイバー、ヤミーだ」

「早速ですか」

そう言つてセイバーとアंकは屋敷を後にしたが、

「お前は士郎のところに行け! 俺はヤミーを追つ!」

「分かりました」

こうしてアंकはヤミーを追い、セイバーは士郎の下へ向かった。

「元帥とナーノは僕とアंकを追つて! 鬼太郎と浦太郎はセイバーさんを!!!」

「うん」

「わかった」

「了解!」

ユーノ達が着いたのは、病院であった。

「何で病院を……」

ユーノスが疑問を感じるが、ユーノはすぐに感づいた。

「まさか……この世界の僕を殺しに!？」

「成る程な……そこにいるんだろ、“俺”!」

そう言ってアंकが振り返ると、もう一人の『アंक』が顔を出す。

「また会ったな」

「アंक……今すぐヤミーを止める!」

ユーノが怒りを露にするが、

「バカかお前は？ それはヤミーの『親』に言え」

「チツ、まずはヤミー退治が先だ！」

「ああ……そうだね」

「行くよ、お父さん」

もう一人のアंकに言われたユーノは、

「「変身！」」

【Slayer mode】

【GUN FORM】

ナーノと共に戦闘を開始した。

一方、士郎はというと……

「ハアアアアア！」

「グア！」

恭也を試合で倒し、さらに続けて士郎を圧勝していた。

「ハア……ハア……」

「凄いな……衛宮。前より強くなってるな」

「そういう……お二人は……本気で掛かってましたね？」

「可愛い教え子の成長のため……本気を出さないワケには……い
かないからな」

すると、セイバーが道場にやってきた。

「シロウ！」

「セイバー！？」

「ヤミーです！すぐに仕度を……！」

「分かった！」

そう言って士郎は、更衣室で道着から私服に着替える。

セイバーは、今度は恭也と士郎にこう言った。

「貴方がたも来て頂けませんか？」

「ハア！」

ユートは、クジャクヤミーを地面に叩き落とし、

「クワアアアアア！」

「ハア！」

そこにナーノが引き金を引き、魔法弾をクジャクヤミーに放つ。

すると、士郎が駆けつけて来た。

「変身！」

【タカ・トラ・バツタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

「タアアアアア！」

仮面ライダーオーズは、クジャクヤミーに向かって飛び蹴りを叩き込んだ。

そんな彼等の戦いを近くで見ていた土郎と恭也。

「アレは……一体？」

驚く二人にセイバーが答えた。

「詳しくは言えませんが、お二人の“なのはへの愛情”が“欲望”という形で生み出された怪物です」

「！？」

それを聞いた二人は、驚きを隠せなかった。

「それは……どう言う……」

「そのままの通りです」

動揺を隠せない恭也にセイバーがさらにこう言った。

「貴方がたの“なのはをユーノの花婿にしたくない”という思いが、あの怪物を生み出し、ユーノを瀕死に追い込んだのです」

その言葉に偽りが無いと気付いた二人は、力尽きたように地面に膝を着いた。

「そんな……俺の……妹^{なの}を思う気持ちが……あの怪物を……」

「しかも、ユーノ君の怪我にも関係していたなんて……」

「貴方達のなのはを思う気持ちは立派だと思います。しかし、その度の過ぎた愛情は、やがて欲望となって今回のような出来事を招いてしまった……お二人が本当になのはの事を思っているのなら、二人の結婚を認めるべきです！」

セイバーの叱責を受けた二人は、精神的にダメージを受けていた。それを聞いていた鬼太郎と浦太郎は、彼等を庇う事は無かった。

まあ、自業自得だろうな。

「クワアアアアアアア！」

クジャクヤミーは、羽から手裏剣を飛ばし、ユーノとオーズを攻撃する。

「グアアアア！」

「うわぁ！」

吹き飛ばされる二人であったが、

「衛宮さん！」

上条当麻が現れた。

「当麻……お前、何で!？」

すると上条は、ダブルドライバーを装着した後、ジョーカーメモリを構えた。

「病み上がりで悪いけど、いくぜ相棒！」

一方病室では、

「何時でも良いよ！」

瀕死の重傷から奇跡的に目を覚ましたユーノ・スクライアが、サイクロンメモリを構えたのだった。

【CYCLONE】

【JOKER】

「「変身！」」

転送されたサイクロンメモリを右スロットの奥へ差し込み、ジョーカーメモリを左スロットへ差し込んだ上条は、

【CYCLONE・JOKER】

仮面ライダーWへと変身した。

「「さあ、その幻想をぶち殺す！」」

走り出した後、Wはクジャクヤミーに飛び蹴りを放つ。

「オラア！」

「クワアアアア！」

「ユーノさん……目が覚めたんですか!？」

「ああ、執刀してくれた医者が凄腕だったからね」

驚くオーズにユーノがそう言うが、

「ところで、ユーノがもう一人いるのは俺の気のせい？」

ユーノが目の前にいることに驚く上条であったが、

「それは後で話す」

オーズにそう言われた。

するとクジャクヤミーは、再び空中へ飛んだ。

「汚ねえ！ 飛ぶのってありかよ！」

Wがそう言うが、アングが二枚のメダルを手に持っていた。

「士郎、こいつを使え！」

投げ渡されたオーズは受け取るが、メダルを見て驚愕する。

「アंकこれ、お前のコアメダルじゃ!？」

「良いから使え! 空中戦ならソイツしかない!！」

「……………分かった。有難う!！」

そしてオーズは、真ん中と左端のメダルを取替え、スキヤナーでスキャンした。

キンキンキンという音が鳴り終えた、まさにその瞬間であった。

【タカ・クジャク・コンドル・ダ・ジャ・ドゥル】

「はあああああ!！」

オーズは新たな姿へと替わった。

頭部はタカヘッドの形状が変わって複眼の色が緑から赤に変わり、腕部は左腕に赤い円盤が装着され、脚部には爪先と踵に強靱な爪が付加され、胸のプレート・オーリングサークルの絵柄は不死鳥を模していた。

不死鳥の如き炎と飛行能力を宿す姿、仮面ライダーオーズ・タジャドルコンボが此処に光臨した。

「スゲエ……………」

「アレが、オーズの力……………」

「凄すぎる……………」

Wとユーノは、その姿に驚きを隠せなかった。

するとオーズは、背部の翼・クジャクウイングを広げて、上空へと飛んだ。

「クワアアアアアアア！」

「ハア！」

クジャクヤミーは羽手裏剣を放つが、オーズはクジャクウイングから羽手裏剣・クジャクフェンサーを放ち、相殺させる。

「クワツ!？」

驚きを隠せなかったクジャクヤミーは再び逃げようとするが、オーズは凄まじいスピードで追いかけてきた。

タジャドルコンボの固有能力は『超高速飛翔』と呼ばれ、空中での飛翔移動を高速で行う事で可能となっている。

オーズはクジャクヤミーを追い越すと、そのまま前に止まってベルトをスキャンした。

【SCANNING CHARGE】

その瞬間、脚部・コンドルレッグが猛禽類の足のように展開し、オーズはそのままドロップキックの要領で叩き込んだ。

「ハアアアアアア……………」

専用武器・斬月を構える。

一方のオーズも、大剣型武器・メダジャリバーを取ると、鳥類系コアメダルを挿入口に入れてスキャンした。

【TAKA・KUJAKU・CONDOR・TRIPLE SCANNING CHARGE】

その瞬間、メダジャリバーの刀身が紅蓮の炎に包まれる。

「行くぜ相棒！」

「ああ！」

【CYCLONE・SOUL】

サイクロンソウルにチェンジしたWは、ソウルメモリをソウルブレードのマキシマムスロットに挿入した。

【SOUL MAXIMUMDRIVE】

ソウルブレードの刀身に風が纏い、それを両手で構える。

「ソウルインパクト……」

「月牙……」

「ハアアアアア……」

絆の完現術師と二人で一人の戦士と紅蓮の不死鳥の刃からの一撃が、

遂に放たれた。

「タアアアアアア！」

「天衝オオオオ！！」

「セイヤアアアアアアアア！」

「クワアアアアアアア！」

三人の戦士の刃を喰らい、クジャクヤミーは爆発し、セルメダルへと変わった。

「お、大量大量」

そう言つてナーノは回収する。

「テメツ！セルメダルに手エ出してんじゃねえ！！」

それを見たアंकはキレるが、

「堅い事言わないでよアंक」

「アंकだアアア！」

ナーノに名前を間違えられ、本気で怒つたのであった。

因みに士郎おやバカと恭也シスコは、真実を知つたのはに暫らく口を聞いて貰えなかつたのであった。

その時の二人の顔は、死人のようになっていた。

「うわあ〜」

「相当ダメージ効いたんだな」

上から上条と士郎がそう言い、最後にアंकが言ったのであった。

「自業自得だろ」

結婚式まで後一日。

アンモルゴアを遂に発見したユーノ達であったが、上条の右手により破壊された。

因みに、どうやって見つけたかは省いています。

面倒なんで。

「「省くな！」」

目的を終えたユーノと上条と土郎は別れを告げた。

「じゃあ、さようなら」

「元気で……」

「たまに遊びに来てくださいね。」

「うん」

上から『この世界』のユーノ、上条、土郎の順でユーノに別れを告げた。

そして当日、ユーノとなのはの結婚式が開かれた。

「ユーノ・スクライア。　あなたは高町なのはを妻として永遠の愛を誓いますか？」

「誓います」

「高町なのは。　あなたはユーノ・スクライアを夫として永遠の愛を誓いますか？」

「誓います」

牧師の言葉に二人は答え、

「では、誓いの口付けを」

二人は、永遠の愛を誓ったのであった。

「良かったな、相棒」

上条は、二人を見ながらそう言ったのであった。

第22話：Yの結婚／士朗の正義と復活のコンビと不死鳥コンビ（後書き）

重要さん、コラボ有難う御座いました。

（オリジナル必殺技紹介）

仮面ライダーW

ソウルインパクト

サイクロンソウルのマキシマムドライブ。

風を纏ったソウルブレードを振るう事で、風の斬撃を放つことが出来る。

仮面ライダーオーズ

オーズバツシュ・ブレイブ

タジャドルコンボ状態で放つオーズバツシュ。

鳥類系コアメダルをメダジャリバーの挿入口に入れ、スキャンすると同時に刀身が炎に包まれる。

剣を振ると、不死鳥を模した炎の斬撃が放たれる。

また、バリエーションで不死鳥を模した炎にオーズ自身が包まれながら切り裂くというものがある。

第23話：Jの誕生／常盤台の超電磁砲（前書き）

ビギンズナイトのジョーカー篇です。

第23話：Jの誕生／常盤台の超電磁砲

御坂美琴…常盤台中学出身の高校生で、またの名を『常盤台の超^{シルガン}電磁砲』。

そんな彼女が何故仮面ライダージョーカーとして戦っているのか、その秘密が今明かされる。

ジョーカー誕生は、ここから始まった。

Jの始まり／常盤台の超電磁砲

三年前…上条当麻が『第三次世界大戦』の後から消息を絶った日の数日後。

「……………」

当時中学二年生であった御坂は、彼の消失によって心に穴が開いていた。

「どうすれば良いのよ……………」

すると、後輩の白井黒子が現れる。

「お姉様、大丈夫ですか？」

心配する白井に御坂は、笑いながらこう言った。

「大丈夫よ。ホラ、アンタは風紀委員ジャッジメントの仕事があるでしょ？」

「ええ……………では行って参りますわ」

白井は部屋を出た後、小さく呟いた。

「お姉様がああなったのは、あの類人猿がいなくなってしまった時ですわね」

寮を後にした御坂は、気分転換にゲームセンターに行った。

「……………」

しかし彼女の心は、全く満足できなかった。

その時であった。

ドガアアンという音が、彼女の耳に響いた。

「何!?!」

驚いた御坂は、ゲームセンターを後にし、爆発音のする方へ向かった。

「な!?!」

そこには、大量の警察官が炎のような怪人に襲われていた。

「アンタが……この人達をやったの?」

問われた怪人は静かにこう言った。

「だったら何?」

すると御坂は、電撃を放ちながら答えた。

「ぶっ倒すわよー!」

御坂は電撃を纏いながら怪人・ヒートドールパントにぶつかる。

「ハアアアアアア!」

御坂は雷撃の槍でヒートドールパントを攻撃する。

しかしヒートドールパントは、炎で相殺させる。

「な!?!」

その能力に驚きを隠せない御坂。

「ハア!」

今度はヒートドールパントが右手から炎を放った。

「キヤアアアア！」

御坂は炎を喰らい、吹き飛ばされてしまう。

「フフフフ…この程度？」

「クッ！」

すると御坂は、ポケットからコインを取り出し、それをヒートドローパントに向ける。

「一体…何が目的なの！？」

御坂の問いにヒートドローパントは答えたのである。

「ガイアメモリの力で、世界を我等『ダーク』のものにする」

「そんな……………理由で……………」

御坂は電撃を集中させ、

「そんな理由で……………人々を苦しめたのかアアアアアアアア！」

十八番の必殺技・超電磁砲レールガンを放った。

ドガアアアンという音と共に、超電磁砲レールガンが命中する。

「ハア…………ハア…………ハア……………」

煙が晴れると同時に、御坂はあるモノを見た。

「そ…そんな……………」

それは全く無傷のヒートドープアントであった。

「終わりよ…………ハア！」

「キヤアアアアアアア！」

ヒートドープアントの火炎弾が命中し、御坂は倒れてしまった。

「さよなら、常盤台の超電磁砲レールガン」

そう言ってヒートドープアントはその場を去った。

目が覚めると御坂は、病院のベッドにいた。

「……は？」

「目が覚めたかい？」

そうやって御坂の元に現れたのは、カエル顔の医者。

またの名を冥途返し【ヘブンキャンセラー】と呼ばれる医者である。

「随分と派手にやったね。彼ほどじゃないけど、重傷だよ？」

「……………」

黙っている御坂に冥途返しは、

「そうそう、キミにお客さんが来てるから」

そう言って病室を後にした。

それと同時に一人の男性が現れた。

外見は緑と白の縦縞の帽子を被り、杖を持った甚平姿の男である。

「どうも。 あたし、浦原喜助と申します」

浦原はそう言って、小さなケースを御坂に見せる。

「何、そのケース？」

「ソフフフ……アナタの力になるモノですよ」

ケースを渡された御坂は、その中を開けた。

その中には、赤を基調とした右側にスロットが着いたベルトと紫で特殊な形の「J」が描かれた黒いUSBメモリが入っていた。

「コレは？」

「言ったでしょ？ アナタの力になるモノです」

果たして、その意味とは？

第23話：Jの誕生／常盤台の超電磁砲（後書き）

次回、Jの誕生／漆黒の切り札

第24話：Jの誕生／漆黒の切り札（前書き）

遂に御坂が変身！

第24話：Jの誕生／漆黒の切り札

数日後、御坂は退院した。

浦原から貰ったケースを持って。

「コレを……私が……」

果たして、彼女の決断は！？

Jの誕生／漆黒の切り札

ヒートドーパントは、金属の怪人・メタルドーパントと共に街で暴れだしていた。

「良いぜ、最高だぜ」

そう言ってメタルドーパントはパトカーを投げ飛ばす。

「全く、あまり暴れないでよ。任務のためなんだから」

「ああ、分かってるよ」

しかしその時であった。

「シヤウジツメン風紀委員ですの！」

白井黒子が腕章を見せながら二人の前に現れる。

「おいおい、ガキがいきがるんじゃないぞ」

そう言ってメタルドーパントは金属で作り上げた鎚で攻撃してきた。

「此方ですの」

そう言って白井は瞬間移動テレポートで後ろに回った。

「クソッ！」

再び攻撃するメタルドーパントであったが、白井は瞬間移動テレポートで翻弄させる。

「そこですよー！」

そう言っつて後ろからドロップキックを叩き込もうとした次の瞬間であつた。

「ハッ！」

ドガアアンという音と共に、ヒートドーパントの火炎弾が、白井に命中した。

「がっ……………」

攻撃を受けた白井は、そのままメタルドーパントに引き飛ばされてしまう。

「あの爆発……………まさか!？」

御坂はそう言って走り出す。

すると、浦原が現れる。

「浦原さん!？」

「乗ってください。　と言うより、これはアナタのモノですけどね」

そう言って黒いボディのバイクを御坂に渡した。

「……有難う!」

そう言って御坂はバイク・ハードボイルダー」に跨り、走り出した。

「か……は……」

白井はメタルドーパントに飛ばされ、立つ事ができない状態であった。

「そんじゃ、死ねよ」

止めを刺そうとしたその時であった。

「待ちなさい！」

そうやって一台のバイクが走り出した。

バイクから降りたその人物は、白井の知っている人物であった。

「お姉様！」

「ゴメン、遅くなった」

そうやって御坂はベルト・ロストドライバーを装着した。

「ナニモンだ貴様？」

メタルドーパントの問いに、御坂はこう言った。

「御坂美琴。常盤台の超電磁砲にして……仮面ライダー^{レールガン}」

【JOKER】

黒いメモリ・ジョーカーメモリをスロットに装着し、横に倒した。

「変身！」

【JOKER】

その瞬間御坂は、黒いボディにWを模した銀色の触覚、そして赤い複眼の戦士に変身した。

「な!？」

驚くメタルドーパントに、彼女はこう名乗った。

「改めて……御坂美琴。 またの名を、仮面ライダージョーカー」

こうして、漆黒の切り札・仮面ライダージョーカーが誕生した。

仮面ライダージョーカーは、メタルドーパントに攻撃を放った。

「ハア！」

飛び蹴りが見事に決まり、メタルドーパントは吹き飛んで行く。

「お姉様？」

御坂の姿に驚く白井。

「黒子、此処は私に任せて」

そう言つてジョーカーは、拳を握りながらメタルドーパントへ走り出した。

「ハアアアアアア！」

「クソガキがアアアアアアアア！」

攻撃を受けたメタルドーパントは、逆上しながら拳を握り締める。

ジョーカーはメモリをマキシマムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

「ライダーパンチ！」

走りながら紫色のエネルギーを纏った右手の拳を握り、メタルドーパントに叩き込んだ。

「ちえいさー！」

「オラアアアア！」

メタルドーパントのパンチはジョーカーの顔を掠っているが、ジョーカーのパンチはメタルドーパントの顔を見事にヒットしていた。

「あ……ガアアアアア！」

攻撃を喰らったメタルドーパントはその場で爆発し、元の男性の体から排出されたメモリも砕かれた。

「驚いたわ……まさかアナタが此処まで強くなるなんて」

ヒートドーパントはそう言って歩き出す。

「でも、すぐに終わりにしてあげるわ。ハッ！」

火炎弾を放つヒートドーパントであったが、

【JOKER MAXIMUM DRIVE】

「ライダーキック！」

そう言ってジョーカーは跳び上がり紫色のエネルギーを纏った右足からのキックを叩き込んだ。

「クソッ！」

すぐさまそれをかわしたヒートドープアント。

「良いわ。アナタに免じて、ここは引いてあげるわ」

そう言ってヒートドープアントは姿を消したのであった。

それから二年後。

高校1年生になった御坂は、一人で歩いていた。

「ジュースでも飲もうかな」

そう言って公園に向かうと、一人の青年が、自販機の下で顔を向け

ていた。

どうやらその青年は、財布を落としてしまったようであった。

「クソッ、全然手が届かねえ！」

「（あれ？ この声……）」

聞き覚えのある声に思わず違和感を感じる。

「ああああ……不幸だアアアアアアアア！」

そう言つて頭を抱えながら絶叫する青年に驚きを隠せなかった。

オレンジ色のシャツの上に着た黒いジャケットとズボンと普通の一般人でも良く着ている服装であるが、黒髪のツンツン頭が印象に残る人物は、彼女がよく知っている相手であった。

「ウン……コレって、夢じゃないわよね」

「え？」

御坂の声に気付いた青年は、彼女の方に顔を向けてこう言った。

「もしかして……御坂？」

あらゆる幻想を殺してきたEランクの能力者・上条当麻その人であった。

「い………」

彼が生きていると分かった御坂は、

「生きていたんなら、連絡ぐらい寄越せエエエエエエエエ！」

そう言ってポケットからコインを取り出し、超電磁砲レールガンを放った。

「うおおおおお!?!」

すぐさま上条は幻想殺し（イメージブレイカー）で打ち消した。

「危ねえ……………」

本気でビククリしていた上条に、御坂は思いっきり抱きつき、涙を流した。

「良かった……………生きてて……………」

「え〜と……………ただいま……………かな?」

何を言えば良いのか分からない上条の一言に御坂は笑顔でこう言った。

「おかえり」

ビギンズナイト・ジョーカー篇：完

第24話：Jの誕生／漆黒の切り札（後書き）

次回、Eの序章／最強の能力者

次は一方通行の物語です。
アクセアラータ

第25話・Eの序章／最強の能力者（前書き）

エターナルのビギンズナイトです。

第25話：Eの序章／最強の能力者

アクセラレータ
一方通行。

サイエンスアビリティ
化学系特殊者の中でも『最強』の座に着くSランクの能力者。

これは『第三次世界大戦』から数日後、元の生活へ戻った彼が初め
仮面ライダーになった話である。

Eの序章／最強の能力者

嘗て、政府公認の暗殺組織が存在していた。

その名は『グループ』。

メンバーは土御門元春、結標淡希、海原光貴、そして一方通行アクセラレータの四人。

『第三次世界大戦』が終わった後は、部隊そのものは解散したが、掃除人チームという形で土御門がリーダーとして復活した。

そんな彼等は、ファーストフード店で食事を摂っていた。

「で、標的はどんな奴？」

結標がサラダを食べながら質問する。

「コイツだぜい」

土御門はそう言って、一枚の手配書を見せる。

「その女性は？」

海原はそう言ってフライドポテトを口に運ぶ。

実は彼の本名はエツァリで、海原光貴と言う名と姿は常盤台中学の

理事長の孫から拝借したものである。

海原の問いに、土御門は写真の女性の名を答えた。

「テレスティーナ・木原・ライフライン。ある事件で留置されていたが、突如脱獄して現在は指名手配中だぜよ」

「木原？」

一方通行はフライドチキンを食べようと口に運ぶが、彼女の名前に反応してしまう。

「土御門、まさかその女ア……………」

「ああ、お前にとつちや因縁のある名前だ。木原数多……………奴の血縁の一人だ」

木原数多…神都の暗殺部隊『ハウントドック 獵犬部隊』のリーダーで、一方通行能アクセアラータ力開発に携わった人物である。

彼は嘗て、ある人物の命令で打ち止め（ラストオーダー）の脳にウシスターズイルスを打ち込み、『妹達』を暴走させようとしたが、一方通行にアクセアラータよってそれを阻止され、彼に抹殺された。

「それで？ このババアを捕まえりや良いんだな？」

「そう言うこと。それじゃ、まずは聞き込み調査だにゃー」

聞き込みを行ってから四時間が経つ。

四人は公園のベンチで休む事にした。

「結局、何も情報もありませんでしたね」

そう言つて海原は笑顔を絶やさなかった。

「で、どオスンだ？」

一方通行アクセアラレータがそう言つと、一人の女性が四人の前に現れる。

「あら、誰を捜してるのですか？」

その女性は二十代後半くらいの妙齡の女性で、美人と言つて良い程の顔立ちであった。

しかし、土御門は警戒する。

「……………こりゃ驚いたな。自分から来てくれるとはな、テレステイーナ」

ピクリとその言葉に反応する女性。

「ハア……………折角整形で顔を変えたつてのに、バレバレなんてねえ……………ぶっ殺してやるよガキ共！」

遂にその本性を表したのである。

「ハッ！ 自分から出てくるたア、随分と余裕じゃねエか木原くん？」

一方通行はそう言って電極のスイッチを入れた。

アクセアレータ

「ガア！」

アクセアレータ
「一方通行！」

アクセアレータ
土御門の叫びも虚しく、一方通行は倒れてしまう。

アクセアレータ
「忘れたのか一方通行あ？ 数多がこの戦法でアンタを苦しめていた事を？」

「テメエ……………あのクソ野郎と同じ手口で！？」

アクセアレータ
一方通行の能力に深く関わっていた木原数多は、嘗て彼の能力を封じる策を作り上げ、彼を苦しめた事がある。

それが、拳を手前に引いて『反射』を無効化させるといふ木原特性の体術である。

「まあ、アンタに殺された数多なんかは何も情を感じないけどさ、
テメエら此処で死ぬ」

そう言つてユートピアドーパントは杖を手に持って雷撃を放つたのであった。

「あ……………此処は？」

アクセアラレータ
一方通行が起きると、全く知らない部屋にいた。

「お目覚めですか？」

そう言っつて一人の男性が現れた。

「何だ、テメエは？」

「浦原喜助と言います」

男性・浦原喜助はそう言っつて扇子を広げる。

「ところでアクセアラレータ一方通行さん？ アナタにお渡ししたいものがあるんすよ」

「ああ？」

「鉄裁、アレを」

「はい、只今」

そうやって鉄裁と呼ばれた大柄の男は、手に持っていたケースを開いた。

そこには、ロストドライバーと光をイメージしたEの字の描かれた白いメモリであった。

「こいつア……………一体……………」

その問いに、浦原はこう答えた。

「『^{エターナル}永遠』……………アナタの新しい^{チカラ}カッスよ」

第25話：Eの序章／最強の能力者（後書き）

次回、Eの序章／純白の永遠

第26話：Eの序章／純白の永遠（前書き）

遂に、変身の時が！

第26話：Eの序章／純白の永遠

とある大きな洋風の屋敷。

「ミス・テレスティーナ。脱獄で上機嫌なのは良いが、誤って足を掬われないようにしたほうが良い」

茶髪で眼鏡を掛けた、黒いスーツ姿の男がそう言ってテレスティーナに忠告をしていた。

「あん？ 助けてくれた恩はあるけど、そこまで偉そうに言われるつもりはないね」

テレスティーナは、ユートピアメモリを握りながらそう言った。

「そうか……なら………気を付けると良い」

次の瞬間、パライーンとガラスが割れる音と共に、アクセアラレータ一方通行が窓を破って現れた。

Eの序章／純白の永遠

「驚いたよ、良く此処が分かったね」

男は動じる事も無く、丁寧な言葉で話し出す。

「まあな。それより悪いな、窓割っちまってよ。玄関の警備が薄手だったもんだから、何かの罠だと思ったんでね」

「構わないよ。まず、そう考えるのが賢明な判断だ」

すると男は、階段へと昇りだした。

「ミス・テレスティーナ。彼はキミが殺せ」

「あん？ テメエ、命令する気か？」

「そう意味ではない。只単に、彼を甘く見ないほうが良いと言っただ」

そう言っって男は、二回へと向かった。

「ハッ！ あの男が何考えてるかは知らないけど、もっかいアンタを殺さなきゃいけないようだね？」

【ユートピア】

テレスティーナは、ユートピアドーパントに変身するが、一方通行アクセアラレータは余裕の表情を見せる。

「さア、スクラップの時間だア！」

その瞬間、彼はメモリを構えた。

【ETERNAL】

それをロストドライバーに差し込み、横に倒した。

「変身！」

【ETERNAL】

その瞬間、アクセアレータ一方通行は白い装甲に横向きにしたE字型の触覚、そして黄色い複眼と手足に炎を思わせる青い装甲が纏った戦士に変わった。

純白の永遠・仮面ライダーエターナルが、此処に光臨した。

「さア、地獄を楽しみなア！」

エターナルは、そう言って親指を下に向けた。

男は、その様子を屋敷の監視カメラで観ていた。

「成る程、あらゆるガイアメモリの支配下における戦士・エターナルとは……………最強の特殊者アシテイに相応しい姿だ」

エターナルの姿を観て、動じないどころか、何かを期待していた。

「見せても貰おうか、君の力を」

そう言いながら彼はワインを飲みだす。

「ミス・テレスティーナ……………力に溺れて、破れねければいいが。まあ、それもまた面白いが」

屋敷内から外に出た仮面ライダーエターナルとユートピアドーパントは、激突を繰り返していた。

「喰らいな！」

ユートピアドーパントは、ステッキから雷撃を放つが、

【WEATHER】

エターナルは、『天候の記憶』を宿す銀色のメモリ・ウエザーメモリを取り出すと、それをマキシマムスロットに差し込んだ。

【WEATHER MAXIMUMDRIVE】

「オラア！」

その瞬間、手から雷撃が放たれ、ユートピアドーパントの雷撃を相殺させる。

「何!?!」

驚くユートピアドーパントに、エターナルはこう言った。

「悪いな。エターナルの所有メモリは、一本だけじゃねえんだよ！」

そう言ってエターナルは、二本の赤いメモリを手に持ち、一本をナイフ型武器・エターナルエッジにもう一本をマキシマムスロットに差し込んだ。

【HEAT・ACCEL MAXIMUMDRIVE】

全身が真っ赤に燃え上がり、ヒートメモリの熱量で強化されたアクセルメモリの加速力を上昇させたエターナルは、そのまま突進してユートピアドーパントを切り裂いた。

「ウラァ！」

「グアアアアア！」

攻撃を受けたユートピアドーパントは、立ち上がるのが精一杯であった。

「ハア……ハア……ハア……ハア……」

「さアて、仕上げだ」

そう言ってエターナルは、自身のメモリをエターナルエッジのマキシマムスロットに差し込んだ。

【ETERNAL MAXIMUMDRIVE】

エターナルがメモリを差し込んだ瞬間であった。

「ガアアアアアアアア！」

ユートピアドーパントの身体が痺れ出したのである。

「何だコレは!?!」

驚きを隠せないユートピアドーパントにエターナルは静かに答える。

「教えてやるぜ。このエターナルメモリは、自分以外のガイアメモリを無効化にする能力を持つんだ。つまり、テメエは袋の鼠なんだよ、木原くウーッ」

するとエターナルは、そのまま走り出してユートピアドーパントに飛び蹴りを叩き込んだ。

「うじアああああああ！」

「ガア！」

ドガッという音と共に吹き飛ばされるユートピアドーパント。

「もオ一度言うぜ、木原。地獄を楽しんでいきな！」

「クソツタレがアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ユートピアドーパントはその場で爆発し、元のテレステイナーの姿に戻った。

しかし、彼女の身体から排出されたユートピアメモリは、何故か砕かれずにその場に落ちたのであった。

「どオいう事だ!?!」

エターナル自身も疑問に感じてしまいが、

「なかなか良いものを見せてくれたね」

そうやって先ほどの男がユートピアメモリを回収した。

「成る程、メモリの無効化か。とても興味深い物を見せて貰ったよ」

「テメエ……………まさか!?!」

テレステイナーの言葉に男は笑顔を崩さずにこう言った。

「ああ、そうだ。キミには実験台になって貰ったんだ」

すると男は銃を手に持ち、銃口をテレステイナーに向ける。

「安心したまえ、痛みは一瞬で終わる」

ドンツという音と共に弾丸がテレスティーナの頭部に命中し、彼女はその場で息を絶った。

「テメエ…………… ナニモンだ？」

エターナルの問いに、男はこう名乗った。

「ガイアメモリ開発組織『ダーク』の頂点・トップ藍染惣右介あいぜんそうすけ。いずれ、この世界の天に立つ者だ」

そう言っつて藍染は、後に迎えのヘリコプターに乗り込み、姿を消した。

「……………野郎オ」

エターナルは、それを見届けるしかなかったのだった。

ビギンズナイト・エターナル篇……完

第26話：Eの序章／純白の永遠（後書き）

次回、Aの始まり／脇役を名乗る男

『ビギンズナイト』シリーズの最後はアクセルです。

第27話：Aの始まり／脇役を名乗る男（前書き）

アクセル篇開始！

二回連続投稿です。

第27話：Aの始まり／脇役を名乗る男

浜面仕上：神都の不良集団『スキルアウト』の元リーダーであったが、後に特殊チーム『アイテム』の構成員となる。

『第三次世界大戦』から数日後、彼が新たな戦いに足を踏み入れる事になる。

Aの始まり／脇役を名乗る男

とあるファミレス。

「浜面アアアアアアアア！ テメエ、ドリンクバー往復すんのに
どんだけ時間かかってんだ！」

怒号の叫びを浜面に放つふわっとした長髪が特徴の茶髪の女性・麦
野沈利。

サイエンスアビリティ
科学系特殊者のランクSで、能力名は『原子崩し（メトロダウナー）
』。

「まあまあ良いじゃないですか。 どうせ浜面は超浜面なんですか
」ら

ポブカットの茶髪が特徴の少女・絹旗最愛がそう言って麦野を宥め
る。

因みに彼女もサイエンスアビリティ科学系特殊者で、能力は『オフイェンスアーマー水素装甲』のランクAであ
る。

「ヒデエ言われよう」

そう言いながらも浜面はドリンクを運ぶ。

「ZZZZZZZZ………」

そんな三人とは対照的に、目を開けながら寝ていたピンクのジャー
ジの黒髪の少女・滝壺理后。

浜面の恋人で、サイエンスアビリティ科学系特殊者であり、能力は『アビリティストーリーカード特殊追跡』のランクAである。

「で、仕事って何だ？」

浜面が問い、麦野が答えた。

「最近、巷で流行ってる奴を知ってるか？」

「え〜とガイアメモリって奴か？」

「そう。USBメモリを模した謎の物質で、使った奴を怪物にするって噂らしい」

「あくまでも噂だろ？」

「ああ……でも早めに手を打っておかないと大変なことになるってことだ」

そう言って四人は、ファミレスを後にした。

「でもよ、今回の仕事とどう関係してんだ？」

暫らく歩いて数分後、浜面がそう言ったら、麦野がこう答えた。

「何でも、無差別に人が凍り漬けにされるって言う事件があるらしい」

「凍り漬け！？」

「そう、その犯人を見つけて捕まえろって依頼らしい」

「物騒だな、凍り漬けて部分が」

「さて、まずは聞き込みと超行きますか！」

こうして四人は聞き込みに向かったのであった。

聞き込みを行って数分後。

「結局、いなかったって事か……」

「まあ、簡単に見つかるとは思わなかったけどな」

すると、滝壺が声を上げた。

「あ！」

「どうした、滝壺!？」

三人が顔を滝壺に向けるが、

「あの店、私の行きつけの駄菓子屋さん」

「え？」

看板に書かれた『浦原商店』という看板に、三人は啞然とする。

「つたく、駄菓子屋かよ」

「まあ、滝壺さんらしいといえば、超らしいですが……」

「でもよ、あの菓子屋がどうかしたのか？」

「ううん。ただ、そこのお菓子が結構安いから」

すると、一人の男性が現れた。

「おや、滝壺さんじゃないっすか」

「あ、店長さん」

店長と呼ばれた男は扇子を広げながらニヤツと笑いながらこう言った。

「浦原で良いっすよ。それと、何かお買い物ですか？」

「いや、今日は偶然」

「そうすか。んじゃ、気が向いたら来て下さいね」

「あ、ついでに塩飴一袋」

「まいどあり」

すると、浦原は浜面に目を向ける。

「そこのお兄さん、アナタに良いものがありますよ」

「へ、俺に？」

「そうッス」

すると浦原は、浜面にケースを渡す。

開けるとその中には、赤いメモリとバイクのスロット部分に良く似

たベルトが入っていた。

「何だ、コリヤ？」

「それは、ガイアメモリ事件に必要なアナタの力になる物です」

そう言って浦原は、不適に笑ったのである。

第27話：Aの始まり／脇役を名乗る男（後書き）

次回、Aの始まり／真紅の加速

第28話：Aの始まり／真紅の加速（前書き）

振り切れ、アクセル！

第28話：Aの始まり／真紅の加速

浦原商店を後にした『アイテム』のメンバーは、滝壺から貰った塩飴を舐めながら歩いていた。

その後ろに、魔の手が近づいていることに気付かずに……

Aの始まり／真紅の加速

とある遊園地に着いた四人。

「てか、何で遊園地？」

浜面がそう言うと、麦野が答えた。

「何でも、犯人は遊園地を習っているらしい」

「確かに、遊園地は大人も楽しめる場所ですからね。超殺しが出来ませんからね」

「物騒な発想だな」

しかし、その時であった。

「キヤアアアアアア！」

「うわあああああああ！！」

「悲鳴！」

「行くわよ！！」

叫び声がする方へ向かうと、

「な……………何だこりゃ!？」

それは、多くの人々が凍り漬けにされている光景であった。

その中心に、白いスーツ姿の男がいた。

「アンタ、何者？」

麦野の問いに、男は答えた。

「そうですね……………『アイスエイジ』と呼んでください」

【アイスエイジ】

男がそう言って白いメモリを首筋に差し込んだ。

その瞬間、男の姿が鳥のような頭部の白い怪人に変身した。

「超何ですか、あの化物は!？」

「まさか、噂になってる“ガイアメモリ”の化物!？」

「フフフ……………正解。ですが、この姿の呼び名はドーパントですよ……………ハッ!」

アイスエイジドーパントは、手から冷気を放ち、四人を凍らせようとする。

「オワッ！」

「クッ！」

「ウワッ！」

「な、何ですか超アレは！？」

「クソツタレが！」

そう言つて麦野は、『原子崩し（メトロダウナー）』による粒機波形高速砲を放つが、アイスエイジドーパントは氷の壁を作つて防御する。

「な！？」

「ハハハハハ……無駄な事を！」

するとアイスエイジドーパントは、麦野の足を冷気で凍らせる。

「しまった！」

「コレで動けまい」

麦野が動きを封じられてしまう『アイテム』メンバー。

「お前等、逃げろ！ コイツは不味すぎる!!！」

麦野の言葉に、三人は逃げようとするが、

「逃がすか！」

そう言ってアイスエイジドーパントは、絹旗と滝壺の体を凍らせる。

「滝壺、絹旗！」

「後は、一人ですね」

そう言ってアイスエイジドーパントは、浜面に標的を変える。

「クソツ！ どうすりゃ良いんだよ!!！」

仲間の危機に、自分の無力さを嘆く浜面。

しかし、浦原貰ったケースを思い出す。

「（まさか……でも、コレしかねえ！）」

すぐさま浜面はケースの中身を取り出す。

「何のつもりかな？」

余裕を見せるアイスエイジドーパントの前に立つ浜面。

「行くぜ………変身！」

【ACCEL】

メモリをスロットに差し込み、右のグリップを捻った。

【ACCEL】

するとその瞬間、浜面はフルフェイスヘルメットを模した青い複眼とA字型の触覚の付いたオートバイクを模した赤いボディの戦士に変身した。

「何!？」

その姿にアイスエイジドーパントは驚きを隠せなかった。

「さてと………振り切るぜ！」

真紅の加速・仮面ライダーアクセルが、此処に光臨した。

「ウオオオオオオオオ！」

仮面ライダーアクセルは、突進しながらアイスエイジドーパントに立ち向かう。

「ウラァ！」

パンチを叩き込むが、

「無駄だ！」

アイスエイジドーパントは簡単にあしらう。

「ガァ！」

「無駄な事を」

「クソッ……どうすりゃ良いんだ」

その時、突如として浦原が現れる。

「アンタは!？」

「浜面さん、コレを使ってください!」

そう言つて浦原は、店のエプロンを着用した大柄の男が持っていた大剣を渡す。

「コレを……」

すぐに大剣・エンジンブレードを手にするアクセル。

「無駄だと、まだ分からんか!」

再びアイスエイジドーパントが冷気を放つが、

【ENGINE STEAM】

メモリを差し込んだアクセルは、高熱の蒸気を刀身から放った。

「何!？」

驚くアイスエイジドーパントに、アクセルは猛攻の反撃を放つ。

「ウオオオオオオオオオ!」

エンジンブレードから繰り出す斬撃に、手も足も出ないアイスエイジドーパント。

「クッ、こうなったら!」

足場を凍らせ、スケートの要領で逃げようとするが、

「逃がすかよ！」

ベルト、アクセルドライバーのバックルを取り外し、アクセルはバイクに変形する。

バイクフォームに変形したアクセルは、そのまま走り出し、アイスエイジドーパントを追い越した。

「何!？」

「そんじゃ、一気に決めるぜ！」

そう言ってアクセルは、左グリップのレバーを押し、

【ACCEL MAXIMUMDRIVE】

グリップを捻ると同時に全身が真っ赤に燃え上がった。

「クソッ！」

アイスエイジドーパントは、冷気を放つが、アクセルには全く通用しなかった。

「ウラアアアアアアアアア！」

そして、そのまま懐に飛び込んだアクセルは、回し蹴りを叩き込んだ。

「ガ……………！」

必殺技・アクセルグランツァーが決まり、

「絶望が、アンタのゴールだ！」

「グアアアアアアア！」

アイスエイジドーパントを粉碎した。

しかし、そこにあつたのは氷の塊であった。

「……………逃げたか」

そう言ってアクセルは、変身を解いた。

変身を解いたアイスエイジドーパントは、元の白いスーツの男に戻った。

「クソツ……………あの男！」

白いスーツの男は、フラフラに鳴りながらも何とか逃げていた。

「冗談じゃない。あんな奴に勝てるか」

そう言ってアイスエイジメモリを握りながら走り去っていた。

それから一年後……公園の前で滝壺と待ち合わせをしていた浜面であつたが、

「生きていたんなら、連絡ぐらい寄越せエエエエエエエ！」

「うおおおおお！？」

「な、何だ！？」

突然の声に驚き、声のする方へ顔を向ける。

そこには、『第三次世界大戦』を阻止した自分とは全く違うEランク能力者・上条当麻と『超電磁砲^{レールガン}』の異名を持つ少女・御坂美琴が居た。

「アイツ……………」

世界の英雄が生きていた……ただそれだけで驚きと喜びを隠せなかつた浜面は、

「はまづら、待った？」

「ん？ あ、ああ。大丈夫だぜ」

そう言って自分の元に来た滝壺に、笑顔で答えたであつた。

ビギンズナイト・アクセル篇…完

第28話：Aの始まり／真紅の加速（後書き）

滝壺の能力名は『特殊追跡』^{アビリティストーリーカー}に変わっています。

緊急報告？（前書き）

大事な話しです。

緊急報告？

皆様のお陰で『仮面ライダーW Another world story』も、20話を達成しました。

そこでこの小説を読んでいる皆様に、好きなキャラクターを一人だけ投票してください。

また、そのキャラにした理由も書いてくれると嬉しいです。

上条

「もう20話も経ったのか……」

ユイノ

「以外に早いもんだね」

インデックス

「誰が一位なのか知りたいんだよ」

アトリ

「因みにこの報告は、早めに消去するから、『感想を書く』に好きなキャラクターとその理由を書いてね」

上条

「あと、『活動報告』にもこの事は書くから、そこにも投票を頼む」

ユイノ

「それじゃ、待ってまあ〜す」

緊急報告？（後書き）

皆様の投票、待っています。

第29話：バーテンダーH／個性的な客が多い（前書き）

特別篇です。

因みにナレーションはあの人です。

第29話：バーテンダーH／個性的な客が多い

私の名はティア・ハリベル。

神都にある酒場『シャーク』のバーテンダーである。

この店に来るお客の愚痴を聞いたり、悩みを聞くなど、彼等との会話を楽しみにしている。

そんな私が出会った客について話しておこう。

バーテンダーH／個性的な客が多い

冷やしますんで」

「いや、お湯で冷やすってオカシイでしょ!？ かけたら冷えるどころか大火傷でしょ!？」

沖田が私にお湯を要求するが、彼の発言を聞いた山崎がすぐさまツッコミを放った。

まあ、私も彼に同意であるが……

「つまみ手度なら何か出すが？」

「悪いな」

そう言っただけで私は、土方にピーナッツを渡した。

数分後：さっきまで大泣きしていた近藤は、ぐっすりと眠っていた。

「幾らだ？」

「余り誰も来てないから、特別にサービスしておく」

「悪いな」

土方はそう言っただけで、眠っている近藤を抱えながら、沖田と山崎と共に店を出たのだった。

真選組が去ってから数分後、

「ハア……………」

「此処、良いですか？」

二人の男が店に入ってきた。

「いらっしやい。ご注文は？」

「ウイスキー」

「俺も同じのを」

そう言って彼等はウイスキーを注文した

中年の男性は高町士郎。

自宅が喫茶店『翠屋』の店主である。

もう一人の高町恭也とは実の親子で、家族で店を経営している。

高町親子が去った数分後。

「開いてますか？」

「いらつしゃい」

今度は裾を結んだ白地のＴシャツに片方が切り取られたＧパン姿の黒髪のポニーテールの女性が現れた。

彼女の名は神裂火織。

特殊部隊『天蘭組』の二番隊隊長で、彼女はある悩みを私に打ち明けた。

「何かあったのか？」

「実は真選組の局長が、私に一目惚れしたらしいんです。お断りをしたんですが、本人はかなりしぶとくて………」

どう見てもストーカーだな……

「嫌な事は、酒と共に忘れるのが一番だ。今夜は奢るよ」

「すみません」

そう言って、私の差し出したカクテルを口にした神裂であった。

その際、彼女が一瞬の笑顔を見せたのは、言うまでも無い。

神裂が店を出た数分後に、再び客がやって来た。

「すみません、開いてますか？」

「いらっしやい」

現れたのは赤銅色の髪的青年と金髪の少女、そして金髪の青年であった。

赤銅色の髪的青年・衛宮士郎は、これまで自分が災害ボランティアで世界中を渡っていたことを話してくれた。

「その中にも、まだ生活に苦しむ人々がいたんだ。今の俺には、彼等に何が出来ることが分からなくて、たまに悩む事があったんだ」
少し暗い顔になる衛宮に、私はそれ以上の詮索をしなかった。

世界には、多くの犠牲者が出ている……その話だけでも、十分彼がどんな苦労をしてきたかが想像がついた。

「シロウ、あまり思い悩まないで下さい」

金髪の少女・セイバーがそう言って彼の肩に触れる。

「まずお前は、この先の自分の心配をしろってんだ」

金髪の青年・アングがそう言って呆れていた。

自己犠牲をする彼に呆れているのだろうか？

それとも、自分の命ですら平気で捨てる彼の行動に呆れているのか

……

余談であるが、この店は未成年のお客にはウーロン茶やジュースを飲ませている。

衛宮達二人が店を出てから数分後に、再び店に客がやって来た。

「うす」

黒髪のツンツン頭の青年に長い金髪の青年、そして栗色のサイドポニーが特徴の女性が席に座った。

「オレンジジュースで」

「僕も同じので」

「私も」

そう言つて三人は、オレンジジュースを注文する。

黒髪のツンツン頭の青年こと上条当麻と長い金髪の青年ことユーノ・スクライアは、『万時屋』という事務所を営んでいて、様々な依頼を引き受けるのである。

栗色のサイドポニーの女性ことなのは・スクライアは名前の通り、ユーノ・スクライアの妻である。

昨日で結婚を果たしたばかりで、旧姓は高町である。

一瞬、彼女の旧姓を聞いて違和感を感じた私であったが、そこは気に留めないでおこうと考えた。

「とりあえず、その二人の結婚祝いだ。 私が奢るよ」

「え、マジで!？」

「良いんですか!？」

「有難う御座います」

そう言って三人は乾杯をしてオレンジジュースを飲んだのだった。

「サンキューな」

上条当麻がそう言って、三人はそのまま店を後にした。

「フウ……………今日も面白い話しが聞けたな」

そう言って私は、グラスを拭きながら次の客を待ったのであった。

私はティア・ハリベル。

酒場『シャーク』のバーテンダーを務めている。

これは、私が出会った客の話である。

第29話：バーテンダーH／個性的な客が多い（後書き）

次回、暗殺するA／始末屋さっちゃん登場！

この作品での破面は、アラシカル虚の孔も無く、ホロウ藍染側にいる者をいけば、普通の住民として暮らしている者も居ます。

ハリベルがバーテンダーという設定は、アニメ版BLEACHのエンディングで思いついたものです。

因みに彼女は普通の住民キャラです。

能力を持っているのを除けば。

第30話：暗殺するA / 始末屋さっちゃん登場！（前書き）

ルキア

「大変だぞ恋次！」

恋次

「んあ、どうした？」

ルキア

「神裂殿を付きまっていたあのストーカー、実は『真選組』という組織の局長だったそうだ！」

恋次

「ああ、知ってる」

ルキア

「え、知っておったのか？」

恋次

「大串君から聞いた」

ルキア

「……………おお……………ぐし……………くん？」

恋次

「そう、大串君」

第30話：暗殺するA / 始末屋さっちゃん登場！

朝……上条当麻は朝食の準備をしていた。

そんな彼の元に、ルキア、ティアナ、スバルの三人が来ていた。

「お早う、上条さん」

「お早う御座います」

「お早う、当麻」

「おう。悪いけどティアナはインデックス、スバルはアトリルキアはユーノとなのはを起こしてくれ」

「はい」

「分かりました」

「承知した」

賑やかな朝、そうなる筈であった。

後にこの朝が、トンでもない自体を生む。

暗殺するA / 始末屋さっちゃん登場！

「インデックス、起きて」

「うーん……………もう食べられないんだよ」

「……………」

インデックスを起こしに来たティアナであったが、彼女の寝言を聞いてベタだと思ったが、

「ほら、もうすぐご飯だよ」

「え、ご飯!？」

「食い付いた!？」

朝食の話を聞いたら、すぐに起きたインデックスに驚くティアナであった。

「あれ、アトリ。もう起きてたの？」

「うん、目覚まし用意してたから」

そう言ってパジャマから私服に着替えるアトリ。

「で、朝ご飯は？」

「用意できてるって」

「分かった」

そう言ってすぐに着替えるアトリであった。

「ユーノ殿、なのは殿。朝食の用意が」

ルキアはそう言って襖を開けるとそこには、

「な！？／＼／＼」

一糸纏わぬ姿のユーノとなのはがいた。

「ふあ？」

「あ、お早うルキアちゃん」

因みに何故なのはがいるかというと、結婚した二人は万時屋で住む事になったのであるが、

（同棲は許さんぞオオオオオオオオ！）

士郎と恭也が猛反対した。

「どうした当麻!？」

他のメンバーが上条の元へ集まる。

そこで彼等が見たものは、

「ふあゝ、ん……………何だお前等」

忍者服を着た薄紫色の長髪の女性が恋次の隣で寝ていたのであった。

「え?」

朝食の時間。

とりあえず謎のくのゝと一緒に食事を取る事にした。

女性の名は猿飛あやめ、どつ言つわけか恋次の部屋で寝ていた。

因みに女性陣は、恋次を軽蔑の目で見ていた。

「おい、何だよ？」

視線が痛くなつた恋次の問いに、

「恋次さんが女性を部屋に連れ込む人とは思いませんでした」

「最ッ低！」

「全くだ」

「れんじがフダラシな人とは思わなかつたんだよ」

上からスバル、ティアナ、ルキア、そしてインデックスの四人がそう言った。

「オiiiiiiiiiiii！ 何でそうなるんだアアアアアアアアアアアアアア！」

因みになのはとユーノはというと、

「ユーノ君、あ〜ん？」

「あ〜ん」

新婚ホヤホヤ気分を味わっており、

「アトリ、その醤油取って」

「はい」

そんな事も気にしない上条とアトリは食事を普通に摂っていた。

「んで、猿飛さんだっけ？ アンタ何で恋次の部屋で寝てたの？
というより、恋次とどう言う関係？」

「もしかして、夜の行為を行った仲？」

「待てエエツエエエエエエエエ！ 何でそう言うことになる
んだー！！」

上条とアトリの発言に、恋次は思わずツツコミを放った。

「だってさあ〜」

「うん、どう見てもそういう感じだし」

すると猿飛（以下さっちゃん）はこう言った。

「さっちゃんの良いわ。それと、私もその記憶がないの。ただ
実家に帰ろうとしたけど、道に迷ってしまって」

「そうか、そこに恋次が現れて夜の行為を」

「待てエエツエエエエエエエエ！！ だから何でそう言う事になる
んだー！！」

ルキアの勝手な捏造にツツコミを放つ恋次であるが、

「いい加減にしてください恋次さん！」

「男性なら、自分のやった事に責任を持ってください！」

「素直に“ごめんなさい”って言って、真選組のお世話になるんだよ！」

「ティアナ、だから俺は知らねえって言ってんだろぅが！ スバル、『やった』ってどう言う意味だ！ そしてインデックス、俺に自首しろって言いてえのか！？」

上からティアナ、スバル、インデックスの発言に連続でツッコミを放った。

「あ、電話だわ！」

そう言ってさっちゃんには携帯電話 ではなくスリッパを手に持つ。

「おい、眼鏡掛ける」

上条にツッコまれ、携帯電話を手に持つさっちゃん。

「……………」

電話をしまい、そのまま外へ出ようとする。

「なあ、何処行くんだ！？」

「実家に帰るの。父が心配してるから」

そう言ってさっちゃんはそう言ったが、

「待て！」

恋次が呼び止めた。

「記憶に無えとはいえ、俺も男だ！ 腹は括った」

そう言って式場に行く時に使う祝い用の和装姿になっていた。

「こんな俺で良かったら、貰ってくれ！」

するとさっちゃんは、恋次の手を掴んで外へ向かった。

「良いわ、来て」

「何処にだ？ もしかして式場か？ 俺そんな金無えぞ？」

「……………」

全員が沈黙する中、上条は恋次の部屋であるモノを見つける。

「あれ、こんな大穴あったか？」

それは、天井に人が一人入れるくらいの大きな穴が開いていた。

二人が気になった上条は、すぐさま二人を追った。

「で……何で塀に登るんだよ？」

そう言っつて手足に鉤爪を装着していた恋次とさっちゃんは、何故か塀に登っていた。

「実は私、箱入り娘なの。だから朝帰りは不味いの」

「ああ、そう言っつことか。でも、挨拶するんならもっとマトモな方法があつたんじゃねえか？」

「それが出来たら誰も塀に登ろうとは考えないわ」

そんな会話をしながら恋次とさっちゃんは塀に登る。

すると、塀の上で一人の男が槍を手に持って立っていた。

「おい、アリヤ誰だ？」

「使用人の中村さんよ。私の小さい時からこの家に仕えてる人で、

驚く恋次であったが、さっちゃんはすぐさまこう言った。

「行くわよ、これは父がアナタに与えた試練よ！」

「そうか、いわゆる花嫁修行ならぬ花婿修行だな！ 良いぜ、やっ
てやるよー!!」

そう言って二人は、中村さん軍団に立ち向かったのであった。

一方で二人を追い掛けて来た上条は、

「随分、デカイ屋敷だなあ」

屋敷の感想を吐きながら門の前まで歩くと、

「シヤアアアアアアア！」

「うおっ！」

突如、何者かの襲撃を受けるが、すぐに避けた。

「何だてめえ………」

「……………」

そこに居たのは、忍者服をイメージした黒い怪人であった。

「ドーパントか………ユーノ！」

そう言って上条はダブルドライバーを装着し、ジョーカーメモリを構える。

【JOKER】

事務所にいるユーノも、サイクロンメモリを構える。

「それじゃ、行ってくるよ」

「気を付けてね」

【CYCLONE】

「「変身！」」

【CYCLONE・JOKER】

二人は仮面ライダーWに変身し、謎のドーパントに立ち向かった。

第30話：暗殺するA / 始末屋さっちゃん登場！（後書き）

暗殺するA / 花婿修行？

第31話：暗殺するA／花婿修行？（前書き）

果たして、恋次の運命は？

第31話：暗殺するA／花婿修行？

『仮面ライダーW（another world story）』
、前回の三つの出来事。

一つ…謎のくのー・さっちゃんこと猿飛あやめが、恋次の部屋に現れる。

二つ…恋次と猿飛は、とある屋敷に侵入する。

三つ…Wが、謎のドーパントと対峙する。

暗殺するA／花婿修行？

謎の忍者ドーパントと激戦を繰り出す仮面ライダーW。

「クソッ！ 何つうーアクロバティックな動きしてんだコイツ!？」

上条はそう言いながら忍者ドーパントの攻撃をガードする。

「オラァ！」

回し蹴りで反撃しようとするが、忍者ドーパントは手から鉤爪を出
現させ、攻撃をガードする。

「ゲッ!？」

「それ、ありなの!？」

Wはそう言って忍者ドーパントの戦法に驚きを隠せなかった。

「だったら!？」

【LUNAR・TRIGGER】

ルナトリガーにチェンジしたWは、トリガーマグナムの引き金を引
く。

「ハッ！」

しかし忍者ドーパントも手裏剣を飛ばして相殺する。

「クソッ！」

「思ったより手強い相手だ」

すると忍者ドーパントは、ようやく喋りだした。

「成る程此処までとは、流石は仮面ライダー」

「テメエ……………ナニモンだ!!」

その問いに忍者ドーパントが答える。

「私は、アサシン。『暗殺者の記憶』を宿すメモリのドーパント」

「アサシン？」

「成る程、その暗殺に長けた武術と武器を活かした戦法なら得心が行く」

ドーパントの正体に驚く上条とは逆に、ユーノは彼のトリッキーな戦法に納得する。

「今のはほんの小手調べであつたからな。決着はいずれ着けさせて貰うぞ」

そう言つてアサシンドーパントは姿を消した。

一方、屋敷内に潜入したさっちゃんと恋次。

「ようやく、屋敷に入れたな」

「待って！」

「え？」

しかし今度は、

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

複数の男達が向かってきた。

「何だアレエエエエエ！？」

「婿候補よ。恐らく父が先に私を手にした方が勝ちというサバイ

バル方式にしたのよ」

「いや、だからってアリヤ多すぎだろ!？」

「私は右に行くわ。アナタは左をお願い」

「分かった!」

二人はすぐに二手に別れ、一端逃げたのである。

一方外では、二人の男が縄で縛られていた。

その二人の周りに四人の槍を持った男、そしてボスと思われる小柄な男の五人が居た。

「さあ、来るが良い始末屋。此処まで来たときが貴様の最後だ」

小柄な男がそう言うと、

そう言つて一人の男が屋根に現れた。

「アナタは!？」

それは、屋敷内でさつちやんと別れた阿散井恋次であつた。

「トオオオオオオオオ！」

恋次は屋根から飛び降りると、

「お父さああああああああん！ 娘さんをおおおおおお
おおおおお、俺にくださああああああああい!！」

小柄な男に頭突きを叩き込んだのだつた。

「あ……………が……………」

流石の小柄な男も、急降下からの頭突きを喰らつて気を失つてしま
う。

え、普通なら死んでるはずだつて？

ギャグ中心ですので、気にしないで下さい。

流石に急降下からの頭突きを受けた恋次は、額から血を流していたので、さっちゃんの手当を受けていた。

「ゴメンナサイ恋さん。騙すような真似をして、ホントは私達はそういう関係じゃなかったの」

謝罪するさっちゃんは、怪我していないはずの頬にも絆創膏を張る。

「いや、そこは怪我してねえから。あと、恋さんて誰だよ」

そう言って恋次はさっちゃんの手を払いのけた。

「アナタ、本当は知ってたんでしょ？」

「……………」

沈黙した恋次は、不適な笑みを見せながらこう言った。

「別に良いじゃねえか、細かい事は。まあ、こんな小細工じゃなくて普通の客として来いよ。茶菓子くらいは出してやるからよ」

そう言って恋次は彼女から姿を消したのであった。

それを見ていたさっちゃんの仕事仲間の勇吉と古介はこう言った。

「もしかしてさっちゃん、あの旦那に惚れたんじゃないかねえの？」

「まさかあゝ」

しかし、当の本人は恋次の後姿を見ながら顔を赤くしていた。

一方その頃、ガイアメモリ密売組織『ダーク』のアジトでは……

「やあ、お帰り」

藍染惣右介の前に、アサシンドーパントが現れる。

アサシンドーパントは変身を解くと、その姿は長い黒髪の忍者服姿の女性であった。

「かげくらあんな陰暗闇那、只今戻りました」

「ご苦労だったね。 どうだったかい、彼の实力は？」

「はい、貴方様の仰る通りでした。 仮面ライダーW……奴はいずれ我々の脅威になるでしょう」

闇那の言葉に藍染は不適な笑みを見せた。

「そうか、それは何よりだ」

そう言っただけでテーブルの上のカップを手に持ち、中の紅茶を飲む。

「キミはどう思っかな、カザリ君？」

その問いに銀髪の青年の姿をした猫系グリード・カザリがニヤツと笑い出す。

「それはキミの好きにすると良いよ。 僕等はそのための同盟だからね」

「そうだったね」

するとその時であった。

ドガアアアンという大きな音が響き渡った。

「藍染、大変です！ 奴が……！」

社員の言葉を聞いて、藍染はまるで待っていたような顔をする。

「すぐに連れてきてくれ」

「ハッ！」

「その必要はない」

すると、謎の影が三人の前に現れる。

藍染は彼に向かってこう言った。

「初めましてと言うべきかな？」

果たして、『彼』の正体とは？

第31話：暗殺するA / 花婿修行？ (後書き)

次回、紫の恐竜G / 復活の邪悪

第32話：紫の恐竜G / 復活の邪悪（前書き）

新たな敵が遂に登場！

第32話：紫の恐竜G / 復活の邪悪

藍染惣右介は、ある部屋に向かっていた。

「やあ、カザリ君。調子はどうだい」

ライオンをイメージした頭部を持つ怪人・グリードのカザリがこう答えた。

「上乘だね。キミの実力には想像を絶するよ」

「それは何よりだ」

「ところで、『彼』は何処に行ったんだい？」

カザリの問いに藍染は答えた。

「『彼』なら既に出掛けたよ」

そう言って、カザリの部屋を後にした。

紫の恐竜G / 復活の邪悪

上条は現在、警察からの依頼で『謎のプテラノドン事件』を追っていた。

そのプテラノドンは、体から黒い煙幕を放ち、人々を消滅させて殺害しているらしい。

「あくまでらしいけどよ……一体何処に居るんだ？」

『しかし、恐竜が甦ってくるということは無いと思っが……』

「しかし、恐竜が甦ったというのは何か……男の浪漫って感じだ

な
」

『アハハハハ……そうだね』

スタッグフォンでユーノと会話をしながら街を歩く上条であったが、

「ワアアアアアアアアアア!!」

「キヤアアアアアアアア!!」

突如悲鳴が聞こえたのである。

「ユーノ!!」

【JOKER】

『ああ!!』

【CYCLONE】

「「変身!!」」

【CYCLONE・JOKER】

すぐさま二人は仮面ライダーWに変身し、悲鳴が聞こえた方向へ向かった。

Wはハードボイルダーを走らせると、そこには思わぬ光景が目に見え、飛び込んだ。

「全てを滅する！」

「ワアアアアアアア！」

「キヤアアアアアア！」

それは、プテラノドンを模した怪人が人々を襲っている光景であった。

「まさか……アイツが」

「例のプテラノドンのようだね」

「兎に角、今は奴を倒すぞ！」

【LUNAR・SOUL】

そう言ってWはルナソウルにチェンジして、プテラノドンに飛び掛

った。

プテラノドンを攻撃すると、その傷口からはセルメダルが飛び散った。

「セルメダル!? ってことはこいつ等ヤミーか!?!」

「しかし、恐竜のヤミーは初めて見る」

「人間は、全て滅する!」

プテラノドンヤミーがそう言って襲い掛かるが、

「そんな事、させるかよ!」

そう言ってWはソウルブレードを構え、プテラノドンヤミーに立ち向かった。

「土郎、ヤミーだ！」

ヤミーの気配を察知したアंकとセイバーと共に、土郎は街中を走り出した。

「クソッ！ まさかこんなに早く……」

しかし、その時であった。

「待て！」

「え？」

「どうしましたが、アंक？」

「何か……来る」

その瞬間、上から謎のエネルギー弾が発射された。

「ウワッ！」

「クッ！」

「チッ！」

何とか回避した土郎は、すぐさまメダルをドライバーに挿入し、スキャンした。

「変身！」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

変身音と共に、仮面ライダーオーズは戦闘態勢に入った。

「ほう、久々のシャバの空気を吸いに来ていたら、面白いものに出会えたから挨拶代わりに放ってみたが……………」

そう言っつて紫の怪人がユツクリ宙から降りた。

その姿は、ティラノザウルスの頭部にトリケラトプスのような腕部そしてプテラノドンのような脚部を持つマントを付けた紫の怪人であった。

それを見たアंकは、彼の名前を呼んだ。

「お前は……………ギル!？」

自身の名前を呼んだアंकに、紫の恐竜グリード・ギルが振り返りこつと言った。

「久しぶりだな、アंक。そして……………」

今度はオーズに目を向ける。

「初めましてだな、この時代のオーズ」

その声を聞いた途端、オーズは背筋を凍らせた。

「（何だ……………この悪寒は……………ヤバ過ぎる）」

ギルの放たれる雰囲気、オーズはその危険さを感じ取り、トラクローを展開してギルに立ち向かった。

「ハアアアア……………タア！」

トラクローを振るいながら反撃をさせんとするオーズに、ギルは片手のみで戦闘を行う。

「何!？」

「片手のみで!?!」

オーズもセイバーも驚きを隠せなかった。

「ハア！」

「グアツ！」

そのままギルは掌底のみでオーズを吹き飛ばした。

「クソツ……………アंक、緑のメダルを！」

「バカ！ お前じゃギルには勝てない！！！」

いつもなら余裕を見せるアंकも、ギルの前では動揺を隠しきれなかった。

「やってみなきゃ、分かんないだろ！！！」

「チツ！ 無茶すんなよ！」

そう言っただアंकはクワガタのメダルとカマキリのメダルを投げ渡す。

受け取ったオーズは右にクワガタ、左にカマキリのメダルを差し込んでスキャンした。

【クワガタ・カマキリ・バッタ・ガクガタガタガタキリバ・ガタキリバ】

するとオーズは、緑を基調とした頭部がクワガタで腕部がカマキリ、そして脚部がバッタの形態・ガタキリバコンボにチェンジした。

緑の昆虫・ガタキリバコンボにチェンジしたオーズは、ギルに向かって走り出した。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

ソレと同時に50体の分身を作り出して攻撃を仕掛けた。

「ハア！」

「ヤア！」

「タア！」

50体のオーズが総攻撃を仕掛けるも、ギルはそれを一蹴したのである。

「グアツ！」

元の一人に戻ったオーズは、元の士郎の姿に戻ってしまう。

「ハア……ハア……ハア……」

「バカな……強い」

ギルの圧倒的な強さに、セイバーは足が動けなくなってしまう。

「フム、久々に楽しめたぞオーズ。 いずれまた会おう」

そう言ってギルは姿を消したのであった。

「ふざけやがって」

そう言ってアंकは右手が震えてしまっていた。

一方、プテラノドンヤミーと交戦していたWは、

「ハア！」

ソウルブレードを振るい、隙の無い攻撃を与えた。

「グッ！」

「このまま行くぜ！」

そうやってWはソウルメモリをブレードのマキシマムスロットに差し込んだ。

【SOUL MAXIMUMDRIVE】

その瞬間、ソウルブレードの刀身が強く光り出し、

「ソウルフラッシュャー!!!」

そのまま閃光の如き速さでプテラノドンヤミーを切り裂いたのであった。

「グアアアアアアア!!!」

その速さに避けることが出来なかったプテラノドンヤミーは爆発し、セルメダルへと変わったのであった。

「コレで、事件解決だな」

しかし、Wも^{ダブル}OOOも^{オーズ}知らなかった。

恐竜のグリード・ギルの復活と彼のヤミーの出現が、新たな物語の始まりである事に……

第32話：紫の恐竜G / 復活の邪悪（後書き）

恐竜グリード登場！

果たしてオーズとWは倒せるのか！？

〈キャラクター紹介〉

藍染惣右介

登場作品：BLEACH

能力：不明

属性：不明

ランク：不明

詳細：ガイアメモリ製造密売組織『**ダーク**』の頂^ト点。
グリードであるカザリと結託し、コアメダルとガイアメモリの力で
世界を支配しようとする。目論む。
自らを『天に立つ者』と呼んでいます。

第33話・地味なSノツッコミ登場（前書き）

Sって誰だって？ それはコイツだ！

第33話：地味なSノツッコミ登場

とある喫茶店。

そこで、一人の少年・志村新八がレジと格闘していた。

「違いよ何やってんだとお前は！」

「す、すみません」

しかし彼は、レジを打つことが出来ず、店長に怒られていた。

「店主、ソレぐらいにせんか。それより、ミルクを頼む」

「あ、すみませんね。オラッ、早く行け！」

そう言われ、新八はミルクの入ったジョッキをお盆で運ぶ。

だが、客の一人が新八の足を引っ掛けたのである。

「ウワッ！」

その拍子で新八は転び、ジョッキの中のミルクも零れてしまう。

「おい何やってんだ！」

そう言って店主は新八を怒鳴りに行くが、

「おい……………」

「へ？」

突如殴り飛ばされてしまう。

地味なSノツッコミ登場

その男の外見を見た新八は、少し驚きだす。

外見は逆立った黒髪に赤い鉢巻、白を基調とした服を着ていて、その背には『悪』と書かれていた。

「テメエ等、相手が気弱な奴だからって調子に乗りすぎなんだよ」
そう言っつて客に睨みつける。

「何だと!」

「俺はな、弱いもの苛めはするのも見るとも嫌なんだ」

そう言っつて鉢巻の男はバキバキと骨を鳴らしながら、ニヤリと笑う。

「無論、自分より身分や立場の低い奴を八つ当たりに使っつヤロウは最もだ」

流石に今の発言が癪に障ったのか、二人の客が跳び掛かったのであった。

「フザケンなコノヤロオオオオオオ!」

その拳は鉢巻の男の顔面に食い込むが、

「何だ、この一撃は?」

「な!?!」

「本物の一撃、得と拝みやがれエエエ!」

全く通用せず、二人は殴り飛ばされたのであった。

鉢巻の男は、新八を彼の実家に送り届けていた。

「この辺か？」

「はい、有難う御座いました」

御礼をする新八であるが、ゴンとイキナリ殴られてしまう。

「いたああああ！　ちよつとおおおおお！　何するんですか！
？」

「オメエな、あんな仕打ち喰らって怒鳴る事も出来ねえのかよ？」

「何ですかアンタは！　助けてくれたかと思つたら、今度は拳骨つて……一体どつちの味方なんですか！？」

「どつでもねえよ」

すると、男は懐から名刺を渡す。

「名刺？」

「相棒がコレくらいは持ってけって言うからよ」

その名刺には『喧嘩屋斬左』と書かれていた。

「喧嘩屋？」

「おう。売られた喧嘩は、この斬左こと相楽左之助が代わりに依頼人の売られた喧嘩を買って出るんだ」

「随分、物騒な生業ですね」

新八の実家である恒道館道場に入ると、

「いい加減にしいやあああああああ」

マッシュルームみたいな髪型のオッサンが一人の女性にキレていた。

「姉上！」

「え、アレ姉ちゃん？」

するとマッシュルームみたいな髪型のオッサンが新八を見る。

「おおおう、弟がいんのか？ だったら弟に人稼ぎして貰おうかいな」

そう言って新八に近づくが、突如左之助が殴り飛ばす。

「んが」

「左之さん！？」

「良く分からねえけどよ、その辺にしとけよ？」

殴られた鼻を押さえながら、マッシュルームのオッサンはこう言った。

「ま、まあええやろ。 それなら、取って置きの話しがあるで」

そう言ってマッシュのオッサンはチラシを見せる。

「これや、『ノーパンシャブシャブ』」

「の、ノーパンシャブシャブ！？」

「何だ？ 親父さん、ハゲてたのか？」

「というか、家族の悪口はよくねえぞ」

「良いじゃないですか、僕の勝手なんですから。それと父上は精神的にハゲて ってアンタまだいたんスか！？ それとその女の子誰エエエエエエ！？」

そう言つて新八は、縁側に座る赤い髪少女に目が入つてしまふ。

「ああ、コイツは俺の相棒のノーヴェってんだ」

「宜しくな」

そう言つてノーヴェが手を上げたのであつた。

「所でよ、姉ちゃんは追わなくて良いのかよ？」

「良いですよ」

「何で意地張るんだよ」

「張つてません！ ただ、姉上も父上もどうして不器用なのか分からないんですよ」

それを聞いた左之助は、溜め息混じりにこう言つた。

「いいか、世の中にも器用な奴何ざいねえんだよ。俺も、お前もな」

「珍しく良いこと言ったな」

「珍しくって何だその言い方！」

左之助の言葉を聞いた新八は、竹刀を強く握っていた。

「ホラ行くぜ、姉ちゃんの事好きなんだろう？」

涙を流す新八は、コクリと首を縦に振るった。

左之助はそれを見て両手の拳をぶつけてこう言った。

「うしゃあ！ 買ったぜ、この喧嘩！」

「ついでに当麻にも連絡するぞ」

そう言ってノーヴェは、万時屋に連絡するのであった。

第33話：地味なS／ツッコミ登場（後書き）

次回、地味なS／喧嘩屋始動！

第34話：地味なS / 喧嘩屋始動！ (前書き)

今回の敵はコイツだ。

第34話：地味なS / 喧嘩屋始動！

喧嘩屋を営む青年・相楽左之助と相棒のノーヴェは、志村新八の依頼で彼の姉・お妙を救出する事になった。

「よう、当麻」

「来るのが遅えぞ」

そう言つて上条当麻とアトリ、そして土郎とセイバーとアングが門の前で待ち合わせていた。

「てか、この人達……よく此処が分かつたな」

新八はそう言つて上条たちの行動に感心した。

「地味なS / 喧嘩屋始動！」

上条はアトリを後ろに乗せてハードボイルダーを走らせ、土郎とアंकはセイバーと新八を後ろに乗せてライドベンドラーを走らせ、そしてノーヴェは左之助を後ろに乗せて自前のバイクを走らせていた。

「もっと早く走れないんですか!？」

新八がスピード上昇を要求するが、

「ルセエ、これ以上スピード出したら交通法違反になるだろうが!」

「アンタ、ガラが悪い割りに結構常識あるな!」

アंकの意外な一言で会話が終わってしまった。

「ヤベエ! 飛行船が!」

「アアアアアア! どうしよう、姉上がノーパンにイイイイイイイ
イ!」

「仕方ねえ！ リボルギヤリーだ」

そう言つて上条はスタッグフォンを操作し、リボルギヤリーを呼ぶ。そして展開したりボルギヤリーに乗り込んだ上条とアトリは、ハードボイルダーの後輪部を緑から赤に変えた。

「空中移動型のハードピューターだぜ！」

「いや、飛べるなら最初からソレ使え！！」

ハードボイルダーを空中移動型に切り替えた上条に、新八はすぐさまツツコミを放つたのであつた。

一方、船の中では……

「お妙で御座います。可愛がつて下さいまし」

「ダメじゃダメじゃ！ そんなじゃダメやって！ ちゃんと谷間を強調してやな」

マツシユルームみたいな髪型のオッサン（以下マツシユさん）がそう言つと、

「ウルセエよ」

お妙は彼の右腕を一握りでへし折った。

「ギヤアアアアアアア」

「次は左腕折るぞ」

「いや、アンタ何！？ 魔王の申し子か！？」

そう言つてマツシユさんは、折られた右腕を涙目で押さえながら豹変したお妙を見る。

「何だあ？ 自分から誘つておいて、逃げる気か？ ああん！？」

「ヒイヒイヒイヒイ！ スンマセン、マジスンマセンでした！」

つ……遂にお妙の貞操に危機が！！

「いや無理やって！ ナレーター、それ無理や！ てかコッチは貞操どころか生命の危機が晒され取るんじゃアアアアアアアアアア！」

マジ泣きで大ピンチのマツシュさんであったが、

「ん、アレ何や？」

突如窓を見ると、謎の飛行体が此方へ向かい出す。

ドガンという音と共にぶつかって来た。

「なななななな何や！？」

すると、そこから三人の男が現れた。

「ど〜も〜、万時屋です」

「それから喧嘩屋だ」

「姉上、まだパンツ履いてますか？」

「新ちゃん！」

それは上条当麻と新八、そして左之助であった。

「良かったアアアアアアアア！ 天の助けエエエエエエエエエエ
！！」

そう言ってマツシュさんは何か嬉しそうな顔で涙を流した。

「 じゃなくて、よくもワイ等の邪魔してくれたな！ 掛かれエ
エエエエエ！」

すると我に返ったマッシュさんの部下達はメモリを手にとると、

【MASQUERADE】

マスカレイドドーパントに変身し、

【シャドー】

マッシュさんも『影の記憶』を宿すシャドードーパントに変身した。

「そう来なくっちゃ」

上条はそう言ってダブルドライバーを装着し、ジョーカーメモリを構える。

「行くぜ、相棒！」

【JOKER】

「ああ、行くよ」

そう言って事務所に居るユーノもサイクロンメモリを構えた。

【CYCLONE】

「変身！」

【CYCLONE・JOKER】

こうして二人は、仮面ライダーWへと変身した。

「さあ、その幻想をぶち殺す！」

「何が“幻想をぶち殺す”や！ この数を相手に何ができる」

「新八、お前は姉さんを護る事だけを考える。 良いな！」

「……………はい！」

「うっじゃあ！ 行くとしますか！」

「応！」

【LUNAR】

そう言ってWは、ソウルサイドのメモリを差し替えた。

【LUNAR・JOKER】

「オラア！」

するとWの右足は、まるで鞭のようにしなやかに伸びたのである。

「ギヤアアアアア！」

「ってウソおおおおおお！？」

「あんな常識はずれな技、初めて見る！」

「行けえええええ、新一イイイイイイイ！」

「新八だアアアアア、ボケエエエエエエエ！」

そうやって新八はお妙を連れて逃げ出した。

「何やってるんや、追っんや！」

シャドードーパントが命令を下すが、

「させるかよ！」

そうやって左之助は、シャドードーパントを殴り飛ばす。

「んが！」

一方の新八と妙はというと……

「新ちゃん、あの人大丈夫かしら？」

「大丈夫です、彼は戻ってきますよ」

上条を心配する姉に新八はそう言ったが、

「ウオオオオオオオオオ！」

「「へ？」」

後ろを振り返ると、

「ホントに戻って来たアアアアアアアアア！」

Wと左之助が思いつきり追いかけるように逃げてきた。

「きつかったんだ！ 思ったよりきつかったんだアアアアアア！」

「何やってんですか！？ 戦ってからまだ数行しか経ってないじゃ

「ないですか！」

「バカヤロウ！ 作者だってな、この小説書くのにスゲー時間かけてんだぞ！ 大変なんだぞ！！！」

「そうだぞ、分かってんのか！！！」

「三人とも、喧嘩してる場合じゃないだろ」

ユ一ノがそう言って上条と新八の喧嘩を止める。

奥まで走ったW達は、目の前のドアを開ける。

「何だ此処？」

「どうやら、この船の動力室みたいだね」

「その通りや、仮面ライダーのお兄さんと喧嘩屋の兄ちゃん」

上条の疑問にユーノがそう言うとマッシュユさんが銃を構えていた。

「あ、オッサン」

「驚いたね、まさかメモリブレイクしたのに意識があるとは」

「当たり前や！ ギャグ漫画を舐めたらあかんで！」

マッシュユさんは、引き金に人差し指を当てながらこう言った。

「ええか、お兄さん。世の中簡単にはいかないんですよ。この勝負、完全にウチ等の勝ちや」

「そうかな？」

するとWは、上を見ながらこう言った。

「後は任せませ！」

「応よ！」

するとそこには左之助の姿があった。

「え……………ちょっと、待ちや兄ちゃん！ アンタいつの間に登ってたん！？ てか、それこの船の動力源！！」

「知るかよ」

そう言って左之助はニッと笑い出す。

た。

数分後、マツシュさん達は警察に逮捕された。

「いやあ、ホントに災難だったな」

「何が“災難だったな”だ！ 下が海じゃなかったら大変な事になつてたぞ」

「いや、全くですよ」

ケラケラ笑う左之助にノーヴェと新八がツッコんだ。

「んじゃ、俺達は帰ろうか」

「そうですね。途中で何か食べて帰りましょう」

「ついでに『翠屋』のアイス食って帰る」

「お前等、ホントに食の事しかないのか？」

そう言つて士郎は、セイバーとアंकと共にその場を去つた。

「あの、姉上……………僕……………」

「良いわよ、アナタの好きになさい」

何かを言おうとした新八に妙はそれを察し、すぐにその場を離れたのであつた。

「んじゃ、帰つて寝るか」

「あ、待つて下さい！」

そう言つて左之助の元へ駆け寄る新八。

後に彼は、『喧嘩屋斬左』の一員になつたのであつた。

それを見ていた上条も、

「さてと、そろそろ帰るか」

「うん」

そう言つてアトリを後ろに乗せ、ハードボイルダーを走らせたのであつた。

第34話：地味なS / 喧嘩屋始動！ (後書き)

次回、海でS出現 / 大蛸大騒動

第35話：海でS出現／大蛸大騒動（前書き）

新たな展開が！？

第35話：海でS出現／大蛸大騒動

『天蘭組』二番隊の神裂火織と建宮斎字、そして五和の三人は海に来ていた。

無論、二番隊の隊士達も。

「さ、流石この格好は恥ずかしいものです／＼／＼」

「そうですね／＼／＼」

そう言つて神裂は黒を基調とした水着、五和は青を基調とした水着を着ていた。

「（おお、女プリエステル教皇様の水着姿だ）」

「（五和さんの隠れ巨乳もだぜ）」

「（くう、拝めてよかつたお）」

男性隊士が邪な目で彼女達の水着姿を見ていた。

すると、ある人物の声が聞こえた。

「あれ、神裂じゃん」

「え？」

それは、ツンツ頭が特徴的な少年・上条当麻であった。

海でS出現 / 大蛸大騒動

「はい、お弁当ですよ。」

そう言ってお妙は弁当箱をシートの上に置いた。

「すみません、私達まで食事にお呼ばれになるなんて」

申し訳ない顔で言った神裂にお妙はこう言った。

「良いんですよ。元々は借金取りの件での御礼に私が上条さんや相楽さんに衛宮さん達を呼んだ様なものなので。さあ、どうぞ召し上がってください」

「んじゃ、遠慮なく」

そう言っって蓋を開ける。

その中には、何か真っ黒な物質が入っていた。

「
.....
.....何コレ？」

長い沈黙をする一同の代表で、左之助が質問した。

「卵焼きよ。ゴメンナサイね、私卵焼きしか出来なくて」

「いやいや嬢ちゃん、こりゃ卵焼きというより.....」

「そうそう、どっちかと言つと可哀想な卵」

「良いから男は黙って食べや！」

「んが！」

左之助と恋次が否定するがお妙に口に突っ込まれてしまう。

「これを食べなきゃ死ぬんだ」

「食べなきゃ殺される」

「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏……」

上条とインデックスがそう言いながら卵焼きを食べる。

セイバーに関しては念仏を唱えていた。

「よくなって三人とも、そんな暗示かけなくても！ 僕みたいに目え悪くなるよ！」

「……（え？ あの卵焼きの所為で、目が悪くなったの！？）」「スバル、ティアナ、ノーヴェの三人は、静止する新八の発言にビツクリしてしまう。」

「……（すごい苦労してるなあ……）」「」

なのはとユーノに士郎は、新八に一瞬哀れみを感じ取った。

「……（どうしましょう……しかし食べないと失礼ですし……）」

神裂達も戸惑ってしまつが、

「火織さん、良ければこの近藤勲が食べて差し上げます」

突如、近藤勲が彼女の横から現るが、

「何レギュラーした顔で出てきてるんですかこのゴリラアアアアアアアアアア！ 何処から湧いて出た！！」

「グガア！」

すぐさま神裂に『七天七刀』で吹っ飛ばされた。

「おいおい、まだストーカー被害に遭つてたのかよ。警察に相談すれば良いんじゃないか？」

「いえ、あの人が警察ですから」

上条がそう言うが、五和が答え、それを聞いた恋次がこう言った。

「世の末だな」

「悪かつたな」

「え？」

聞き覚えのある声に、恋次が振り返るとそこには土方と真選組の面々が居た。

「おいおい、ムサイ男共が何のようですか？」

「そこをどけ。そこは真選組が毎年の海を楽しむための特等席だ」

それを聞いた恋次がコメカミの血管を浮かべながらこう言い返した。

「なに、勝手なこと言ってんだこのチンピラ警察！別に場所なら何処でも良いだろ！」

「違えよ。ここで飲む酒が格別なんだよ、なあお前等」

そう言つて土方が隊士達に顔を向けるが、

「いやあ、俺等は酒が飲めたら何処でも良いですよ」

「酒のためならイソギンチャクとお話しが出来ますぜ？」

場所にこだわっていないような発言をするが、

「ウルセエ、俺だって本当は何処でも良いんだよ！　ただ、コイツのために場所変更すんのが気に食わねえんだよ！！」

そう言つて土方は、のんびりしている恋次を見た後にこう言つた。

「大体、山崎は何処に行つたんだ！　アイツに場所とらせに行かせたる！！」

「ああ、ミントンやってますぜミントン」

「フン！　フン！」

それを聞いた沖田は、バトミントンラケットを手にとって素振りをする山崎を指差す。

「山崎イイイイイイイイイイイイイ！」

「ギヤアアアアアアアアアアア！」

そして土方の鉄拳が彼に振り下ろされたのであつた。

「まあ、兎に角だ。大切な行事をキャンセルするわけにはいなんのでな。　悪いが去つてもらつぞ、火織さんを残してな」

「いや、火織さんごと去つて貰おうか」

「いや、火織さんはダメだつてば」

すると天蘭組のメンバーがこう言った。

「ふざけるなアアアアアアアアア！
女プリエステル教皇様の水の滴る水着姿を
お前等ムサイ男共に見せられるか！！」

「五和さんの隠れ巨乳もだ！」

「「エエエエエエエエエエエエエエ！？ 何でそうなるんですかアアアアアアアアアアアア！？／＼／＼」」

男性隊士達の発言に、神裂と五和が顔を真っ赤にしてしまう。

「冗談言つんじやねえよ！」

そう言つて恋次、左之助、お妙、そしてアंकが身構える。

「俺達をどかしてえんなら、大砲でも持つて来いよ！」

「喧嘩なら買つてやるぜ」

「ハーゲンダッツ2ダース持つて来いよ」

「アイスクャンディー30本持つて来いよ」

「「案外お前等、簡単に動くんだな」」

上から恋次、左之助、お妙、アंकの順で四人がそう言つと、新八とノーヴェがツッコミを放った。

「面白え、どうやら青い海じゃなくて血の海を拝むハメになるようだな」

土方も刀を構えるが、沖田が止めに入った。

「待ちなせえ。 堅気の皆さんがマツタリしてるつてのにチャンバラたあいけすかねえ。 此処は海らしい勝負で決めましようや」

そう言つて沖田は工事用ヘルメットを被り、ピコピコハンマーを手持っていた。

「 第一回、陣地争奪・叩いて被つてジャンケンポン大会”！」

「海に全然関係ねえじゃん！」

これには全員がツツコミを放ったのであった。

こうして、陣地争奪・叩いて被ってジャンケンポン大会が開かれた。

「え、勝負は三人一組による一対一の対決です。必ずルールは護ってください」

そう言つて山崎と新八が2組の前に立つ。

「審判は平等に新八君と俺、山崎退が務めさせて頂きます」

そう言つて二人は一礼をする。

「勝ったチームには此処で海を楽しむ権利&神裂さんが手に入ります」

「何ですかその勝手なルール！ あんた等山賊！？ それじゃ僕達勝つても負けてもプライマイゼロでしょうが！」

すると山崎は、懐からソーセージを手を取った。

「じゃあ、君達にはこの『真選組ソーセージ』だ。屯所の冷蔵庫に入っていた」

「要するにただのソーセージじゃねえか、いるか！」

しかしそれを聞いた上条とインデックスは、

「ソーセージだってよ！ コレでこれで食材が助かるぜ！」

「うん！」

「バカか！ お前等バカか！！」

大喜びするが、新八がツッコんだのであった。

しかし、彼らは知らなかった。

この大会に悲劇が起きることを……

第一回戦は、近藤勲VS志村妙。

「あの、志村妙。別に私が代わっても良いんですよ」

神裂がそう言うが、お妙がこう言い返した。

「良いんですよ。私に任せてください」

そう言つて目の前の近藤を睨む。

「あの人、何でもストーリーカーらしいわね。 此処は私に任せて……
…全て終わらせてあげるわ」

それを聞いた新八は、姉が豹変している事に気付いた。

そして神裂も、彼女の中の何かを感じ取った。

「（マズイ……あの目は……）」

「（何でしょう、この殺気は!?!）」

そしてそのまま試合が始まった。

「それでは、叩いて被って……」

「「ジャンケンポン!」」

近藤はグーでお妙がパーを出す、近藤はすかさずメルメットを被るが、

「おっとセーフ!」

「セーフじゃない! 逃げる近藤さアアアアアア!」

「え?」

新八の叫びで上を見上げると、

「南無難事九十九難光来……………」

ドス黒い殺気を立てながらお妙はピコハンを手に持ちながら念仏を唱えながら、

「あの…すみません、もうメット被ってるから」

「オラアアアアアアアアアア！」

豪快に振り下ろしたピコハンで近藤に一撃を叩き込んだ。

その威力は、彼が被っているヘルメットにひびが入るほど。

「……………」

……………」

これを見た一同は、心の中でこう思った。

“ルール、関係ないじゃん”と……………」

「局長オオオオオオオオ！」

「テメエ、何しやがるクソアマア！」

隊士の一人がお妙にキレるが、

「ああん？ やんのかコラ？」

「すみマセンでしたアアアアアアアアアア！」

余りの威圧に真選組全員が土下座して謝った。

「新八君、キミも大変だね」

「もう、慣れましたよ」

「敵にしたくありませんね」

山崎の一言に新八が呟くと、神裂も小さくそう言った。

「ええ、近藤局長が戦闘不能になったので第一回戦は無効試合とさせて頂きます」

そう言って山崎は第二回戦を開始させる。

「二試合目は最小限のルールを守って」

「オオオオオオオオ！」

言ってる子供並にダサイよ！」

すると、二人は酒を飲みだしていた。

「……って、何あんた等飲んでんの!？」

「あ？ 勝負は始まつてるんだよ」

「うし、次はテキーラ！」

「上等だ！」

そう言つて再び酒を飲む出す二人。

「もう、勝つてに飲み比べ始めてるし」

新八がそう言つと、再び歓声が聞こえた。

「オオオオオオオオオ！」

「勝負がさらに加速になつてるぞ！」

そう言つて左之助と沖田を観ていた一同であったが、新八がある事に気付く。

「ちょっと待って、二人ともメット被つてるだけでジャンケンしてない!？ ……まさか」

すると二人は拳を互いに相手にぶつけていた。

「つてただの殴り合いじゃねえか!？」

「だからルール守れって言ってんだろぅが!」

「これじゃ、勝負は永遠に着かないな」

呆れる山崎であったが、

「こつなつたら、最後の勝負に賭けるしかない。 恋次さ」

そう言つて新八は振り返るが、

「オエエエエエエエエ」

「んが!」

恋次と土方は酒の飲みすぎで嘔吐していて新八はそれを見てズツコけた。

「おい、何やつてんだ! これじゃ勝負着かねえよ!」

新八の発言を聞いて恋次がこつ言つた。

「心配すんじゃねえよ。俺はまだやれる……白黒着けようじゃねえか」

「上等だコラ」

「だがこのまま勝つてもつまらねえ……此処だどうだ? 真剣使つて“斬つてかわしてジャンケンポン”にしねえか?」

「上等だコラ」

「「ええ!?!」」

恋次の提案に新八と山崎は驚いた。

「オメエ、さつきから“上等だ”しか言ってるねえぞ？ 俺が言うのもなんだが、大丈夫か？」

「上等だコラ！」

そう言っつて恋次と土方は刀を抜いた。

「行くぜ！」

「上等だコラ！」

「「せーの、斬ってかわしてジャンケンポン」」

ジャンケンの結果、恋次がチョキで土方がパーを出した。

すかさず恋次の攻撃が来た。

「取ったアアアアアアア！」

「!?!」

これには全員が驚くが、

「安心しろ、峰打ちだ」

恋次が斬ったのはヤシの木で、峰打ちでもなかった。

「テメエ、さつきからグーばっか出してんじゃねえ！」

そう言つて土方は大岩に怒鳴っていた。

「ハア……」

「お互い、何か大変ですね」

「全くです」

「同意だ」

山崎の言葉に新八とルキアは同感した。

するとその時であった、

「ゲオオオオオオオ！」

「な!？」

突如海から蛸のような怪人が現れた。

「アंक、アレって!？」

「ヤミーだ!」

そう言って士郎とアंकが驚くが、

「変身!」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

すぐさま士郎は、仮面ライダーオーズに変身した。

「相棒!」

【JOKER】

「ああ!」

【CYCLONE】

「「変身！」」

【CYCLONE・JOKER】

上条とユーノも仮面ライダーWに変身した。

「ハア！」

タコヤミーを攻撃するWとオーズであるが、

「クソッ！ まだあんなに数が！！」

水槽系ヤミーは量産型であるため、一匹を倒してもその内の一体を倒した事にしかならなかった。

「こうなったら、ガタキリバで」

そう言ってオーズはアंकにメダルを要求する。

「アंक、メダルを！」

しかしタコヤミーは一斉に集まり、巨大な大蛸の怪物に代わった。

「な！？」

「集まって巨大化した！？」

「マジかよウッブ」

「クソッ……ウッブ」

驚く恋次と土方は酒が回り過ぎて再び嘔吐する。

「ダメだこいつ等」

Wは二人を観て本気でそう思った。

「士郎、水中戦にはコイツだ！」

そう言つてアंकは青のコアメダルを投げ渡した。

受け取つたオーズは、すぐさまメダルを差し込み、スキャンした。

【シャチ・ウナギ・タコ・シャウシャウシャウター・シャウシャウシャウター】

その瞬間オーズは、鯨を模した黄色い複眼の頭部に鰻を模した鞭の付加された腕部、そして蛸を模した脚部の青い姿に変わった。

水中戦に優れた形態、仮面ライダーオーズ・シャウタコンボだ此処に光臨した。

「ハッ！」

海中に潜つたタコヤミーを追つたため、自らも海に潜つた。

海中でタコヤミーと激突を繰り返すオーズ。

タコヤミーの触手が向かってくるが、オーズはタコレッグの装甲を触手の如く操り、それに対抗する。

しかし、触手に縛られてしまいが、オーズはその身体を液体と化した。

シャウタコンボの固有能力は『液状変化』で、自らの体を液体と化して相手を翻弄させたり水中戦で有利となるのである。

そしてウナギウィップで拘束した後、そのまま海上へと投げ飛ばした。

ザパーンという音と共に宙へと舞うオーズとタコヤミー。

その瞬間、オーズはベルトのメダルをスキャンした。

【SCANNING CHARGE】

再びウナギウィップで拘束し、オーズはタコレッグを一点に集中させ、

「セイヤアアアアアアアアアア！」

必殺技『オクトバッシュ』を叩き込んだ。

そしてその様子を遠く観ていた黒い甲冑騎士のような怪人。

「アレが、Wとオーズ」

変身を解くと、その姿は銀髪の長い女性であった。

彼女は立ち去ると同時にメモリを手に持つ。

【セイバー】

第35話：海でS出現／大蛸大騒動（後書き）

次回、EとBとの出会い／魔人と我欲

次回はラージさんの『仮面ライダーイーヴィル』と『仮面ライダーブライ』とのコラボです。

第36話・EとBとの出会い／魔人と我欲（前書き）

ラージさんとのコラボです。

第36話：EとBとの出会い／魔人と我欲

「ほう、コレは面白い」

『仮面ライダーイーヴィル』の主人公・無限ゼロはそう言って、周
囲を見渡す。

「まるで風都のようだ」

息子のネオを抱く彼の妻・リンフォースも驚きを隠せなかった。

「パパ、此処って一体!？」

娘のヴィヴィオも驚きを隠せなかった。

「ほう……興味深いな」

そう言ってゼロの親友・脳嚙ネウロが面白そうに見渡す。

「てか、此処何処!？」

相棒の桂木弥子も驚きを隠せなかった。

「とりあえず、この街をしてみるしかないな」

「そうだね」

ディアンとフェイトがそう言って警戒する。

EとBとの出会い / 魔人と我欲

「オイオイ、此処は何処だ？」

「どうぞやら、別世界に来たようですね」

「へえ、どつりで雰囲気が違うわけだ」

「初めての体験だな」

『仮面ライダーブライ』の鋼刃介、鑢七実、花菱烈火、真庭竜王の四人がそう言っつて街を歩き出す。

すると、七実がある気配を感じ取つた。

「ヤミーです。すぐ近くの様子ですね」

「うっしや、行つてみるぜ」

「おう！」

「無論だ」

こうして四人は、ヤミーを捜しに向かつた。

現在上条当麻は、仕事の帰りであった。

「ハア、疲れた」

そう言っただけで夜道を歩いていった。

すると次の瞬間、

「!?!」

突如何かの殺気を感じた上条は振り返る。

「……………」

そこには、黒づくめの女性が居た。

「何だ……テメエ!」

上条の問いに女性はメモリを取り出す。

「ガイアメモリ!?!」

【キャスター】

コネクタに差し込んだ女性は、ローブを身に纏った女性のような黒い怪人に変わった。

「ドーパントかよ!」

そう言つて上条はダブルドライバーを装着する。

【JOKER】

事務所で資料をまとめていたユーノも、サイクロンメモリを構える。

【CYCLONE】

「変身!」

【CYCLONE・JOKER】

すぐさま二人は仮面ライダーWへと変身した。

暫らく街を歩いてきたゼロ達であったが、

「ん？」

ゼロが何かを察知した。

「どうしたのパパ？」

「欲望の気配がする」

そうやってゼロはドライバーを装着し、リーダーメモリを構えた。

「行くぞ、相棒！」

【LEADER】

「ああ」

リインフォースもネオをヴィヴィオに預け、マジカルメモリを構える。

【MAGICAL】

「「変身！」」

マジカルメモリが差し込まれたと同時にリインフォースは気を失い、フェイトが身体を抱える。

転送されたマジカルメモリを奥まで差し込んだゼロは、リーダーメモリを差し込んで横に倒した。

【MAGICAL・LEADER】

その瞬間、ゼロの肉体は銅色セントラルパーテーションを境に、右半身が白銀で左半身が紫のボディを持つ横向きE字型の触覚を持つ緑色の複眼の仮面ライダーに変身した。

魔人の能力と魔導師の能力を持つ魔法の統率者・仮面ライダー・ヴィルが、此処に光臨した。

衛宮士郎は、バイトの帰りであった。

だがその時、突如悲鳴が聞こえた。

「イヤアアアアアアアアアア！」

「!?!」

声のする方に向かう士郎。

「そこか！」

そこには服を引き裂かれ、ほぼ下着状態になっている女性が、男に襲われている光景であった。

「止める！」

士郎は男を止めにかかる。

「早く逃げる！」

女性が逃げたことを確認した士郎は、そのまま男を投げ飛ばす。

「があ！」

その瞬間、彼の体からトラの怪人が現れた。

寄生型を生み出すグリッド・カザリの猫系ヤミーであった。

「やっぱりヤミーか！」

そう言って士郎は、オーズドライバーにメダルを差し込み、スキヤンした。

「変身！」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

すぐさま士郎は仮面ライダーオーズに変身し、トラヤミーに接近し

た。

「ハア！」

「ありや、オーズか!?!」

「そのようですね」

驚く刃介とは対照的に冷静に答える七実。

「まあ良いか、兎に角行くぜ」

そう言って刃介は、ドライバーに血錆色のメダルを差し込みスキヤンした。

「変身！」

【リュウ・オニ・テンバ・リ・オ・テ・リオテ・リ・オ・テ】

その瞬間刃介は、血鎊色を基調とした龍を模した頭部に鬼の如き強靱な腕部、そして天馬の如き脚部の仮面ライダーに変身する。

妖魔系コンボから生み出される無類を名に持つ我欲の王・仮面ライダーブライが此処に参上した。

「我刀流当主・鋼刃介、いざ参るぜ！」

キャスタードーパントと交戦する仮面ライダーW。

「ハアッ！」

魔法陣から繰り出すエネルギー波を右手で打ち消すW。

「クソッ！ 飛び道具じゃ、接近できねえ！」

「一端メモリを替えよう」

【LUNAR・TRIGGER】

精密な射撃を得意とするルナトリガーにチェンジし、エネルギー波を撃ち落とした。

その内の一発が、キャスタードーパントに放たれるが、

「ハッ！」

キャスタードーパントは結界を張り、攻撃を防御した。

「マジかよ!」

驚くWであったが、突如何者が現れた。

「ほう、Wと出くわすとはこの世界は面白いものだ」

「私達も知らない管理外世界が存在するなんて……」

右半身が白銀で左半身が紫、そしてE字型の触覚を持つ緑色の複眼の仮面ライダーが現れた。

「お前等は!？」

「仮面ライダーイーヴィルだ。世間話をしたい所だが、まずは奴を倒す事が先決だ」

「……………そうだな」

イーヴィルの意見にWはそう言ってメモリを差し替えた。

【SKULL・SOUL】

Wはすぐさまスカルソウルにチェンジし、ソウルブレードを構える。

「……………クッ！」

二対一は不利と判断したキャストードーパントは、すぐさまその場を後にした。

「ヤロツ！」

Wはそれを見てキレるが、

「落ち着くん当麻君、深追いは禁物だ」

「クソツ」

そう言ってWは変身を解いた。

オーズはトラヤミーに苦戦するも、

「オラア！」

血鎧色を基調とした龍を模した頭部に鬼の如き強靱な腕部、そして天馬の如き脚部の仮面ライダーが、突然トラヤミーを蹴り飛ばす。

「ウオツ！ 誰だ！？」

を見て驚く。

「仮面ライダーブライ。 自己紹介したいところだが、今はヤミーだ」

「あ……………ああ、そうだな」

そう言つてオーズとブライはタツグを組んだ。

「グオオオオオオオオオ！」

トラヤミーは二人に接近するが、

「士郎、使え！」

セイバーと共に駆けつけたアंकが灰色のコアメダルを投げ渡し、

オーズはそれを差し込んでスキャンした。

【サイ・ゴリラ・ゾウ・サゴーズ・サゴーズ】

オーズは犀を模した頭部にゴリラの如き腕部、そして象の如き脚部を持つ灰色の姿に変わった。

重量系を操るパワー形態、サゴーズコンボへとチェンジした。

「ウオオオオオオオオオオオ！」

ゴリラのドラミングの如き動作で重力を操り、トラヤミーの動きを封じた。

しかし、その時であった。

突如男が、意識が操られたかのようにトラヤミーに近づいて来た。

「な!？」

慌てて重力操作を中断させてしまい、トラヤミーは再び男に憑依した。

「女ア……おんナア………」

そう言って男が歩き出し、

「待て！」

変身を解いた士郎は、すぐさましがみ付くが、

「邪魔だ！」

「グワツ！」

常人離れた力で吹き飛ばされてしまった。

「このバカ！ あのままサゴーズで抑えとけば良かったものを！」

そう言ってアंकは士郎の行動に呆れてしまう。

無論、ブライもであった。

男の正体を知るため士郎とアंकは、刃介と七実に烈火、そして竜王と共に万時屋を尋ねた。

「検索を完了した」

そう言ってユーノが、男の正体を教えた。

「男の名前は獅子山^{ししやま}天互^{てんご}、現在指名手配中の連続強姦魔だ」

「指名手配に成る程なのか？」

刃介の問いにユーノは答えた。

「ああ。 奴に犯された女性の数は数え切れなく存在して、中には男性不信に陥った者もいれば、自殺するものもいたらしい」

それを聞いた烈火が怒りを爆発させた。

「ふざけんな！ そんな奴が野放しにされてたまるか！！」

「全くその通りだな」

するとゼロ一行を連れて上条が帰ってきた。

因みに烈火の意見に同意したのはゼロである。

「しかし性欲か、人間の三大欲求は“食欲”・“睡眠欲”・“性欲”と聞くからな」

「強姦の常習犯の性欲による欲望で生まれたヤミーか。 これは厄介だな」

そう言ってゼロは、『欲望』を前にして内心は喜んでいた。

「まずは奴を捜さない……………」

「ああ、また犠牲者が増える」

そう言つて動揺を隠せない上条と土郎であつたが、

「それなら、良いのがありやすぜ」

「「え？」」

突如現れた沖田に驚きを隠せなかつた。

「いやあ、堂々とパトロールをサボつてたら面白い連中がいたんでねえ、後を尾付けさせてもらいやした」

「（堂々と言つたよこの人！？）」

沖田のサボリ発言に弥子はツツコミを入れた。

「ソウゴ、他にやる事はないんですか？」

セイバーがそう言つと、

「そうですね、昼は凶悪犯罪者を椅子にして楽しいティータイムを楽しみましたが、これは流石に土方さんに怒鳴られました。ム力つくほど」

沖田の発言に再び弥子がツツコミを入れた。

「（うわ、警察なのに外道だこの人）」

「「「ん？」「」」

すると、沖田とゼロ、そしてネウロは偶然目が合うと、固い握手を交わした。

「（外道同士で気が合った！！）」

ゼロとネウロのドSっぷりを知っている弥子は、この光景に青ざめてしまう。

こうして、『獅子山天互・逮捕作戦』が開始したのであった。

第36話：EとBとの出会い／魔人と我欲（後書き）

次回、EとBとの出会い／鉄拳と猫王コンビとドSトリオ

今回はイーヴィルとブライの活躍を一気に増やします。

恋次

「って俺達の出番は!？」

ルキア

「呆れめろ、恋次」

スバル

「多分無いと思いますよ」

ティアナ

「確かに」

第37話・EとBとの出会い／鉄拳と猫王コンビとドストリオ（前書き）

最強の共演です

第37話・EとBとの出会い／鉄拳と猫王コンビとドストリオ

獅子山天互は、再び女性を襲っていた。

「イヤアアアアアアアアア！」

涙を流しながら叫ぶ女性。

「イヒヒヒヒ……」

この男から逃げられる事は、もう出来ないのか……

EとBとの出会い／鉄拳と猫王コンビとドストリオ

その日、ノーヴェ・ナカジマは街を歩いていた。

露出度の高い上着にミニスカートという、彼女には珍しい服装であった。

「（くそお……………何でこうなるんだよ）／／／／」

赤面で涙目の彼女を監視するように見張る左之助と新八。

「おい、これで大丈夫なんだろうな？」

携帯電話を通じてネウロに言った。

「安心しろ、そのために監視が居るのであるっ？」

何故こうなったのかというと、昨日の出来事であった。

〈回想〉

獅子山対策のために、囀捜査を実行する事を提案した。

しかし、この作戦には問題があった。

女性陣の誰が、囀になるのかということである。

「言うておくが、私は相棒（ま）を売り渡すほどの無責任な男ではないし、娘の初めてを強姦にやるつもりもない」

そう言うてゼロはリンフォースの胸を当たり前のように揉む。

「んあ／＼／＼」

揉まれた本人も、気持ち良さそうに喘ぎ声を出す。

ヴィヴィオはそれを見てみぬフリをする。

「我もゼロに同意だ」

そう言うてディアンはフェイトを強く抱きしめる。

当の本人は、嬉しそうであった。

「よし行け、弥子！」

「って待てコラあああああああああ！！」

ドS顔で弥子の肩に手を置くネウロであるが、弥子本人はすぐにツッコミを放つ。

「「チッ！」」

即答で拒否した弥子を見て、ネウロと沖田は舌打ちをする。

「インデックスに任せたらステイルに殺されるからヤダ」

「流石にアトリに任せるのは……………」

そう言って上条はインデックスに任せる事を拒否し、ユーノもアトリにさせるわけにはいかないと行って拒否する。

「おう、何かメシあるか？」

すると、喧嘩屋のメンバーがただ飯目的に来訪してきた。

「ええ〜!?! 私にやれって!?!」

事情を聞いたノーヴェは、すぐさま自分が囿にされると知った。

「幾ら何でも、強姦相手は……………」

断るノーヴェであるが、ネウロがこう言った。

「嫌か?」

「当たり前だろ、誰が」

断ろうとするノーヴェであるが、

「嫌か?」

「(やらなきや、殺す気だ!)」

ネウロの顔を見て、彼の考えを読んだ。

「わ……………分かった」

「おお、やってくれるか」

こうして、ノルヴェは囹をすることになったのであった。

強姦を捕まえるためであり、ネウロに殺されないようにするために。

く現在く

街を歩きながら周囲を見渡すノルヴェ。

一部のマニアや中年男性が彼女に集中してみていた。

「（恥ずかしいい）／＼／＼／＼／」

恥ずかしながらも道を歩くノルヴェ。

路地裏に差し掛かるまさにその時であった。

「んぐ!?!」

突如何者が彼女を連れ去った。

「しまった!」

監視していた左之助と新八は、急いでその場へ駆けつけたが、

「よう、俺達の何のようだ?」

明らかにガラの悪い雰囲気男達が現れた。

「この獅子山さん専属のチーム『メタルクラッシュ』に出くわすとは、お前等運が悪いな」

男の一人がそう言うが、左之助は黙っていた。

「何だ、だんまりか?」

「それじゃ……………死ねエエエエエエエ!」

こうして、男達が襲い掛かってきた。

「い……………いてえ……………」

「誰だよ、勝てるって言ったのは……………」

獅子山の部下たちはたったの数分で壊滅した。

「おい、こんなモンかよ？」

襲われていたハズの左之助は、全くピンピンしていた　　というよ
り、無傷であった。

「強ッ!？」

「まさか、あの数をたった一人で!？」

助太刀しようとしたフェイトとディアンも、これには驚きを隠せな
かった。

すると左之助は、男の一人にこう言った。

「おい、此処に赤い髪の子を見かけなかったか？」

「し……………知らねえ……………」

男がそう言うが、左之助は近くの外壁に『二重の極み』を叩き込んだ。

バアーンと粉々になった外壁を見て、男は言葉を失った。

「……………」

「これでもか？」

「言います言います！ 良いますから殺さないでえ—————！！」

涙目で叫ぶ男は、洗いざらい話す。

というより、話さないと殺されると思ったのであろう。

「お……………恐ろしい……………」

「敵にしたくないな」

その光景にフェイトとディアンは本気でそう思った。

その様子を見ていた

ゼロもこの光景を見ながらこう呟いた。

「この『欲望』はもう、私の手中にある」

とある廃工場。

「ガア！」

放り込まれたノーヴェは、そのまま倒れてしまう。

「イヒヒヒヒ………女だ女」

既に正気を失っている獅子山は、ヤミーの影響下で常人離れた腕力で彼女の両手を掴む。

「つつ！ 止める……！」

暴れるノーヴェであったが、獅子山はそれも構わずに彼女の服を強引に引き裂く。

ビリィという音と共に服が引き裂かれ、ノーヴェの豊かな胸と白い

肌が露になる。

「な！？／／／／」

服を引き裂かれ、肌が見えてしまったノーヴェは羞恥心のあまり、顔が赤くなつてしまい、

「オラア！」

獅子山はそんな彼女に構わず、今度はスカートを引き裂いた。

「ヤッ！／／／／」

完全に全裸にされたノーヴェは、逃げる事が出来ない。

拳に自慢があるが、両手を封じられてしまっているため、動く事ができない。

「やめる……………やめる……………」

しかも獅子山はズボンのファスナーを降ろし、ナニを出そうとしていた。

「やめるオオオオオオオオオオオオオオ！」

必死で叫ぶノーヴェ、しかし逃げ場は無い。

しかし、その時であった。

「ギヤアアアアアアアアアアアアアア！」

突如ロケットの如く、弥子が飛んで来たのである。

ダガアンという音と共に吹き飛ばされる獅子山。

「うう〜」

ソレと同時に目を回す弥子。

「見事だぞ相棒」

そう言ってネウロや上条達が現れた。

「……………大丈夫なのかアイツ？ 気絶してるぞ？」

【CYCLONE・JOKER】

【MAGICAL・LEADER】

「さあ、その幻想をぶち殺す！」

「さあ、貴様の欲望を差し出せ！」

こうして、仮面ライダーWとイーヴィルは戦闘態勢に入った。

「俺達も！」

「おつよ」

「変身！」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

【リュウ・オニ・テンバ・リ・オ・テ・リオテ・リ・オ・テ】

仮面ライダーオーズとプライも加わり、四人はライオンヤミーに立ち向かった。

「ノーヴェさん、大丈夫ですか！」

「新八！」

駆けつけた新八であったが、

「な……………え、エロい」

「って何処見てんだテメエ！／＼／＼」

「アベシッ」

ノーヴェの裸体を見て欲情してしまい、本人に蹴り飛ばされた。

すると、左之助は上着を脱ぎ、それをノーヴェに渡す。

「とりあえず着とけ」

そう言って鍛え抜かれた肉体を晒しながら左之助は笑う。

「あ……………ああ、有難う／＼／＼」

そう言って顔を赤くするノーヴェ。

「気にすんなって」

そう言って彼女の頭に軽く手を置く左之助であった。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ライオンヤミーは、四人に攻撃を仕掛ける。

「させつかよ！」

そう言ってブライは、基本形態・リオテコンボの腕部『オニアーム』に付加されている刀【魔刀『劔』】を高速で振るい、ダメージを与えた。

「ハハハハ、やるではないかブライ。　だが……」

今度はイーヴィルがメモリを替えながらこう言った。

「いたぶるなら、徹底的にやれ」

【TRICK・BLASTER】

『奇術の砲撃手』・トリックブラスターにチェンジし、ブラスターメモリの専用武器・ブラスターキャノンの銃口から発射した弾丸で、上下左右前後と様々な方向から攻撃を叩き込んだ。

「いや……やりすぎだろ!?!」

これにはWもツツコミを入れるが、

「その旦那、危ないですぜ!」

そう言って沖田は、ロケットランチャーを発射した。

「おっと!」

ブライはすぐに解けると同時にライオンヤミーにロケットランチャーの砲弾がドガンと当たった。

「……それはもっとやりすぎだアアアアアアアア!」「」「」

Wとオーズは、沖田の行動にさらにツツコミを入れた。

「土郎、つつ立っていないで、早く中の人間を取り出せ!」

そう言ってアंकは、チーターの絵の描かれた黄色いメダルを投げ渡した。

「よつと！」

受け取ったオーズは、すぐさまメダルを差し替えた。

【タカ・トラ・チーター】

亜種形態・タカトラータにチェンジしたオーズは、チーターの如き凄まじい速度でライオンヤミーに接近し、肩を掴みながら連続蹴りを叩き込んだ。

ガガガガと両脚で蹴り続けるオーズは、そのまま取り込まれた獅子山を救出した。

そのまま投げ飛ばされた獅子山は起き上がると、左之助が拳を鳴らしながら立っていた。

「よう、ウチの相棒が世話になったな……………」

それを聞いた獅子山は、嘲笑うかのようにこう言った。

「知るかよ。俺は女を犯ればソレで良いんだよ……………俺にとつて女はなあ、快樂の人形に過ぎねえんだよ！」

それを聞いた新八とノーヴェは怒りを覚えたが、

「そうかい……………だったらその根性、叩き直してやらあ！」

そう言つて左之助が拳を構えたのであつた。

「よし、このまま……」

そう言ってオーズが接近しようとしたその時であった。

「ぐわぁ！」

突如何者かがオーズに攻撃を仕掛けた。

「やぁ、久しぶりだねオーズ」

「カザリ！」

「あ、名前覚えてくれたんだ。嬉しいよ」

そう言ってカザリが接近しようとしたその時、

「!?!」

突如何者かが、カザリの背後を攻撃した。

「全く、慎重すぎると逆に命取りみたいですね」

カザリが振り返ると、そこには鑢七実のグリードとしての姿・キョトウがカザリからコアメダルを奪い取った光景であった。

「お前！」

そう言っただけでカザリが睨むが、

「衛宮さん」

そう言っただけでキョトウがメダルをオーズに投げ渡した。

オーズはそれを手に取ると、メダルにはライオンの絵が描かれていた。

「これでコンボが完成できると思いますが？」

「有難う！」

そう言っただけでオーズはメダルを差し替え、スキャンした。

【ライオン・トラ・チーター・ラタ・ラタ・タトラータ】

瞬間オーズは、獅子ライオンの鬣を思わせる青い複眼を持つ金色の頭部と虎チーターの力強さを思わせる腕部、そして狩獵豹の速度を持つ脚部の姿に変わった。

疾風の如き速さを持つ光速の姿、ラトラーターコンボへとチェンジした。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ライオンヘッドの鬣部分から放たれる高熱放射・ライオネルフラッシュャーによって、視覚を奪われたライオンヤミー。

「俺も行くぜ！」

そう言つてブライは、金色のコアメダルに差し替えるとスキャンした。

【ヤイバY A I B A・ツバT S U B A・ツカT S U K A・ヤバイカY A B A I K A・ヤY A K A I B A!
カイバY A I B A!
ヤイバカY A I B A K A!】

金色を基調とした白銀の眼が輝く刃と化した頭部と境界たる役目を果たす鎧と化した胴体、そしてその力を振るう為の柄と化した脚部の姿へと変わった。

刀剣のグリード・ガトウこと仮面ライダーブライのコンボ形態・ヤイバコンボへとチェンジした。

「行くぜ！」

【SCANNING CHARGE】

オーズとブライは、ベルトのメダルをスキャンした後、ライオンヤミーに接近した。

「仕方無い、セルメダルは諦めるか」

そう言ってカザリは徹底を試みるが、

「逃がすかよ！」

「そうはさせんぞ?」

【MAGICAL・LEADER】

Wと基本形態のマジカルリーダーに戻ったイーヴィルは、互いにメモリをマキシマムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

【LEADER MAXIMUMDRIVE】

「はあああああ………!!」

そして二人は、カザリに目掛けて必殺技を放った。

「……ライダーツインマキシマム!!」

WCJの必殺技・ジョーカーエクストリームとイーヴィルMLの必殺技・リーダーブレイクラッシュャーが同時にカザリに命中したハズであった。

「クツ！ 流石に今のは効いたよ」

そう言っただけでカザリは姿を消したのであった。

「逃したか……」

「なに、良くあることだ」

Wが悔しがりますが、イーヴィルは落ち着いた表情でそう言った。

「フン。不本意だが、セルメダルはやるよ」

そう言っただけでアंकはセルメダルを数枚ほど渡した。

「ゼロ、アンタへの報酬だ」

刃介にそう言われ、セルメダルを受け取るゼロ。

「では、早速……」

そう言っただけでゼロは、魔人の姿に戻り……

「頂きます」

セルメダルに内包されている『欲望』を喰らった。

なお、この瞬間を見た上条や士郎は驚きを隠せなかった。

「あれが……無限さんの本来の姿……驚いたな」

「というか、お前は俺と一緒に居んのに驚きすぎだろ」

ゼロの正体を知って驚く士郎に、アंकはツッコミを放った。

一方その頃、左之助はというと……

「　　つうく、随分硬えな」

そう言っつて獅子山を見る。

「クククク………驚いたか？　俺の能力、ダイヤモンドアーマー金剛装甲の硬度はよ？」

W達が戦っている間、獅子山と激突していた。

「うおおおおおおおおお！」

左之助は『二重の極み』を叩き込んだ。

その瞬間、獅子山は両腕を交差して防御した。

「な!？」

この光景を見た新八はこう思った。

“もう、勝てない”と。

「だから言っただろうが！ 俺の金剛装甲ダイヤモンドアーマーを打ち破る事は、誰にも出来な
」

獅子山がそう言って攻撃しようとしたその時であった。

ブシューーという音と共に、彼の両腕から血が噴水のように噴出した。

「な……アアアアアアアア！」

これには獅子山も激痛のあまりに体勢を崩してしまつた。

「ウオオオオオオオオオ！」

そのまま左之助は獅子山に頭突きを叩き込み、彼を地面にダウンさせた。

「ハア……ハア……ハア………どうでい」

そう言って左之助も地面に倒れたのであった。

「く……そ………」

獅子山はそう言って齒軋りを立てるが、

「ほう、まだ倒れていないか」

そう言ってゼロが獅子山のズボンを脱がせ、ネウロが尿瓶らしき物を彼のナニに挿入した。

因みに沖田は両手両脚に手錠を掛けた。

「さて、貴様も犯され側の気分を味わってみろ？　そうすれば貴様

に犯された女共の気持ち分かるぞ？」

その瞬間、獅子山のナニに挿入された尿瓶が口の付いた生物に変わり、彼のナニを吸い出した。

「魔界フフツ能力『死者の尿瓶【イビルビーカー】』」

「グアアアアアア！」

ナニを吸い上げられた獅子山は、苦しみでのた打ち回る。

因みに尿瓶内では彼の精子が大量に出てきている。

「魔界の尿瓶は一度挿入すると、宿主の精子を極限まで搾り取る」

「ガアアアアア！ 助けてくれエエエエエエエ！」

「ヤダ」

助けを求める獅子山であったが、ゼロもネウロも断固と拒否し、沖田もそれを見てドス黒い笑みを見せた。

その瞬間、獅子山の体から何かのエネルギーが放出される。

「「頂きます」」

そう言ってゼロは『欲望』を、ネウロは『謎』を喰らったのであった。

その数分後、警察が来る前に上条達は姿を消した。

上条はアトリに連絡して、ノーヴェの着替えになるものを持ってくるように頼んだ。

因みに獅子山は精子が尽きたのか、燃え尽きたかのように真っ白になっていて、警察もこれには啞然としていた。

「もうあんな事、絶対にやらないからな！／／／／」

アトリが持って来てくれた服を着たノーヴェは、赤面しながらそう言った。

「そうですね、ノーヴェさんのマ　　が丸出しだったんですよ！」

「　　ってダメエどこまで見てやがったんだこの変態眼鏡エエエエ

「エエエエエエ！／／／／」

「グガッ！」

新八が問題発言を口にして、ノーヴェはそれを聞いて跳び蹴りを叩き込んだ。

「左之助……………／／／／」

「ん？」

「さっきは、ありがとう／／／／」

「気にする事じゃねえぞ？」

そう言って左之助は、背中の悪一文字を見せながら二人の前を歩いた。

「……………／／／／」

そんな彼の後姿にノーヴェは両手でギュッと胸を押さえ込んだ。

因みに新八は気絶している。

そしてゼロ達はというと、戦いが終わったと同時に元の世界に戻ったのである。

「やっと『風都』に帰れた」

ヴィヴィオがそう言っていると、ゼロのマンティスフォンから電話が鳴った。

「もしもし？」

「無限か？ 悪い、一緒に来てくれ。今ある殺人事件を追っているんだが、この『謎』が難しいんだよ」

風都の仮面ライダーW・左翔太郎がそう言っていると、

「分かった、すぐにいく」

「ネウロ、事件だ。しかも『謎』まで用意されている」

「そうか……………では行くぞ弥子」

そう言ってゼロ達は現場へと向かった。

「あ、元に戻れた」

そう言って刃介は周囲を見渡した。

「ところで刃介さん？」

「何だ？」

すると七実がこんな質問をする。

「初めてセイバーさんを見たとき、一瞬驚きましたけど、どうしましたか？」

「え、気付いてた!？」

「当たり前です」

実は刃介はセイバーの顔を見て一瞬驚いたような顔をしたことがあ

り、七実はそれを見逃さなかったのである。

なお、その場面は残念ながら省かれてしまっているが。

それを聞いた刃介はこう言った。

「まあ、ちよつとな」

「ん？」

キョトンとする七実に対して、刃介の首にはあるモノが光っていた。

嘗て、友情を築いた騎士から貰ったペンダントが、光に照らされて
……。

第37話・EとBとの出会い／鉄拳と猫王コンボとドストリオ（後書き）

ラージさん、コラボ有難う御座いました。

次回、暴走するO／水槽王と重力王と『狂人の記憶』

キャラクター紹介（前書き）

新キャラクター紹介です。

キャラクター紹介

相楽左之助

原作：るろうに剣心

性別：男性

年齢：19歳

能力：無し

属性：無し

詳細：『喧嘩屋斬左』を営んでいる青年。

名の通り、依頼人が『売った』『喧嘩を』『買って』でるが、楽しんだ喧嘩によって報酬の額が違う。

異常とも呼べる打たれ強さと腕力を持つため、ガメルのような重量とパワーに自信がある敵を相手に出来る。

大の喧嘩好きで、面白いと思ったら喧嘩は買って出る。

万時屋や士郎達とも面識があり、たまにただ飯目的で来たりする。

この小説では3番目の主人公である。

ノーヴェ・ナカジマ

年齢：19歳

登場作品：魔法少女リリカルなのはシリーズ

能力：不可思議
インビジブル

属性：魔術系特殊者
マジックアビリティ

ランク：A

設定：『喧嘩屋斬左』で働いている少女。

根は優しいが、素直になれないため『ツンデレ』と言われる（本人は否定しているが）。

左之助に好意を抱くが、当の本人は全く気付いていない。

拳の勝負に自信がある。

喧嘩屋の仕事がないときは、スポーツジムでコーチのバイトをしている。

この小説ではヒロインの一人である。

志村新八

年齢：16歳

登場作品：銀魂

能力：無し

属性：無し

詳細：『喧嘩屋斬左』で働く少年。

実家の家系上、剣術に長けているが、あまり活躍の場が無い。
ツッコミにキレがあり、細かいボケも即座に対応する。

“新八の95%は眼鏡で出来ている”らしく、新八が掛けている眼鏡という形になってしまう。

地味である事をコンプレックスに持つ。

寺門通のファンクラブの会長になるほどのアイドルオタクである。

第38話：暴走するOノ水槽王と重力王と『狂人の記憶』（前書き）

水槽系のグリードと重量系グリードの二人が登場！
今回はWは出ません。

第38話：暴走するOノ水槽王と重力王と『狂人の記憶』

「それじゃ、行くわよガメル」

「うん、メズール」

シャチのような頭部に蛸のようなマントを付けた女性怪人・水槽系グリードのメズールは、犀のような頭部に象の鼻と牙を持つ怪人・重量系グリードのガメルの中にセルメダルを投入した。

チャリンという音と共に、ガメルの中から生まれた右肩がウニになっているアルマジロの怪人・ウニアルマジロヤミーが生まれた。

「やった、生まれた」

そう言っただけで喜ぶガメルとそれを見て笑みを浮かべるメズール。

果たして、この二人の目的は？

暴走するOノ水槽王と重力王と『狂人の記憶』

ある朝、衛宮低では…

「ふあ〜」

大きな欠伸をする女性・藤村大河が、眠そうな顔でこう言った。

「土郎、私寝るわ」

「あのなあ藤ねえ、まだ朝飯になってないぞ？」

そう言って土郎は呆れてしまう。

すると、後ろからこんな声が。

「先輩、私も寝ます」

「桜も!？」

後輩の間桐桜も眠そうな顔でそう言った。

その瞬間、突如遠坂凜が倒れだした。

「遠坂!」

驚く士郎であるが、凜は突然こう言った。

「眠い」

慌てた士郎も、これにはずっこけた。

とりあえずと三人に毛布を掛けた士郎。

「全く、我が主ながら情けないな」

そう言つて白い髪に褐色の肌、黒い衣服に赤い外套を羽織つた男性・アーチャーがそう言いながら呆れた。

「しかし、コレは一体……………」

手に顎を置くセイバー。

「まさか、ヤミーか？」

士郎がそう言つてアंकに振り返る。

因みにアंकはというと……

「んあ？」

朝食を既に食べていた。

「……って、何やってんだお前は!？」

「朝飯食つてに決まつてんだろが!」

実はアंकの好物はアイスキャンディーであるが、士郎の料理も気に入っており、よくお代わりをする事もある。

「ところでアंक、キミの意見を聞かせて貰いたい」

アーチャーの問いに、茶を飲み干したアंकはこう言った。

「プハア…… 士郎の言ったとおり、恐らくはヤミーだろう。だが、こんなに一度に同じ欲望が生まれるのは、初めてのケースだ」

「あ、寝ることも欲望なんですか？」

セイバーがキョトンとした顔で聞くと、アंकは呆れながらこう言った。

「阿呆か！ 睡眠欲も立派な欲望だぞ、よく覚えとけ！」

「「確かにな」」

士郎とアーチャーは、アंकの発言に息が合うように頷いた。

「で、ではアंक。何か心当たりは？」

「あつたらとづくに」

その瞬間、アंकはヤミーの気配を察知した。

「ヤミーだ！」

「アーチャー、此処は任せた！」

「フン、良いから行って来い」

「では！」

そう言ってアーチャーに留守を任せた士郎、セイバー、アंकの三人は外に向かった。

とある建物の屋上。

「さあ、眠れ眠れ！」

ウニアルマジロヤミーがそう言って笑い、駆けつけた土郎達三人は驚きを隠せなかった。

「アルマジロ……ガメルのヤミー!？」

「しかしウニが付いているということは、メズールのヤミーでは!？」

驚く土郎とセイバーとは対照的に、アंकはこう言った。

「成程な、“自分の欲望を満たす”ガメルのヤミーと“欲望の数で生まれる”メズールのヤミーを一体化させたみたいだな。いわば

合成獣系ヤミーだ」

「合成獣……つまり、ガメルの“眠りたい”っていう欲望を利用して、メズールの“眠った人の数でメダルが溜まる”ヤミーを作ったっていうわけか」

そうやって士郎はオーズドライバーを装着し、コアメダルを挿入してスキャンした。

「変身！」

【タカ・トラ・バツタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

仮面ライダーオーズは、すぐさまユニアルマジロヤミーに飛び掛った。

「ハアッ！」

トラクローでユニアルマジロヤミーを斬り裂くオーズ。

「ガア！ オーズ！！！」

「まだまだあ！」

そうやってオーズは、カマキリコアを差し込んでスキャンした。

【タカ・カマキリ・バツタ】

亜種形態・タカキリバにチェンジしたオーズは、カマキリソードで切り裂く。

「ハア！」

その様子をバツタカンドロイドで観察していた藍染とカザリ。

「ほう、これはとても興味深いな」

「あのさ、何故オーズはあの形態で戦うのかな？」

カザリの言葉に藍染はこう答えた。

「簡単だよカザリ君。カマキリのコアメダルは二刀流が使えるそうじゃないか？ 衛宮士郎も二刀流剣術が使える。つまり、カマ

キリのメダルは彼にとってはお気に入りの武器という事になる。まさに、彼なりの『切り札』ということだ」

「ふうん、亜種だと思って油断するなって事かな？」

「理解が早くて助かるよ。紅茶でも出そうか？」

そう言つて藍染は、紅茶の準備をしていた。

「ところで、ギルは何処行つたの？」

「彼なら、私の部下から一人気に入った人物がいたようでね、その人物と共にオーズの元へ向かつたよ」

「クツ！ オラア！」

ユニアルマジロヤミーは、右肩のウニの部分から棘のマシンガンを発射した。

「ハッ！」

しかしオーズは、いとも簡単に弾き飛ばした。

「クツ！」

「終わりだ！」

そう言っただけで構えるオーズであったが、

「士郎、後ろだ！」

「グアッ！」

アングの叫びも虚しく、突如何者かがオーズに体当たりしてきた。

「お久しぶりね、オーズのボウヤ、アング、そして騎士王のお嬢ちゃん」

「メズールにガメル！」

「チッ！」

セイバーはすぐさま剣を構え、アングは猛禽類の頭部に赤いボディの怪人に変った。

「これで、三対三」

「そうねガメル」

そう言ってセイバーがメズール、アंकがガメルと戦った。

「ハッ！」

セイバーは剣を振るいながらメズールに攻撃する。

メズールもそれをかわしながら反撃を行う。

「クッ！」

サーヴァント グレイド
英霊と欲望王の女性対決は、華麗で妖艶な戦いになっていた。

「ハッ！ どうしたガメル、そんなもんか？」

「アंक、お前、倒す！」

そう言ってガメルは闘牛のように体当たりするが、アंकは嘲笑うかのようにかわした。

「鈍いんだよお前は！」

そう言って中指を立てるアंक。

しかし、その時であった。

「随分と面白いモノが見れたな」

「!?!?」

その言葉に全員が振り向いた。

そこに居たのは、紫を中心とした紳士的な衣装に身を包んだ黒髪の男と、黒い革ジャンを羽織った男が居た。

「誰よ、アナタ？」

メズールの問いに、紳士的な衣装の男は突如姿を変えた。

「そうか、君達でもこの姿では分からないか」

その瞬間、紳士的な衣装の男はティラノザウルスの頭部を持つグライダー・ギルへと変った。

「ギル！」

「チッ！ よりによって一番会いたくない奴と会っちゃった」

「そう言うなアंक。 あはれよう 暴狂、遊んであげなさい」

暴狂と呼ばれた黒い革ジャンの男は、黒いガイアメモリを首元のコネクタに差し込んだ。

【バーサーカー】

その瞬間、暴の姿が黒いボディの鬼のような姿の怪人に変わった。

『狂人の記憶』を宿す怪人・バーサーカードーパントである。

「
—————」

声にならない叫びを上げながら、5mもある巨大な剣を振るいだすバーサーカードーパント。

「グアアアアア！」

流石のオーズ達もダメージを受けししまう。

「クッ！ ガメル、逃げるわよ」

「メズール、分かった」

そう言ってメズールはガメルと共に逃げ出した。

「が……………は……………」

破壊力が高すぎたのか、強制的に変身が解けた士郎にギルは、

「そこだ！」

そう言って何かを投げ飛ばした。

その瞬間、士郎は突如苦しみだした。

「グワアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

「ギル、お前まさか！！！」

アंकの問いにギルはこう答えた。

「そうだ、オーズにプレゼントを差し上げたのだよ。私のコアメ
ダルというプレゼントをね」

「貴様アアアアアアアアアアア！」

そう言ってアंकは羽手裏剣を飛ばすが、

「ハッ！」

即座に回避したギルがこう言った。

「さらばだアंक。 いずれまた会おう」

そう言っつてギルは立ち去り、変身を解いた暴も姿を消したのであった。

「士郎、しっかりしてください！」

そう言っつて士郎を抱きかかえるセイバー。

「まずいな……」

そう言っつてアंकは、拳を握り締めていた。

「士郎、士郎……… 士郎オオオオオオオオオオオオオオ！」

何故ギルは、自分のコアを士郎に放ったのか？

目的は一体何なのか？

その答えは、次回に続く。

第38話：暴走するOノ水槽王と重力王と『狂人の記憶』（後書き）

次回、暴走するOノ土郎の過去と紫のオーズと騎士王の涙

第39話：暴走するOノ士郎の過去と紫のオーズと騎士王の涙（前書き）

遂にあのコンボが!!
今回もWは出ません。

第39話：暴走するOノ士郎の過去と紫のオーズと騎士王の涙

衛宮低まで士郎を運んだセイバーとアング。

「……………シロウ」

主の昏睡状態に、セイバーの表情はもはや騎士王の気品が無く、まるで死んだような顔であった。

「目を……………開けてください……………」

その瞳からは涙が零れていた。

縁側でアイスキャンディーをほつばるアंक。

「随分とピリピリしてるな」

アーチャーの一言に、アंकは振り向く。

「何だ？」

「聞きたいことがある」

そう言って彼の隣に座るアーチャーは尋ねた。

「彼に何が遭った？」

「……………どうやら、お前の前じゃ沈黙は出来ないようだな」

アイスを半分ほど食べたアंकは、立ち上がりながらこう言い出し

た。

「ギルのお気に入りの手口でな、ヤツはオーズの体内に自分のコアメダルをワザと取り込ませる」

「何故そんなことを？」

「知るか！ ただ言える事は、奴のコアを使ったオーズは暴走するということだけだ」

そう言っただけで、残りのアイスをほうばった。

「ギルのコアを使ったオーズは、その強力な能力故に敵味方関係なく暴れます。 800年前も当時のオーズがああメダルで世界を滅ぼした」

「暴走するオーズか……衛宮士郎がそのオーズと同じことになる可能性は？」

「……ヤツの性格上、身を滅ぼす確立は90%以上のハズだが」

「だが？」

「ああ。 本来ギルのコアを取り込まれたオーズは、取り込まれた後すぐに暴走する。 だが士郎の場合は、昏睡状態という形で済んだんだ。 このケースは初めてだ」

アंकですら違和感を持つ出来事に、セイバーが現れる。

「アंक」

「ん？」

「もし、アナタの言葉が正しいのであれば、恐らくは……………」

セイバーは、あることを話し出した。

とても、悲しい事実を…………

三年前………… 『第三次世界大戦』が始まっていた頃であった。

海外の災害ボランティアに参加していた土郎は、戦場で重傷を負った人々を救助していた。

無論、セイバーも協力していた。

「シロウ、少し休まれては？」

「いや、俺が休んでも戦争は休んでくれない………何処の誰かは知らないが、戦争という形で人々を悲しませやがって」

そう言つて士郎は、再び戦場に足を踏み入れた。

そんな彼に、全てを砕く悲しい出来事が待っていた。

重傷で動けない人々や、巻き込まれた人々を捜す士郎とセイバー。

そのとき、セイバーがあるモノを発見する。

「シロウ、アレを！」

「な!？」

そこには戦場地帯に二人の親子がいた。

子供の方は涙を流し、親の方はその子を庇うように抱いていた。

「クッ！」

すぐさま士郎は、親子の方へ走り出す。

「シロウ！」

慌ててセイバーも走り出す。

必死で煙の中を探索する土郎。

すると、突如煙が晴れ、土郎があるモノを目にしてしまった。

「あ……………ああああああ」

それは、先ほど彼が助けようとした親子の亡骸　　とは言えないほどの無惨なものであった。

「そんな……………」

これを見た土郎は、地面に膝を付き、大粒の涙を流した。

「し……………るっ」

後から駆けつけたセイバーも、言葉を失ってしまふ。

「シロウ、お気を確かに」

慰めようとしたセイバーであったが、土郎はこう言った。

「俺は……………あの親子を助けられなかった……………俺が殺したのも……………同じだ」

「シロウ……………」

「うあああああああああああああああああー!!」

地面に顔を向けながら泣いていた土郎。

そして、彼に何も言えなかったセイバー。

この戦争は、多くの人々を苦しめた。

無論、衛宮士郎もまた、その被害者であった。

「まさかアイツが、一番欲望の渦の中心に立っていたとはな」

セイバーから話を聞いていたアングの第一声がこの一言であった。

「戦争は、あらゆる欲望が暴走する事で生まれたものだ。“革命を起こしたい”、“世界を変えたい”、“国のトップを潰したい”……そういう欲望の塊が集まっている」

「ええ。シロウは、今の自分に出来る事をやろうと、災害ボラン

ティアに参加していました」

「……ヤツが“正義の味方”になりたいという欲望を持つようになったのはそれか？」

「いえ、シロウは十年前に実の家族と同じ街に住んでいた人々を亡くしています。“正義の味方”になろうとしているのは、それがキツカケです」

「それも戦争が原因でか？」

「……………ええ」

「内容は違えど、戦争という『欲望』に二度巻き込まれるたあ、既にアイツ……心が乾いてるはずだぞ」

しかし、その時であった。

「チツ、ヤミーか！ コツチは大事な戦力が戦えねえってのによ！
！」

そう言ってアंकは外へ出るが、

「待ってくれ、アंक」

「シロウ！」

「お前！」

昏睡状態になっていた士郎が起き上がったのだった。

「ヤミーが暴れてるんだろ？ 行くぞ」

「分かってんのか？ お前の身体には」

「分かってるさ！ でも、休むわけにはいかないんだ！！」

その揺ぎ無い目を見たアंकは、呆れながらこう言った。

「ハア、セイバー。 お前大変だな、こんなバカな主人を持って」

「コレばかりは、アナタに同意です」

「ソレ、褒めてんのか？」

「んなワケねえだろ」

「呆れてるんです」

「ハハハハ………だよな」

こうして三人は、ヤミーの元へと向かった。

とある住宅街、多くの人々が眠っていた。

「さあ、眠れ眠れ！」

ウニアルマジロヤミーはそう言って、街中の人々を眠らせていた。

「させるかよ、変身！」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

仮面ライダーオーズは、すぐさまウニアルマジロヤミーに飛び掛るが、

「ハッ！」

「グアッ！」

突如現れたメズールに阻止されてしまう。

「フフフ……また会ったわね、オーズのボウヤ」

「メズール、貴様アアア！」

セイバーがメズールに飛び掛るも、

「メズールに、手を出すな！」

「ガッ！」

ガメルに阻止されてしまう。

「チッ！」

事実上、アंकはマズイ状況に立たされていた。

貴重戦力のオーズは、ギルのコアの所為で満足な戦闘が不可能。

そのパートナーのセイバーは、メズールとガメルの人質となった。

「さあ、アंक。取り引きよ」

「ヤッパリな」

「持つてるメダルを全部寄越しなさい。無論、齒向かえば騎士王のお嬢ちゃんとオーズの命はないわ」

「クッ……………」

人質を取られたアंकは、絶体絶命であった。

「（勝った……………」

心の中で勝ち誇るメズールであったが、

「アंक……メダルを……渡すな」

そう言っつて士郎が立ち上がる。

「シロウ！ 動いてはダメです！！」

セイバーが叫ぶがガメルに止められる。

「お前、黙れ！」

圧倒的な腕力によって腕を掴まれたセイバー。

「グアアアアアアアア！」

「セイバー！」

その叫びに士郎は、心からの叫んだ。

「やめろオオオオオオオオオオオ！」

その瞬間であった。

ドクンという音と共に、士郎の体からギルのコアメダルが三枚出現した。

「…… あれは、ギルのコア……！」

驚くメズールに構わず、それをすかさず手に取った士郎は、オーズドライバーに装着してスキャンした。

【プテラ・トリケラ・ティラノ・プトティラクノザウルス】

その瞬間士郎の姿が、緑の複眼を持ったプテラノドンの頭部にトリケラトプスの腕部、そしてティラノザウルスの脚部を持った紫色の装甲のオーズに変身した。

絶対零度を誇る古代生物のコンボ形態、仮面ライダーオーズ・プトティラコンボが誕生した。

「暴走か……………」

当時と同じ状況になると予想するアंक。

「マズイ、このままじゃ……………」

慎重派のメズールも、これには驚きを隠せなかった。

「ウオオオオオオオオ！」

するとオーズは、真っ先にガメルの元へ向かい、

「グアアアア！」

彼を殴り飛ばしたのだった。

「まさか……………」

暴走という言葉に恐れるセイバーであったが、

「スマナイ、セイバー。後は任せろ」

「え……………」

その一言を聞いた瞬間、涙が零れ出たのである。

「し……………シロウ！」

思わず彼に抱きつくセイバー。

これを見たアークは、驚きを隠せなかった。

「まさか、ギルのコアを制御したと!？」

無論、メズールとガメルもコレには驚いた。

「そんなバカな！」

「ホントに、オーズ!?」

セイバーを後ろへ引かせたオーズは、地面に手を突っ込み、そこからテイラノザウルスの頭部を模した斧を手にしたのである。

プトティラコンボの専用武器『メダガブリュー』である。

メダガブリューを構え、オーズはメズールとガメルを一蹴する。

「ハアアアアアアア!」

「グアアアアアアアアア!」

その拍子で飛び出したコアメダルをアंकが奪い取る。

「コイツは儲けたな」

「ガメル、一端引くわよ!」

「うん、メズール」

そう言って二人はすぐさま逃げ出した。

一方のオーズは、ユニアルマジロヤミーへと攻撃を変える。

「ハアツ!」

「グアア!」

その圧倒的な強さに手も足も出ないウニアルマジロヤミー。
すぐさまオーズは、ベルトのメダルをスキャンした。

【SCANNING CHARGE】

その瞬間、トリケラームの肩の突起が伸び、ウニアルマジロヤミーの身体に刺すと同時に凍らせたのである。

そしてオーズは、テイラノレッグの大腿部の突起を巨大な尻尾のように伸ばしてその一撃を叩き込んだ。

「グアアアアアアアアア！」

ウニアルマジロヤミーはその場で砕け、セルメダルへと変わったのであった。

「ハア……………ハア……………ハア……………」

変身を解き、その場で腰を下ろす土郎。

「お疲れ様です、シロウ」

そう言ってセイバーは、涙を流しながら抱きついた。

それを見ながらアंकは、こう呟いた。

「まさか、ギルのコアまで使えるとはな……………どつちやらお前には、コアメダルを使いこなせる才能があるようだな」

バツタカンドロイドを通じて、オーズの観察をしていた藍染とカザリとギルの三人。

「そんなバカな!？」

カザリは、プトティラコンボを使いこなす士郎に驚愕してしまう。

「ほう、私のコアで暴走しないとは……………とても興味深い」

士郎にコアメダルを埋め込んだ張本人・ギルは、モニターを観ながら感心していた。

「ほう、これは面白い」

そう言って藍染は、モニターの電源を切った。

「彼もWも、いずれ我々の脅威になるな」

不適な笑みを見せながら、藍染はその場を去ったのであった。

第39話：暴走するOノ士郎の過去と紫のオーズと騎士王の涙（後書き）

次回、射抜くAノ会【ぱーてぃー】

次回はあのタッグが登場！

第40話：射抜くAノ会【ぱーてぃー】（前書き）

あのコンビが登場！

第40話：射抜くAノ会【ぱーてぃー】

「ほう……これは美味そうな香りの『謎』だ」

そう言っつて前髪のみが黒い金髪的青年がそう言っつた。

「行くんだ、ネウロ」

「ああ。仕度だ弥子、『謎』を食いに」

魔人・脳嚙ネウロと相棒の桂木弥子が、依頼のあつた場所へと向かつた。

彼の好物の『謎』を求めて……

「エエエエエエエエエ！？ パーティー！？」

「ええ、そうなのよ」

フエイトは義母のリンディからあるパーティーに出席して欲しいと頼まれていた。

「でも、何でそんなことに！？」

「ホントはクロノに来てただけ……仕事で来れなくなっちゃったのよ」

そう言われ、リンディは手を合わせながらお願いしたのである。

「ハア……………」

溜め息をつきながら悩むフエイトであった。

「どうして休みの日にそういうことするのよ！」

「仕方ないだろ！ 僕だって忙しいんだから」

「だからって休日に頼まないでよ！ コツチは会社の人達から付き合いが悪いとか、変な噂が立てられてるんだから」

実はフェイトはコレまで、クロノの突然の急用で休日をマトモに過ぎした事が無かったのである。

「そんなもの別に気にする事じゃないだろ！」

「気にしてるから嫌なんだよ！」

徐々に口論になるが、

「だろうが」

「そうだけど、仕事だから仕方ないだろ」

「ソレがダメだっけって言うてるんだろっけ！」

バンと机を叩く上条であったが、突如土御門が現れた。

「ク〜ロ〜ノ〜、話は聞いたぜよ」

「いや、お前どっから聞いてたの？」

「可愛い妹の休日を潰しておきながら、その詫びを一回もしないとは、シスコンの風上にも置けないヤツだな！」

「何だと!?!」

「おい、だんだんシスコン談義になってるぞ」

徐々に話の趣旨が変わってきたことで、頭を抱えてしまう上条。

「“妹”と言う存在がこの世界に存在だけでも感謝するもんだぜ？俺だっけな、可愛い義妹がメイドさんになるうと頑張ってる、その姿にはマジで興奮するぜい！」

「さっきからキミはシスコンシスコンとバカにしてるようだが、僕はただ妹離れが出来ないだけだ！」

「それがシスコンです」

「お笑いだにゃー、自分がシスコンである自覚もねえのかよ」

「断じてシスコンじゃない！」

「もう良いよ！ しつげえよお前等。 てか、もう帰れ！」

シスコン談義にもう怒りが頂点になりそうな上条であった。

パーティ当日。

「ハア……（結局出席する羽目になるんだよなあ）」

青いドレスに身を包んだフェイトの姿に男性陣は釘付けであった。

「（うう〜、早く帰りたい）／／／／」

そう思いながら視線が気になるフェイトであったが、

カランとグラスの中の氷を鳴らしながら一人の青年が笑顔でそう言った。

「良ければ、俺とお話ししませんか？」

長く赤い髪に緑色の瞳、女性に見えるくらいの整った顔立ちの青年が黒いスーツに身を包んで、フェイトに声を掛けて来た。

「え／＼／＼／」

それを聞いたフェイトは、足を止める。

「（綺麗な人……………とても男の人には見えない）／＼／＼／」

「酒は飲めますか？」

「あ……………いいえ。全くダメです」

「ご安心を。コレ烏龍茶なんです」

そう言って青年は、もう片方の手に持っていたグラスを彼女に渡す。

「どうも……………」

異性に話を掛けられるという出来事は、驚く事は無かったが、紳士的で優しく雰囲気も良い青年に声を掛けられる事は滅多に無かったフェイトは、緊張の余りに気ままずくなってしまふ。

「あああああああああ、私フェイト・T・ハオラウンと申します。 アナタの名前は？」

「南野秀一、蔵馬って呼ばれています」

そう言ってフェイトと蔵馬は、自己紹介をしたのであった。

一方、舞台裏では……

「オーホホホホ！」

高笑いをしながら扇子を扇ぐこのパーティーの主催者マダム・フレシアは、ペットのヒツジザルを肩に乗せながらこう言った。

「“あの子”は来ているのですか？」

「はい、只今丁寧に運んでいます」

「宜しい、皆羨ましがるわよ。あの子の姿を見れば」

そう言つて笑いが止まらないマダム・フレシアは、自分の誕生パーティーにあるモノを連れてきて居るようであるが、

「（ハア……………コレだから金持ちつてのは……………）」

執事の一人がそう言いながら溜め息を吐く。

「　　ったく、何でこんな事に……………」

そう良いながら上条は、黒を中心としたスーツに身を包んでいた。

以外に似合っていた。

「作者、“以外”は余計だ」

上条は現在、仕事の依頼でマダム・フレシアの護衛を依頼された。

「（別に怪しいヤツなんざいねえと思うけどなあ……………」

そう思いながら周囲を見渡す上条であるが、

「ん？」

ある人物に目を付けたのである。

闇のように黒く、影のように暗く、そして夜の用に黒いスーツに身を包んだ女性SPに目を付ける。

「（何だ……………アイツ？）」

他のSPからは全く感じられない雰囲気、上条はすぐさま彼女の後を追った。

「探偵……なんですか？」

「正確には探偵助手なんですけどね」

「じゃあ、蔵馬って呼ばれるのは……」

「ええ、仕事上の呼び名です」

フェイトと蔵馬は、いつの間にか世間話をしていた。

最初は緊張していたフェイトであったが、蔵馬が優しくエスコートしてくれたため、緊張の糸が解れたのである。

「その探偵さんってどんな人なんですか？」

「喧嘩っ早い性格ですが、慕われる部分がある……そう言う感じですよ」

「へえー」

「ところで、フェイトさんは何か悩みでも？」

「ふえ？」

「さっき何か思いつめたような雰囲気だったので」

「(き……………気付かれてたアアアアアアアアアア!)」

隠せても無駄だろうと思ったフェイトは、蔵馬に全てを話した。

「成程、お兄さんがねえ……………」

「幾ら何でも、少しは空気を読んで欲しいくらいです」

「成程、あの呼び名は本当だったんですね」

「呼び名?」

クロノの話をしたフェイトは、蔵馬の言葉に疑問をぶつける。

「ええ、彼はどんな状況でも空気を読まないところが多いので、通称・KYのクロノと呼ばれてたらしいんです」

「(クロノお、すっごいバカにされてるよ)」

自宅でも空気を読まない義兄のKYっぷりが、かなり噂されていることを知って、苦笑してしまうフェイトであった。

廊下を歩いていたスーツの女性は、いきなり立ち止まる。

「いい加減に顔を見せたらどうだ？」

「ちえ、気付いてたか」

そう言って上条当麻が姿を見せた。

「何故、私が怪しいと思った？」

「アンタは他のSPとは全く違う雰囲気を見せてたからな」

それを聞いた女性はこう言った。

「成程な、もう少し警戒するべきか……」

その瞬間、女性の姿が消えたのである。

「何!？」

これは驚く上条であるが、

「が」

突如、後頭部を強打されてしまう。

女性はフツと笑いながらこう言った。

「悪いな、恨みは無いが此処で眠って貰うぞ」

そしてそのまま立ち去ろうとしたその時であった。

「いつてえ、今のは流石に効いたぜ。不幸だあ」

「な!？」

起き上がる上条に、驚きながら振り向く。

「その身体能力、並みの人間のモンじゃねえな」

そう言つて上条は女性を睨む。

「……………ターゲット 標的以外を攻撃するのは規格外であるが仕方無い」

すると女性は懐からメモリを取り出した。

【アーチャー】

メモリを腰のベルトに差し込むと、女性の身体は狩人をイメージした怪人に変身した。

「ドーパント!?!」

「我が名は弓堂由観、『弓騎士の記憶』を宿すガイアメモリのドーパント」

「堂々と名乗るたあ、礼儀が良いな!」

そう言つて上条は、ダブルドライバーを装着した。

【JOKER】

事務所で本を読んでいたユーノもドライバーを通じてサイクロンメモリを構える。

【CYCLONE】

「変身!」

【CYCLONE・JOKER】

仮面ライダーWは、戦闘態勢に入った。

「さあ、その幻想をぶち殺す!」

その同時刻、

「此処みたいだねネウロ」

「フム、微かだが『謎』の気配が漂っている」

そう言っつてネウロは、口から出た涎を拭き取りながら会場へ向かう。

「行くぞ弥子。この『謎』はもう、我が輩の舌の上だ」

第40話：射抜くA/会【ぱーてぃー】（後書き）

次回、射抜くA/予【よかん】

第41話：射抜くA／予【よかん】（前書き）

遂に激突！

第41話：射抜くAノ予【よかん】

会場の外、ネウロと弥子があるモノを発見した。

「これって……」

「ほづ……」

SPが血塗れで倒れていて、車体ですら原型を留めていなかった。

弥子はすぐさま病院に連絡した。

「これって一体……」

「行くぞ弥子、『謎』はすぐそこだ」

そう言ってネウロと弥子は、会場へ向かった。

射抜くAノ予【よかん】

「え、皆様。私の誕生パーティーにお越し頂き、誠に感謝します
でございます」

「ぎ……ザマスって、本当に言う人いるんだ」

「俺も、初めて聞きましたよ」

そう言ってマダムの口調にフェイトと蔵馬は苦笑する。

しかし蔵馬は、彼女の後ろにある柵にも目をつけていた。

「（それにしてもあの檻………宝石を見せるなら、もう少し枠を狭くするべきじゃないのか？）」

その檻は、宝石を囲むものにしては、余りにも枠の部分が大きすぎたのである。

「（まるで、巨大な生物を閉じ込めるような感じだな）」

「蔵馬さん？」

「え、ああ、いや……あの後ろの檻が大きくなってしまいました」

「はあ……………」

そんな彼の表情を見ていたフェイトは、

「（何だろう、さっきの蔵馬さんの顔。……………何か嫌な予感が）」

そう思いながら彼の顔をずっと見ていた。

しかし、彼女の予感は、後に当たる事になってしまっただけであった。

その同時刻、アーチャードーパントと交戦中の仮面ライダーWは、
「クソッ！ コイツ、接近戦が強すぎる！！」

「飛び道具使い⇨接近戦に弱いつていうのは、素人の考えだからね」
そう言って距離を取りながらメモリを取り替えた。

【LUNAR・TRIGGER】

ルナトリガーの追撃弾で攻撃を仕掛けるが、

「ハッ！」

アーチャードーパントは、両手に持った双剣で弾丸を叩き落した。

「アイツ、只の弓使いじゃねえよ！」

「今頃言われてもね」

「どつする！？」

「此処は接近戦に入るよ！」

【SKULL・SOUL】

そう言ってWは、スカルソウルにチェンジした。

「ウラァ！」

ソウルブレードを振り下ろすが、アーチャードーパントは双剣で防いだ。

「クソッ！ 出来るな……………」

「互いにな」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「ハアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

刃と刃のぶつかり合い。

もし、これを目にしている者が居るならば、恐らく簡単に観れない筈だ。

何故なら、速すぎる故に目で追うことが出来ないのだ。

するとアーチャードーパントは、一度空中へ舞い上がると、

「行くぞ！」

双剣の柄と柄を合わせて、一本の弓を作り上げた。

「双剣が弓に!?!」

「アーチャーの由縁はそこだったのか!?!」

これにはWも驚きを隠せなかった。

「相棒、俺達も!」

「ああ」

そう言ってWは、ソウルブレードの柄のマキシマムスロットにソウルメモリを差し込んだ。

【SOUL MAXIMUMDRIVE】

「ソウルスラッシャー!」

「喰らえ!」

紫色の斬撃と蒼白い矢がぶつかり合った。

その反動でWとアーチャー・ドールは吹き飛んでしまった。

「グアッ！」

「グッ！」

結果は引き分け。

しかし、二人は立ち上がった。

「クソッ……………強い……………」

「ハア……………ハア……………出来る！」

一方その頃、マダム・フレシアのSPの一人は、

「此方A班。 “アレ”はどうなった？ おい、応答しろ！」

彼の連絡に、仲間が全く応じなかった。

いや、応じる事が出来なかったのである。

今、新たな事件がこの会場で襲い掛かってくるのであった。

「？」

「あの、どうしました？」

蔵馬の異変に、フェイトが尋ねてしまう。

「いや、先程から物音が聞こえた気がしたので……………」

「物音？」

「失礼、空耳みたいですね」

そう言っつて二人はマダム・フレシアの話聞いていた。

「実は皆様をお呼びしたのは、今日新しく我が屋敷に新しく入ることになったペットのフローラちゃんのことですの」

「ペット？」

「てつきり宝石か何かかと思った」

それを聞いていた招待客は、驚きながらそう言った。

「（やはりあの檻は、動物を閉じ込めるための檻か）」

聞いていた蔵馬も、檻の正体に気付く。

するとフレシアは更にこう言った。

「実はフローラちゃんはある絶滅種の生物でして、それを我が財団の科学技術によって甦らせたのです」

その時、檻の方からドスンドスンという足音が聞こえた。

「（何？ この胸騒ぎ？）」

「（この足音は……象？ いや、もっと別の大型生物）」

胸騒ぎを感じたフェイトと足音で生物を特定する蔵馬。

「ホラ、聞こえるでしょう。出て追いで、フローちゃ」

すると、会場へ跳んできたのは原型を留めていないトレーラーであった。

「え……………何？」

「何か……………来る……………」

驚くフェイトとは対照的に警戒する蔵馬。

そしてそこへ現れたのは、

「グルルルルルル……………」

誰もが図鑑で見たこともある生物であった。

「ティラノ……………ザウルス……………レックス！？ まさか、こんな巨大恐竜が！？」

「ウソ！？」

蔵馬のフェイトも、コレには驚くが、フレシアは小さく呟いてしま

う。
「……………電磁拘束装置が作動してない」

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

雄叫びを上げたティラノザウルスのフローラは、檻に体当たりを行
った。

驚く一同に、フレシアはこう言った。

「み、皆様大丈夫でございますの。この檻は特注で、象が暴れても絶
対に壊れな」

だがその瞬間、バゴーンという音と共に檻が壊され、恐竜が雄叫び
を上げた。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「ウアアアアアアアアアアアア！」

「キヤアアアアアアアアアア！」

これには全員が慌ててしまい、逃げ出してしまうのであった。

戦いが長引く事を危惧したアーチャードーパントは、変身を解いて、元の弓堂由観の姿に戻った。

「此処は退かせて貰う。……この勝負、預けた」

そう言ってその場から消え去った。

「不幸だ、何かヤバイ奴に目エ付けられたみたいだ」

「とりあえず僕等も変身を解くよ」

「そうだな」

そう言ってWも変身を解いたのであった。

上条は、一端会場へ戻ろうとするが、

「ん？」

「「ウアアアアアアアアアアアアアアアア！」」

「「キヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」」

「「ギヤアアアアアアアアアアアアアアアア！」」

突如走り出す人達に踏み付けられてしまう。

「ふ……不幸だあ〜」

踏まれながら上条はしっかりそう言った。

「グルルルルル……」

フローラは今でも暴れだしていた。

「このままじゃー!」

そう言ってフェイトは自身の能力を発動した。

彼女の能力名は『バルディッシュ迅雷閃光』と呼ばれ、雷の如く高速で動く事が可能だが、同じ電気系でランクSでも御坂美琴より強さの差は低い方なのである。

能力を発動させ、フローラに立ち向かおうとするが……

「（でも、あんな大きな恐竜に勝てるの？）」「

巨大な相手に関わった経験がないため、手足が震えてしまうフェイト。

その時、フローラが襲い掛かってきたのである。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

向かって来るフローラにフェイトは、

「（どうしよう……足が……）」

すくみ足で動けなくなっていた。

フローラの巨大な足が今にも彼女を蹴り飛ばしそうになった。

「（もう……ダメ！）」

そう思ったその時であった。

「危ない！」

「え？」

突如、蔵馬が彼女の元へ駆け寄り、フローラの蹴りから窮地を救った。

「ギリギリセーフ！」

「蔵馬さん！」

「怪我は？」

「あ、ハイ。大丈夫です／＼／＼／」

しかし、フェイトは彼の腕を見て驚愕する。

「そ、その腕！」

右手におびただしい量の血が流れていた。

「ああ、コレ？ 別に気にする事じゃないですよ」

そう言って笑顔で安心させる蔵馬。

「でも……………」

心配するフェイト。

だがフローラは、そんな二人に急接近してきた。

「マズイ！ このままじゃ……………」

するとその時であった。

【CYCLONE・TRIGGER】

突如、風の塊がフローラの頭部に当たった。

「オイオイ、こりゃパーティーの余興イベントの一つか？」

そう言つてサイクロントリガーに変身していた仮面ライダーWが、右手にトリガーマグナムを構えていた。

第41話：射抜くA / 予【よかん】（後書き）

次回、射抜くA / 挑【とらいある】

次回は浜面が登場します。

第42話・射抜くA／挑【とらいある】（前書き）

完結篇です。

第42話：射抜くA／挑【とらいある】

「つうーか、何で恐竜がいんの？　ここは原始時代にタイムスリッ
プでしょうか？」

仮面ライダーWはそう言って、トリガーマグナムを構えていたが、

「グオオオオオオオオオオ！」

ティラノサウルスのフローラは、Wに目掛けて突進してきた。

「うおっとー！」

慌てて飛び上がってフローラの上を越したW。

しかしフローラは、そのままロビーに突っ込んでしまう。

「な、何だアリヤ！？」

驚くWであるが、

「その声、上条当麻君か？」

蔵馬が後ろから呼びかける。

「んあ、もしかして蔵馬か？」

「随分と、久しい顔ですね」

「てか、コレどう言う状況？」

知り合いがいたらしく、Wはすぐさま蔵馬から状況を聞いた。

「マダム・フレシアは、恐竜を遺伝子操作で甦らせてペットにしていたんです。それが暴れだして」

「はぁ！？」

「恐竜を甦らせるとは一体どう言う神経してるんだ？」

上条が驚き、ユーノはフレシアの考えにクレームを付けた。

「キヤアアアアアアアア！」

しかし、ロビーから悲鳴が聞こえたため、Wはすぐさまそちらの方へ顔を向けた。

「オイオイ、逃げ遅れがまだ居たのか！？」

「まずはコッチを優先しよう！」

Wがそう言って向かおうとするが、

「待って！」

フェイトに呼び止められる。

「フェイト？」

「お願い……あの子を助けて……きつと自分の生きてきた環境とは違うところに来たから混乱してるの……お願い……助けて」
涙を流しながら心の叫びを上げるフェイトにWはこう言った。

「蔵馬、これから恐竜を止めに行く。ソレまで、ウチのお得意さんを頼むぜ」

仮面ライダーWは、数億年の歴史から甦った『命』を救いに向かった。

ロビーに向かうと、多くの人々がバラバラに逃げて行った。

「ッたく、どっかに隠れていりゃ良いものを……………かえって逆効果じゃねえか？」

「まあ、人間の考えはよく分からないからね」

すると、マダム・フレシアとそのSPが目と鼻の先にいた。

「お前等、銃を構えろ！」

そう言ってSPが銃を構えていた。

「な、何をなさうの！」

フレシアが呼び止めるが、

「もし此処でフローラを殺さなければ、アナタは破産どころではあ

りませんよ!」

そう言っつて弾丸を放つが、

「させるかよ!」

【LUNAR・TRIGGER】

すぐさまWは、ルナトリガーにチェンジして引き金を引いた。

ルナメモリの力によつて軌道を変則的に変える弾丸で、SPの弾丸を全て落とした。

「な、何だ!？」

「今、弾丸が勝手に!？」

「命は大事にするもんだぜ」

驚くSPに聞こえないように、Wはそう言った。

ホテルの外では、

「フア〜、暇だな」

コンビニで買ったジュースを飲みながら、浜面仕上は休んでいた。

「ワアアアアアアア！」

「キヤアアアアアア！」

「ん？ 何だ？」

しかし、ホテルから騒ぎ声が聞こえた。

「誰かスゲエ有名人でも来てんのか？」

すると、その時であった。

「グオオオオオオオオ！」

ドガーンという音と共に、ティラノサウルスが壁を突き破って現れたのである。

「……………」

これには浜面も啞然となる。

「そ、そうか！ 俺は夢でも見てんのか！ 恐竜が生きてるわけがねえもんな」

自分にそう言い聞かせるが、

「お、浜面。 丁度良いぜ」

Wがそう言って近づいてきた。

「一緒に恐竜捕まえないか？」

「は？」

こうしてWと浜面は、ハードボイルダーとマシンディアブロスに乗り込み、フローラを追いかけていった。

「なあ上条、分かり安く教えてくれるか？」

「安心してくれ、俺も良く分からなねえんだ」

「ただ言えることは、あの恐竜はマダム・フレシアのペットで、フ
イトから殺さずに止めて欲しいとの依頼だ」

「随分可愛いペットだな!？」

ユーノの説明を聞いた浜面は、すぐさま“恐竜がペット”という部
分にツツコミを入れ。

すると、とある交差点でフローラが暴れていた。

「んで、本当に良いのか？」

「足止め程度だろ？ だったら任せる主人公^{ヒーロー}」

【ACCEL】

「変身!」

【ACCEL】

浜面は仮面ライダーアクセルに変身すると、今度は信号機を付けた
ストップウォッチのような青いガイアメモリを手を取った。

【TRIAL】

「ん、何だソレ？」

「まあ、見てなって」

そう言っつてアクセルは、ベルトメモリを取り替えた。

【TRIAL】

その瞬間、アクセルのボディカラーが赤から黄色に変わり、そして装甲が削れると同時に青に変わった。

青いボディにオレンジの複眼、オフロードバイクを模した『挑戦の記憶』による高速移動形態、アクセルトリアルへと変わった。

「スゲー！」

「これは凄いメモリチェンジだ」

「まあな。けど装甲が薄い分、防御力が低下すんのが難だけど」

そう言っつてアクセルは、何時でもOKという構えを取る。

「んじゃ、任せるぜ」

「おう！」

暴れるフローラにアクセルは、もの凄いスピードで走り出した。

「ハッ！」

「おー！」

その高速移動にWも驚きを隠せない。

アクセルが走っている間、Wはバットショットをトリガーマグナムを装着しながらあることを考えた。

「狙うは足だね」

「ああ。どんなにデカイ図体でも、小指が角に当たったら泣くのと同じだ」

尻尾から頭部へ登ったアクセルは、頭頂部に向けて踵落しを叩き込んだ。

「オラア！」

ドガツという音と共に怯みだすフローラ。

「ガアアアアアアアアア！」

「今だ、上条！」

アクセルの叫びに、Wはマグナムを足へ向ける。

「一回で決める」

【TRIGGER MAXIMUMDRIVE】

バットショットのスコープで、フローラの足をロックオンする。

「トリガー……………バットバースト！！！」

銃口から黄色と青の弾丸が放たれ、フローラの足の指の間に命中した。

「ガアアアアアアアアア！」

強靭な足にダメージを負ったフローラは、その場で倒れてしまったのであった。

「依頼、完了だぜ」

同時刻、Wがフローラを止めた場面を目撃した一人の男。

「クソッ！」

そう言っただけだそうとするが、

「成程な、興奮剤をトレーラーの中に忍ばせておいたのか」

そう言っただけでネウロが男の前に現れた。

「SPになり済ませておけば、予めトレーラーの中を確認できるし、粉末状の興奮剤をあの中に入れることが出来る。後はトレーラーが走る時に外から流れる空気と共に興奮剤が恐竜の口の中に入る…
…実に単純なトリックだな」

そう、フローラの暴走はこの男の犯行によるものであった。

「あ、あの女がいけないんだ！ ペットの自慢のためだけに俺等を
コキ使うから！」

「フン、微弱だが『謎』は『謎』だ。食わせて貰うぞ」

そう言っつてネウロは本来の姿に変わり、

「頂きます!」

「ウワアアアアアアアアアアアア!」

『謎』を喰らったのであった。

その夜、蔵馬は傷の手当を終えた帰りであった。

「ん?」

「どじも」

するとフエイトが現れる。

「あの、食事でも御一緒にどうですか？／＼／＼」

「そうですね、お願いします」

そう言って二人はレストランへと向かった。

食事をする二人は、こんな会話をする。

「そう言えば、恐竜はどうになりましたか？」

「あの後軍が保護して動物園で暮らしてるそうですよ」

「そうですか。殺されるような事が無くて良かったですね」

恐竜の安否を聞いてホッとする蔵馬。

「それからマダム・フレシアは今回の件で警察から事情聴取を受けてるそうですね」

「でしょうね」

事のキツカケを作ったフレシアに関しては無関心であったが。

その後フェイトは、蔵馬に自分の気持ちを伝えようとした。

「あの……蔵馬さん／＼／＼」

「ん？」

「実は……伝えたい事があるんです／＼／＼」

「え？」

「実は私、蔵馬さんの事がす　　」

フェイトが蔵馬に告白するが、

「あ、失礼」

そう言っつて蔵馬は、突如鳴り出した携帯電話を手に取った。

「もしもし……何ですかぼたん、人の大切な時間を」

知り合いからの電話であるが、突如電話して来た事に怒りを見せる蔵馬。

「分かりました。すぐに戻ります」

『あのさ、蔵馬。もしかして怒ってる?』

「怒ってる以外何があるんですか？」

そう言っただけ電話を切った蔵馬は、フェイトに申し訳ない顔でこう言った。

「すみません、急用が入ったようで」

「あ、そうですか」

こうして二人のディナーが終わったが、

「（今度こそは、告白しなきゃ!）」

「（あんな可憐な人、今まで出会えなかったな）」

どつちやら互いに画思いのようであった。

第42話：射抜くA／挑【とらいある】（後書き）

くオマケく

蔵馬

「ぼたん、少し頭冷やしましょうか」

ぼたん

「ちよつ、どうしたんだい蔵馬！ 顔が笑つてな ギヤアアアア
アアアアア！！」

幽助

「ぼたんのヤツ、蔵馬に何したんだ？」

桑原

「相当、厄介なことしたんじゃないかねえか？」

飛影

「死んだな」

第43話：復讐のM／ビデオレターと市長の依頼とアフロ男（前書き）

新たな物語が始まります。

第43話：復讐のMノビデオレターと市長の依頼とアフロ男

「あそこか？ 次の依頼がある場所ってのは」

一緒に乗っていた左之助達『喧嘩屋』一行は窓の外からの風景を見ていた。

その理由は、三日前のことであった。

復讐のMノビデオレターと市長の依頼とアフロ男

久しぶりに高い報酬を得た上条達は、必要な食料と物品を得るために買出しに出るところであった。

その際、左之助達に出会うが、

「久しぶりだね、上条当麻」

そう言つてスタイル「マグヌスが現れる。

「スタイル、何の様だ？」

上条の問いにスタイルは、懐からテープを取り出した。

「アーケビショップ最大教主からキミにコレを渡せとのことだ」

テープを渡された上条は、疑問に思いながらこう言った。

「何でお前がこんなメンドくさい事してるんだ？」

「仕事なんだから仕方ないだろ」

そう言つてスタイルは煙草を一本吸いだす。

「兎に角、テープは渡したからな。見るかどうかはキミ次第だ」

スタイルは、そう言い残してその場を去った。

買い物の予定であったが、テープを見ることを優先することにした。

「ところで当麻、その最大教主アークビショップという人物は何者なのだ？」

ルキアの問いに上条は答える。

「天蘭組を創造者って言えば良いかな……所謂、組織のお偉いさんだ」

そう言って上条はテープの中身を観る。

『御機嫌よう、『幻想殺し』。久しぶりじゃのう、最大教主アークビショップの口ーラじゃ　と言いたいが、余が一人で喋ってるようなものじゃからな』

そう言って独特の喋り方をする金髪の外見が18歳くらいの女性が

画面に映った。

「オイオイ、こんなガキンチョが組織のお偉いさんか!？」

「こんなヤツでも、立派なお偉いさんだぞ」

初めて観るローラの顔に恋次が思わずそう言ったが、上条にツッコまれる。

『実は、神都このまちの離れにある月光街ムーンライトシティーで起きている連続殺人事件の犯人の逮捕の依頼を受けて欲しいのだ』

「殺人事件？」

疑問を感じた上条であるが、ローラは事件の内容を教えた。

『犯人は突如現れ、女・子供関係なく己の素手だけでその命を肉塊に変える事が出来、警察ですら瞬殺なのじゃ』

「マジかよ……………」

「普通ではあり得ん話だな」

恋次とルキアはその説明に驚きを隠せなかった。

『本当なら余が組織を動かしてその街に加勢に行きたいところなのだが、上層部はそれを許さない』

「よーするに、自分達の代役を務めて欲しいって事か」

『なお、市長からこの依頼に1800万円の報酬が掛けている』

「な!？」

これには一同が驚いていた。

『では、この辺で失礼する』

そう言って映像が途切れ、画面がザーザーと砂嵐になっていた。

「ど、どつするのだ当麻？」

ルキアの問いに上条は、

「行くしかねえだろ。そんなヤツを放っておくワケにはいかねえからな」

そう言って上条は買出しのために外に出たのであった。

三日後

電車を降りたメンバーは、月光街ムーンライトシティに到着した。

メンバーは上条当麻、ユ一ノ・スクライア、朽木ルキア、阿散井恋次、ティアナ・ランスター、スバル・ナカジマ、インデックス、柴馬アトリ、相楽左之助、ノーヴェ・ナカジマ、志村新八、衛宮士郎、アंक、セイバーの14人である。

「悪いな衛宮さん、来て貰って」

「気にすんな。そんな事件を野放しに出来ないしな」

そう言って士郎は、笑顔で答えた。

「とりあえずは宿探しだな」

アंकがそう言って、宿を探すことにした。

宿に着いた一同は、部屋分けのジャンケンを行った。

結果、下記の通りになった。

Aルーム：上条、ユーノ、土郎、アंक

Bルーム：セイバー、ティアナ、スバル

Cルーム：インデックス、アトリ、ルキア、新八

Dルーム：恋次、左之助、ノーヴェ

その内上条、土郎、アंक、ユーノ、左之助の五人は、市長が居るビルへと向かった。

「市長の卯ノ花烈と申します。 申し訳ありません、貴方達にこんな危険な仕事を任せることになるとは……………」

そう言つて、首に三つ編みの髪を束ねた大和撫子のような女性・卯ノ花烈は気まずい顔をする。

「アンタも大変だな、街が完全にゴーストタウン状態だぜ？」

上条の言葉に、彼女は溜め息を着いた。

「情けない話しです。 このままでは街が『あの男』の支配下になつてしまいます」

そう言つて卯ノ花は、秘書の虎鉄勇音に顔を向ける。

「勇音、彼らに資料を」

「はい」

そう言つて勇音は上条に資料の入った封筒を渡した。

「此方です」

「どうも」

暗い表情を見せる卯ノ花は、彼らにこう言った。

「気を付けて下さい。 相手は途轍もなく異常で凶暴で、命を何とも思わない冷徹な殺人者です。 ですから」

「心配すんな」

「え？」

「必ずそのクソ殺人鬼の幻想を、俺がぶち殺してやるよ」
そう言って上条は笑顔で安心させたのであった。

一同がビルを後にした。

「頼みましたよ、上条当麻さん」

その様子を窓から観ていた卯ノ花は、小さくそう呟いた。

「大丈夫なんでしょうか？」

「勇音、今は彼らの信じましょう」

心配する勇音であったが、卯ノ花は安心させるようにそう言った。

外を歩くアंकが珍しく疑問を感じた。

「おい当麻、あの女……本当に最大教主アークヒンショップと繋がってるのか？」

「そうか、アंकは神都の人達しか知らないから分からないから知らないんだっけ？」

「まあな」

するユーノがこう言った。

「普段卯ノ花さんは、穏やかで優しい印象だからどっちかと言って言うと華道の先生とかに見えるけど………」

「まあ、実際に開いてるもんな」

そう言いながら上条は、封筒の中身を取り出した。

「うお！ コイツが犯人の顔写真だぜ」

「どんな顔だ？」

「どうやら前科持ちのようだな」

「しかもアフロ」

上条、士郎、アंक、ユーノの順番でそう言うが、

「な！？ ウソだろ……………コイツが！？」

左之助が犯人の顔写真を見て驚いたのであった。

果たして、彼と事件の犯人との繋がりは一体？

第43話：復讐のM／ビデオレターと市長の依頼とアフロ男（後書き）

復讐のM／正体と悲しみの涙と新たなヤミー

第44話：復讐のM / 正体と悲しみの涙と新たなヤミー（前書き）

アフロの正体が判明する！

第44話：復讐のMノ正体と悲しみの涙と新たなヤミー

仮面ライダーW（another world story）、
これまでの三つの出来事。

一つ…ローラから市長の依頼を受けることになった上条達。

二つ…目的地・月光街↑インライトシティに到着。

三つ…市長から渡された殺人鬼の写真を見た左之助が驚愕する。

（復讐のMノ正体と悲しみの涙と新たなヤミー）

とある酒場。

五人は渡された資料を見ながら左之助の話を聞いていた。

「ギャンザレジック？」

「ああ、俺が『喧嘩屋』を開いて数日経った頃なんだけだよ。相
当のワルでな、ある路地裏で女を襲って逃走してな、俺はその女の
ダチからその『喧嘩』を買ったんだ」

「んで、強かったのか？」

「確かに常人外れした一撃は持ってたがな……………」

そう言つて左之助は当時の出来事を思い出す。

（ポリが来るまで俺と喧嘩して貰うぜ？）

（ハッ、俺に殺されてえようだな！）

ギャンザはそう言つて左之助の顔面に一撃を入れたが、

（そんなモンが、効くかよ）

打たれ強さを売りとする左之助にとって、そんな攻撃は全く通用しなかった。

(うらあああああああ！)

(ガッ！)

左之助の一撃を受けたギャンザは、彼がその場を去った後に警察に逮捕された。

「本来なら懲役40年の筈だったんだが、後に脱獄して行方知れずって所かな……………」

そう言っつてつまみを口にした左之助。

「アイツの拳は、確かに常人離れしてるけど……………連続殺人鬼になるような化物クラスには発展しなかった」

「何か彼を変えた……………ということですか？」

「まあ、そう言うことだ」

すると、店主である40代の女性が彼らの前に出る。

「どうしたんだいお客さん、資料なんか広げて？」

それを聞いた上条は、

「ああ、俺達万時屋って言うんだ。　実は例の殺人鬼を捕まえるつもりなんだ」

その瞬間、店主が慌てだす。

「ちょ、ちょっと待ったお客さん！ それは止めときなつて、警察だつて殺されてるんだよ！！」

「でもオバサンも商売が上がったりなんだろう？」

「あたしは、まだ良いほうだけど………」

そう言つて店主は一人の女性を見ていた。

「あの娘さん、例の殺人鬼にお兄さんを殺されてね………それ以来ずっと飲んだくれてんだよ。もうすぐ結婚だつてんのに」

それを見た上条は、彼女の元へ足を踏み入れた。

20代くらいの女性が酒を飲んでいた、

「よう」

「ん？」

上条が声を掛けると、女性が顔を向く。

すると上条は、酒瓶を自分のグラスに注ぎ、酒を飲んだ。

「一杯奢るぜ。言いたい事を吐いたらどうだ？」

それを聞いて女性は涙を流した。

とても悲しい涙を……

「アンタには分からないわよ……私は、一週間後に結婚するつもりだった。あの殺人鬼が来て以来、誰も外に出られなくなった」

「……………」

「兄は誇り高い人だった。事件が解決したら私の花嫁姿を見守ってくれるって笑ってたのに……………なのに……………なのに……………」

……………」

たった一人の肉親の死に涙する女性。

それを聞いた上条は、無言のまま酒瓶を手に取り、一気に飲みだした。

「な!？」

「ちよつと、そんな強い酒一気に飲んだら!！」

「てかオメエ、まだ18だろ！」

それを見た左之助と店主は慌てだした。

因みに、左之助も19歳ですが普通に酒飲んでます。

ゴクゴクと酒を飲み干す上条は、

「プハアー！ オラア、飲んだあ！」

そう言つて酒瓶をテーブルに置いた。

「コレだけ飲めば、アンタの気持ち分かるかもな。だから安心してくれ、クソツタレの殺人鬼の幻想を必ずぶち殺すからよ」

その言葉を聞いた女性は心の底に封じ込めた“涙”を流した。

「あれ、そついや士郎とアンコは？」

左之助は、今更ながら士郎とアンコが居ない事に気付く。

因みに彼はアンコのことを“アンコ”と呼ぶ。

「さつき“ヤミー”の気配がしたから行く”って」

それをユートノはそう言った。

とある街角。

「キシヤアアアアアアア」

そこには大量のウツボのヤミーが一箇所に集まっていた。

「メズールのヤミーか！」

「士郎、複数戦にはコイツだ！」

そう言ってアंकは士郎にカマキリコアとクワガタコアを渡した。

すぐさま士郎は、所持していたバッタコアと一緒にドライバーに挿入し、スキャンした。

「変身！」

【クワガタ・カマキリ・バッタ・ガクガタガタキリバ・ガタキリバ】

すぐさま士郎は、クワガタの顎を模した角とオレンジの複眼にカマキリの双剣を持つ腕、そしてバッタの脚を持つ緑の装甲、仮面ライダーオーズ・ガタキリバコンボに変身した。

「ウオオオオオオオオオオオ！」

雄叫びと共にオーズは50体の分身体生み出し、そのまま総攻撃となった。

「ハア！」

「ヤア！」

「タア！」

「オラア！」

数を十分に減らした後、オーズはメダルをスキャンした。

「ハアッ！」

すると分身体と共にオーズは、必殺技のガタキリバキックを叩き込んだ。

「…………セイヤアアアアアアアアアアアア!」「…………」

ウツボヤミーを制圧したオーズは、元の一人の戻り、変身を解除した。

「まさか、ヤミーが生まれたのにも関わらず、誰も気付かないなんて…………」

「メズールのヤミーは、ある一定の場所に擬態して卵を孵化させるからな。それは『親』も分からないくらいだ。待てよ? コレだけ多く生まれたのに何で誰も…………」

アंकも士郎と同じ考えを述べるが、

「成程な……………今回の『親』は、例のアフロだな」

「な!?!」

それを聞いた士郎も驚きを隠せなかった。

「ヤッパリ、この殺しも欲望の一つ?」

「“多くの人間を殺したい”、それも欲望だからな。だが、コレだけの数が生まれたということは、相当沢山の人間を殺してるはずだ」

「だったら、尚更止めるしかない!」

「俺達グリードにとって人間は、“欲望メタルを作るための畑”見たいなものだが、その人間の進化にも興味がある。これ以上は殺しをさ

「せんな」

「士郎とアंकは、ギャンザの殺戮を必ず止めると心に誓ったのであった。」

「一方、全く別の場所では……」

「ここですね」

「ダークスーツを身に纏った長い金髪の中性的な顔立ちの青年がギャンザの写真を眺めていた。」

「動くのか？」

「青い髪にスーツ姿の青年がそう言った。」

「フワァ〜……早く行きましょうか」

そう言って赤い髪の女性が欠伸をする。

果たして彼らは何者なのか？

ギャンザとの関係は？

第44話：復讐のM／正体と悲しみの涙と新たなヤミー（後書き）

次回、復讐のM／作戦会議と囷とマンホール

上条

「そう言えば俺等『万時屋奇譚幕』でゲストになってる」

ユ一ノ

「あ、本当だ」

第45話：復讐のM / 作戦会議と囷とマンホール（前書き）

謎の人物の紹介です。

第45話：復讐のM／作戦会議と囷とマンホール

仮面ライダーW（another world story）、
前回の三つの出来事。

一つ……殺人鬼・ギャンザレジックには、左之助に敗れた経験があった。

二つ……上条は、ギャンザに兄を殺された女性に約束を交わす。

三つ……ギャンザを捜す、謎の三人が登場する。

暴走するO／復讐のM／作戦会議と囷とマンホール

グシャツと一人の人間を殺害するアフロ頭の男・ギャンザ＝レジック。

「クククク……この音、この感触………たまんねえぜ」

すると、彼の元を尋ねる人物が。

「捜しましたよ」

「あん？」

そこには、ダークスーツを身に纏った長い金髪の中性的な顔立ちの青年に青い髪にスーツ姿の青年、そして赤い髪の女性が現れる。

「ああ、あんた等か……」

「んで、アナタは此処で何してたんですか？」

赤い髪の女性の言葉に、ギャンザはこう言った。

「決まってるだろ？ 狩りだよ、狩り」

ギャンザが殺人を行う理由は、“狩り”と称して自身の力を振るっていた事であった。

ギャンザは、自分の隠れ家に彼らを招き、椅子に腰を下ろした。

「我々が来た理由は、分かってますね？」

金髪の青年・剣刃の言葉にギャンザはこう言った。

「ああ、覚えてる。能力チカラを手にした代わりに俺をあんた等の仲間にするんだったな」

「そうです」

「その事なんだが……無かった事にしてくれるか？」

「「!？」」

刃の後ろに居た二人は驚くが、刃本人は冷静にこう言った。

「その理由は？」

「折角のお誘いを断るようで悪いんだがな……折角の“楽しみ”」

が出来たんだ。 邪魔しないでくれるか？」

「.....」

ギャンザが誘いを断った理由を聞いた刃は、沈黙の後にこう言った。

「分かりました、時間を与えます。 明日の昼頃にまた返事を聞きます」

そして三人はギャンザの隠れ家を後にした。

「あのヤロおゝ、人の恩を仇で返しやがってえゝ」

青い髪の男性・木倉投擲きくわいとうてきがそう言って苛立てていた。

「まあ、落ち着いて下さいよ。 今になって始まった事じゃないんですから」

赤い髪の女性・乗場手綱じょうばたしなが宥める。

「でも、刃あー。何で時間を与えたの？」

その問いに刃は答えた。

「恐らく、能力チカラを手にしたことで正気を失っているかもしれませんが、時間を与えたのは、ちゃんと正気を保っていられるかを試すためです」

呆れながらそう言う刃。

果たして、彼らの正体は一体？

その夜、とある宿では……

「うっぷ……気分悪い」

顔を青ざめた上条に左之助が呆れながらこう言った。

「飲めねえクセにあんな強い酒、一気に飲むからだ。少しは頭使え、バカ」

「同感だね」

「ユーノお、お前までえ」

相棒にまでバカにされ、フォローしてくれる相手が居ない上条。

「でも、相手は快樂殺人者って考えても良いんでしょうか？」

「恐らくな、さつきニユースで警官が一人殺されたらしい。ギャンザがまた殺しを行ったてことだ」

「という事は、チンタラやってるワケにはいかなねえって事か」

アंकの言葉を聞き、その場の全員が頷いた。

「うっしゃあ！ そうと決まれば、ギャンザ捕獲作戦だ！！」

気合を入れる左之助であったが、

「よお~~~~~しい~~~~~」

酒がまだ回っているのか、未だに酔いが覚めない上条であった。

「良いか、ヤツを捕まえる方法は只一つ……“釣り”だ！」

「釣り？」

初めて聞く言葉にキョトンとするインデックスに新八が答える。

「掃除人が獲物を捕まえる時に使う作戦の一つで、自分自身が無防備を装った罠エサになって、相手が来たところを捕まえる。だから“釣り”」

「だけど、コイツは上級の賞金首にしか使えない故に、自分自身を罠リスクに使うから、かなり危険度が高いんだ」

最後にノーヴェがそう言った。

「だとすれば、相当相手が厄介って事だろう？」

アंकがそう言うのと、左之助がこう言った。

すると、セイバーがこう言い出した。

「でしたら、私が囿になります」

それを聞いた一同は、

「本気で言ってるんですか、セイバーさん!？」

「相手は警察でも歯が立たないんだぞ!」

「騎士王の嬢ちゃん、オメエ死ぬ気かよ!！」

「止せセイバー! 少しは考えて行動しろよ!！」

しかし、セイバーの覚悟は固かった。

「昼間、トウマやユーノから兄を殺された女性が酒に溺れていたという話を聞きました」

「……………」

「その方の兄や今までギャンザに殺された方々は、皆“もつと生きたい”という思いがあった筈。それを“快樂”のために奪ったギャンザを……………許すワケにはいかないんです! お願いします!！」

それを聞いた全員が、その覚悟を受け止めたのであった。

翌日、セイバーが囿となって作戦は開始された。

「どうだ？」

「全然だ」

あらゆる方向から周囲を警戒する上条達。

「それにしても、セイバーも頑固なところがあるな。　　ありや意地張ってるのと同じだぜ？」

上条がそう言うと、アंकがこう返した。

「まあ、人間誰しも意地を張りたい事がある。　それも立派な『欲望』だかな」

「それにしても、中々来ないですね？」

新八がそう言って不安になっていた。

しかし、彼らは知らなかった。

敵は常にその場に居るといふ事に。

「女か……久しぶりだぜ、警官以外の獲物は………」

何処にいるか分からないギャンザレジックは、そう言ってセイバ
ーを見ていた。

一体彼は、何処に身を潜んでいるのか？

そして、彼は一人の少女に狙いを定めていた。

とあるビルの上で見張っていたノーヴェであったが、

「ん？」

セイバーの後ろにあったマンホールが、妙な浮き方をしていることに気が付く。

さらに、そこに目を凝らすと、一人の男が彼女を狙っていた。

「（まさか！） セイバー、逃げるオオオオオオオ！」

「！？」

ノーヴェの叫びも虚しく、彼女は異常に筋肉が発達したアフロ頭の男に捕まってしまった。

この街を恐怖に陥れた殺人鬼・ギャンザレジックと対面したのである。

第45話：復讐のM／作戦会議と囷とマンホール（後書き）

復讐のM／『筋肉の記憶』と“道”^{タオ}とサゴーズコンボ

第46話：復讐のM / 『筋肉の記憶』と“道”とサゴソゴコンボ（前書き）

激突、ギャンザVS W一行

第46話：復讐のM / 『筋肉の記憶』と“道”とサゴーゾンボ

仮面ライダーW（another world story）、
前回の三つの出来事。

一つ……謎の青年・刃とその仲間、ギャンザを勧誘するも断られる。

二つ……上条達は、囷作戦を開始する。

三つ……ギャンザが、地下水路から現れた。

復讐のM / 『筋肉の記憶』と“道”^{タオ}とサゴーゾンボ

地下水路から出現したギャンザに掴まってしまったセイバー。

「さてと、お嬢ちゃん。何して遊びたい？」

「（此処は、戦わないと！）」

必死で拘束から逃れようとするセイバーであったが、脱出する事が出来ない。

「ギャンザ！」

そう言つて左之助が現れる。

「その嬢ちゃんを放せ！」

「何だテメエ？」

ギャンザの問いに、左之助はこう言った。

「『喧嘩屋』だ。テメエを捕まえに来た」

「ほう、俺に賞金が掛かったって事か……一体幾らだ？」

「いいから、その嬢ちゃんを放せ」

それを聞いたギャンザはニヤリと笑いながら、

「お断りだね」

もう片方の手でセイバーの額にデコピンを叩き込んだ。

「ガッ」

余りの威力にセイバーも声を上げられなかった。

「テメエ！」

「へへへ………」

怒る左之助を嘲笑うギャンザ。

しかし、ノーヴェがすぐさま屋上から飛び降り、

「放せて言ってるだろうが！」

バキインという音と共に踵落しを叩き込んだ。

その衝撃でセイバーが解放されるが、

「いっつうく、何つうー固さだよ！」

涙目で右足を押さえてしまう。

「もう一人居やがったか……」

しかしすぐさま我に返り、

「ちったあ、痛かったぜ！」

ギャンザのパンチをガードした。

「ぐ……あ……」

だが、ドゴオンという音と共に吹き飛ばされてしまう。

「ノーヴェ！ 騎士王の嬢ちゃん!!」

ガハツと口から血を吐くノーヴェは、立ち上がりながら呟いた。

「警察じゃ歯が立たないワケだぜ」

「ウオオオオオオオオオ！」

怒りの鉄拳を叩き込む左之助であったが、今のギャンザには全く通用しなかった。

「な!？」

「あん？ お前……どっかで見た面だな……」

そう言ってギャンザは、左之助の顔をを目を凝らしながら見ると、

「！！　　そうだ、あの時俺がブタ箱にぶち込まれるキツカケを作った、“悪一文字”の男！！」

目の前の相手が誰なのか、すぐに判明した。

「へえ、久しぶりだなあ……まさかこんな所でお会いできるなんてなあ」

「グツ……………」

「テメエには、この能力でタップリお返しをしたいと思ってたんだぜ！」

ギャンザは筋肉が異常に発達した拳で、左之助を殴り飛ばした。

「ガッ！」

殴られた左之助は、そのまま後ろの外壁に衝突する。

「へへへへ……………更にもう一つ」

そう言ってギャンザは、ボディビルダーをイメージしたMが描かれたメモリを挿入した。

【マッスル】

その瞬間、ギャンザは筋肉が異常に発達した異形の怪人・マッスルドーパントに変身した。

「ドーパントかよ……………」

「トリガーエアロバスター!!」

銃口から連射された風の弾丸が、ギャンザの身体に命中する。

ドドドドと連続で発射された弾丸は、見事に命中したが、

「が……………て、テメエ!」

痣が出来た以外は、無傷と言って良い程ダメージが無かった。

「オイオイ、マジかよ!」

Wもコレには驚愕してしまう。

一方その頃、

「この気配……始まったか」

そう言つて刃は、手に持っていた缶コーヒーを飲み飲んでいた。

「行きますよ。木倉さん、乗場さん」

「マジか？」

「え〜」

所持していた飲み物を飲み干した刃達は、すぐさまギャンザの元へ向かった。

目を覚ましたセイバーは、額に血を流しながら起き上がろうとした。

「セイバー、大丈夫か？」

「シロウ、ヤツは!？」

「痣一つ付けられた程度で逃げやがった。慎重になったようだな」

セイバーの問いにアंकが代弁した。

一方、地下水路に隠れたギャンザも……

「少しは殺り甲斐があるじゃねえか。まあ、コレぐらいじゃねえと面白くねえからな」

そう言つて撃たれた腹部に触れる。

「で、どうするんだ？ コツチには手負いが二人＋も居るんだぜ?」

Wはセイバーとノーヴェ、そして新八を見ながらそう言った。

「つて待てエエエエエエエエ！ え、何!？ “＋”つて僕の事オオオオオオオオオオ!？」

新八が怒号を上げるが、

「確かに、そう言う感じだな」

「だな」

「ありえるな」

アंक、左之助、ノーヴェの順でそう言い、

下水道に居るギャンザモといマッスルドーパントは、新たな攻撃態勢に入った。

「こオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

徐々にマッスルドーパントの上半身は、ボディビルダー顔負けの体格どころか異常なまでに発達していた。

「コレで、俺の腕力はさっきの20倍。殴られたヤツは、一撃で肉塊に変わる……クソが、狩られる側の分際で俺に傷を付けたことを後悔しやがれ」

遂に、この戦いに終幕が降りてきた。

突如発生した地震。

「な!?!」

「アイツか!」

「悪い、静かにしてくれ。結構、集中力が必要なんだ」

そう言っただけは、地面 否、地下を見ていた。

シャチヘッドの特性である『感知能力』でギャンザの居場所を察知する。

「……………」

そして居場所を察知したオーズは、すぐさま指示を出した。

「上条、左へ跳べ!」

すぐさまWは左へ飛び上った。

その瞬間、マッスルドーパントが拳で地面を突き破った。

「よっしやー!」

Wがマグナムを向けるが、マッスルドーパントはすぐさま姿を消した。

「ヤロツ！ 爆弾投げたるか！！」

「バカ！ 地下水路にはいくらでも逃げ場があるんだ」

そう言ってアंकはサイコアをオーズに渡す。

「ヤツが次に現れた時が勝負だ」

「ああ」

「ククククク……………思ったよりやるじゃねえか。コレくらいやつても貰わねえと殺り甲斐があるってもんだ。 だがお前等は『氣』を感じ取れる俺から逃げることは出来ねえ……………“あの薬”に選ばれた俺にはな！」

そう言つてマッスルドーパント　ギャンザは、脱獄中の出来事を
思い出す。

当時のギャンザの前に現れた藍染惣右介と名乗る男が、彼にある薬
の入った瓶を見せた。

(神氣湯しんきとう……この薬を飲んだものは、“道タオ”と呼ばれる術を手にす
る事が出来る)

(ほ、本当か!?)

(君次第さ。　才能ある者が飲めば一時的な仮死状態から目を覚ま
す事ができるが、無い者飲むとそのまま死ぬ事になる)

(な!?)

それを聞いたギャンザは最初は戸惑うも、藍染の後ろに居た手綱が
こう言つた。

(別に飲まなくても良いんだよ。　でも君は脱獄犯だから、捕まれ
ば死刑だしね)

(そう言つことだ。　選びたまえ……この薬を飲むという賭けに
挑むか、このまま逃げ続けるか)

そう言つてお猪口一杯分の神氣湯をギャンザに渡して藍染は去つて
行つた。

「そつだ……俺はその賭けに挑んで勝つたんだ！　誰も俺を止める

事は出来ない！ ハーハハハハハハハハハ！」

再び地震が起きるが、オーズは静かにこう言った。

「無駄だ……アンタの幻想は、既に殺されている」

その瞬間であった。

ドゴオンとオーズに目掛けて、マッスルドーパントが拳を突き出した。

「ハッ！ ちよろいぜ！」

勝ち誇るマッスルドーパントであったが、

「待ってたぜ……………」

「な！？」

「ウオオオオオオオオオオ！」

そのままオーズに引き上げられ、そのまま地面に叩きつけられた。

「ガアッ！」

そしてその瞬間、オーズがメダルを取り替えた。

【サイ・ゴリラ・ゾウ・サゴーズ・サゴーズ】

重力を操る重力系コンボ形態、サゴーズコンボにチェンジした。

「ウオオオオオオオオオオ！」

オーズはドラミングの要領で胸を叩くと、重力空間を操った。

サゴーズコンボの固有能力は『重力操作』であるため、対象を軽くしたり重くすることも自在に出来るのである。

「か、体が重い！ 何じゃコリヤアアアアアアアアアア！！！」

マッスルドーパントも、この能力の前では手も足も出ない。

重力を重くされ、身動きが取れないマッスルドーパント。

【TRIPLE SCANNING CHARGE】

メダルをスキャンしたオーズは、天高く飛び上ると脚部のゾウレックで地面を踏み付けると、地面が一直線に割れそのままマッスルド

ーパンツを拘束した。

「な、何じゃコリヤアアアアアアアアアア!!」

そして自動的に接近して来たところを

「ハアアアアア……………セイヤアアアアアアアアアアアア!!」

「グワアアアアアアアアアアアアアア!!」

サイヘッドの角による頭突きとゴリラアームのパンチから繰り出す、サゴーズコンボの必殺技・サゴーズインパクトが炸裂した。

攻撃を喰らったマツスルドーパンツは、元のギャンザに戻り、メモリも砕けたのであった。

「が……………は……………」

「アンタに殺された人達の……………恨みだと思え」

そう言ってオーズは変身を解いたのであった。

しかし、そんな彼等の動きを別の場所から見ていた者達が居た。

第46話：復讐のM / 『筋肉の記憶』と“道”とサゴソコンボ（後書き）

次回、復讐のM / 殺人鬼の最後と道の説明と新たな動き

第47話：復讐のM/殺人鬼の最後と道（タオ）の説明と新たなる動き（前書き

物語は、更に加速して終わりを迎える。

第47話：復讐のM／殺人鬼の最後と道（タオ）の説明と新たなる動き

仮面ライダーW（another world story）、
前回の三つの出来事。

一つ…ギャンザがドーパントに変身する。

二つ…オーズ・サゴーズコンボが、ギャンザを倒す。

そして三つ…彼等の戦いを別の場所から見ていた者達が居た。

復讐のM／殺人鬼の最後と道タオの説明と新たなる動き

マツスルドーパントことギャンザ＝レジックを倒した万時屋一同。

「勝った……………」

変身を解き、息を切らす土郎。

しかし、その時であった。

「凄いですね。ドーパントになった道使いを倒しちゃうんなんて」

「!?!」

突如現れ女性がそう言って接近してきた。

「コイツ、超ムカついてたんです。でも、アナタが倒したお陰でスッキリしました」

そんな女性に、アंकがこう言った。

「お前、何で道の事を知ってやがる!」

その問いに別の人物が答えた。

「ギャンザ氏に道の存在を教えたのは我々ですから」

ダークスーツを身に纏った中性的な顔の青年が現れる。

「初めまして、欲望の王・オーズ……そして疾風の切り札・ダブルW。我々はガイアメモリ開発組織『ダーク』の特攻部隊『七騎士団』セブンナイツのメンバーです。」

「組織の人間か！」

Wはそう言って銃を向けるが、

「御安心を、我々は戦いに来たものではありません。ただ彼の最期を見取りに来たのです」

そう言ってギャンザを見ていた。

「ぐ……………」

起き上がるつととするギャンザであるが、まさにその瞬間であった。

「な!?!」

突如ギャンザの体が、徐々にしぼんでいったのであった。

「何だこりゃあああ!?!」

「それがアナタの最期です、ギャンザレジック。“道”タオの能力の源である“氣”は、我々人間の生命力そのものです。それを修行しないで使えば、底を尽くのは当然です」

冷酷な目付きでギャンザにそう言った剣刃。ツルギイバ

ホテルに戻った一同は、部屋でぐっすり休んでいた。

そんな中、ベランダで黄昏ていた土郎と上条。

「何だ？ あのアフロ頭を死なせた事、まだ気に病んでるのか？」

そう言っただけでアリスを啜えたアंकが現れる。

「いや、そうじゃない。どっちかって言うと半分かな？」

「もう半分は、“道”の事だ」

それを聞いたアंकは二人の間に入り、ベランダの柵に背中を預けながらこう言った。

「“道”^{タオ}ってのは、数百年も前から存在した異大陸の氣攻戦術の呼び名だ」

「数百年？」

「ああ。俺達グリードが生み出される前の話になるが、俺の知ってる限りじゃ、あの能力を手に入れるための秘薬が存在するってことだ」

「つまり、誰でも簡単に能力を得る事ができるって事か？」

「そう言うことだが、その薬を飲んだヤツは一時的に仮死状態になつちまうことがある。能力の素質のあるヤツは、飲んでから数分後に目覚めるが……………」

「素質の無いヤツは、その場で死ぬ？」

「そつだ。それにより、その秘薬の製造を禁じられたとしか知らねえ……………」

それを聞いた上条は、ベランダを後にした。

「ちよいと卯ノ花さんトコに行つてくるわ」

その夜、剣達は墓地にいた。

「何で墓地い〜」

手綱が文句を言うが、

「それは上層部に行ってください。僕だって、好きで此処に来たワケではないのですから」

溜め息混じりにヤイバがそう言うが、

「どうやら、嗅ぎ付けられたようだぜ？」

投擲がそう言うてある方向を向くと、

「まさか、仲間との合流先が墓地とはね……………」

「埋葬の手間が省けるな」

そう言うて、赤い上着に黒いミニスカート姿の黒いツインテールの少女・遠坂凜とそのサーヴァント・アーチャーが現れる。

「此処まで嗅ぎ付けるとは、以外でした」

「それはどうも」

刃の言葉に凧が意地悪そうな顔でそう言った。

「出来れば任務外の戦闘はしたくはないのですが、あの遠坂の当主です。甘く見ない方が良いでしょう」

「だったら、私が行きますよ。丁度暴れたいと思ったので」

そう言っ手綱が前に出た。

「行くわよ」

【ライダー】

手綱はメモリを挿入すると、紫色のボディのカウボーイのような怪人・ライダードーパントに変身した。

「言っとくけど、変身が出来るのは貴方達だけじゃないわ」

凧はそう言ってベルトを装着すると、セルメダルを入れて横のレバーを回した。

カポンという音と共に、彼女の姿は黒と銀色のボディに身を包んだU字型の複眼の戦士に変身した。

“誕生”を名に持つセルメダルの戦士・仮面ライダーバースが此処に光臨した。

「さあ〜て、稼ぐわよ!」

「やれやれ……」

軽く手を擦ったバースを見て、アーチャーは少し呆れてしまった。

バースはすぐさまメダルをバツクルに投入する。

【クレーンアーム】

すると右手にクレーンを模した籠手型の武器・クレーンアームを装備し、そのままライダーパンツを攻撃する。

「オラア!」

「ハッ!」

ライダーパンツも、キックで相殺させる。

「クッ、やるわね」

「お互い様よ!」

そう言ってライダーパンツは、距離を取ろうとするが、

「させるかアアアアアアア!」

「藍染様！」

藍染惣右介が、この場に現れたのであった。

「まさか、遠坂の者と交戦していたとは……………此処は一端退こう」

「……………分かりました」

「それから……………」

そう言つて藍染は、一瞬でバースの前に現れる。

「な!？」

驚くバースであるが、

「彼女は、返してもらつよ」

そう言つて手綱を救出されてしまう。

「では、さらばだ」

その瞬間、藍染の手から眩い光が放たれ、

「キャッ!」

バースもその光に目が眩んでしまう。

「な!？」

すぐさま目を開けると、藍染達の姿は何処にも見当たらなかった。

「逃げられた……………」

そう言っただけで変身を解いた凜は、奥歯を噛み締めた。

アーチャーはそんな彼女を見ながら、

「まあ、殺されなかっただけでも良かったと思うけどな」

呆れながらそう言ったのであった。

「何ですって？」

「いや……………何でもない」

「そうでしたか」

上条は、卯ノ花にこれまでの出来事を話した。

「道……あの禁術が、またこの世に放たれるとは……これは放って置けませんね」

「話しは以上だから、俺は帰るぜ。　そうそう、報酬は15千万にしといてくれ。　街の復興に、大金は必要だと思っからさ」

そう言っ上条はその場を去った。

「上条当麻……アナタはいずれ、藍染惣右介と戦う事になります……絶対に死なないで下さい。　アナタを必要としている方々がありますから」

そう呟きながら卯ノ花は、上条当麻を見送ったのであった。

翌日、遂に帰還する時が来た。

「んじゃ、帰りますか」

「「「「おつ！」「」「」

荷物を持って、駅に向かう彼らであったが、

「あの……………」

「ん？」

一人の女性が尋ねてきた。

「アンタは……………」

それは、上条達が出会ったギャンザに兄を殺された女性であった。

「あの……………本当に、有難う御座いました。お陰で結婚も明日に開かれました。何とお礼を言えば……………」

それを聞いた上条は、

「別にいらないぜ。俺はあの殺人鬼の殺人をぶち殺したただけだから、だから……………」

俺はあの殺人鬼の殺人をぶち殺したただけだから、だから……………」

サムズアップをしながらこう言った。

「本当の幸せを掴んで行けよ」

「……………はい！／／／／」

それを聞いた女性は、とびっきりの笑顔で答えたのであった。

「んじゃ、皆行くぜ！」

こうして万時屋一同は、ムーンライトシティ月光街を後にしたのであった。

月光街篇・完

第47話：復讐のM／殺人鬼の最後と道（タオ）の説明と新たなる動き（後書き

次回、 とW／『最後の記憶』

次はユートピアさんとのコラボです。

第48話： とWノ『最後の記憶』(前書き)

ユートピアさんとのコラボです。

第48話： とW / 『最後の記憶』

ムンライトシティー
月光街から神都への帰りの電車に乗った上条達は、

「疲れたあ〜」

「もう、クタクタ」

そう言って疲労した身体を休ませたのであった。

「ん？ 此処は？」

そう言つて上条は目を覚ますと、周りは真っ暗であった。

「まるで何も無い……闇の中だ」

ユーノも起き上がつてそう言った。

突如の暗闇に戸惑つてしまつが、

「おい、誰がいるか？」

「へ？」

すると、一人の青年が現れる。

「お前は？」

上条の問いに、青年はこう答えた。

「俺は、朝月真谷。結婚したばかりで、妻との新婚生活を満喫するつもりだったんだけど……」

「ああ、そうなんだ。俺は上条当麻」

「僕は相棒のユーノ・スクライア」

とりあえず自己紹介をした三人。

しかし、その時であった。

ゴゴゴゴという音と共に、炎に包まれた巨大な仮面ライダーが出現した。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

「……」

その姿を見た三人は、驚きを隠せなかった。

「ちよつとおおおおおお！ アレ何！？ あんなデカイ仮面ライダー、上条さんは初めて見るんですけど!？」

そう言つて上条は驚きを隠せなかった。

「まず、仮面ライダーというのが疑わしいね」

ユーノが溜め息を尽きながらそう言い、

「まるで、怪物だな」

真谷はその姿を見てそう言った。

「我はコア……仮面ライダーコア！ 我は世界を支配し、仮面ライダーとして君臨するのだ」

仮面ライダーコアの言葉を聞いた上条とユーノと真谷は、ドライバ―を装着してメモリを構えた。

「ふざけんなよ」

【JOKER】

「君はバカかい？」

【CYCLONE】

「仮面ライダーを支配者にするだど？」

【OMEGA】

「「「ふざけるな！」「」」

「仮面ライダーは、人々の平和を守る英雄と言う名の戦士だ！」

「君の言葉は、仮面ライダーを名を利用して支配者になろうとしている！」

「お前は仮面ライダーを騙って、人々の心を汚した悪党だ！」

「今、その幻想を……」

「僕達がこの手で……」

「撃ち壊すぜ！」

三人の言葉が重なり、メモリをドライバーに挿入してスロットを倒した。

「「「変身！」「」」

【CYCLONE・JOKER】

【OMEGA】

上条とユーノはWに変身し、真谷はWのファンングジョーカーのよう

で背中から腰ぐらいまでのギリシャ文字の 書かれたマントを付けた右腰にマキシマムスロットがあり顔はWのようでWの部分はギリシャ文字の を反対にしたような仮面ライダーに変身した。

「さあ、その幻想をぶち殺す！」

「さあ、絶望のカウントダウンを数えろ！」

疾風の切り札・仮面ライダーWと最後を運ぶ戦士・仮面ライダーオメガが、時空を越えて降臨した。

「グオオオオオオオオオオオオ！」

コアは灼熱の拳を振り下ろす。

「ウオツ！」

ユーノの身体を抱えたWとオメガは、

「クソツ！ 今までこんなにデカイ相手と戦った事ないから、流石に厄介だ」

「全くだ」

初めて戦う巨大な敵に苦戦してしまう。

するとコアは、下半身を四つのタイヤに変形し、二人に接近してくる。

「来たアアアアアアアアア」

「不幸だアアアアアアア」

必死で走るWとオメガであったが、

【ULTIMATE・LEGEND】

オメガは『無限の記憶』アルティメットメモリと『伝説の記憶』を宿すレジェンドメモリにより、オメガファイナルレジェンドにチェンジする。

それを見たWは、スカルメモリとソウルメモリを取り出し、

【SKULL・SOUL】

スカルソウルにチェンジした。

「行くぜ」

「ああ」

ユーノの身体をユックリ下ろしたWはソウルブレード、オメガはアルティメットカリバーとレジェンドブレードを構える。

「行くぜ」

「ああ」

【SOUL】

【ULTIMATE・LEGEND】

【MAXIMUMDRIVE】

互いの剣にエネルギーが集中し…

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「……ライダーツインマキシマム！！！！……」

そしてそのまま、コアに強力な斬撃を放ったのであった。

「グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

その攻撃を受けたコアはその場で消滅し、サソリ、カニ、エビのコアメダルとMの書かれたガイアメモリが飛び出してきたのであった。

無論、Wとオメガの攻撃で砕かれたが。

「ハア…………ハア…………ハア……………終わったな」

「そうだね」

「ああ」

仮面ライダーコアを倒し、互いに変身を解いたWとオメガ。

しかし、その瞬間であった。

「何だ!?!」

突如、謎の光が彼らを包み込むように現れる。

「…………ウワアアアアアアアア!」

「ハッ！」

上条とユーノが突如目を覚ますと、そこは電車の車内であった。

「ゆ……………夢？」

上条はそう言っつて寝汗を拭う。

しかし、ユーノが上条の右手を見て驚く。

「当麻君、ソレ!？」

「!?!」

それは夢の中に出てきたサソリの描かれたコアメダルであった。

性格には、半分に割れたコアメダルの欠片である。

「もしかして……………」

「夢じゃ……………なかった？」

これを見て、上条もユーノも驚きを隠せなかった。

くオメガの世界く

「ハッ！」

真谷が突如目を覚ますと、そこは自分の部屋であった。

「真谷、入るよ？」

「あ、ああ」

ドアを開けた妻のデイエチは、そのまま真谷の元へ向かう。

「大丈夫？ 凄い息が荒いよ？」

「ああ、大丈夫」

するとデイエチは、彼の右手にあるモノが握られていたことに気付く。

「ねえ、それは？」

「ん？」

その手に握られていたのは、半分に割れたサソリの描かれたコアメダルの欠片である。

「（……………夢じゃ……………無かったのか！）」

これを見て真谷は、自分に起きた事が夢ではないと気付く。

「真谷？」

「あ、ああ……………これは、戦利品……………かな」

「そう」

メダルを見つめる真谷にデイエチは、後ろから彼に抱きついた。

「あまり、無理しないでね」

「……………有難う」

一度見つめ合った二人は、唇を重ね合ったのであった。

上条と真谷は、互いに窓の外を見ながら小さく呟いた。

共に現実的な夢の世界で戦った仲間の名を……

「朝月真谷……仮面ライダーオメガ……か」

「上条当麻……仮面ライダーW……か」

上条とユーノを乗せた電車は神都へと向かい、真谷はディエチと共に管理局へと向かったのであった。

互いに半分に割れたサソリのメダルを眺めながら……

第48話： とWノ『最後の記憶』（後書き）

ユートピアさん、有難う御座いました！

第49話：〇の全て／錬金術師と警告と爬虫類コンボ（前書き）

オーズ中心の話です。

第49話：〇の全て／錬金術師と警告と爬虫類コンボ

早朝の士郎は、一人鍛錬のために外へ出ると…

「ん？」

玄関のポストに、封筒が一通入っていた。

開けるとその中身は、地図付きの手紙であった。

『衛宮士郎へ。 アンクとセイバーを連れて、この場所に来て欲しい。 ガラ』

「“ガラ”？ 誰だろう……」

そう思いながら士郎は、屋敷に戻るとアンクにこの事を伝えた。

「ガラだと!？」

「やっぱり、知ってるのか？」

「コアメダルを作った錬金術師の一人だ。 だが、奴は正真正銘の人間だ。 生きてるはずがない」

アンクはそう言って、ガラという名前の人物のことを話した。

「でも、念のために行って見ないか？」

「……………」

「私もシロウに同意です」

「チツ、好きにしろ」

こうして、士郎とセイバーそしてアングの三人は、ガラと呼ばれる人物に会いに行くのであった。

とある屋敷。

その屋敷は、とても豪華とは言えないが、歴史あるような雰囲気を見せていた。

「でかい……………」

「何というか、他の建物とは雰囲気違いますね」

「行くぞ」

そう言って三人は、屋敷の中に入ったのであった。

「お邪魔します」

扉を開けると、その中はとても豪華な家具などが置かれていて、品が溢れていた。

「良く来たわね」

三人は、声のする方へ顔を向けると、

「待ってわよ」

赤を基調とした和装姿に長い黒髪を下ろした妖艶な美女が居た。

「初めまして、衛宮士郎君にセイバーちゃん。そして、久しぶりねアंक」

「……………ガラ」

「え!?!」

「この方が!?!」

「そう、初めまして。 私がガラよ」

そう言って彼女は、自らの名を名乗った。

リビングに向かい、茶を楽しみながらガラは彼等の話を聞いていた。

「そう、ギルのコアが体内に」

「ガラ、アナタならシロウの体内のメダルを取り除けますか？」

「それは無理ね。ギルのメダルは特殊なモノだから、取り除く事は不可能よ。無論、製作者の私でもね」

そう言ってガラは、セイバーの問いに答えた。

「だけど、土郎君の体内に入ってるメダルの数が三枚……それもコンボが出来る数で幸いだっただわ」

「「え？」」

「どう言う意味だ？」

「そのまんまよ。もし士郎君の体内のメダルが五枚以上だったら、変身直後に暴走していたから」

「……」

それを聞いたアंकは、士郎が始めてプトティラコンボを使った際に暴走をしなかったことを思い出す。

「でもね士郎君、出来るだけギルのコアに頼らないようにしなさいよ」

「え？」

「人間の体内にコアメダルが入っているということは、相当ヤバイって言う事よ。君の場合は三枚で幸いだったけど、五枚か六枚以上だったら暴走が徐々に進んで、やがて君の心と身体はグリードそのものになってしまうのよ」

「な!？」

「シロウが、グリードに!？」

「チツ、だったら余計に使わせるわけにはいかないって事か」

恐竜系コアの使用の危険さを危惧された三人は、驚きを隠せなかつ

た。

「しかし、本来なら他のコアでも暴走しているのに、君の場合はそんな気配が無い……………」

「それは、どう言うこと？」

士郎の問いにガラは答えた。

「ギルのコアを制御できるほどの『器』を持っているということとは、過去の経験から欲望に空白が出来てるってということよ」

「過去の……………経験から……………」

「詳しくは聞かないわ。だけど、その経験が君の欲望を奪い、ギルのコアの『器』にしたという事よ」

ガラの言葉を聞いた士郎は、当時の戦争で救えなかった例の親子を思い出す。

まだ幼かった子供を守らんと、必死で抱きつく母親。

それが頭から離れなかった。

すると、今度はアंकが答えた。

「次は俺の質問だガラ。お前、どうやって生きてる？ 人間のお前が、800年という年月を経ても生きているはずが無い」

それを聞いたガラは、サラッと答えた。

「ああ、それ？ 私、コアメダルを製作した直後に自分自身をグリードにしたの」

「何!？」

アंकですらその言葉に驚きを隠せなかった。

「グリードになってからは分かったけど、どうやらグリード化はヤミーの気配に敏感になるけど、その代わりに味覚や他の感覚が無くなってしまっ様ね」

「つまり、自分自身を実験モルモットにしたって事か？」

「そゆこと」

しかし、その時であった。

チャリーンという音が、アंकとガラに響いた。

「ヤミーね」

「早速、お出ましか」

そう言ってアंकとガラは構え、セイバーも剣を取り、士郎もオズへ変身する。

「変身!」

【タカ・トラ・バッタ・タ・ト・バ・タトバ・タ・ト・バ】

その瞬間、屋敷の屋根をぶち抜いて、一体のヤミーが現れた。

「オーズ、メダルを寄越せ！」

蟋蟀のような姿のコウロギヤミーであった。

「ハアアアアアアアアア！」

オーズはそのまま突進するが、

「ハッ！」

コウロギヤミーは、ジリリリリという謎の音を放って、オーズの耳を通して攻撃する。

「グアアアアアアアアアアア！」

これにはオーズも耳を押さえてしまう。

「シロウー！」

「チツ、あのヤミー。音を操るのか！」

「あ、そうだ。すっかり忘れてた」

そう言ってガラは、ポケットからあるモノを取り出した。

「私のコア、これを彼に渡すつもりで呼んだのよね」

それは毒蛇、亀、鱈の絵が描かれていた橙色に近く、茶色にも近い色のコアメダルであった。

「土郎君！」

ガラはすぐさまコアメダルをオーズに向けて投げ飛ばした。

「……！」

オーズはすぐさまその三枚を受け取り、オーズドライバーに装着してスキャンした。

【コブラ・カメ・ワニ・シャア……・ブラカー……ワニ】

その瞬間、オーズは新たなコンボチェンジを手に入れた。

紫色の複眼にターバンのように巻かれた茶色い毒蛇の頭部、半分ずつ割れたカメの甲羅が左右に付いている橙色の両腕、そして鱈の鱗に近い橙色の脚部の戦士が特徴的な姿に変わった。

爬虫類生物のコアメダルの形態、仮面ライダーオーズ・ブラカワニコンボの誕生であった。

「ハッ！」

オーズはコウロギヤミーにまるで滑るように移動しながら突撃する。

「ハッ！ タア！」

そしてオーズは、オレンジ色に光るワニ型のオーラを纏いながらコウロギヤミーに回し蹴りを叩き込む、

その蹴りは、ワニのオーラがその強靱な顎で全てを噛み砕くような威力であった。

「セイヤア！」

「ガアアアアアア！」

蹴り飛ばされたコウロギヤミーは、その場から2mも吹き飛んだ。

「クッ！」

コウロギヤミーは、一端飛び上がるつとすが、

「コレを使って！」

ガラが投げた笛を受け取ったオーズが吹くと、同時に頭部から出現したコブラが攻撃を仕掛けてコウロギヤミーを地面に落とした。

「オラアアアア！」

コウロギヤミーは、音の衝撃波を放ち喰らったオーズの装甲に亀裂が入ったが、その亀裂はすぐさま修復していった。

「傷が!？」

神秘を司る爬虫類系コアのブラカワニコンボの固有能力は『再生能力』で、どんな小さな傷もすぐさま修復するのである。

「終わりだ!」

【SCANNING CHARGE】

メダルをスキャンさせたと同時に、地を這う蛇のように滑りながらスライディングをするオーズ。

「ハアアアアア……………」

そして、そのままコウロギヤミーに近づ居た瞬間、オーズは挟み蹴りの要領で獲物を噛み砕くワニの顎の如き一撃を叩き込んだ。

「セイヤアアアアアア！」

「グアアアアアアアア！」

ブラカワニコンボの必殺技・ワーニングワンドを喰らったコウロギヤミーは、その場でセルメダルと化した。

そしてその後、

「士郎君、おかわり」

屋敷が戦いの影響で破損したガラは、衛宮邸で居候する事になった。隣に住む藤村大河には、

（就職先が決まるまで、此处で候させて貰っています）

そう言って許しを得たのであった。

新たな味方を得た士郎達は、今夜の食事を楽しんだのであった。

第49話：〇の全て／錬金術師と警告と爬虫類コンボ（後書き）

次回はどうか、楽しみに！

第50話：やりすぎた男とやって来たF/全・力・全・開（前書き）

あの男が、^{コソ}トンでもない事を！

そして真打ライダー登場です！

第50話：やりすぎた男とやって来たF／全・力・全・開

「よし！ コレで完成だ」

そう言っつて近藤勲が、ある薬を調合していた。

「とは言っても、一回目のような徹を踏むワケにはいかんからなあ」

一度悩んだが、すぐさまこつ切り出した。

「こつなったら、実験君に任せてみるか！」

果たして、彼の目的とは……

やりすぎた男とやって来たF／全・力・全・開

「いただきます」

ユーノはそう言って作り置きの昼食を取っていた。

「なあ、ユーノ殿。当麻君は、出か掛けるのか？」

「ええ、仕事で出ますけど……」

「（ようし！ 予定通りだ）」

何を狙っているのか分からない近藤であったが、

「それで……インデックス殿やアトリ殿達女性陣は？」

「皆で買い物に出掛けましたけど」

「そ、そうか……」

女性陣が居ないという言葉聞いて何かしよげていた。

「あの…何か？」

「あ、いや……その……」

徐々に慌てだす近藤。

「（あれ、何で俺は慌ててるんだ？）」

それは自分でも、理解不能であった。

「あ、ユーノ殿。ほっぺたにご飯粒が付いてるぞ」

「え、そうですか？」

「俺が取ってやるう」

「え？」

「（な、何言ってるんだ俺はアアアアアアアアアア！？）」

「あの、近藤さん。何、僕の手を握ってるんですか！？」

その瞬間、近藤の中の何かが弾け飛んだ。

「ユーノ殿！俺は、君を離したりはしない！！」

「な！？」

徐々に手を握る力が強くなってきた近藤の手を、必死で払おうとするユーノ。

「ちょっと、何言ってるんですか近藤さん！！ 正気に戻ってくださいー！！」

「俺は冷静だ！ 正直言つて、君が好きなんだ！！」

「ハア！？」

「だから、俺とキスをしよう！ すぐしよう！！」

「き、き、き、キスう！？」

そのままユーノを押し倒した近藤。

「止めてください！ それから蛸みたいな顔で近づかないで下さい！ それに僕は、男ですよー！！」

「男同士が何だ！ 愛に限りはなああああああー！！」

完全に『そっちの気』になってしまった近藤に、必死で抵抗するユーノ。

しかし、その時であった。

「ただいまあ〜」

なのはが帰ってきてしまったのだ。

「え……………」

目の前の光景に、彼女は言葉を失った。

「ウソ……ユーノ君が……そっちの趣味があつたなんて……」

「ち、違つんだのは！ 実は」

「そつだ！ 俺とユーノ殿は、愛し合っているんだ！！」

「ちよつとおおおおおお！！！」

近藤の言葉を真に受けてしまったのはが、絶望の涙を流し、

「ユーノ君なんて大つつ嫌い！」

その場から出て行つてしまった。

「なのはあああああああああ！！！」

「では、邪魔者も居なくなつたところだし、ユーノ殿。 たつぷりと愛のキスを」

そつ言つて近藤がキスを迫るが、

「せえよ」

「ん？」

「ウルセエつて言つてんだ、このクソゴリラ！」

突如堪忍袋の緒が切れたユーノが、近藤の顔を思いっきり殴つた。

「ぐばあ！」

予想以上に思い一撃に、近藤は吹き飛ばされてしまった。

「一番好きな女性に『大嫌い』って言われた男の気持ち……。テメエに分かるのか？」

「え、え、え、え………」

突如豹変したユーノに、近藤は驚きを隠せなかった。

「少し……頭冷やしてやるよ、クソゴリラ」

「ええええええええええ！？ どうしたのユーノ殿！ メツチャ言動と雰囲気が変わってるんだけど！？」

「一回死ねエエエエエエエエエエエエエエ！」

そう言つてユーノは、途轍もなく重い一撃を近藤に叩き込んだ。

「ぐばあああああああ！！」

この一撃に近藤も外まで吹き飛ばされてしまったのであった。

「ハア……ハア……ハア………」

溜まっていたストレスを解消したかのように息を切らしたユーノであつたが、

「!?!」

突如、猛烈な腹痛に襲われたのであった。

「いっつ……と、トイレ……」

そう言ってユーノは、すぐさまトイレに向かったのであった。

屯所に戻った近藤は、絆創膏を張った頬を擦りながら呟いた。

「ま、まさか……ユーノ殿に、あんな一面があったとは思っても寄らなかつた」

本気でキレたユーノの恐ろしさを知った彼は、彼を『実験君』にすることを止めた。

寧ろ、やったら殺されると感じたのであった。

「しかし俺は、何処までの記憶が無くなっているんだ？ ユーノ殿の手を握ったところまでは覚えてるんだが………」

そう言っつて近藤は、もしあのまま殴られていなかった事を考えてしまい、背筋がゾツとした。

「そ、想像したくないな………」

しかし、すぐに開き直った近藤は、

「だが、この薬を飲んだ者には、高性能のフェロモンが発生して周囲の人間を魅了させることが出来るのは間違いない！ 同性を魅了させたのは失敗だったけど、完成までの道のりは近くなってきた！

ダーハハハハハハ！！」

笑いながら次の段階へと向かったのであった。

「それで、近藤さんがユーノを押し倒していた所を見て、つい『大嫌い』って言ったのか？」

仕事を終えた上条は、帰りの途中で公園で泣いていたなのは相談を受けていた。

「言っちゃいけない事だっというのは分かったのに……私、信じられなくて……」

「あのな、上条さんはユーノにそんな趣味がないっというのを知ってるぜ？」

「え？」

「大体、アイツにそんな趣味があるんだったら、俺はアイツとそう言う関係なっただははずだぜ？」

「あ……」

それを聞いたなのは、確かにという顔をする。

「それに、俺が居なくなったら、誰がアイツの味方になるんだ？お前だろ？」

この瞬間なのは、一番大事な事を忘れていた。

「兎に角、なのはすぐさまユーノのところに行って謝りに行け！」

「で、でも……」

「い・い・か・ら・行け!!」

「は……はい」

完全に説教を受けたのはは、ユーノの元へ向かった。

原作では『白い魔王』と呼ばれた彼女でも、『神浄の討魔』には勝てなかったのであった。

すると、良いタイミングで近藤が現れたのであった。

「よう、当麻く」

しかしすぐさま上条は、すぐさま近藤を殴り飛ばした。

「オラア！」

「グパア！」

殴り飛ばした近藤の胸倉を掴んだ上条は、マジギレであった。

「このやるお………テメエの所為でな、相棒はホモ扱いされそうになつたんだぞ？ 責任取れやコラ!!」

「す、スマン。詫びと言つてはなんだが、コレを飲んでくれな
いか？ あとこれはユーノ殿の分」

そう言つて近藤はペットボトルを渡した。

「ペットボトル？」

「まあ、飲んでみると良い」

疑問を感じた上条であったが、すぐさまその中身を飲みだした。

「プハッ、あんまし味しないけど？」

そう言つて上条は、その場を後にした。

否、此処からが近藤の陰謀であつた。

「（フフフフ……当麻君に揉ませたモノには薬を入れたのだ。さあ、どうでるかな当麻君）」

すると、一人の少女が現れた。

「あ、当麻？」

「よう、御坂。学校の帰りか？」

「まあね。あと、ユ一ノさんに借りた本を返しに行くんだけど」

「（ちよつとおおおおお！ 御坂殿オオオオオオオオ！ 何イキナリ現れるのオオオオオオオオ！）」

御坂の登場に驚きを隠せない近藤であつたが、暫らく様子を見ることにした。

「そういえば今日、遊園地のチケット貰ったんだけどさ、二枚ある

から明日一緒に来てくれるかな？」

「え、俺が？ 白井じゃなくて？」

「黒子は無理。 てか嫌」

「……………そうなんだ」

「そ……………それに……………／／／／」

その瞬間、御坂の頬が赤く染まった。

「（あれ、御坂殿の頬が赤く染まってきたような……………まさか！？）

近藤も、それを見て何なのかが分かった。

「それに……………アンタには、借りがあるし……………その……………何て言うか……………／／／／／」

「え〜と……………御坂さん、どう言うことでしょうか？」

「だから、私は……………その……………／／／／」

この瞬間、御坂の何かが弾け飛んだ。

「私はもう、アンタを失いたくないの！！」

「ハア！？」

「（やったぞオオオオオオ実験は成功したんだアアアアアア
！！）」

実験が成功した事に喜ぶ近藤であったが、

「だから、キスして……………」

「うおおおおおおおおおおお！！！」

御坂にキスを求められた上条は、すぐさまもの凄い勢いで走り出した。

「何でそうなるんだよ！ 不幸だアアアアアアアアアアアアアアアア
！！！」

「あ、当麻！ 当麻あああああああああ！！！」

猛スピードで走っていく上条、彼を追いかけようとする御坂。

しかし、上条の逃げ足は非常に速く、既に姿が見えなくなってしまった。

「ってあれ？ 私、何してたんだっけ？」

そう言って御坂は、頭にハテナマークを付けてしまう。

屯所から帰った近藤は、すぐさま薬の入ったコップを手にする。

「やったぞオオオオオオオオオオオオ！ 遂に成功したんだ！！！」

そう言つて薬をがぶ飲みしたのであつた。

「フフフフ……待つてて下さい火織さん！ この愛の伝道師・近藤勲が、アナタの元へ行きますよ！！！」

その瞬間、近藤の頭の中には、神裂の事しか無かつた。

何か大人の雰囲気漂う景色。

「近藤局長……アナタが此処まで魅力的な方だったとは……」

そう言つて神裂は、徐々に服を脱ぎ始めた。

「火織さん」

近藤は既に真つ裸であつた。

「局長……」

「火織さん……」

その瞬間、近藤のナニが彼女の秘所に入っていく。

「ああああああん？」

イヤらしい想像をしながら近藤はニヤニヤしていた。

「へへへへ……火織さん、そんな大胆に……ウへへへへ」

「近藤さん……近藤さん！ 何ニヤニヤしてんだよ!？」

「え、あ!?! トシ、お前居たんだ!？」

「さつきから居たよ!」

土方の登場に驚く近藤であつたが、

「お、俺はちょっと出掛けて来るから、留守を頼むぜ！」

そう言っつて屯所を後にした。

「……………何か、嫌な予感がするな」

土方はそう言っつて煙草を吸いだした。

近藤は天蘭組の屯所に向かう途中であった。

すると、一人の男が現れた。

「真選組局長・近藤勲。その首貰い受ける」

【タイガー】

その瞬間、男は『虎の記憶』を宿すタイガードーパントに変身した。

「な!?!」

驚く近藤であつたが、

「逃げてください!」

そう言つて一人の少年が出現した。

「改蔵、ドーパントよ!」

「ああ! 羽美、下がつてろ!」

少年・勝改蔵は、腰のベルトのスイッチを全て押した後、

【3…2…1…】

「変身!」

【GO!】

その瞬間、改蔵の姿がオレンジ色の複眼にロケットを模した頭部、宇宙服を模したボディの戦士に変身した。

アストロスイッチの力で変身する戦士・仮面ライダーフォーゼが、此処に光臨した。

「宇宙………来たアアアアアアア!」

一度しゃがんだ後に思いつきり拳を突き挙げたフォーゼは、タイムガンに当たって倒れた。

「仮面ライダーフォーゼ！ タイマンは張らせて貰うぜ！！」

そうやってフォーゼは突撃したのであった。

その光景に驚く近藤であるが、

「ふぐ！？」

突如、猛烈な腹痛に陥った。

その同時刻、万時屋事務所では……

「御免なさいユーノ君！ 私、ちゃんと確認しないであんな酷い事
言ってしまうて……」

そう言っ上条はトイレに入ったのであった。

「何だよ……一体!？」

トイレから戻った上条は、とても辛い表情になっていた。

「ハア……死ぬかと思った」

「そう言えば、ユーノもお腹痛いって言って、何度もトイレに行っ
てたんだよ」

この様子を見ていたインデックスは、ユーノも同じ事をしていたこ
とに気付いた。

「そういえば、そうだったね」

ユーノはそう言っ何度もトイレに入ったことを思い出す。

「ん？」

するとルキアは、あるモノを拾った。

「何だ、この紙は？ 何かの説明書のような……」

丁寧に折り畳まれた紙を広げると、そこにはこう書かれていた。

「『コレを飲めば、どんな女性もイチコロ！ 無味無臭だから飲みやすさも抜群。 さあこの“モテモテ”で男の魅力を存分に引き出してください。 モテライフをアナタに……』」

「何だコリヤ！？」

その場の全員が紙の内容を読んでそう言った。

「ん？ 下に何か書いてるぜ」

恋次がそう言って小さく書かれた文書を読んだ。

「『効果は抜群ですが、思わぬ副作用がありますのでご注意ください
い』」

「まさか、お前等これ飲んだんじゃ？」

「んなワケねえだろ！」

「何で僕等がこんな薬を飲むんですか？」

上条とユートは、恋次の問いに即答で答えた。

「では、この薬は一体誰の……」

するとユーノは、あることを思い出した。

「そう言えば、確か昼食の時に近藤さんが来て、水を淹れてくれた事があったっけ？」

それを聞いた上条も、あることを思い出す。

「そう言えば俺も、近藤さんに貰ったドリンクを飲んだら……」

「(まさか……)」

これを聞いたルキアは、薬を飲ませた犯人が誰なのかがすぐに気付いたが、その動機が分からなかった。

するとインデックスは、説明書の裏に何かが書かれていたことに気付いた。

「あれ、裏に何か書いてあるんだよ？」

それを聞いた上条は、その内容を読んだ。

「『一度目は効果を試したものの、副作用が起きて失敗。二度目は実験君一号で試すも、俺がときめいて失敗。三度目は実験君二号で試したら、遂に大成功！なんと御坂殿が実験君二号にメロメロ』」

「え？ 私が……メロメロ!？」

「実験君一号って僕の事ですか!？」

『実験君』が自分であると知ったユーノは、驚きを隠せなかった。

さらに上条は、文書を読んでこう言い出した。

「それに実験君二号にメロメロって……さっきの御坂の事じゃ……」

「さっきって何よ?」

それを聞いた御坂が問い出したが、

「覚えてないのか!? 確かにあの時のお前は変だったけど……」

「変って何よ?」

「だから、お前が俺に向かってキスしろって!!」

「え……私が!?!?!」

キスを求めた自分に赤面してしまう。

「兎に角、近藤殿がこの薬を当麻とユーノ殿に飲ませて実験していたという事は間違いない!」

「それじゃ、御坂も被害者じゃねえか!」

「そうですね。それに僕は、近藤さんにキスを迫られたんですか

ら……」

「私達を実験台にしたのよ！ 只とっちめるだけで気が済む？」

「いや、トコトン懲らしめてやりたい！」

「だったら、良い方法があるんだけど……」

そう言って一同が、御坂の提案に耳を貸した。

その数分後、近藤が事務所を訪れた。

その理由は……

「のオオオオオオオオオオ！」

薬の副作用が起きてしまい、猛烈な腹痛に襲われてしまったのである。

実を言うと、天蘭組と真選組の屯所は全く別の方角にあり、天蘭組の屯所に行くには万時屋の事務所を通り過ぎなければならないのである。

「当麻君、スマンがトイレ借りるぞオオオオオオオオオオオオ!!」
猛スピードでトイレに入り、

「き、来たあああああああ!!」

絶頂の中でウ　コをしたのであった。

「フウ……命拾いした」

安心していた束の間、突如扉の前で声が聞こえたのである。

「止めるんだ、なのは!」

「ユーノ君にあんな趣味があつたなんて……」

「（あれ、この声……ユーノ殿となのは殿?）」

静かに耳をすますと、こんな声が聞こえた。

「まさかユーノ君と近藤さんが、あんな関係だったなんて……」

「頼むなのは、その包丁を向けないでくれ」

「まさか、今なのは殿は、ユーノ殿を殺そうとしているのか!？」

自分の実験が厄介な事になってしまい、徐々に焦ってしまう近藤。

「私は、此処でユーノ君を殺して……私も死ぬ！」

「ウワアアアアアア！」

「よせええええええええええ！」

そう言つて近藤は、慌ててドアを開けた。

「落ち着くんだなのは殿！俺とユーノ殿がそういう関係に見えたのはあの薬の所為なんだ！俺は火織さんLOVEだあああああああ
ああー！」

すると、近藤の前にはドス黒い殺気を放つ上条、ユーノ、なのは、御坂の四人であつた。

後ろに居るルキア達は、その殺気にガタガタ震えていた。

「よう、ケツ丸出しで何やってるんだ？」

「ズボンくらいはキツチリは穿いてください」

「あ……いや……その……」

「近藤さん、少しO・H A・N A・S H Iしましょうか？」

「言つとくけど、選択肢は無いわよ」

上条達四人の殺気に当てられた近藤は、まさに蛇に睨まれた蛙状態であつた。

「兎に角、アンタはコツチに行つて貰うからな」

そう言つて上条の言葉と同時に四人は、近藤を外へ放り込んだ。

「『『『頭冷やせボケエ！』『』『』」

「ギヤアアアアアアアア！」

そして扉が閉められ、近藤は再び起きた腹痛と戦いながら扉を叩く。

「ちょッ！ 当麻君、開けてエエエエエエエ！！」

「ウルセエ！ 誰の所為で俺とユーノが腹痛くなつたと思つてるんだ！ テメエは俺等の何倍も苦しみやがれ！！」

「そ、そんなこと言わないで、開けてエエエエエエエ！！」

必死で扉を叩く近藤であつたが、もう手遅れであつた。

ドゴォーンと、ナイアガラの滝のような勢いで、近藤の臀部から汚い茶色の物体が出てきたのであつた。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

漏らしてしまった近藤は、滝のような涙を流しながら屯所へ走ったのであった。

その頃、タイガードーパントと交戦中の仮面ライダーフォーゼは、

「ハアツ！ タアツ！」

圧倒的な強さでタイガードーパントを追い詰めた。

「コイツで決めるぜ！」

そう言って右端のスイッチを押した瞬間、右手からロケットが出現し、その噴出によりフォーゼは体当たりを仕掛けた。

「ロケットライダーパーンチ！」

そう言ってロケットを手にした右手で上へ吹き飛ばした後、空中へ跳びながら左端のスイッチで左足にドリルを装着して、

「ライダードリルキイイイイイイック！」

急降下しながらキックを叩き込んだのだった。

「ぐわああああああ」

タイガードーパントは敗れ、元の男の姿へと戻ったと同時にメモリも砕けたのであった。

フォーゼから元の姿に戻った改蔵は名取羽美と共に、その場を後にしたのであった。

その夜、万時屋にあるユーノの寝室では…

「んあ……ユーノ君、そこ……良い／＼／＼」

「なのは……凄く良いよ」

誤解が解けたなのはとユーノは、互いに相手の心と身体を求め合った。

「んあ……………もっと……………／／／／」

二人は今まで我慢していた思いと欲情を爆発させ、淫乱な音を立てていた。

「行くよ、なのは」

「うん、来て／／／／」

ユーノとなのは…二人は誰よりも深い愛を求めて、互いに心と身体を捧げたのであった。

同時刻、上条達はどうしよう…

「お願い、もう許して……」

志村低へ場所を変え、近藤を逆さ吊りにしていた。

「暫らく、反省して貰うからな」

謝っても許さないという感じのオーラを纏った上条と事情を知ったお妙が、

「一回、地獄を見やがれエエエエエエエエ」

「アアアアアアアアアア！」

近藤にキツイお灸を供えたのであった。

「ったく……あのゴリラ、何考えてんだかよ？」

「というか左之さん、いい加減にウチのご飯食べに来るの止めてもらえませんか？」

そう言っただけで呑気に夕飯を食す左之助と新八とノーヴェの三人であった。

第50話：やりすぎた男とやって来たF/全・力・全・開（後書き）

遂にフォーゼも登場しました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2193x/>

仮面ライダーW ~ another world story ~

2011年11月27日02時52分発行